26
26-355イ
1200501241667

始

26-355

帝國圖書館藏

大石良雄

前篇

第五版

塚原澁柿著

大正
2. 3. 24
購求

大石良雄　前篇

塚原澁柿

上

（一）

播州赤穗の城中では、この三四日、家老物頭、重役を初めとして、家中の諸士、足輕小者の末々にいたるまで、安からぬ心配の色を剃下げの額に現はして、奈良麻の帷子の胸に置く手もそは〳〵と、飮食も咽喉に下だらぬ爲體。これ平事にあらず、如何なる仔細と人に問へば、主君采女殿の御病氣、御餘命もはや旦夕が程と、汗より先に涙含む。

「ほう、御病氣が、其樣に重られたかな。いかにも此の暑氣で。――なれど御輕症い御當座の事やうにも聞き申したが。」

問ふ人の緊しく眉宇を顰する丈け、問れた士は唯だ鼻洟をのみ掀むのである。

「然て、何樣な御症かの。御年も壯し、平生は御軀も御壯健　命數の御壽命のと云うでも無い。何御症かな。」

「御熱氣じやとは申しまするが……。」
「御熱氣なれば然のみの事。――愚老醫術は不案内じやが、勞瘵勞咳、「それらの類とは事異つて、熱病なとは先づ易治の症じやとは申すじやが。」
「醫師も其樣には申すげにござります。御熱さへ除れますればと……。」
「然う御座らうとも。又た其熱も、御壯年なり、右の彼の御氣性じや、御藥さへ精出して服らば其麼の理由はない。で、御藥は、進らうな。」
「其れがで御座ります。」 と若侍は涙を拭く。
「ふう、其の御藥が？」
不審と云ふ眼は些しく異樣に耀くと、彼は口惜いなり、術無氣なりの眼眶を摩つて、
「主人身上を申しまするは、不忠の嫌もござりますれど、外ならぬ先生の御手前、三郎兵衞眞實を申しまする。殿は其の御藥を召されませぬで。」
「何と云ふ、千馬！」
老人は居寄せた膝頭を看る／＼四角に、「釆女殿は御藥を召されぬと？」
恁う暴々しく問掛けたが、猶堪らぬ氣色で、

「三郎兵衞。何じやとて召されぬかッ！」
此の見脉に斜ならず驚かされたのは千馬。
「何故とて存じませぬが、唯御嫌じやと……。」
「嫌じやとて嫌じやで通す法は無い。聽きやれ三郎兵衞。此の老人はな。いや恁う云ふ甚五左はな。目今は御咎の身、剩さへ歳も五十を過ぎた。前途とても望は無い、在るも可し亡いも可え身であるもの、猶其れすらがな、御國の御恩や修め得た學問の上を思へばぞ知やれる通り毎日軀に養生の灸治をする。其れを況てや當城五萬石の釆女殿。若殿の又一殿ござつた處が倘だ御七才、一朝變事ばし有つたる日には、淺野家の安危、家中上下の大勢の悲歎、言はうも更らで、第一が御先祖、公儀への不忠、不孝とござあるのに御心が附かれぬか。あゝ然りとはじや。藥は御嫌――怪しからぬ！」
はら／＼との落涙を畑に見せたが、
「殿は縱し然有うとも、臣たるの道、何故貴所等は其を諫めぬ。安閑と傍觀て坐る！」
「は、御道理……。」
「道理なりや何故諫めぬ。諫める方角も附きやらなんだか！」

「いや然樣の義は…………。」

「御身は君側——馬廻組じや。然樣の御非分を諫むるは御分等が役、何故黙止て居めされた！」

「はい。」

老人の憤怒は倍激しい。多時は俯向いて居る對手の額に其の電光めく瞳子の光りを射着けたが、卸て突と、

「御事等もじやが、第一に不得心なは大石じや。此より參る。行んで所存の訊く。怪しからぬ！一國の重臣として其の主君の非を其の安閑と、宛も路人の死を見る如くに爲る！不忠至極な！」

腹立紛れの袴の紐をぐいゝと緊結むで、甚五左老人は耐えぬ座を起つた。

甚五左老人とは什麼誰ぞ。事も愚かや當時其名の雷と天下に轟ろく山鹿流の軍學者、曩に幕府の忌諱に觸れて當赤穗の淺野家へ御預の身、城内の籠居の窓から罪無くて見る配所の月も早や七週年の、四人ともあれ今は一藩の師と仰がるゝ、山鹿甚五左衛門の素行先生、其人である。

（二）

こゝで些しく素行子の傳を、其の行狀等の書に就て童蒙の爲めに說くとする。先生姓は山鹿、名は高祐、通稱は甚五左衛門、號を素行子といふ。元和八年奥州の會津に生る。其の生家は何か知らぬが、餘り身柄の人でも無いやうで、九才の時某る緣について羅山先生の門に入り、十一の時、小學論語、貞觀政要等を講ずるに、論辯殆んど老成の如しとあるから、夙く大器の成熟した狀景も想像られる。十六の時北條安房守に從つて初めて兵學を修む、房州は小幡景憲(勘兵衛、甲州流の軍學者)の高足なり、故に子も亦た景憲に從遊す、景憲其の强敏を賞して印可を與ふ。と書いてある。蓋し其の天成の才に勉强の功を加へて、此の大偉人が功名の素を爲したでもあらう。此より素行に從學する者日に多く、乃ち自ら武教小學、武教全書、神武雄備集の數書を著はして其徒に授くと云ふ。其書は今猶ほ兵家者流の珍とする所である。其學益行はれて名聲遂に小幡北條二氏に超え、當時列侯士大夫等の門に入る者幾んど四千人。將軍家光(三代公)其名を聞き、侍臣を遣はして亦た就て學ばしむ。尋で拜謁の事あらむとせしに偶公の薨せらるゝに遇うて廢む。識者惜矣と。素行、始めは宋學を修めしが、四十才以後其の性理の說を疑ひ。これ周孔の旨に非ずとし

て自ら聖教餘錄を選み、專ら程朱を排斥す。程朱の學は幕府の宗とする所なり。之に因て忌諱に觸れ、造言の罪に當てられて播州赤穗に謫せらる。是れ先生四十五の時、卽ち寛文六年十月なり。然れども世其刑を非として、先生の爲に之を哀しむ。

これが素行子の小傳である。猶ほ爰に特書すべきは子と赤穗との關繫で、先生年三十一、淺野侯長直、（今の釆女正長友の父、內匠頭長矩の祖父）に仕へて祿千石を給せられた。なれと其の學ぶに厚うして養ふに疎かなる子は、それが驥足を此の小祿に繫がれるのを苦むで、當國に居ること九年、終に其仕を辭して放浪の身と爲つたのではあるが、侯の賢なる亦た强て之れを追逐なむだ。時に先生約して曰く、高祐、君の寵遇を願はず、恁樣の願望を上げ候ふこと全く學問の爲で候ふ。其證としては再び他家へは足を入れ候はじ。但し世の中悉くともあらば、必らず馳せ參じて一方を承はりなむ。其際は何卒萬石の御扱ひ、殿の御釆を下され候らへ。

泰平の世は彌其の根抵を深めて、世の中は竟に、恁うとも變らなむだが、先生の身は不思議に變つて猶又た不思議にも此の赤穗に來たのである。この頃は內匠頭長直既や世を逝られて其の子息、今の釆女正長友の代となつたが、先代の値遇はあり、幕府よりも其れと

無き內意を達せられて、先生は唯だ「放し囚人」、猶ほ實際を云へば「客分」の、公儀預りの「軍學の師範」といふ爲體で居た。

「放し囚人」は鎌倉以來無い例でもないが、「御預の軍學師範」は凡は奇異しい例である。

其の稀れなる特典を得た先生の身には、當時恁う云ふ評判も有つたので。

彼の慶安の騷動以後（正雪、忠彌の）、幕府は深く浪人の軍學者といふに目を着けて、所謂る目星の揚つた者をば、其れが羽翼の未だ成らざるに先つて、先づ其の巣を覆へすと云ふ政策を執つたのは隱れも無い事實である。然して其れが一方には、又た其者の修め得た學術を世に弘通て、海內の武備を嚴重にすると云ふ、太だ虫の好い話ではあるもの丶、此が當時の施政の秘訣。其の秘訣の主唱者は、當代政治の中心たる會津中將正之朝臣（土津神社）で、先生に對する進退緩急の料理は、總て此の朝臣の方寸に出でたるもの。卽ち其の造言の罪名も、放し囚人も、御預の軍學師範も、自から政府が深秘の神機の裏に含まれて居たもので有つたとの事である。

夫れ果して此評を當れりとすれば、中將が政策も、其の一部には花を咲かせて、成効の美果を結ばせ得たものと言ねばならぬ。卽ち「日本一の武道の鑑」と世に謳れる大石が後年

の復讐の擧も、此の「放し囚人」の放瘖が哺養み立てた其力である。荒廢みかけた「武士道」の其道を開拓いて、爾來明治の今日に到るまで二百有餘年、忠義の的の狙ひ外さぬ我が弓勢も、恐らく「御預の軍學師範」が方向を指敎へた其の薰陶の恩と謂つても、格別の異議も無からうか。然して其原は、皆彼の中將が秘略の匣から芽を萠いた、其の種子の收實である。

其は措きて、生ては萬衆の師表たり、死しては流芳を千歲に傳ふ、一介の處士たる身を以て、威權の赫たる火の若き時の覇府に怖ぢられて、隱然一敵國の重きをなされた先生の軀！眞に男兒の榮譽として、噫又た羨むべきものでは有るまい歟。

（三）

此夏の長旱に、いとゞ稀れなる雨の脚は乾熱の火雲の中に裹まれて、小指の尖一つほどの涓滴も與れぬ。鹽燒の豐年は百姓の不作で、青田の稻は名詮の赤穗。名物の夕凪は岸邊に寄する細漣さへ得立てずして、常は爽涼しい軒先の淡路島山もひつゝとする草熅れのみ襲うて來るやうな。其れにも負けぬ怫然たる面の色。開け披げた八疊の亭座敷に上座を占めて、べしい口の居丈高なるは山鹿老人。使ひ罷けの扇を疊むで、其の對坐に太息の思案顏するは

主人の大石。遙か下つてじと〳〵汗の膏濕りを拭ひも敢へず、家老の面前、師匠の手前、額を疊に半ば埋めて恐縮つて差控へるのは、馬廻組の彼の千馬三郎兵衛。

居丈高の老人は取直した扇を丁と膝頭に突き立てゝ、

「權內、何故處存の言れぬじや。何故に御異見の申されぬ！」

權內とは主人の名、卽ち當淺野家の一家老、知行は千五百石、年は三十四、藩中切ての分別者との評判のある男である。

權內は窮つた顏を斜にして、

「御尤もじやが、先生。其義に就いては我等分別にも能はぬ義で、同役共々幾と手を摺り居まするじや。」

「ふン、何故然う又た手を御摺りやるか。」

「實はな……。」と彼方は言ひ澁る。

「實はが如何した。究竟御身等が其れは命を惜れるのじや。――えい申されな。病に罹つて醫療を嫌ふ！殿の御無理は重々じやが。其の御無理を御無理で通して强諫も得爲ず唯手を御摺りやる。卽ち非理の御立腹をたゞ恐怖れて追從する面諛の臣じや。御分の平生、其れ

程の人とも存せんじやッたが、地體が然樣か。其れで重役？　御分、知行は何の爲に頂戴する！」

不義と見ては一寸も遁されぬが此の老人の氣性。既に時の政府に反抗つて、今日の身上と爲られたのも、亦た其心に是とする所の學說を飽まで主張て、世の邪議を破らうとした、其率直の信念が此の禍を買ふ基因と爲つたのである。恁くても悔ひず、今や君臣の大義といふを眞額にして、其の門弟子たる彼が頭上から、痛切――寧ろ微塵と計りに擊下したので、然しもの大石も此の太刀先をば受け難ねた。少時は無言の、首を垂れて、取つ舍つの苦惱と云ふのを。其れと見た先生、俄爾に窮寇は追ふべからずの態度に和らいで、

「右申すは愚老の意見じやが、御身が方にも又た御諫爭の能らぬといふ仔細もござらう。それ一通り聽き申そかな。」

纔に呼吸の出でたる樣に權内は面を揚げたも、太息は猶其の肩口から吐れるのである。

「恁う迄の御叱斥では是非もござらぬ、實を申すが……。」

と、再た一息して、

「實は、殿は狂亂の御容體でな……。」

「あッ狂亂？」

と流石に老人も喫驚いた。成る程諫爭どころの詮議では無い、家國の大事！若し夫れ公然の沙汰とならんか。當主の狂亂、家名は卽時に斷絕だ。

「ふーう、そりや一大事でおざるのう！」

「先生も御存知のあの御氣質、御疳もいから御强い方、それが御熱の所爲もでざらう、先づ昨今は御耳も目もおはしませぬ。現に一昨日――これは極めての秘事、御他言もとより御無用じやが、實は醫師の道菴を……。」

「御手討か？」

「既にのところ。漸く近習が支へ申して一命だけ救助けまいたが、其れでも額から頰――十鍼ほど縫はせましたで……。」

「而て何故じやとて？」

「御藥でござります。彼が調合の御藥、强てもと進げましたれば直さま右の爲體。で我等も幾と――御察し下されい。」

（四）

固より御病氣とあれば醫藥に限る。其の醫師の調合したのを、素直に服上つてさへ下されば理由は無いので、御平癒眼前と有るのであるが、其れが平生の疳癖に御熱が加はつて、剰さへ泣兒と地頭の我儘も手傳つた其終局が、今の狂亂！既に是れ狂亂と云へば、幾んど人間たるの資格に於て可疑しい點がある。所謂る癈人！然ながら此癈人を癈人として遇はれぬのは、何物よりも太切なる當家五萬石の存亡で、彼の又一郎殿（後に内匠頭長矩）といふ若殿は在すにもせよ、尙だ御七歳。海とも川とも未だ知れぬ——加之らで、幼稚の家督は其の領知の半減と云ふが當時の定法。假令御本家（藝州廣島の松平安藝守）からの御愁訴があつたと爲たところで、奥州邊りへ領地替の、俗に謂ふ「冷飯大名」となるのは知れてある、上下の難義、一藩の困窮、其の淺猿しい有樣と云ふものは、石州の津和野、備中の松山、其れ等の家中が泣きの涙で、幾んど離散の悲境に陷いつた現場の模樣を見ても、誰とて怖毛を顫はぬは無い。山流の駕に乘るなら寧そ地獄の釜に入る、其方が一思ひで好い。と云ふ迄に當時の男女は恐れて居る。此程であるから、主君の御命は我が命。成る事ならば我が壽命の半分を獻げても御家の繁昌を。と冀望ぬは無いのである。では有るが、情けなや此の有樣では、肝腎の殿は人事不省い。御藥を進らせる。「予は嫌じやい」「御嫌でも是非。」「汝無禮者！」直ぐ御佩刀とあるのだから、實に、何とも、焔硝庫に落下た巨礮の彈で、あれよ〳〵と、手の下け樣も無いのである。

無からう！蓋し無いではあらうが、其れを無奕に爲て措かれぬので、權内等も彼の手を摺るのである。家中も飮食の咽喉を下らぬのである。一時大義の大太刀を眞額に振り翳した山鹿の老人も、雨斷の此の裁決には頗ぶる苦むで、皺めたる眉の下から徒爾に其の凄き眼光を射出して居るのみであつた。

「權内、此義を什麼ふ爲る？」

「强諫て聽納れまする程の事なりや何とて生命を惜みませう。たゞ目今では自他の御分別も無い、御意に逆かへば直ぐ御手討。——で、何とも早や……。」

御服藥の術計と云ふのも最う盡きたのか！

「あゝ、成る事なりや御口を破ても進げたいが、——流石御主人の然樣も叶ぬかい！」俛むた口から老人も、恁う唸き出された。

「先生！」

突然と發つた聲に驚いて振顧へると、其れは千馬である。彼は今まで埋めた額を疊から卒

に離して、思入つた眼色で、
「先生、御口を破てもと今仰せられます。殿樣御口を破りましても御爲とござらば、不忠とは爲りませぬかな！」
「何有？御分お爲らうと？」　と先生の眼は太く晃つた。
「不忠とさへ御座りませねば、私——私、命を棄ても仕つります！」
潸然との涙を流したのである。
「お爲ると？え〻？——あ、天晴れな！甚麼の不忠か。其れが所謂る死諫、龍逢比干の誠忠無二と無けらんにや出來ぬ所爲じや。あッ貴公天晴れな！」
目眩き迄に褒られて、彼は赫と赤面した。「いや兎に角に致します。但し御口と申せばとて私一人の力では爲りませぬ。其の、御藥を進ぜますのは………？」
「如何にもじや、組留むるとなりや別義は無いも、御藥と云ふ役が此れが手練じや。其の趣向は、や。權内殿………。」
「あッ。」　と權内、其膝を寄んとする時。
「あ御父樣、先生、三郎兵衛殿も先づ待たしやりませ。私異存がござります。」

片側の簀戸をさらりと啓て突と入る者。扨は密議の談合を竊聽れたか、と六個の眼は齊しく注視ぐと、
其は大事もない者であつた。此家の子息。平生から寡言の、痴呆か怜悧か分らぬとの評判もある吉千代といふ大若衆！

（五）

大事無い者とはあるなれども有繫に密議の席である。恁う突然に出られて見ると、人々の手前、父の權内も默止ては居難ねて。「何じや、悴？」と稍暴かに眼を睜剝げると。
「御父樣、右は協りませぬ義と私は存じます。」
吉千代はぐるりと一遍其座を看同して、大人しく頭を下げた。
彼は今年十五である。頭は前垂といふ若衆髷に結び立てゝ、袴は葛布、帷子は近江麻を石疊模樣に染めた半振袖。然し其の半振袖も最う似合ぬのは、年に合せては大兵と謂ふほとの大柄で、殊に其の面貌が、廣き額、肉厚き頰、隆き鼻、方なる口、筋骨の太さ、眉の濃さ、全體の肉置から日焦の工合まで天晴れ勇士の相貌を具へて、就中目立つ、切目長き眼の底に冐すべからざる威嚴を有つた光輝の含まれゐる容體などは、昔話の先づは桃太郎！

此れに萌黄匂の腹卷でも着せて、猩々緋の陣羽織でも被らせたらば、見事鬼が島の鬼退治をも爲て遂くべき面魂。現下は故さら一心を決めた場合でもあるか、凄じき程の面色で居る。此程の骨柄を有つ少年であるから、誰人も畏れて敬ふかと想へば。敬ふところか、他は痴呆だと呼ぶ。其故を甚麽と問へば、彼は第一、物に拘泥らぬ。第二には寡默である。第三には、喜ぶべきにも喜ばねば、怒るべきをも怒らぬと云ふ。其故で痴呆！但し藩中一の國家老の子息であるから、流石に其れと露骨しては云はぬが、陰では種々の醜名を呼ぶ。彼が身材の巨大い點からは、「胡麻胴亂」！

其の事物に頓着せぬ所からは、「晝行燈」！

寡默の、衆と爭はぬ容體からは、「梟引の梟」！

其他、馬と呼び、牛と罵しる、惡口も數々あるが、嘲はれても彼は平氣でゐる。其の平氣で在るのは、抑も胡麻胴亂の物を容れて餘す無き度量の宏潤いのか。晝行燈の光を韜むのか。梟引の梟の燕雀の囀りを耳に爲ぬのか。其等の心事を知る由もなき親類や縁者の男女は、秘に心配して、行末を案じて、内々權内へ、現今の内と忠告する輩も有つたが。子を見ること親に若かずか、但しは燈臺下暗しか、所謂る親馬鹿か、若くは既う匙を投げた

のか。彼者は先づ彼の儘でと澄したもので居る。母のお美代も、似た者夫婦か、總ては拙夫がと其等に取合はぬ。獨り山鹿の先生のみは、彼が前途の善惡を極めて測度り易からざる者として、當淺野家の爲に、又た大石の家名の爲に、暗に心痛の胸を傷めて。彼見が苟初の擧動と雖も、忽諸ならぬものゝ如くに、遁さず其眼を注けて居た。

其は措て權内は、兎に角我兒の此程に口を利くのは、此の二三年來初同であるから、係る中にも籠に飼ふ鶯の初音を聞くほどにも怡むだ。然ながら彼も思慮ある士である、迂濶とは白い齒を見せやうとは爲ぬ。

「協らぬ義じや？——協らぬとは。」

「協りませぬ義で。——倘か御父樣、三郎兵衛どの、此義を行されましたとなりや其れこそ御大事じやと存じます。」

「何故か？」　と詰問る權内より先に急立つたのは三郎兵衛。

「吉千代どの、何故協りませぬ。協らぬとは此の三郎兵衛に出來ぬとござるのか。千馬三郎兵衛、其樣な不甲斐ない士と被仰れまするか！」

彼は正直である。剩けに疳癪も有る男である。正直で疳癪と云へば喧嘩早いは知れてある

が、其上に又た吉千代の平生を、右の晝行燈と輕蔑つて居るのであるから。甚麼の小癪なと、恁う衝突つた。

「不甲斐ないとは云ひませぬ。御身樣が其事を爲さるは殿樣の大御不爲と…………。」

「えゝい措かれい！御爲を存ずればこそ我等も恁樣爲ます。――のみか第一、御幼少でも武士に有るまじき竊聞などゝ。」

「其事の不是いは今更らの義か。ぢやが三郎兵衛どの、仁に當つては師に讓りませぬ。是れは御家の御一大事で、――些細は閣れませ。」

「如何にも枝葉じや。三郎兵衛御控やれ。――然て千代どのは何樣いふ處存かな？」

と先生は扇を一打、徐に其方を打見遣られた。

無念を堪へて、眞赤になつて、突懸けた膝を控へて、其でも尚だ目を血迸らして、齒を喰切つて居る三郎兵衛に一會釋して、師匠と父とへ等分に手を支へた吉千代は、

「伺ひますが、御家老たる御父樣、御馬廻の三郎兵衛どの、唯今殿樣御手討とござりましたりや御家は什麼なるでござりませう？其れで御公儀御咎とござりませねば千代も強ては御抑留を申しませぬ。」

驚くべき是れは難問。馬廻と云へば諸士以上、諸士以上の成敗と云へば是非とも大公儀へ屆が要る。況んや家老をや。大阪城代からの目附が來て、仔細を檢査て、萬一か狂亂の手討とも發露たらば其れこそ卽ぐ斷絕だ。是れは驚くべき詰問である。と父も先生も何樣といふ眼を覗合せた。

（六）

「むう、此れは言れたの。」

呟いた計りの老人は、更に吉千代が面を沁々と、――口を噤むだ。

父はと見ると、堅く〳〵腕を組むで、深き歎息に沈むで居る。

薄暮の鴉がかい、かは〳〵と鳴く。二羽、三羽、五羽。彼等は親子兄弟うち連れて、樂しく、嬉しく、城內の森の宿塒に今夜の夢を結ぶのであらう、其れとは反つて、此方は其の夫婦も父子も、其の城中の御人の爲に、此から先の居處起處に迷ふのだ。と想へば其聲の、猶更ら忌はしくも、恨しくも聞えるので。折柄、華嶽寺の晩鐘も哀れに響く。物の悲しさは彌增す。

「千――千代を御勘當下さりませ！」

此の以前より疊に頭を、平伏して居た吉千代は突如に這の一句。後は涙か、もう聲さへ立てなむだ。

老人の眼も亦た遽に暗涙を含むで、父なる人の面を覗た。父と云ふ權内は、猶苦しく〳〵切無げの息を吞むのである。

驚いたのは三郎兵衛、全體の意味を解し難ねて固唾を咬むだが、兎にも角にも其座の哀れさの胸に徹へて、同じく鼻を酸らせた。

「權内、御子息が胸裏は御酌れたか喃！」　と、老人は口を啓つたのである。

「解せました。彼は我等の勘當受けまいて、單身で此の大役、擔當けうとの處存と見えまする。――はッはッ、近、近頃、有爲者で！」

言ふ顏を見れば、眼は朱に染つて、我にもあらず滂沱と落つる涙滴は、宛がら鮮血！苦痛さを笑容に紛らす其色は蒼白く、聲は顫へて、身體も戰々と！從前の權内其人とは到底が見えぬ。

然うでもあらう。天にも地にもの唯だ一粒兒、其の一粒兒の此れ程の健げな我兒を、闇々と死せに遣る。嗟呼、忠と云ひ義と云ひ、世間の手前と云ふものが無かつたならば、彼は其兒の手を拉て遁逃たでもあらう。其の遁げ得ぬのは、唯一つの恥辱と云ふもの！倘か其の恥辱てふ者が物の體貭を作して在たなら、彼は飛着て、寸斷に斬つて、其肉を啖ひ、其血を啜つて、猶其屍を蹂躙らずは已むまい。何故ならば、恥辱は其兒の死敵で有る！

然し、其の恥辱は現在在る。何處に在る？佗ともあらぬ彼が胸の心に在る。彼は心に其讐の在ると云ふことを知たから、胸の邊を搔撓つた。雖然と猶其も他の手前、其恥辱なる者に制せられて現在の所作としては出來ぬから、心で心を搔き挘つた！

老人も、歎かぬ悲歎の父の心を想像つては、甚麽と言辭の執做し様も無いのである。けれども目下は此れより餘に、亦た爲術も無い。

「察し入るがのう權内、千代殿の存分立てさせて遣はさるのが目下の御身が役。此は所望通りに喃。」

「いや御辭添、痛み入りまする。如何にも此義は彼より外に爲人もござるまい。彼は倘だ十五、公儀御帳にも注りませぬ。縱令何樣の義がござればとても御届と申すに及ばず、内く々で事が濟みまする。其を存じて彼も申し出でましたる義？はゝ勘當などは要りませぬ。――然ながら先生、父の口からは些と異な樣なも、彼が健氣さ、御褒め置き下されたい。」

と目を瞑る。

「や、千代、申す計りも無いぞ。素行、改めて盃おまそ。三郎兵衛、それ！」

感涙を拂つた三郎兵衛は、師匠の辭に座を起たうとする。時其時！

屋敷の玄關に慌遽しく駈込むで來た一人の若侍。

「御家老へ御申上げ下されたい。唯今殿樣御發病で同役三人、相果てました！」

それは取次に云ふのであるが、開拔げた夏座敷には奥の間でも手に取るやうだ。

「呀！ソレ千代どの！」

山鹿の老人は屹と目授せする。げにも機會と前髪を搔上げも敢へぬ吉千代は、卽ぐ駈出した。此に續くは父の權內。三郎兵衛も同じく後れじと跡から馳せた。

（七）

原來赤穗の淺野家と云ふのは、前回にも云つた藝州廣島の淺野家の分家で、其家の先祖采女正長重は彼の彈正少弼長政の三男である。

長政は親しき豐臣家の姻戚ではあるが、又た關東の德川家とも疎濶ならず交際をせられた御人。其故からして三男長重をば最初から江戸へ下して、當時の中納言殿、後の二代將軍

秀忠公の御許へ參らせた。恁くて長重、慶長十一年に叙爵して采女正(其れ迄は又一郎)、其後父の遺領を賜はりて常陸の眞壁で五萬石（其前は二萬石)。大坂の冬夏兩陣に戰功が有つたと云ふので、更に三千石を增加へられて同國笠間にて五萬三千石。寬永八年に卒去せられて子息の內匠頭長直家を繼ぐ。今の赤穗に其封を移されたは此の內匠殿の代で、則ち正保元年正月の事である。長直、寬文十年に隱居して、子息采女正長友に家を讓らる。此際、嫡子長友に五萬石、餘の三千石は次男三男兩人に頒與へられたので、今は其高舊領の儘の五萬石。と恁う云ふのが此の淺野家の歷史である、

柳の間でも、五萬石では、所謂る「木片大名」の部類である。然ながら「本家持」てふ藝州の搖錢木を控へて居る有難さには、尋常の素大名とは理由が違つて、內分の助成も來れば、借金も成る。況んや先代の長直侯、賢を愛し、士を聘し、藩政を釐革して、鹽田其他の土地の物產を興起された其の餘澤として、今の淺野家實際の收納は、幾んど十萬石近くの實は有ると云ふ。で有るから勝手元も頗ぶる富裕で、富裕であるから——强ち奢侈と云ふ理でも有るまいが——御當主の采女殿も、年は壯し、自然御心緒も弛むだ容で、父君の御死去の後は御嬉遊の方に御身が入つて來た。

富裕者流の遊興と云へば、昔から定式の色と酒。色酒の御相手には、偏固しい鬚面よりも艶治とした口前の甘い方が到底も坐附の工合が好いから、此で難解く言へば、讒諂面諛。平易、云へば阿佞者の御鬚の塵取侍といふ、糞取よりも尙だ腐腸の臭い、鼻持も叶らぬ奴輩が御前に跳梁はる。其れで好氣の殿樣は、吾獨り賢也と云ふ御自慢が募つて、疳氣ばかりが亢奮つて、果には、病氣でも服藥は可厭じやと云ふやうな痴呆た御意も出る樣になる。目下の釆女殿も卽ち其者で、可哀や父（長直）の御子であるから然のみの暗愚でも無つたものを、到頭其の野放圖も無く劫じさせた御我儘の爲に、人間以外の狂者の、手も下られぬ者とまで爲せて了つた。

御奥では今大變である。何が御意に逆らつたのか、今年三十二の、痩肉の、色の蒼白い、眼の吊上つた釆女殿は、病に羸弱つた骨ばかりと云ふ手に、重代の光忠の一刀、夏猶寒き切尖から韓紅の色を滴下らせて、齒を咬鳴らして、瞳子を凝視て、矗然と突立て居られる。其の脚下には今斬られた計りの近習三人、生死は知らず朱に染みて、僵れて居る。

處へ跚足で突と出たのは吉千代、

「殿樣、あゝ遊ばしましたな。好う斬れました。」

「うむ吉千代か。――予は斬た！無禮者の成敗した。好う斬れたかな？」

「如何にも御見事で。然し御刀に御鮮血が――拭ひまして――。」と言ひながら寄る。

此は狂者に刃物と俚諺にさへ云ふ其の危險物を、手から奪うとの趣向である。

「むゝ、此刀、拭へ！」

ずいと出される。吉千代も此れには窮困つた、其れも餘人なら一も二も無い、此隙に卽ぐ飛込むで突如に刀刃を叩き落す。其の手心に覺えはあるのだが、此は御主君。鼠に投せんとして其器を忌むもので、萬一の過錯が有つたる日には身の申し譯無きよりも、御家の御瑕瑾。折角の忠も不忠で、「御藥の手筈も水の泡」と彼は慧くも考へたから、霎時躊躇した。

「其體じや協りませぬ、恐れながら御柄を私へ…………。」

進まうとすると、殿は礑地と睨ませて、

「成らぬ。汝も予から此の腰刀を奪らうとするな！見い、此二人も汝が樣な所爲しをらうと致すから討棄てたのじや！」

醉漢本性違はずと云ふから、狂者にも自から正氣は有る。「否や」と駁つたが、殿は中々、其

の手刄を與されさうにも！　更に狙ふが如き御眼、咬斷ぎる樣な唇、其唇から、

「無禮者！手討じやぞッ！」

手の電光は閃乎と見めいた。驚破、吉千代眞二つ？

（八）

發狂者でこそあれ殿も覺えある一廉の手者。況てや御佩刀は稀代の名刀。其御腕で、其刀で、眞面に來たらば鐵石とてもやはかゝと云ふ、其の太刀風の下に立つのが軟肉を柔皮で裹むだ尋常の人間。然も骨節とて尙だ纖弱い今年十五の少年の吉千代。哀れ彼は兩斷に變つたか？

變らなむだ。所謂る山鹿流の「霞隱」で彼は閃然と影を躱した。其の身替に立つたのが御居間の柱、七寸角の三分が一を殿はすッぱと切れたので。

「や、無念！」

「殿樣御無體な、千代めは此處に居ります。」

言ふ聲は御背後の緣側にある。「呀」と顧向かれると、吉千代は其處に蹶乎と、霄明ながら突立て在るのが幽暗に見える。然も其の御討損じを嗤笑つて居るやうに！

目も眩むばかりに咆つた殿は「汝！汝！」と齒を咬切つて、拔む〱と捩られるでは有るが、檜の太柱へ二寸餘りも喰入つた刃は容易に脫けぬ。

「殿樣、千代めは此處に居ります。はい、此の御緣に…………。」

彼は廣緣に後退りながら足踏鳴らして、小手招きを爲るのである。組まば組むは容易けれども、其よりもと彼は手段を變たのだ。

「や！無、無禮！」

最う刀を待ては居られぬ。汝一摑み！と殿は飛で蒐られたが、敢もなや、御熱で絕食の、疳氣ばかりで有て居られる脚元は踏所も極らぬに、逆上で彼の目も暈むでゐる。看る間に緣板を踏外されて雨落の土間に頭顚倒！

「あッ殿樣！」

と吉千代は慌遽てゝ駈寄つた。

「何を、小悴！」

勃乎と起て、攫みに懸る。閃乎と退く。甚麼を！と又た蒐る。再た飛退く。えゝい！と走られる。其でも追及ばぬ。終末には夢中で廣庭の樹の影、水の隈、場所を嫌はず追へど

もく〳〵、我影の我手に捉へ得られぬが如くにて、身輕き吉千代が姿は蝶か燕か。其でもと追ふ采女殿は呼吸も喘々、果には氣も力も他愛も亡なつて、

「無念じやッ！」

廣げた大手に胸を叩いて、：庭石に平然、と看る〳〵横にばゝたりと倒れて了はせた。

其の倒れた、呼息も無い殿の御顔を、柔和い光りの手で撫でゝ居るのは、東方の山から今さし昇つた今宵十五の月影である。

其の介抱は月に委任せて吉千代は「怖い」と喚むだ。其聲か聞えるか否な御殿の方では吶と云ふ騷動で、眞先に素跣の儘驅着けたのが父の權内、續いて三郎兵衛、近習に醫師、然ながら女中は襄に逃げたなりで、恐怖て居るのか未だ寄り附かぬ。

「殿！殿！御氣を！」　と呼ぶ衆聲に、漸くに息蘇られた殿は未だ夢我夢中。這處ぞ！といふ權内が目授を承けて、三郎兵衛は醫師が差出す御藥の茶碗を御吻に當てると。殿はいゝ、ごツくり！

「今、今一碗！」

心得たりと右から左から差上げるのを。御渴が劇しいので連續て五碗。えいゝ漸と起上られ

たが、

「千代めは居るかッ！」

彼の瞠乎する眼を、衆人の背後に嬉し泣に泣いて居る彼が頭に射着られると、御氣色は頑た俄に變つた。

「やア居たな。好く居つた。誰か、彼奴を拘立て來い！。」

如何な主命でも此に應ずる勇氣は無い。況んや其の嬉し泣と云ふのも甚麼で有る、殿が御藥を服れたので此では卽て御平癒と云ふ、其れを喜ぶ誠心の涙とは有るまいか。其程の少年と云ふのを聞々と、嗟。と衆人も默つてゐると。

「えい汝等まで。」

「いや、御成敗なりや御手までも御座りませぬ。權内、承はつて仕つります。」

「呀、權内じやな。や、汝同腹！小悴めに行せたのじやな。」

權内は、物をも言はで平伏した。

「行せた、行せた！可憎い奴！むゝ、むゝ苦惱しい。此苦惱み——汝行せたじやな。」

殿は御胸を拳頭で擊たれて額から頷からの膏汗、藥劑の瞑眩とは御存知ないから、

「あッ苦痛い。——毒害かッ。誰ぞ、素奴、斬れ！」
蹌々と近習の肩に凭られて、其でも其者が脇指の柄に手を懸けられる。
「あ、父上。」
と、此時駈て出られたのが若殿の又一殿。其手を牽いて、裾もほら〳〵、殿と權内とが間へ遽だしく割て入たは、局役兼御保姆の松島であつた。

（九）

若殿の手を拉て駈着けた保姆の松島は、外見から凜乎とした四十餘りの局役。擾れ懸つた鬢の亂毛を掻上げながら襟の邊りを屹と修繕つて、
「さ若樣、御早く仰せ上られませ、唯今の義を。——申し殿樣へ恐れながら松島が申上げまする。唯今和子樣から何事かの仰上げられが御座りますさうにござります。何卒御心を御鎭め遊ばして……。」
「うむ、父上、又一の御願ひがござります。御父樣を此樣に爲ました權内と吉千代は憎い奴めで御座ります。何卒兩人を又一に下されて……。」
今年御七才の可愛い御手で、一方は父君を和めて、又一方には彼等父子を庇護はせられる。

げにや紅は園生に植ゑても隱れなき利發の御擧動には、松島さへ淚に暮れたので。況や此は恩愛の至情である。病犬の如くに哮られた殿も此を覽れた御眼光は從前のものとは稍違つて來た。雖然とお發狂は依然お發狂、殊には嘔吐を催進する藥劑の効驗は御胸に衝逆ける、其苦痛さとで、
「む丶！苦惱い。うむ若。父は毒—毒害されるぞよ。其の兩個の奴、與るゝから討て！父が讐敵じやぞ。」
「それ若樣、御允許が。——疾う御打ち遊ばせ。」
松島は其身を楯に、大石父子を我が背後樣にして、手快く拔き取る腰の扇を若殿の手に我と持添て、
「さ御打ち遊ばせ。すッぱりと！」
「討て、討て、疾う討て！む、苦、苦痛い！あゝ眩暈う。あッ！」
眼は血逆る、御息は逼る。此時夥多しき御吐氣は來たが、何しろ此の軀體、其儘ぐたり、と、殿は人事不省と爲られた。
御醫師は卽座に介抱する。近習は手昇き足昇きして御病間へと御供をする。

其れを遙に看送つた大石父子は、松島と相對して泣たのである。噫、心にも無い不臣の罪！無禮の咎！其涙に曇らされてか、從前は此の騷動を嘲笑ふが如くに見えた月影も、いつか朧ろと、旋て其光さへ見えずなつた。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

縱令狂人でも對手は殿である。其の相恩の主君からして、毒殺者と罵られ、手討との御諚を被けた權内父子は、現下什麼するであらう。

切腹より外は無いのである。其れは厩制でも當時の掟、縱や其行事が忠でも義でも、常面に於ける主の勘當を受けた以上は、其の御憎惡を晴させまゐらせて、疑念を散して貳なき心の忠誠を明かすが譜代たる重臣の操行で、其には難義でも切腹より他の方は無い。然して此の父子の胸裏に其等の覺悟は有る筈のである。

父子も下城の當時から然樣考案へた。唯一つの無念と云ふは、御快氣の御祝賀を見ぬので有るが、其れは躬の微運、是非も無い事として、彼輩で平癒の御緒端が啓けるとなれば其れで本望、自分等は安心して成佛が能る。

「先生、意趣は右のでござります。唯だ願望ひ置きまするは、我等が死後の御家の義を

喃。」

先生と呼ばれたのは山鹿の老人。老人は父子が御前の首尾如何を氣支つて、今迄も此の一間に、膝も頽さず待て居たので。

今や權内から其の逐一を聽取つて見ると、想ふに優つた吉千代が擧動には舌が卷かれて、現幻もない殿が御容子には愁涙が翻れて、松島が機敏、若殿のお怜悧には感歎の膝も拍たれたが。又た權内其人の覺悟を聽くと、鼓情の露は我も知らずに其の眼眶から溢れるのである。如何にも義理に迫つた言分、切腹！眞正に餘義なくは有るもの丶然りとては又た眞實の犬死。什麼にか其道理に柄を設けて、可惜ら忠義の武士一人を救護けたい。其の工夫に先生は頭腦を病ませた。

が、未だ其の思案が着ぬ。取つ舍つといふ白髮の耳元に、紙襖を隔てた、よいとの忍泣。

「呀」と老人は問咎める。其れより前に權内は怪しからずの不快な聲色で、

「誰じや。見苦しい！」

「私でござります。一生の御訣別、私にも一言申させて下さりませ。」

他目も忘れて轉び入るのは、權内が妻、吉千代が實の母なるお美代である。

（十）

「何を泣く！」

と、權内は故意なる尖聲して叱り付けたが、其眼猶且含涙である。

「私は其の忠義の御切腹を御抑止め申さうとは致しませぬ。唯だ、今に御沙汰が、御沙汰がと存じますのに其の御話もござりませず、餘りと申せば御餘所々々しい。——殊には千代さへお供を申すに母の私へ訣別を惜めとの御指圖さへござりませず……………。」

と母は埋冤に堪へ難ねた聲を惜します、咽ぶが如くに泣伏して、

「私、私も武士の妻、夫や子の忠死を餘所に汚目々々と生存る程の女子ともござりませぬ。何故に然う御情れ無くは遊ばします？」

驚くべし、其言を聞くと、此の女性は夫や兒供と其の死出三途の旅を共にして、冥路の果まで偕老の誓と哺育の慈とを渝へじといふ心事と見えるのだ、權内、吉千代、山鹿の老人さへ其れが健氣さ、言辭の爽快さには喫驚いた。

雖然も權内も、我が屠腹の手に妻が死首の黒髮をまで卷添むとの男でも無い。

「愚痴を申すな、女子は女子の分がある。男役の切腹に其方達の關繫はるべき筋は無い。

右は、相成らぬ！」

「成りませいでも、是非私は！」　と美代は泣く。

「沒分曉な。其方も出羽殿が娘、勝入が御緣をも引いたる女で平生は利發の生れとも思ふたが——案外、沒理解な。身が切腹に女房までを伴に連れたとなりや世間は甚麽と云ふ。判らんか！」

妻は彌ゝ身を震はしたが、此時は詞も發揮と、

「判りませぬ。世間の口に夫婦の情を換えうとは、判りませぬ。私のは然樣のでは無い、世の人が何と有らうと夫婦は夫婦、恩愛は恩愛で。——然ながら其程の御心では最う冗うは申しますまい。手前は千代と一所に參ります。御意に逆らつて妻では無いと被仰りますなりや、私は千代が乳母の名で冥途へ參じます。喃う千代や！」

と母は吉千代の手を執るのである。其甲には熱い涙がはら〳〵落下る。

吉千代は何とも言はず、唯だ嗟歎の儘で頭を垂れて居る。父も無言、凝るが如き苦しき呼吸は其の肩頭から吐れてゐる。

深沈たる夜色は砌を涉つて、唯だ折節に燈火の閃散くのみが濱風の出た徵候でもあらう。

なれど退潮時の渚には岸うつ涙の音も聞えず、雨氣に鎖られた月の光を哀しんでか、垣根の蟲は聲立てゝ鳴く。

「あ、權內殿。」

と、今迄の死黙を破つて、坐禪の牀から出た如き先生は主人を喚むだ。

「は。」と權內も、氣の注いた樣な聲で遽爾に應へた。

先生は扇の蟹目を一つ走らして、

「權內殿、愚老、思案を致すにのう、こりや切腹は熟慮へ物じやてな。先づ、當面いた處でも內方の決心。此義がじやて。——兎角は內方は、御身父子を先立てて世に遺存る所存は無いと御言やる。何さま道理じや。——其の夫婦父子の情から云はゞ至極のじやが、又た當今の武の批判から申さば、切腹はやはり男役だけの男子が可い。——なれど、今申さるゝ內方も岡山の國老、出羽殿（池田）が女、況てや勝入の御曾孫、紀伊守之助からは御孫、豪傑の輝政が大叔父に、故利隆を御叔父に持たれた身で見うと、こりや一旦の決心を中途で廢止て、鉦叩きの尼法師で世を送ると云ふ、其れも協るまい。先づ御先祖の意地。然すれば依樣自害じやが。其れは可惜い。賢女を無駝じやで喃。

御身は存知もあるまいが、今の留守たりや見事なものじやッた。御身達父子が御殿へ出仕れる。其跡で內方は鳴りを靜めて、此の大けな屋敷の中、下男下女の咳拂一つさへ御爲しやらぬ。取締めたもの！所謂る令嚴夜寂寥じや。天晴れ三軍の大將で、老人采配を把むでからが此程に行かうか否かゞ疑はれる。出來いたものじや。

其れから今一つは子息じやの。此も惜しい喃。但し其趣意は今は言ふまい。唯だ犬死は可惜なものと申して置く。

扨て其の賢妻に奇見、これをむざむざ死すと云ふも御分の死じやが。其死が又た思案の爲ると、何分にも無理死。——犬死と爲る樣かに思はるゝ…………。」

權內が氣色は猝に變つた、

「や、犬死とは、何う申す？」

「さ、其れがのじや。主君と云や今の殿も若殿も同じ主君じやな。襄に聞けば、若殿は御分等父子を御貰ひになつたと云ふ。されば御身等は、若殿御附じやな。卽ち現下の太切な主君は、大殿もであるが、先づ若殿じや。其の若殿は甚麼と御爲れた？父この殿が手討との御沙汰あつたを、扇で御折檻、御心の中は言はでも知れてある。さあ其處じや。喃う權

内。」

「む〻、何樣。」

「御心中を其の無にして、御免許も無いに腹切るは、意地なりや格別で。忠とは如何じやかな？愚老に論はすると犬死とも云へぬかな？」

「む〻、然れば………。」

「一命は貴い。其命より名は又た貴い。其の貴い名も一つ過失うと皆無に爲る。所謂る忠が不忠での、折角の切腹も我の意地に爲る。我は固より忠では無い。——で、先づ這處は、若殿の治命に遵つて、大殿の亂命に隨はず。其の思案かな。地體重臣たる御身等が覺悟は、一寸の進退も太切じやで喃。」

説き去り説き來る老人が論辯の最中に、御殿からの女中使。其れは松島からの者で、若殿より内々恩賜の御菓子まで副つてあつた。

（十一）

女中使の口狀に據れば、殿は御吐氣のありたる後、すや〳〵との御寢ならせて、御熱も餘ほど減退方の御模樣。此の容體にて二日三日保續たば、御心氣も鎭まり、御藥も服られて、

追附けは御快氣と、醫師方の歡喜は其れは〳〵との事である。此も偏へに當家御父子の忠誠と御前樣（夫人）和子樣の御滿足は此上なき御義。依て和子樣よりは御褒美の御菓子を取り敢ず下させられます。勿論表立ての義とは御座らねど、御心もじは又た別しての御品。難有く御頂戴。と例の折目高なる三指での傳達であつた。父子の面目は此上も無し。殊に彼の絶食の腹へ吐藥といふ、寧ろ無法の荒療治も、當時で云ふ病の急所に的中つたとでも謂ふものか。結局は御壽命のめでたい釆女殿は其後する〳〵との御快方で、二月の後には早や御床上の御祝義。家中の上下は、旣でに手から捩取られ懸つた五萬石を、測らず繫留た怡悦の眉と一所に、舞臺も開ける。御能もある。祝言の高砂の四海波靜かに恁う治まつたも全くの處、權內殿と吉千代が働き。然すれば我々が守り本尊、扶持方の護持佛樣と。晝行燈の光りは急に彌陀の後光ほどに輝き出して、胡麻胴亂の口を窄めて、彼等は梟引の梟に賽錢も上げ難ねぬ迄の光景となつた。

下々の信用は此の通り。此際また局の松島から段々との言上を聞し召されて、釆女殿も御額をぴッしやり。然うで有つたか、予は面目ないが當時は夢中での、いや然らば彼等に改めて謝禮を申そ、究竟は予が病痾を退治して呉れた、再生の命の親である。と此で權內に

は御刀、吉千代には御小袖の拜領物。御懇の御意も數々あつて、猶ほ、賴もしい千代めは早速又一が伽に致さう。見る處ろ彼は後來我家の基礎ともなるべき有爲少年じや。喃う松島、大石とは好名字を附けたの。と以前の疳癖家とは打て變つた洒落い殿樣。御口も御氣も輕ろ〲と御機嫌も斜ならざる次第。母のお美代も、此等の首尾を聞くにつけても、一月前に灑した淚が今更ら慚愧しく、死なで今日の慶事を見るも、偏に師の御恩　君の御慈愛、疎濶に思うてはなりませぬと我兒を諫める。諫める兒よりも先づ自己が泣いて、君恩の難有さを俯し拜む。

一藩の人の口は悉く綻び初めて、花笑ひ蝶舞ふ春日の駘蕩たるものゝ有るが中に、「南無、愛宕大權現。早く所願を果させ給へ！」京都の方を睨み詰めては、秋の夕の寥しき面に莞爾とも爲ず。其の以來端坐の膝を頽した事も無くて居るのは權内である。

彼か所願とは抑も甚麽事であらう。立身か、出世か、富貴か、長命か。其樣筋では無いのである。彼は此の權現に起誓を籠めて、我か一命の疾く終了むことを祈るのである。驚くを已めよ。此が當時の、一言の義理に身を果す意地强き武士の氣質！意地の切無さに

は最愛の妻子をも、可惜ら家名をも放擲てゝ我が所思を全くする。哀れ權内も其者のである。

師と仰ぐ老人の說諭、共に死なむと云ふ妻の啣言、殿が御病氣の快方と云ひ、若殿が御褒美の賚物等、それらの内外の事情に牽されて一旦の覺悟をば是非なく猶豫したものゝ、彼は其手に取らむとした、九寸五分の握り心地を寸の間も忘れ得ぬのである。卽ち、苟にも其齒から外へ出したる唾を再び嚥下むは、刀の手前、協らぬ事！との心で居る。或る一方からは、是れを我意だと謂ふでもあらう。雖然ど、其の我意の誹議より、彼は未練といふ良心の責苦が寢た間も耐られぬ苦痛なのである。

師の山鹿は、殿の御諚を亂命だと云はれた。何樣、或は亂命かも知れぬ。然ながら亂命でも殿の御口から出た以上は、卽ち主の御意である。主の御意を臣下の分として、其を亂命として反古にも爲ば、是れを人臣の分を盡せるものと謂ふべき歟。我は憖る言を身の楯として、徒らに身を惜まむ者をば、狗鼠の奴輩として其面に唾するをも難からぬ。其の唾すべき權内が、其の狗鼠たる賊輩が所爲は到底か出來ぬので、其で我は死ぬのである。但し、其の死も、今は其腹をば切るまい。此は君への面當である。御恩のみにて埋寃も無

き主への面當。是れは權内の亦た死すとも爲し得ぬ所。既に死の臍を固めた以上は、此は然のみ急ぐを要せぬ。唯だ一言の恥辱を悲むで、終始の意地を貫徹いて、其の御手討の御意を反古にせぬ、重臣たる我が目下の覺悟と云ふは、唯だ餓死か！

彼は此の決心からして權現へ其祈誓を懸けた。あゝ我が信ずる大權現、一日も疾く此命を召せてたび給へ！

權内は其後間もなく重病を得たのである。最初の程こそ他目を離ぬる醫藥といふをも用ひたが、後には全然、食事をさへ斥けた。愆る心とは知るよしも無き妻子の悲嘆、殿の御驚き。御醫師もまゐる、御見舞の被下も種々あつたが、彼は内心の誓約を渝へず、唾をも幾と其の咽喉へは通さで、病中も着詰めにしたる麻の上下、霰小紋の其の消るがやうに、惜しや三十四の壯齡を一期、延寶元年九月といふに、村時雨の懸るに先立つ庭の木の葉、常無き風に誘はれて冥途へ散つた。

其の病中に細々と書き認めたる封書一通。それは山鹿の老人へ！

（十二）

涙の中に歳も暮て、延寶は二年となり、吉千代は半振袖の形愈好笑き十六の青年となつた。

如法き大柄ではあるが未だ十六。殊に父親の忌服と云ふのに難つて元服の祝儀を擧げず。家祿は格別の思召といふ理合で取り來りの千五百石。家督相續滯りなく仰せ付られて、彼は新御殿と云ふ若殿の御伽となつたが。其後の吉千代は依樣以前の吉千代で、寡言の、物に頓着せぬ、晝行燈の薄ぼんやりと、梟引の梟の、間暇さへあればてくり〳〵と坐眠をのみして在る。先づは痴呆！なれと先度の技倆に猶ほ度膽を拔れてゐる家中の者は、今度は「狼者」といふ綽名を附けたので。

何樣、狼！彼が一生の行事は現にも幾んと其の狼の擧動に似てゐるから不思議で有る。卽ち、彼の後來の所作として、同盟者の肚裏を謀つたのが、晝寢の狼。寃家の間諜の來路を狙けたのが、送り狼。終局にはわんやりと一口に仇敵を僵した、其れが本相の狼で、然も良犬と書く其の文字さへ――些と牽强だが――大石良雄の姓名の中の頭の二字にすら因むで居る。

然りながら此の狼が、義の固いといふ良犬の果して良か、若くは人を啖ふ惡犬の惡であるかに、眼目を注けて、或は探り、或は試み、其の本性を發見さうと云ふに意を留めたのは、家中を擧つて、猶且彼の先生の老人獨り！

話頭は此で兩派に分れて、當時備中の國加陽郡庭瀨の城に、二萬二千四百石を領してゐる戸川縫殿助といふ大名が居た。其の曾祖父である肥後守達安は、以前は浮田の家老、關が原役に拔群の功を現はしたので此の庭瀨の地三萬九千石に封ぜられ、其後一族に分封して今は右の二萬二千四百石。其子土佐守正安、同じく玄蕃頭定家と相繼いで、此の縫殿助光風は達安からは四代目、卽ち其人の曾孫に當たる。

原來、達安は、右に云ふ備前の岡山、浮田家で一萬二千石を領して居た筆頭の家老である。或る時主の中納言殿(秀家卿)が御不行狀と、姦臣の暴斂を强諫めて、領民の難澁を救護はうと爲たのが御氣色に抵觸つて、數千の討手を其の屋敷に向けられた。彼は其の討手に圍まれながら、家子等と酒宴を開いて、門外で鬨げる吶喊に調子を取らせて、獨吟の松風を節面白く謡ひ澄したので、寄手の大將も流石これには吃驚いた。恁くてはと云ふので、其の包圍を卷き解さうとする、其間隙を得たりと討て出た達安は、突如に彼が小腕を拉て相鞅に跨り。容赦し難き御事なれども、主の御使なれば助[illegible]くるぞ。歸城て其由を眞直に云へ、達安は東國へ行く、此の鬚首御用とならば何時にても黄門殿(中納言)御自身と奪りに御出やれ、然もなくて餘人とあらば協らぬ事。鬼との戲れじや。と、あはゝゝと哄笑て其

の鎧武者取つて投げ棄て、百五十人の若黨共に妻子の警護させ、自ら殿りして悠々と岡山の城下を立ち退いたと云ふ。大膽不敵、先づは命不知の荒者である。

其の餘風が今も遺存つて、世は太平の四代目となつたが、家中には尙だ鬼膾を蓼酢で喰うといふ荒武者も在る。然るに當主の縫殿殿は生來の多病、且つ十八の未だ獨身で居られるのだから、無論御子は無い、其れが此年の十一月、風邪の心地とあつたのが俄に劫じて、哀れ結ばうるべき霜より先に葉末の露と消られたので、家中は取て返すが如き大騷動。家老の吉澤四郎左衞門、大木木工を初めとして、小鬢を戰かして、眼を血迸らして、扨て今後の義は？と評議に及むだも、情けなや諸事は總てが跡の祭で、既に繼目養子の病中願すら出す暇も無かつた戸川の家は、代々の系統こゝに斷え果て、庭瀨の城は沒收といふに事が決定つた。

「ちやが喃、鬧々との城渡し、無念でおりないか！」

瞬乎と一座を看囘して顎鬚を忙しく捻るは、彼の一家老の四郎左衞門。

(十三)

鬧々との城渡し、無念で無いか。との家中の吉澤が發言に、其日城內の大書院に會合つた

る彼の鬼臍の連中二百餘人は、一議にも及ばず同意した。「如何にも無念、然らば此城受け取に渡せられた公儀衆を些と揶揄うておまそ。」「それ宜からう。到底我々は天竺浪人、それから餓鬼道の苦に墮ちて死うよりも、修羅道で鬼共と喧嘩ひながら殿の御迹を慕うが好く御座る。籠城と決め申さう。」

城受取の役人を敵手にして揶揄っと云へば、彼等は謀反である。如何に血迷うたとは云へ當主の病死で其家斷絶とあるのは是れ天命。天命の然らしむる所は誰を恨みむ樣もない、尻の遣り場も無いのであるが、其れを彼等は敵を作つて、自から好むで修羅道の苦患に墮つるとは、詮ずるに是れ狂人の沙汰！なれども是れが此の時世の氣風で、其の氣風は獨り鬚の生えた剃下げ頭の男のみでは無い、紅白粉で人前を淑む、所謂る巾幗の心臓中にすら、自然ら磅礴として更に鬱勃たるものが有る。

縫殿殿の母堂常松院といふは今年五十餘りの老尼。先代玄蕃頭の世を逝られた後は、黒髪とゝもに浮世の煩累さをふッつと斷つて、棄恩入無爲、念佛三昧に日を消くられたのが、此の評議を聞くと其儘、念珠持つ手に白柄の薙刀といふのを捻くつて、「勇ましい次第で御座るよ喃う。尼も人々の前途の樣好う見屆けて、忠義の一々を冥途の

玄蕃殿、又た縫殿殿に逢うて傳へませう。戸川の家の恥辱とならぬやう何分とも賴みますぞや。おゝ〳〵皆の勇ましい事。健氣な事喃！」

天晴れの女丈夫！這處で大將は此の尼公と決着つて、急ぎ夫れ〳〵の準備に及ぶ。乃ち從士二百餘人は、各個牛王に血を濺いで、起請を立てゝ、妻子眷族を本丸に人質に入れる。手近の領民からは兵糧秣草を積込ませる。戸川が定紋、三本杉に劔梅鉢の旗馬印は何時にか追手の櫓上に樹てられて、弓鐵砲の足輕五十人、騎馬二騎は、矢束を解き、彈藥を肩頭から懸け、鼻膏に手唾して、城受取の役人が到着といふのを今や遲しと待掛けた。

豫て萬一の變を氣支はれた幕府は、其れが近國の諸家といふ、西方は廣島、東方は岡山、其間に散在する松山、足守、淺尾、岡田、福山、三次等、大小の藩々に命を傳へて、領境を固めさせ、素破との際の人數を用意させ、警戒おさ〳〵懈怠り無く計畫はれたが。其等諸藩の物聞の足輕、斥候の使番等が此の情勢を見ると吃驚いた。敵手は僅少の二萬二千石、人數と雖とも多寡は知れてある。とは云ふもの丶見る體は戰爭で、籠城だ。天草以來三四十年、血腥さい氣の稍薄らいだ昨今の此の騷ぎであるから、彼等は天地も顚倒する程に魂を消して、馬の蹄を宙に飛ばせる。鐵觜に風を切らせる。各個其の藩地に馳せ歸つて恁々

云々との注進に及ぶと。幾んど其れと同時に於いて、大阪の城代から赤穂の淺野家へ此の庭瀨の城受取──寧ろ敵手を命せられて、諸事は出張の大目附御目附の指圖方を相受くべく、急ぎ高割の人數を備前境の眞金宿にまで繰り出すべし。猶餘は追く達すべき事。との旨を急奉書をもて傳へられた。

高割の人數と云へば、百石三人の目安として千五百人の大勢である。武備もとより怠りなき淺野家と雖ども火急に此の多勢の出陣と云つては頗ぶる難義の大事件である。猶其外に此の人數の總大將！此れを誰人に命せられむ歟が今一層の難問題で。釆女殿も扨て此義には進却せられた。因に云ふ當時國詰の家老と云ふのは、安井治左衛門に大野九郎兵衛、此の兩人の老骨である。

（十四）

案の外なる騷動について赤穗からも多人數の出張。其の人數の總大將として殿の名代を勤むべき者は、依榛家老の兩人の中から遣はされるより外は無いのである。では有るが、現下は一家老といふ安井治左衛門は早や七十の老耄爺、行歩さへ甚だ不自由と云ふのであるから、到底千五百の軍兵を指揮して、一陣に向つて戰功を勵むなんどは思ひも寄らぬ次第

此は暫らく留守居の隱居役として、續いては二番家老の大野である。彼れ九郎兵衛は未だ四十にも足らぬ血氣の壯者、殊に算勘にかけては拔目なく、平生は下々へ七面倒なる小理屈も云ふ分別男、唯だ其の武道の上に於ては是れぞと取立てたる沙汰も聞かぬが。兎角は姑づ彼をと云ふので、釆女殿は九郎兵衛を召された。

用部屋に算盤を控へて、下役を叱り廻はして、人馬の手當、兵粮の用意、何くれに目を皿に、足手を摺古木にして飛回つてゐた大野九郎兵衛。火急の御召といふのに喫驚いて狼狽て伺候する。其の腰の周圍のがちやがちやめくのは一束にした金函の鍵、造次にも他手に托さぬ彼が其の職事に忠なるを見せてゐる。

「九郎兵衛、御前にござりまする。」

末座逈かに踞まると、殿は殊更ら御機嫌の體で、

「ほう、九郎兵衛か、近う〳〵。」

「はゝ、はッ。」と云ふので彼は恐る〳〵躄り寄る。此時、彼が眼に先づ映射たのは御背後の御床にある三寳に載せられた采配だ。金々具に白熊革の御物。はゝあ此は今回の大將へ御預けになる御品だな。と思つたが、

「いから寒じまする氣にござりまする、御障らせも御座らしやれませで。」と頭を下げると。

「おゝ其方も日々太儀じやな。何うじや手當は？」

彼は急ぎ、拜領の紫縮緬の服紗に包むだ懷中の紙夾から、小奉書剪紙の書附を取出して、いゝ、さらりと披げて、

「御意にござります、大概は先づ整理ひましたるで。馬上が七十騎、御弓が三百張、鐵砲が四百挺、其餘が槍、長柄、熊手、鳶口の類。跡々が口取、仲間、雜人共にござります。糧米、秣草、旗幕の御新調、銘々への御手當金等、未だ確との御勘定も相立ちませぬが、總じての御入費が先づは雜と四千五百兩――五千兩にも上りませうかな？何に致せ百石三人の御高割で、近國とて御餘義もござりませねと、いやはや申さう樣もござりませぬ御痛事やうにござります。下世話に申す兎角近所に事無かれ――自然は廣島樣御金庫から御助勢の義ともござりませいでは、な？」

と面を皺める。誰か知るべき、其の秣草も兵粮も、那の馬が喰つて那の鼠が自己が巢窟へ引き込むのか、鞠したら奇異いもの！

「大分に費るじやのう。然し其れも公儀勤めじやから致し方も無いとして、扨其れよりも、人數を預かる惣指圖方の者じやがのう。此は誰じやらう？」

御手焙の火鉢を些しく側方に排斥けられる。さればこそ大事の義の御尋ねなれと、九郎兵衛は遽爾に口を鎖した。

「其方の分別も大概あらうが、先づ誰じや？」

「然ればにござります、是れは身柄の者…………。」

「如何にも身柄じや。身柄と申せば重役で、重役の中では、先づ其方じやな。」

「ひえッ？」

と叫つて、殿を瞻上げた。眞面に御目に留つたなら、嘸ぞ彼が驚愕より其の喫驚に、殿は銀つて驚ろかれたでもあらうが、幸か、不幸か、此時殿は、御後背の采配に御眼を注られたので、九郎兵衛の魂消た面は一時御瞳子に映らなむだ。

「兎角は珍らしい義じや。恁樣な事は今後有るまい。其方若役に出張て見い。」

御意なされながら、殿は彼の三寶に御自身御手を懸けられた。

（十五）

御采配の三寳が其座へ出られては大變、此れぞ所謂る南無三寶！腹切刀の九寸五分の載つたのを突附けられたと同樣で、もう一命は亡いのである。　九郎兵衞、生れ得て何故か晦日と軍とは大嫌ひ、血といふ言は耳に聞てすら悚然とするのを、況んや其れを眼前に見て、剩さへ場合によれば、此の大切な軀體から、自身其を流さねば成らぬに於けるをや。

七里血敗、鶴龜々々、命あつての物種！と彼は慌遽てゝ、

「殿、まゝゝ待せられませ。恐、恐れながら其は些と御逸まらせかとも存せられます。」

殿は怪訝な顔。

「何故じや？」

「何故じやと申て恐ながら大將の御人選は大切なものと御座ります。況てや此は殿樣御名代。すりや先づ其の御人撰とござりまするには、物頭惣中、諸士以上をも召させられまして、篤と意見を御聽と有らしやれて、入札なり、又た其座の評議なり、此仁をと申す議定の以上で、改めましての仰付られが然るべき義かと九郎兵衞、憚かりながら存じ上げまする…………。」

「むゝ、其れもじや喃。」

「……然も御座りませいで、憖じ多人數の不同意の者を上の御目鏡じやとて遣はされます。其れは君臣の間、誰々否じやと御前では得申ますまいも、內心に其の不服を存じますれば自然御奉公にも疎漫が出來まして、結句は御大事の基となりまする。殊には此は一命を的の出役、將其人を得ざれば卒を以て敵に與ふる也とか、何時や山鹿氏の講釋にも承はりました氣にござります。然すれば、此はな、幾重にも…………。」

「むう、何樣。」

と殿も彼が言の理あるに折れて、折角の三寳も不出仕舞の、稍御思案の爲體。　彼は這處ぞと、

「兎角に此義はやゝ、やはり山鹿の老人へ御談合な。其れが萬一の御過失がござりませいで、――倘し御不調法とも御座ましては御家の名折れ、第一公邊へ對はせられまして…………。」

「然れば其れじやから…………。」

「何分にも然るべく御勘考…………。」

「如何にも篤と勘考せうが。然し、老人も家中も其方をと申さば、其方にも異議は無からうな。」

九郎兵衛は驚とした。

「へえ！」

「其方の口状にも一理あり、あの老人へは父者の御遺言も有る事じやから、談合も爲し、意見も聞うが喃。其上にて其方をとあらば異論を申すなよ。此は予か偏頼む。何にせよ、見い、治左は彼れ體じや。惜しい權内は昨年死ぬ。物頭と言うた處で、予の名代たるべき物は無い。其の、予は此の城地を離れられぬに、若は未だ八歲。甚麼と其方より此の采配を預らうと云ふ者の無いではないか。其方も小分とは云へ、九百石。他家ではじやらうが、當家中では大祿じや。喃う、九郎兵衛。年は壯し、病氣は無し、平日は予に分別とも云ふ其方じや。仔細を申さで、出張て呉りやれ………。」

實際、殿が仰の通りに、此の家中では三番目の高取で。九郎兵衛自身で考へた處ろでも、身柄と云ひ、年配と云ひ、此の大役は自己より他に勤め得べき者は無いやうである。けれども嫌だ。沁々との殿が御依囑は道理だが、蟲が不好ぬ。抑も給米を升量つて、餘納を竊取ねて、給銀を削減て、家中の顎を吊させるのは自己の得意だが。敵に出遇つて、其首を丁ン切るなどは、先祖の道犬以來まづ禁物で、第一が自個の柄に無い。——然し這麼で明々地に其意を云つたら、近來は堪忍強くなられた殿も、猶且以前の御癇といふが何處にか在るから、「卑怯未練な、不忠奴、手討！」とも有るまいが、「給祿を召し上げる！」とは必然來る。來たらば其れ限りである。命から二番目の大事件！と彼は此の御言の斷れ目を幸ひ、危きには處るべからず、厭な耳をば聞くべからず、又もや御意の變らぬ中。と卒怱々にして其場を逃げた、

部屋へ歸つて、扨て勘考へた。それは、其れと無く此の大難を遁れる名案はと、考へたが、考へたが、——いや、有る。有るわい。人を射ば先づ馬を射よ、敵を擒にせば其將を擒にせよ。其の相談相手といふ那の老人を先づ生擒つて、其口から、九郎兵衛は御見合せが好い、彼はやはり當所に在つて兵粮方！——恁う言はせる。ソレ其れに爲る。此れは甚麼よりもの不着手で、豈妙ならず乎。然うだ！と意が注くと、彼は矢も楯も堪らぬ程氣が急いて來て、幾んど血眼の爲體で老人の宅へ駈着けた。其れでも好く双刀をば忘れずに！

（十　六）

山鹿の老人が籠居といふのは、赤穗の城内、帶曲輪の盡處で、松立てる門は靜かに、竹叢茂げる窓は幽かに、南向の椽側はからりと啓けて、山近く、海また遠からず。暖國の習ひ、

霜に弱らぬ小草の青色面白ろき垣根の外には、蜑の呼聲時をりに聞えて、沖に小さき漁舟は手に取るやうな。其の眺望も御咎の身とて、明り障子をはたと閉鎖して、座敷には火鉢も置かず、領主の宛行ひ富裕なれども、疊の破れも依然なる、坐邊りには、古机一脚と、幾十卷かの書籍。此れのみは此軀になつても傍を離されぬ師の房州から譲られの、黑糸縅の甲冑を一具に、小幡が紀念の十文字の鎗一筋。唯だ線香の薰のみが、此の住居に相應しからぬほの〴〵との瀟洒なる氣勢を見せてゐる。

夕陽も陰沈つて、臺所では早や晩飯の支度をと混雜する薄昏時、警護の番卒が案内をも待たずつか〳〵と入つて來たのが、彼の狼狽者の大野九郎兵衛。彼は實に其の狼狽眼を嘘啓々さして、

「や御老人でざつたか、好い折じやッた。」

坐に就くや否や、猶其邊きよと〳〵と看回して、

「扨、先生！」と彼は一つ膝頭を叩いた。平生、何日ぞ面を見せたことも無き此男、先生など、尊敬の語を吾に使用うのは凡そ此七八年來、過錯にも無い事である。加之か、陰では隨分吾が事を惡く云ふ、喰餘し者、厄介者！と。否な陰どころでは無い、面と對つても無禮を働く。自個こそ當家の家老だと云ふ横柄面で、此方から會釋をしても其の挨拶さへ碌々に爲ぬ不愛想者。其奴が甚麼として此處へ來たのか、近ごろ不思議な。と老人は、

「ほう此は珍らしいお重役殿、今日は什麼いふ風で哉？」

「いや先生、定めし御聽もでざつたらうが、那の一義じや。あの庭顴の馬鹿者共がな……
……。」

「ふン、庭顴の馬鹿者共が？」と若笑した。餘りに物言ふ法も知らぬ奴！と老人の疳氣は稍勃々と來たものゝ。然う云ふ馬鹿者の這奴は這奴。姑づ其事は其事として、

「むゝ籠城かな。如何にも。」と扇を笏に取る。彼は那麼事は頓着なしに、

「いや、途徹も無い事を爲出しおいたで當家でも苛い迷惑。此も御聞きも爲されたらうが、其の討手の役が來まいての…………。」

「ふン、然うなと申す…………。」

「それで、其の大將ぢや。當手人數の其の指圖を爲まする大將の人選じやが――其義に就てな…………。」

「むゝ――。」と先生の肩頭は遽に正しく容作られた、

「是れは大義じや。承はれば千五百の御人を出張るゝと云ふ、千五百と申せば一廉の大人數、見事華やかな一軍も成る！其れが大將、むゝ此れは頗ぶる大義じや。――で其の御仁は、誰殿かな？」

九郎兵衛は有繫に些と面羞しといふ風に、

「其れがでござるて。拙者、實は其の役目を申し受うと存じたが……………。」

が、といふ聲が餘りに幺微に過ぎたので、

「ほう、貴所がかな？」

と、老人には聽取れ無かつた體。

「それがな、殘念なは病氣とござるので……………。」

愈々赤面の彼は口籠る。

「病氣とは怖う、――折角の折柄、殊に御身柄じやが！」

「仰せられると一言も無い、誠と身柄でござるがな…………。」

「恁樣な時の御名代、――平日から殿の御口眞似、其れ以外の事も爲される御事じやに…

……………。」

九郎兵衛はぎッちり閉口て、

「はッ然樣で…………。」

「病氣とて、――何處がお惡い？」

「……………………。」

「見受けた所は、好う肥胖て、好うお叱言も言はるゝ氣じやが、何處が御惡い！兎に角此際は大切な場所でござるぞ。御分の身上、我等左右うを申す役でもござらぬが、一應の道理は然樣じや。御身等からして爾う嚳込れては以下輕輩の衆中たりや甚麽で働く？第一が其の大將の人選といふ、甚麽で我等へ談合なさるゝじや？あ？」

（十七）

例の、不義と見ては一寸も假さぬ苦い〳〵老人の口に窘責められて、然しもの九郎兵衛も穴あらば入りたき心地。抑も自己は、甚麽の爲めに自ら好むで此の死地にも陥ちたのであらう、原來が戰爭が可厭さに此の蹇爺を出車に遣つて、當面の難義を助からうと爲たのであるものを、其れが全然鵙の嘴！然し恁う狂言の筋が狂つたのも、自己が慾ゐ刀の手前に

世の義理破理を愛惜つた其の失錯で、最一つが、此の酢でも菎蒻でも喫へぬ老爺を甘口で誘惑せるものと見た此方の目の違かぬ咎。えゝ是非もない。何も角も失敗々々！たゞ目下は這の藪蛇に蜿蜒り出されぬ其の用心で。此に出られたら身上仕舞。身上の爲には耻も外聞も言つて居られるか。と彼は其の苦し紛れに「實は」と出掛けた。

「實は」の內情を聽かされて見ると、老人も呆れたのである。苟にも武士と云ふ、此の血氣の三十男が、血と云ふこと大嫌ひ！軍と云ふもの錦畵で見ても怖毛が震はれる！嘘の樣だが、實際然うで、全く以て虫が好かぬ。其言に虛飾の無い證據には、神文でも何でも御覽に入れる。但し血判だけは右の理だから御容捨をと泣く。聽けば愈憫れも膽も打ち飜へる。

いかに泰平の腰拔士とは云へ、好くも其體で……と老人も一時は面色まで變へて見たものゝ、所謂る此れが糞土の墻で、弦無き弓は射るべからず、刃無き劍は斫るべからず、殊に慾ゐ無い智慧を有ん顏にして大事を誤まる、彼の趙括が流に比べては是れは聊か罪無き方で、結句は正直の可愛くもある。別しては這奴が吾を殿へ薦告て、且つ內情を賴みに來たとは、淺野家の御武運の未だ盡きざる處。唯だ恁樣の痴者を國老として藩政を委任せらる

ゝ殿の不幸は歎惜くに餘りありと云ふべきも、其れは又た後日の穿議。目下の當面き、明日にも迫れりと云ふ其の討手の惣大將をば？あゝ誰人に任せらるべき！這奴が云ふ、殿の御談合とある際には、抑も何人と其名を指して御答を申さむ歟。

「兎角は御依賴の筋は聞き屆けた。貴公は先づ當城に居られて、兵糧の缺目ないやう扱はるゝが好い。はゝはゝゝ誠に結構なお心掛けじや。」

老人は尻尾を掉つて、遁ぐるが如くに歸つて行く九郎兵衞が迹を目送つた後も、深き思案に沈まれた。

此件につけても、嗟乎、忠に似た不忠、義に肖た不義の可惜ら無理死を遂げたのは權內である、と老人は呻吟いた。那男にして現今在らば、殿とて吾とて甚麼の苦心！見事彼の城、攻破らせて、天下の目に餘る程の當家の武功を其等が口に謳はする事も協るべきに！と先生は腕を扼つた。然かも其の最期におこしたる遺書、御家の義を賴む、吉千代が身を囑む、と書きたればとて、目下の我が此躬、御咎の、日蔭者とある甚五左衞門！甚麼と爲るべきと老人は其の眼瞼に暗淚を湛めた。

「ぢやが、其の千代じや。彼者は心强慕い小悴のう！」

と、老人は其の含涙の眼を耀かせて、俄に其れが屋敷の方を屹と眄た、

「那者じやて――。」と指折つて、

「今年は十六、――既や七じやな?」

再び首を傾けて、

「父の權内には逈に生れ優りの奴!予も人を視ること寡う無いが、那程の心底の透見されぬ者、見た事が無い。――豪傑かな?――心憎いほどに諸事を空嘯いて在る!」

更に其眼を空にし、其鬚を捻りに捻つて、

「權内が右の遺書にも書きやッたな。彼は追ては大事の御役にも立つべき者。なれと又た御家に仇する大惡の無道をも巧むべき奴。萬事は貴老の御手一つに委任すべければ、善なりと見ば、御敎諭も賜はり候へ。若し然も無くば、君國の爲め、如何樣にも御處置。――と言つてある。實に好うも視た。が、其の善惡は未だ予にも熟う見えぬ。――這邊かな、彼が前途の、其を觀るには………?」

薄暮の書机の前に悵く獨語いた老人の姿は、それより一時の後、彼れ大石が彼の亭座敷の孤燈の下に儼然たる威容を作つて在るを見た。其の對坐にあるものは、母のお美代と、今は當主の其の吉千代。

（十　八）

吉千代を遇する山鹿の老人が態度と云ふは、師弟の情合と謂ふよりも、寧ろ獄丁の罪人を看守るが如きもので有つたのだ。獄丁と雖も敢て罪囚を傷はらぬでは無い、けれども其の兇徒たる事は何處までも彼等が眼中にある。即ち、彼れ、我が目の間隙を竊むでは那樣な惡事を企巧むか、非法を行ふかと、斷ず肚裏に其を措ねばならぬのに、實際も亦た其の準備をして居る。手快く云へば、一方には冷かなる其手を以て其が頭を撫でゝ、一方には其熱せる拳を以て刀の鯉口を寬げて居るのである。彼の老人も其れで、此に稍似た用心を以て今まで吉千代を睨むで居た。

雖然も、吉千代の容子といふものは、師の老人が那樣な考慮でゐるか、什麼かは、一切無頓着の平氣で居るとより外は見受けられぬ。或る時は老人が暴怒つて見せる、彼は恐懼もせぬ。或る時は太く賞擧ても見せる、嬉しとも感はぬ樣である。叱責るれば低頭をして唯だ引退がる。質問せば知つた丈けを答へて、其餘を言はぬ。斷えず莞爾々々、其間には何處でも管はぬ例の坐睡のこくり〳〵。これを澄せども清まず、攪せども濁らず、洋々たる

水と謂うか、汪々たる波と謂うか、幾んど際涯も無いのに然しもの老人も手を着け難て、鯛に負る虎の遊戯べる象を狙ふやうに、其の覺隙も有らば、有らばと、唯其の時機の到來といふのを待てゐた。——時節は今來たのである。

老人も此夜の景色は良平日に異なるもの有つて、彼の白銀なす頤下の髯は、一絲を紊さず其胸の邊りへ搖り懸られて、黑鐵の筋入りたるかと覺しき硬き腕は、大伽藍の巨柱なんとを見るやうに、袴の襞に、蹈手と衝立て居る。半眼に啓いた眼は挑ます、眴がす、今や事の成行から意裏の一通りを演了りて、此から對手の兩人が返答といふを待つ面の色！

「御師匠樣の御慈悲、愚者をも人並かの樣に思し召まして此の大役を仰せ付られませうかの御詞、母たる私も申し盡くす辭も無い程に難有う存じまする。然し未だ御覽の通りの若輩、前髮さへも取れませぬ身で、殿樣御名代。——御公儀初め、隣國への手前、餘り御家に御人も無いやうにござりましては、自然御家の御武威にも關はりまして、御瑕瑾の筋ともござりますまいか。其邊の義は………？」

と此れが母親の答である。

「勿論、其の遠慮もじやが、な、殿の御名代は外にある。千代どのは其の御名代を御輔佐申して。右御名代の又た名代の采配を採られるればと、これ有るじや。」

御名代の名代とは其意が解せぬ。と母は又た、「それは？」と居寄ると。

老人は打潛めて、

「其れは若殿じや。愚老分別には、又一殿を殿御名代として遣はされる。千代を其の又た御補佐とする。恁樣に言上をしやうと思ふ………。」

母は眼を睜つた。其れが彼の眞面目とあるのだから彌々驚いた。「憚りながら」と言うとするのを老人は抑へて、

「言はれな。いや御身の言うと爲らるゝのは我等も存知じや。御八歲の大將に、十六の御補佐。鬼事の遊戯でもする樣じやと云はるゝので有らうが喃、然りとては古例に暗い。權内も好いて讀れたから御身も存せぬとはあるまいが、あの太平記じや。正成討死せられた跡の正行は什麽有つたな。彼折り帶刀はまだ十一じや。其の小腕でも見事足利の大軍を防遏へて、自己が所領、扨は吉野の行在をも守護申したな。又た幼年の大將といふは鎌倉攻の千壽王殿(足利義詮)これは御四歲。されば武家の大將は幼稚とても苦しうは無い、結句は佳例じやな。」

「其れは然やでござりませうが、正行の幼稚と申すも餘に和田恩地以下の然るべき古兵が在られたからと、權内も右は申されました。唯だ今日では其の古兵が？」

「むゝ、有らば異議ないな。此の城攻を見事爲課せて、淺野家の武威さへ揚らば、獨見の吉千代を矢石の間に立たするも異論は無いとお言やるじやな。—むゝ權内も悦ばれうよ。

むゝ——會得た。——然らば、千代じや、。

千代！御事は、若殿を御輔佐の此の大任を擔當けて、身を死して忠を主家に致す、重臣としての覺悟は有るか。什麼？確乎と言やれ！。」

彼老の睜張つた眼光は、其者の額上を耦煞と射た。

（十九）

吉千代も今宵は例もの坐睡りには似ず、耳を澄して曩刻からの對話といふを聽いて居た。なれど其は唯だ「聽いて居る」までの事である。別に、其事に就いての異りたる顏色とか、變りたる氣觸とか謂ふものは新たに心を剪り立の蠟燭の光にすら一向見えぬ。抑も此が普通の人間に克る事であらうか。今夜師命を諾うとなれば、明朝からにも其の死生の地、存亡の道に出入して、然も御八歳の若殿の輔弼てふ大任を擔當けさせられる。身の名譽とか、

御家の安危とか、合戰の勝敗とか、些少は其の心裏に於いて、驚き、喜び、危む等の感動が無くてはならぬ。否我れ先づ味方の情勢から考へて、敵情を量つて、地理を質して、兵糧秣草彈藥、矢種の用意如何をまで、此の師なる人にも問うと云ふ。猶其れより先に、其が吾を推薦せむとする其の意衷を訊すと云ふのが當然の順序とも有るべきに、そこらの點には空々寂々の意にも注めぬは、依樣痴呆のか。但しは胸臆に成竹あり、彼の草廬を出でしずて夙く已に三分の計を定めた、豪いのか。一圓判明ぬで。老人も今更らながら張合が抜けて、暖簾に腕押の扼り詰めた拳の力も自然ら弛むで來た。では有るが、此の場合、此儘とは濟されぬ。

「千代、什麼じや？」

「御指圖なりや參りませう。」

其の言樣から平氣な工合は、宛然遊山の供にでも立つやうな！

「千代、こりや發揮り御返答せぬか。故何其方は！」

と、母親は氣が氣で無いのである。

「むゝ千代、此は合戰じやぞ。所謂る國之大事、之を校ふるに計を以てして熟く彼我の

情を索めねば協らぬ場目なのじやぞ。御事、彼所へ出張らうと云ふ。行でから後、什麽爲やる？」

先生も稍些しく心許無い氣が注て來たので膝さへ迫り詰めた。でも彼は悔乎とも爲ぬ。

「什麽も爲ませぬ。私はな、參れば水なぶりして遊びまする。」

母親は、發狂つた歟と苛立つた。面目無いやら、情け無いやら！突然に其子の肩頭を引捉へて引伏るのを。

「いや、急くまい。」

と老人は押隔てゝ、

「こりや千代、謀は密なるを尊べとも此坐は見る通りの水不入、遠慮は無い。な。——彼所の地理は存ちやが、胸中の秘は聞くまいで、唯だ身が問ふまでに得答へませい。——彼所の地理は存知かな？」

亂れた襟を掻き直した吉千代は、惡怯れも、何にも爲ぬ。

「一通りは心得居りまする。——城は平城で…………。」

「むゝ、平城で、——其の附近は？」

「深田が三方、一方は海近にござります。」

「おゝ其の通り。で其れは新城、又た別に舊城が有る。其も知てかな？」

「はい、初代の肥後殿(達安)が其の以前に居られましたは備前の兒島、可成の山城で、それは常山と申します。今も敵の墓所、瑜伽山續きは此の要害の地にござります。」

「むう、好う調査て。——で川は？其の水なぶりせうと云ふ其の川流は？」

老人が膝頭の扇は此時儼しく衝立られた。

「川流は、東方に笹瀬川、中央に撫川、西方に足守の板倉川がござります。いづれも砂川の水は多量もござりませねど、笹瀬川には岡山の旭川。撫川と板倉川には西方の高梁川から水を一杯に引けまする。私は此處で其の水なぶりの戲遊をせうと…………。」

と、はゝと微笑ふ。其の前髪を掻き上げる手元から容子といふを沁々と覗た老人は覺えず知らず、

「あッ、ても、お主は怖う！」

後句は言はれぬ程、山鹿の先生、自ら任じた古兵の助勢の口も啓かれぬまでに、扨もくと感じたのである。

誰か知るべき、羽柴殿が高松の水攻と云ふを憶着いたる老人が胸中の秘と、吉千代の謎語と云ふのが、不意くも符合たらしい。

(二十)

翌朝、山鹿の老人は御前に召された。御談合は數刻、もとより人拂の、其の模樣は殿と老人との外何人も知ることを得ぬのであつたが、其れでも漏れたは誰が口か。老人の退出後、新御殿といふ若殿の御住居は色めき渡つて、今回の御名代として又一郎殿御出馬との沙汰は、奥表の人の耳口に囁語かれた。

御八歳の若殿が御名代。それは有るべからぬ事とは無いが、扨て其れが御傅役は誰ぞ？安井か、大野か、但しは物頭、老輩の然るべき人體を選擇まるゝか。兎に角此の御人選は、川狩や茸狩の易々いとは違つて、猪狩よりも最そッと危險しき鬼狩の御供と云ふのであるから、此れは猿や犬雉のお伽話の格には行くまい。と、誰も人も固唾を嚥む。

其の固唾の口も、此の翌朝となると、無慘やな彼等が案外といふ方に開かせられた。

其れは當日の朝五つ半時、諸士以上、城内の大書院へ總出仕といふ其の面前で、若殿又一郎殿へ采女殿手から御采配を下させられて、續いて御鎧の着初があつた。其式が濟むと、御

伽の吉千代を御前へ召されて、這處で元服。祖父が名に因む内藏助、代々の通字の良といふ字へ雄と云ふ文字を添へられて、名は嚴めしき内藏助良雄！父祖代々の忠功を思し召さるゝと云ふ御賞詞があつて、十六の小童が家老職へ登用。事も愚かや今度の討手の總指圖方、大將たる若殿の御輔佐との重き御意さへ下たので、一同は啞との口も塞がら無つた。成る程、安井は七十の老耄である、此が留守役は然も有るべき事として。次には大野。然し此も彼れ體の男であるから御目鏡に叶はぬとした處が、猶其外にも當家には御人と云ふが幾許もある。現に此座に見えた衆でも、侍大將の番頭には、伊藤五右衛門、外村源右衛門、岡林杢之助、玉蟲七郎左衛門、近藤源八。奉行の筆頭には奥野將監、家老格側用人には進藤源四郎。此等の歴々の老輩が有るを差し置れて、あの薄ぼんやりの晝行燈の、梟引の梟から此ごろ狼に成り上つた爲體の分らぬ此の小童を。――地體、殿樣は、あの御病氣の彼件以來、彼者を太く御寵愛なさると見えるが。彼件は實は眞の輕業、西の宮の傀儡師の小僧を雇うてからが爲る藝である。武士の所作としては實と鼻撮みの、風上にも置けぬ所爲。其れを殿は猶且あの手打ち〳〵あわい、此處までござれ甘酒進上で、敵が城から誘引き出されて、軍に勝てると思し召すのか。然りとては！沙汰の限り！と、彼等は吃驚が

二分の呆然三分、餘の五分が例の嫉妬の、不平、不服、不愉快と云ふのから、誰も目と目を視合せの、頭を些と下げた計り。

此體を御覽ぜられた殿は、重ねての御意。

「又一殿は予が名代、內藏助は總指圖方。——皆、然樣心得い。」

堪り難ねた外村と玉蟲は勃々と出掛けた。

「先づ以て御名代の義も。被御付も相濟みまして私共一同の安堵、別して若殿樣へは恐悅の段を皆よりも申上げまする。但し總指圖方とござりまする內藏助義は、如何御料見でござりまするやら、人體と申し、年配——私共いから愚案に解ち難ねまする。憚りながら右御分別の程…………。」

「不相應しからぬと申すのか。」

「御意にござりまする。何分不似合と…………。」

「申すな。予が眼鏡じやぞ。」

御眼鏡とあれば、其れ迄だ。なれども其の「御眼鏡」が彌我ゞ小瑕に觸つて、忌憚りなき御席とあるなら「盲目の其物だ」と言ひたい程である。でも堪らぬから彼等は竊に、大野が面に瞳子を注視ぐと、彼は、

「構うな、行れ〳〵。」と同じく眼で嗾ける。彼も其の案外な今日の始末に、業を煑やして、此の我は顔する小倅の這面皮を！と云ふので有るらしい。

（二十一）

大野が目授に勢を得た外村玉蟲の兩人は、殿の御諚に恐れ入つて今下げた頭を急に抬上げた。

「御眼鏡とござりますれば、私共異議申ます隙間とてござりませぬ。但し此は申す迄も無い御大事の義。內藏助如何やうの處存で居りまするか、右の段だけ悄と問諦めたうござります。」

侍大將の番頭たる彼等が要求としては至當のものである。況んや彼等の一兩人は彼が配下に屬けねば成らぬ者。其の打合せ旁、此坐で萬事の手筈を談ずるも緊要の件。加之らで、采女殿すら〻其實はと云へば、山鹿の老人が强ての口入で、此の惣指圖方を彼へと御意はなされたものゝ、最初は同是小首を傾げられた其の夥伴。是れ倖ひの要望、媒人口の果然當るか不當ぬかを彼等の砥に硎けて試して見るも惡しからぬ事と云ふので。こゝで「勝手に」

との御聴許は出た。

さあ事件である。内藏助に爲り立の、ほやほやと煙の出てゐる御家老の吉千代は、今や試驗の席。いや好い看世物、否寧ろ包圍攻擊の彈丸雨下中に、其の孤城落日の軀を揩かせられるのだ。後楯と依憑む殿さへも此の御心、滿坐の虛呂つく眼光は、我に隙も有らば取て蒐らう、蹶仆いたら啖うといふ、敵軍の探照燈か、送り狼。「狼者」の綽名も虛なる、彼は送られ狼の無情い境遇に墜ちて了つた。

爲濟し顏なるは彼の兩人である。

「いや御伽の、吉千代では無い、老職の內藏助どのでござッたな。はゝ先づ以て此度の御大役、千萬御苦勞に存じ申すな。就ては我等承知したいは、其の總御指圖方たる貴所が其の御指圖振じや。—什麽御指圖召さるかな？」

一座は森とした。咳拂の聲さへ聞えぬ。それは固唾を嚥むだのである。

「現今は未だ別に思案もござりませぬ。いづれは彼地へ到着りましてから以上の事……。」

彼の應對は尙だ丁寧の、內藏助より吉千代で居る。圖に乘つた兩個は、

「然はござるまい。御手前も山鹿老人の御門弟、七書の端片位ゐは窺かれた者。彼の孫子

には何と御座るな。——彼を知り己を知れば百戰百勝、多算なれば勝ち、少算なれば敗る。上兵は謀を伐つ。—其餘にも要文は數々ござる。「到着てから」杯は御座興過ぎますな。—外村は皮肉に抉ると、玉蟲も其尾に接いて。「いや源右、申されなよ、孫子の子は團子の子じやと申された吉殿じや。那麼な思案が。はゝゝゝ、扨は內藏殿、御身樣のは、下世話の、出た所勝負じやな？」

「如何にも其の出た所とやら、勝負は凡て其樣なもの。—敵にも夫れ夫れの用意はあらう、我等は其の敵に因て轉化しまする。」

鋒鋩は晃乎と見えた。外村は卽ぐ其言を捉へて、

「言れたな、轉化とは。—然し轉化も、我に其備有つての後に其義も叶る。空々寂々、無算の轉化とは聞きも及ばぬ。第一、其の轉化といふ、轉化の物素がござるまい。」

內藏助は輕く笑つた、

「御自分のは其りや板附じや、はゝ釘附の兵法と云ふものじや！」

はゝと再た嘲笑ふ。すは癖兒と外村は居丈高、

「近頃の怪言！縱し釘附でも、先づ勝て後戰ふと有る。先づ勝つとは我備の有るからじや。

出た所勝負の貴所が合戰は、戰つて後勝を求むる、所謂る敗兵！て、この義、什麽でざる？」

と乘り掛るのを、内藏助は平氣で、首頷いて、

「備かな？備にも種樣ある。目下の其の備とお言やる、其の意義はな？」

「おう、備とは手當の事。」

「手當とは？」

玉蟲は其傍から、

「支度の事よ！」

「むゝ、支度とは？」

「分曉んかな、支度とは備の事！」

と兩人は勃氣に叫喚むだ。叫喚いたが、逆戻り！其の逆戻と勃氣とが好笑いとて、下座の方では取り失してくすくす。殿さへも含笑れて、嚴冬の座敷も浮やかに春めき立つたが、其れに逆上せたのか、兩人は眞赤になつた。

「あゝ分解ました。では御兩所のは、地理、山川、兵糧、彈藥、其餘城攻の人數立じやな。」

誘引を掛けると、

「勿論――。」と兩個も苦笑ひ。

「人數を立てゝ、什麽覧られます、彼城に？」

「え？」

「什麽其の軍の備を立てゝ、御兩所は彼城を攻められます！彼處はな、四方は深田、馬の蹄も立ちませぬのに、城の石垣は高うござります。守る兵は金鐵の郎從が二百餘人に、雜人も五百餘。兵糧も矢種も澤山。こゝで一合戰、冥途の土産といふ荒者の籠つた堅城に、御兩所は什麽備を立てゝ。其の田の中、什麽覧られます？」

匆遽の頓智、内藏助は守勢から攻勢に轉化つた。

（二十二）

内藏助に疊み掛けられて外村も玉蟲も大きに急迫つた。卽ち、敵城の攻法について、歪形にも條理を附けねば此で自己等が餘りの痴呆になる。然も無くて「其の攻方の意見は？」と我より問はゞ、這奴必然「其れは我等が方寸の裏、惣指圖方たる拙者が采配を後日に御覽なされい。」と反擊けるに相違ない。然すれば此も當座の物笑ひ。指を咬へて引込むか。當

面き出放題の城攻を此座で饒舌つて、所謂る茶を濁して面目を繕うか。何方にしても守勢に轉つた味方の旗色、甚だ不利からぬではあるが、儘よ、敵手は猶ほ多寡の知れたる剃刻しの小童！と就中外村は張臂の、眼を瞋かして、

「其れ計りの事に怯ぢやれるのか。固より城！城ちふ以上は石垣もおざろ、塀櫓もあろ、鐵砲に弓箭。其等の道具に恐怖がつて甚麼合戰が成る。ぢやから我等の云ふ其の備立じやわ！」

再た逆戻りに爲りさうなので耐り難られた殿は「待て」と喚れて、

「源右、こりや判らんぞ。內藏助は城の要害を云々と說いて、其要害を什麼攻むると申す。然るに其方は、其の仔細をば得う應はで唯だ、備、備と云ふ。然る深田の、馬蹄も立たぬ、路細き所謂る難所、然も弓銃隙間もなく備へた虎口へは其方何樣に備へて、如何して蒐る？予が士は敵が矢彈の餌では無いぞ。將、其忿に勝ずして之に蟻附し、士卒三分の一を殺すなど云ふ無法を申さば、其方、番頭の職には置れぬが。確乎と申せ！。」

吃驚いたは外村源右衛門、飛だ藪から棒が出て、身上の大事となつたのに狼狽周章いてはツと手を突いたが、その儘無言！

「七郎左は如何じや。—意見が有るか？」

意見どころか、其者が肚裏には胃脐より外無いのである。肝腎の端馬と憑むだ外村さへ此の始末であるから、況て尻馬たる彼は尾を縮めて、其場に慴伏した。

「御父樣—。」

と起上られたのは若殿、又一殿である。

「源右衛門も七郎左衛門も憎い奴でござります。又一と仲の好い千代を苛虐め樣といたします。千代は忠臣でござります。先度の御病氣の際も御服藥を進げましたのは千代ばかり、源右衛門に七郎左衛門も徒觀て居りました。其れだのに其の千代を却つて虐遇めやうと致します！」

凜乎、嚴乎。御八才の若殿が御口からとしては愕くべき理義の明晰に、異むべき迄の辯舌の爽快、秋霜烈日の激しきに遇へるが如き滿座の諸士は、覺えず襟を肅め頭を額きて、壯者は其舌を震ふが中に、老たるは辱けなやと、感涙を其袖に包み餘した。殿も御喜悅の暗涙の御聲。

「申された又一殿、今の一言は前途賴もしい！、一番首獲た程にも當り申すぞ。やあ內藏、

某る老人も若と其方とを水魚の交にも爲やうとて、肝煎るぞ。予も至極の義と存じて此大儀をも言附けたのじや喃。其方、好く其意を得て、萬事を賴むぞよ。若は、其方を、忠臣じやと云ふ。忠臣に爲れ！礎石とも爲れ！」

身に餘る御懇の御意とて、內藏助は唯だ嗚咽！

「御意、恐れ入り存じまする。」

「猶一言云ふべきのは味方の兵じやぞよ。彼等もまた人之子じや。濫りに殺すなよ。見切たる圖の外は、たゞ謀略をもて彼城を奪れ。其方も地理は明るい。―遠慮も有る。―今の口狀で予も稍安堵した。深うは言ふまいが、全般を賴むぞよ。」

甚麼たる責任の重大にか、十六の少年、然も單身。支柱なき彼は其の重力に堪で將に自ら壓潰んとす。猶什麼と克く行動せむ。危哉岌々乎たりである。

（二十三）

備中國賀陽郡庭瀨の城の討手として、若殿又一郎殿を大將に、家老の內藏助を惣指圖方とした る赤穗勢千五百餘人は、旗鼓整々、兵馬堂々、延寳の二年十一月下旬に在所を發つて、播磨備前の境なる帆坂峠を押し下し、三石より片上、藤井、岡山にかゝつて押前四日、備中の眞金、宮內の宿に到着したは十二月の初旬。此處より庭瀨へは近き二里。豫て其所をと見立て置きたる吉備の中山の西方の山際、吉備津の宮の回廊の廣場を陣所として、內藏助は先づ人馬の息を休めたのである。

赤穗勢の到着より先に、岡山よりは大供の町に。足守よりは國分の宿に。松山よりは總社の驛に。福山よりは倉敷の陣屋。讃州の丸龜よりは海路を兒島の呼松に。各々五百、七百、千、千五百の人數を出だして。庭瀨の敵を釜中の魚にして、遠卷の勢を見せて居る。なれども其の城受取の役、卽ち討手の正使と云ふは赤穗の淺野。自餘の諸侯は其れが助勢たるべしとある目附方からの傳達に因て、此等の諸家は進んでは攻めず。又た城よりも討ては出でず。現下は交互に睨み合の情景。唯だ當時には珍らしき旗馬印に甲冑の閃耀き、冬枯の山田に春秋の花紅葉を一時に見せたる稀代の壯觀とは有るものゝ。抑も泰平の御代も四代に渉つて、元和の偃武からは既や六十年。幾んと干戈の甚麼物であるかを忘れ果てたる此日に際つて、寢耳に洪水の此の珍事であるから、上下の驚愕、近國の騷動は云ふも更らにて、街道は留る、往來は無くなる、暢氣な雲助が長持唄は、晝夜に揚ぐる寄手が鯨波と調子が變つて、宿妓が塗り立てた白粉の顏も駈け立つる早馬の蹄の塵に掻き黒まされる。時

の勢を得たものは、唯だ鍛冶屋に研職に甲冑師。況して庭瀨を中心とせる撫川、妹尾、早島、中莊、宮内等の農商共は、こゝに物の哀れを止めて、敵味方の火繩の臭ひに魂を消して、拔刃の光りに度を失つて、命一つを辛らくに、逃る、喚く、泣き叫ぶの體。宛ら見る、熊野比丘尼が掛軸の地獄の亡者が、惡鬼に逐れ、猛火に燒れて、劍の山や針の谷、生み死みに逍げ漂ふ、先づは其の慘景。

然無きだに此體である其騷動に、更に一層の輪を加けさせたは赤穗陣からの布令である。庭瀨の城周り一里が男女は、此三日が以内に立退くべし。然もなくば其の器財雜具、一命を迄も洪水の底に失ふも知れずと云ふ膽の潰れた軍令。聞く老幼は皆魂を飛ばした。が、此令を聞いて又た冷笑ふ者も寡くは無いのである。就中城中の左右の大將、吉澤四郎左衞門に大木木工の兩人は、巨口開いて呵々と笑つた。寄手の弱蟲等！此城の要害に見侮ねて、最初から卑怯な水攻にしをると見ゆる。羽柴殿が猿智慧から憶着いた手段ともあらうが、然りとては拙劣なや。高松は些少な山城ながら、故國に據れば塀垣も低い。當城の要害と謂ば、石垣の高さは五間、此れに乘る水嵩の堰、堤を築かうには抑も何程の工手間が要る！高松ですらが七十五町、其の堰堤は數十二間に馬踏六間、高さが三間、此の土俵の數

七百五十九萬三千七百五十俵、卽ち一坪に六十二俵半積と書てあるは。當方がのは其の三倍か、五倍かな。三千萬俵からの土俵、誰が作つて誰が此處に積み立つるかよ。はゝはゝ、貝杓子の海、蟹の剪刀での富士の山の出來たる際に切て出て、其の堰堤崩いて反對に素奴等に水泡吹かさうじやまで。可矣其れ迄は何程なと積め。汝輩は城内で晝寢して居い。あはゝゝゝ。と内心は知らぬが表面には氣にも留めぬ顏色。

其れと同じく寄手の方にも其の批判はあつた。いとゞさへ降雨少なき中國の地に、時は乾天の十二月。河川の水は涸れ盡て河磧の砂は塵埃と立つ昨今の日和、何を目的に然る悠長の穿議と御座あるか。赤穗衆、城攻叶はずとならば其の討手、當方へお委任せ下されい。先づ一當て當てゝ城の奴等が弓槍の取廻し方も見申さう。と其れは軍監の目附方へ申し出た討手過半の所望であつた。

（二十四）

赤穗と宮内の本陣とは、國こそ播磨備中と隔てゝ、其間に備前の一國を介むでは居るものの、路程として、僅に十七里、早馬ならば一日で着く。されば日々の注進はある。彼地の模樣は手に取る樣である。其の手に取る如きに就けても、心配の胸のいとゞ堪へ難きまで覺

ゆるのは、内藏助が母親の美代である。

我子が采配ぃ執り樣、城攻の爲方、山鹿の先生も那れ程賞讃て下されたので有るから決めし脫落などは微塵も有るまい。年齡よりは勝れた青年、流石は赤穗の惣指圖方と味方の眼をも驚かしたか、敵の膽をも挫いだか、落城は何日？凱旋は何日？今日や好い耳、明日や吉報？と待つには反對て。追々と來る注進から、飛脚から、隨つて家中上下の口に耳にする批判と云ふものは。情けなや、散々の次第である。

其の散々な中にも種樣あるが、批難の七分は冬季に掛つての彼の水攻の迂策で。素人聞にも至極道理な論難の條由。卽ち、那の雨も降らぬ、水も無き川々の流末を堰上げて、五間も高き塀櫓を水浸に爲うと云ふ。何たる虛呆！此が便ち晝行燈の沒幹事兒、胡麻胴亂の口ばかり巨大く開いても腹中は空なる馬鹿者の本體を現はしたのだ、と笑ひ且罵るので。或は其の仔細らしきは。彼の阿呆は阿呆として、物の廿日も此儘であらば、討手の役目も召上げられて御不首尾は眼前。然らば其の跡始末は如何相成らう。御名代たる若殿は御咎、殿も其儘では相濟れまい。御家も半知か、城地は無論土地替へ！と此等は蓋た彼の大野等が爲にする所ある曲矩でもあらうが、紛々として發る蜚語は八方から殿の御耳へ飛蝗と飛來る。

衆口は金を鑠かし、積羽は船を沈むるの譬喩、懼るべきものは彼の浸潤の譖なる者で。采女殿も好箇殿樣ではあるが、決して又た一たび任じて復た疑はずと云ふほどの明察も度量も無いのである。殊に況んや其事たる、御家と若殿が御身とに關繫つて、猶其の結末は、殿御自身の御頭の上にも及ばうと云ふ、急所も急所、致命の傷とも謂ふべき大事件！もう這處では彼の水攻其者が、人之子を死すな、我兵を損ずるな、見切たる圖の外は謀略をもて彼城を奪れと御意なされた、其の謀略に其れが當るか、否等との御考案も甚麽も無い。背は固より以て腹に換ふべからず、鶴の餌には泥鰡が爲る、泥鰌の餌には孑孑が爲る、大の蟲を助ける爲には小の蟲の死されるのが世間の理法。と此で可哀や內藏助一人が惡者に陷されて。匆々本陣から召還し、其代として奧野か近藤か、猶ほ他に然るべき老功の者を。と云ふに御內議は略決つたものゝ。唯だ山鹿の老人が其議に頭掉を掉られたとかで、今暫時と沙汰は延びたが。到底彼れ內藏が壽命といふは此處十日が以內との事。——と其の風說は母親が耳に的然中たる。

「如何したら可からう、可からう？寧そ是れは先生に！」

お美代は、死だ亡夫からして、山鹿の老人が先殿への誓言「大事あらば當家の爲に一方の任承はらん」との言質ある事をも聞て居る。先日の「古兵の助勢」と云ふのも、或は其意味からして來た語ではあるまいかと、信じて居た。但し其は兎も角もとして、我子が采配の振り方を、目下甚麼したらば可いので有るか。成るならば先生が所謂る影武者で、其の言質や古兵の助勢といふのを實地に行つて戴きたい。現今の御身分、强つてとは到底要求へぬが、其の「成るならば」で。と恩愛の切無さには羞恥も外聞も既う言つて居られぬ母親の慈悲。彼女は自身供をも連れず、帯曲輪なる彼の老人の籠居へ駛着けた。

（二十五）

母親の美代は恁く半狂亂の體とまで其胸を痛めてゐるに、其子の内藏助が落着加減は呆れる迄に又た暢氣なもので。其策の迂を尤める、愚を嗤ふ、攻撃の矢彈は四方八面、不斷晝夜く彼が一身に降り來つて、庭瀬の城より宮内の彼の本陣の方が味方の爲にあはや、攻陷されんかと見ゆる程なるも、悠然自若。那處を其の箭風が吹くか、何處に其の彈雨が降てゐるのか、はゝあと輾然一笑に附して――附してなら尙だ可いのであるが、空々寂々。嘗て言へば寂然不動。其れが什麼やら馬耳東風の、意にも注めず、感覺も無い風で在るらしい。

軍監たる目附方も餘りに見離ねて、之れを質問した。其れに對して内藏助も、我が處存の一通りと、其の幕府としての城攻の、恁く有らねば協らぬ義といふ、大體の意趣とを應へたのである。雖然も中には其を太平の軍遊びとして嘲笑つた。唯獨り大目附の依田筑前守のみは、感歎之れを久うして。

「天晴れの義じや。何さま天下人たる公方家の御軍略としては其要を得たものじや。四海を統御させらるゝ大腹量、人命を傷はらせらるゝ御仁惠。後詰の患ひもなき此城を攻るには、勢を以て威し、和を以て濟すと云ふ其方が大趣意には、筑前幾と感心いたす。但し公方家たる御稱に就いての御仁惠と、將軍家たる御號に對しての御武威とは、又た一樣のものならぬ箇所を、其方、熟う合點いたして喃。」

内藏助も、治世の大體を得たる其言に悅んで、明察の敏きに感じて、局量の寛大なるに服して、猶ほ筑州が意見に附いての種々の評定には及むだが、是れ固より至極の密議。當時の掟として斯る密議の座に列なる者は、一々牛王に血を濺いで、神水を啜つて、他聞他言を緊く禁めらるゝと云ふのであるから、其の一言半句も他所へは漏れぬが。唯だ其れが結果としてか、其の翌日から、諸手へ割當の水留の土俵と云ふを、公儀目附方の立合、赤穂

が役人の指圖の場所々々へ山の如くに積上げさせた。

其の場所と云ふは。庭瀬の城の東方に於ては、吉備の中山の東南の尾崎、花尻の在家より城の辰巳なる延友の村へ懸けて、此間二十町。其れより、稍南方へ折れて、妹尾崎の丘の麓まで十餘町。又た城の西方をば、栗坂の背後の陵より、戌亥の方二子の鼻の斜向にして同じく十餘町、卽ち東南西の三方、平均各二十五町が程、丘陵ある土地は丘陵を背面に、防堤あるをば其物を便りに、土俵を築立て、大杭を振り。彼の城の東方を流るゝ笹瀬川、中央を落す撫川、西方より來る足守川の水を一滴、露の一雫をも漏らさじと構へて。猶其の築立の場所々々へは人數を進めさせ、鯨波を揚げ、貝を立て、太皷を鳴らし。此日初めて城に向ひて諸手總懸の巨礮の火蓋を切らせたのである。

物の悽愴さは譬喩を取らんに詞も無し、彼の天柱も折れ地軸も碎け、此城今や微塵になるべき歟と見ゆる迄なるを、城の兩將吉澤、大木は、母堂の常松院を眞先にして、追手搦手、岡山妹尾の諸口の門々を看廻り。立回り、憖くてこそ味方が武勇も見えつるぞ。看よ彼の多勢、千にも足らぬ我等が小勢を攻め難て、土俵事して唯あの巨礮の遠攻にするなるよ。笑止の爲體かな。一陣に進むで男見らしき勝負を望む和郞等も無きと見ゆるぞや。好し、其

義ならば今夜にもあれ此方より逆寄せして、些ばかり鬼味噌の鹽鹹きを舐らせて與るべいか。あッ陰嚢無し！あッはゝゝ。と笑ひつ罵りつ、鬚を揮つて勇む士卒を猶ほ表面には督勵するものゝ、眞實は内心疲弱らぬでも無い。其れは猶且り水攻より來る兵糧攻。華やかなる修羅道の鬼となる覺悟の兵が、餓鬼道の亡者に墮ちて、飢渴の苦惱に悶死する墓なき運命が稍眼前に散ついて來たからである。

「吉澤殿、此れ御覽なされたか。」

「何物じや？」

と拔くと、其れは箭文！赤穗の重役大石内藏助良雄より、城中諸手衆へ。

「えッ和議の——降參を勸むる箭文？穢らはしい、燒棄て〱！」

（二十六）

燒棄ても〱、日に幾十通となき寄手の箭文は此頃の雨脚より繁く來るのである。然も其の文言は、所謂る手を換へ品を變て、城中の將士が彼の武士道の意地を立貫きて、數代の城地を今故なく渡すを恥ぢたる其の心根の義理固きを譽めたるもあれば、又た落城の眼前なるを威嚇したる文句もある。就中も誠意を籠めたらしきは、今にして開城あらば、公邊

の義は寄手惣中より如何樣にも申し和めて、戸川の家名は再興させむ。城内の上下一同、一命の義は言ふに及ばず、世の中を廣く、無事に、安穩に過さるゝ樣計らふべし。此事僞りなき證據としては日本の大小の神祇、就中熊野の牛王に懸けて神文を進らす。とて誓詞に血判を据えたるをさへ遠矢に卷きて、城中へ射込むで來るすらがある。

此れが爲めとも有るまいが、大抵は人の情、倦氣てふものに魅まれると、什麼な鐵心石腸と雖も案外に脆く行くのが、和漢今昔の類例で。其れも味方が勝に乘る猛勢ともあらばで有るが、城内から試けた二度までの夜討は、寄手の陣所の間際も無きと、彼自個が要害に賴みたる川々とに妨害られて、結句は敵の柵際にさへ附き得で、引返した。其れが抑も怪痴の着き初め、引續いて又た此頃の降雨といふものは、日和返しの沖氣と云ふので、西南の海面より勃々と騰る雲脚は、伯耆出雲の國境なる峯巒の額に行當りて、それが雨となる。然も霖雨、其の霖雨に今まで乾々の足守川も劇に落とす濁流の勢、河磧一面の砂石を捲いて、捲いたる潦水は下流に築き上げられた堰堤に堰かれて、城の堀水と一緒に逆しまに石垣の根に渦流を卷く。凄まじ抔とも愚かと云ふ其慘景に氣を得た寄手の陣々、すはや時機ぞと人夫を倍して、蛇籠を伏する、土俵を積む。然れば城の辰巳の方、卽ち川の落口には

三間に餘れる高さの土居、延長七八町が程に蜿りを見せて、花尻より切り落す笹瀬川も、旋ては此の堰堤の中に入らむと云ふ。慥くては彌 城中は手も脚もなき蟹となる、今が由に彼の防堤、切り破れや。と常松の尼公も、白柄の薙刀に白綾の鉢卷、猛りに哮つて嚴しく、士卒を下知せらるれども。奈何せむ出口の橋は疾くに引いたり、稍一面の湖とも見ゆる城外には船ならでは出づべくもあらぬに、其船が又た城内には極めて不足。兎やせむ、角やと憤急る中に、丑寅の隅櫓は、淺野の隊から撃つ五貫目丸の巨礮に破壞られて。兵粮藏三箇所は、棒火箭の火に、嘻乎、燒亡れた！

士氣は沮喪、覺悟は相違！味方の死人も無き代りに、敵の首とて未だ一級も見ぬ中に、城は此體と爲了たのである。出ては戰へず、居ても守れず。徒らに飢死の悶死と値が決まると誰とても命は惜くなる。馬鹿々々しいとの氣にも爲る。熟々思へば益も無き此の籠城哉。固より開ける運は無し　楯籠る以前に諸方へ忍ばせた女房子の身上も如何なつたか？捕はれたか、殺されたか。此方が恁樣であるから定めし憂目に！嗟!!と思ふと、自然彼の箭文も見る氣になる。熟く〳〵とも眺められる。眺めては歎息する。其處へ又た意地惡く其文が、雨の降る如くに來る。

恁うなると、彼の倦氣で。鐵心石腸も、誓詞も神文も、存じの外に手弱いもので。有繫に誰も「降參」とは云はぬが、機會もあつたら落支度の、如何ならむ山の奥、蠻の笘屋にも一生を。と今は最期の念佛よりも、可愛い嚊衆や、可傷し娘の名を口弄まれると云ふ氣色。明暮れ懷かしき其の妻孥が棲む山里の空、其れをのみ見勝ての墓なき張番の足輕が、

「や、ありや甚麼じや？あれ〳〵來るは！」

「何樣こりや子供と女子。いや駕も來る。甚麼じやな〳〵。」

（二十七）

來た、來た、來た！と城内張番の士卒が騷めき颯々く。其の來れるは何者かは知らぬが、駕で、その駕も事も愚かや、如是る陣中には見も得べからざる女中用の鋲打駕！陸尺さへも熨斗鉢卷に菊形を大模樣に染め出したる廣袖の看板着。打物の一つも持せず、甲冑めく武者の一個も附かず。先づは悠長なる物見遊山か、若くは奥方代參の練道中。

驚愕いたのは獨り見張の番卒のみならずして、其れが注進に因りて本丸より此の追手に馳せ着けたる城將の一人大木木工、其れさへも思ひ難ねたる小手を翳して、眼を皺めたので、

「甚麼じやな？む、箭留と云ふ。見も熟れぬ女駕！苦しうも有るまい、潜門を啓け。」

渡櫓から下知を傳へると、桝形の冠木門に番をして居た足輕の小頭は、小門を開けた。折柄、五町餘の湖を渡せる彼の奇怪の一行を乘せた小艇一艘、門際の橋臺に棹を止めて、艄子は纜繩を投げ上ぐると、卽て駕は舁き揚げられた。其れより先に、飄然と岸に跳り上れる年五十餘の老黨一人、

「此れは淺野又一郎が乳母の女。主人申し附に依り常松院尼公へ御見舞として參向いたした。御取次下されたい。」

睥睨と見かる底光の眼を射つけて會釋した。扨は討手の正使といふ淺野家よりの陣見舞の使者である。敵方からして陣見舞の使者！固より無い例ではないので有るが、昨今の箭文と云ひ、其の他、婦女とも云へ油斷のならぬ。倘くは開城を勸告る說客とあるでは有るまい歟。究竟は害有つて益無き者、唯だ此儘にして逐回さむにはと、木工は匆遽に、

「意を得申した。御主人御心入の口狀、拙者大木木工承はつて尼公へ委曲言上申さう。其れにて御逃べやれ。」

彼は將机に腰うち掛けた。黒絲縅の鎧、鬼丸作の太刀、兜をば若黨に持せて、白檀磨きの籠手に軍扇の太きを握つて、大章摺の菱縫の板に突と衝立てた氣勢と云ふものは、何樣天

晴れの武者振。關が原陣に石田が隊に進むで、鎗下に敵の冑首六つまで取つて、家康公より六團子の指物を拜領した當代の勇士、大木才兵衛の孫ほどが値は確に有る。

「ほゝゝゝ、大木殿とや。是れは爲たり、御自分樣、御詞とも覺えませぬ。」

と昇き据えた駕の扃を啓けさせて、蹶乎と出づる、其人は、別人とは無き内藏助が母の美代。

お美代は今年三十二である。姥櫻の色褪せぬなど云ふ年齡なれども、此は岡山の國老、池田出羽が愛娘とて、城中城外切つての美人。兒子とて内藏助が外に多くも持たねば尙だ潤澤と、今や滿開の艶麗さを十分に見せたる白牡丹の花。匂も盈ちて翻れむとす計りなる其の美しさを、又た水際の立つ迄に引立てたるは、彼が此日の形裝である。

彼は白綾の無垢の雪をも欺くを五つまで重ねて、黒地の織物の幅廣き帶。上には濃萠黄の韓織の上を、金銀の色絲もて立浪を巧みに繡ひたる、裏には緋羽二重の未だ巳の刻なる目も覺むる計りの裲襠。其を双手に揷い取り含めて、徐かに一步出でたる、先づは女神！其の神々しさを猶ほ一層倍して見せたるは、照輝くまでの唇の紅色と、額に氣高き處々の太眉。鬢の毛一絲亂れて見えぬ光滑澤き下髪とであつた。

番卒は吃驚いて平伏したのである。大木は目眩さに眼を眇めた。彼等が武威と兵の備を散々に蹂躪り得たる美代の腰は、淑かに將几に着いた。四邊に薫ずる伽羅の香は馥郁として人も馬も唯だ夢に醉はんとす。然も彼等は身の戰場に在るかをも忘れ果たばかりである。

美代は淸かなる眼に微笑を見せて、

「大木殿へ申し進せます。淺野又一郎使者の美代、尼公樣への御目見の義を改めて願ひまする。」

これを聞いて獨り含笑むのは、後邊に突這ふ彼の惣髪の老翁であつた。

（二十八）

恁くの如き癖者を城門の内一步も入るゝは、我と疫病神を招くが如きものである。況て尼公への見參など、以ての外。いゝ、いゝ、いッかな！と大木は首を左右に掉つて、

「叶ひ申さぬよ。尼公は御病氣じや。外人への御逢、一切協はぬ。唯だ其の口狀、拙者へまで。」

「其の御取次願ひにとて妾、此迄は參りませぬ。況て御不豫と入せられます。何樣の御容體やら、窺ひまして、歸りて主人へ申し聞けたらでざります。」

「其の御主人は尼公の何者か？」

と木工は忌はし氣に詰問した。美代は倒つて惘れた顔、

「何者かとは、扨は御失念！尼公様には岡山様御分家、石見様の姫君に渡らせられまする。又た主人又一郎様御祖母様には、御同家の右京様から成らせられました。然すれば御縁は遠いと申せ、御縁者の御情誼はござります。其の御情誼を以ちまして——且つは御籠居の御鬱氣をとて、妾へ御氣色を窺ひのやう申し附られまして御座ります。右にて御疑惑も、ほゝ晴ましたかな。」

晴れる處か益々晦くなる。笹紅の其の甘い唇から無を有とも魅かしに懸る物の言振は、愈以て尾の裂けた畜類。素手では行くまじ、威嚇し附けて。と彼は最う此方を野狐の待遇である。

「要らぬ〳〵。系圖調は後日の事。今はたゞ言ふてと言うて御歸りやれ。强てと有らば御爲で無いぞ！」

睨め棄てゝ將机を起上がる大木木工は「其ッ！」と左右に目を授せる。何かは知らぬが大將の下知、豫て其意を得たる鐵砲足輕の一組は、ひた〳〵と銃口を此方に向けた。

「此れは仰々しい、甚麽爲されます？」

美代は臆せず向き直ると。

「御歸りやれんから慿うして歸す。さ、言ふてと言うて疾々と去にやれ。使者も女子も銃先には容捨は無いぞ！」

「では、使者を御手込か！」

「歸れと云ふても歸られんなり。此方、敵と見る！」

「敵とは！」

と美代が眼は晃耀いた。

「おう御事等は使者を言ひ立て、城中の現況を覽やうでがな？」

踏み跨かる脚の下から、薄氣味の惡い笑聲は起つた。

「はゝ大木殿、措れませい。愚老一言申したい。」

のそ〳〵と躄り出るのは、彼の總髮の眼の閃つた老黨。大木は三角の眼を四角にした。

「何者じや、汝ッ？」

「いや、我等は淺野が足輕、名も無い爺じやがな、今の城中の模様と被仰れる、いから笑

止なで一言進せたい。御身樣方は當城の現況、寄手では皆目不知ぬと思はしやる氣に見ゆるが喃う、其は御料見違ひの頂邊じや。見られい、寄手では、あれ彼處に居る各位方の御家内衆を生捕つて、繪圖に當て、矩尺を畵き、其等が口から本丸、二の丸、御武器庫から御金庫、兵糧藏の所在場までも間積にして、鵜で呑むやうに存じて居らしやれる。ちやから一昨日の火事。な、丑寅の御櫓下の棒火箭での出火も、大石殿が其圖から割出された指圖、兵粮藏の三棟まで燒けたちふのも皆存知で居られまするじや。」

「呀。」と喫驚いて大木は彼の老爺の面を視る。足輕共は彼が指す方の湖の對岸を遙かに望むと個は什麽、彼の駕に附いて來た多勢の群集といふのは、注意られると皆確に自己等が妻子である。猶ほ熟視ると、彼等は此方を招いて居る。泣くもあれば、號ぶもある。背に負はれた嬰兒などは手を擧げて、父樣のう！と我を喚ぶ。頑是なき其聲が、正々と風に誘はれて聞えて來るかの樣にも思はれる。

足輕等は火繩を棄てゝ、自己も駈け出して彼等を呼んだ。

「父は此處に居る！おう此處に居る！女房ども無事じやか喃う！」

喚ふを休よ。此邊が人間の至情！恥も外聞も人目も棄てた足輕の三十餘人は、足摺しても

克はぬ島の俊寛で。船をと呼ぶ。其船も無い。聲を揚げても達かぬので、石垣に咬ひ着いて皆泣號た。

「大木殿、彼れ體じや。先づ好う御使女の見參計はれて、熟と何かの御談合なされたが可えじやか喃？」

大木は無言、首を垂れた儘で居る。恁る處へ使番の武者一騎、鞭を擧げて走せ着けたが、飜然と下りて、

「尼公樣の御意おざります。寄手の使者、御逢ひなされうとの仰せ出されにござります。」

（二十九）

お美代は今や本丸へ來た。

彼は、敵將たる大木に導かれ、敵兵の足輕等に前後を圍まれ、四方の物見を布もて裹みたる彼の駕に乘せられて、唯だ一人。召伴れたる老黨、舁夫にも引別れて、二の丸の堀なるべき歟と暗想はるゝ橋を渡り、門を入り、栅に沿ひ、土居を繞りて、漸やくに下乘を容認されたのは、其の本丸なる玄關の式臺。其れより小書院、大書院、疊廊下、板廊下、詰り〳〵の警護の者、張番の士、其等が悽じき眼光さへ冇るに、猶ほ自己が前路を呪咀ふかと

見る壁畫の仙人の面、吾の來るを怒るが如き衝立の猛虎の口。氣だも弱からば戰慄も出づべく、一歩毎に地獄の底にも落つるかと思ふ物全體の恐怖きが中を、勉めて怖畏れず、彼は軈て四五十疊敷の大廣間と見ゆる廣書院の口に伴られて來たのである。

來て見ると、此處こそは我が一命の瀬戸？と覺悟の美代が胸さへも動悸とした。只見る上段の眞正面には彼の常松院の尼公であらう、五十餘の古尼、病氣どころか！白斑なる切下の髪を白絹の鉢卷もて緊く束ねて、白絲の小腹卷の上には白重ねの無垢着、白茶地の裲襠衣を輕く被つて、例の白柄の小薙刀を馬手にと突立て、無手と將几に凭られた嚴丈な爲體と謂ふものは、宛然繪に見る三途河の媼！鷲鼻の尖れる下から開かば血池となるべき朱唇を一文字に緊結むで、惡龍の眼といふ兇眼を瞬きもせず、美代の面に擊射けてゐる。其れが左右に居流れたる若き女中といふも十七八人、此等も皆一樣の白出立して搔取の下には手襷、然も無きは籠手に鉢卷、二尺に近き大脇指！妍きもあれば醜きもあるが、孰れも最期を此處十日が以內と諦念めたる眼光血迸りて、紅を潮したる面色。其の四邊の雪白がだけつき〴〵しと云ふよりは寧ろ悽愴じく、物怖しき形容で居る。

其が途中より大木に代りて案內に立ちたる局一人、「此座」にと美代へ尻目に會釋して、

「淺野又一郎樣御使者の女、美代、御目通りに御座りまする。」

淑かに披露して、傍邊に座を占めた。

此からが美代の舞臺である。彼は抑も什麼ならむ所作を演せむと爲るにやあらむ、十分に沈着めて、

「御披露に就きまして申し上げまする。尼公樣御緣家、又一郎樣の乳母美代、和子樣御意を以ちまして御前へ罷り出でましてござりまする。」

旋て彼の局の方へ徐に面を向けた。其口狀は所謂る「兩敬」、局へ對ふは彼が披露を賴むといふ、此れが如是る時節の禮儀である。

折柄、御次の紙襖の陰には、聞えよがしなる、低き、故意の咳拂が五つ六つ。その他草摺の觸れ合ふ音、鎧金具の戞めく響さへ紛れず聞えた。

美代は一段との鎭めたる聲。

「和子樣、仰せ進せられにござりまする。又一郎樣御義、大公儀の御沙汰に依らせられまして、此たび御當地へ御發向の事、眞に御思ひ懸けも無き御餘義無き次第と御座あらせられまして、明暮れ其をのみ御歎かせに御座ります。然りながら、其れも早や落着、御祖母

様とも賴ませられまする尼公樣、御對面も程近き事と、此れをのみ責ての御怡悅に入せられまする。」

「落着」と云ひ「御對面」と言ふ頃より「えゝへん、えへん！」の咳拂は誰が口よりとも無く此の座中に響き亘つた。抑や此の威嚇の聲辟たる、或る意味に於ては這の女說客めける、使者に死の宣告を豫告せるものである。雖然と其れ等に耳をも假さぬ美代が舌は、すら〳〵との諜滯さへ見せず、圓滑に動いた。

「但し、右、御對面の際の御供立、萬端の事。如何樣の御式とござりませうか。其等の邊、御首立衆へまで御談合せの事。差向いたる義然るべう取り計らへと私へ御內意にござります。此等の趣き好しなに御披露且つ御返答の程を賴み上げまする。」彼は輕く式代した。

（三十）

「何じやと云ふ、又一が尼へ對面じや？」

と局が披露を待兼ねた尼公は、彼の血池の口を太大に開かれて、

「はゝはゝゝ、對面とは小怜悧い。但し對面は追附け。其の禮式は實檢じや。又一首級を此方へ申して、其際綏々と對面しませうよ。」

可憎々しく彼の鷲鼻を撫すられた。

「此れはまあ！」　と美代は其面を泌々瞻上げて、

「和子樣は、御前樣を、御祖母樣と御慕はれにござります。其れを御首なと——然樣の御意なされませいで、幾重にも御愛情の御沙汰の程を…………。」

「痴呆たこと！尼は第一、又一と云ふ孫をば持ちませぬ。又一とは誰が兒子じやな？」

「此れは〳〵。——恐れながら御前樣には、故石見守樣姬君に渡らせられまする。石見守樣は圓淸院樣（池田輝政）の御四男。又た又一郞樣御祖母樣は、石見樣の御弟、右京大夫樣の姬上に入せられまする。然すれば御前樣と、和子樣御祖母樣、これは紛れぬ御從妹。其の御從妹の御孫の和子樣が、御前樣を祖母樣と仰せられます、何の怪しい事？——御前樣にも和子樣を御孫同樣——いや、御孫君と御覽せられまするが世間普通の例。然るを係りの御餘所々々しい、誰が子じやとは餘りなる御情け無い義にござります。」

美代はほろりと、見せたのである。尼公は稍思案の顏。

「むゝ、緣合からは然る筋にもならう。やゝが啼、美代とやら、尼は彼者を孫とは見せぬ。彼者は敵で喃…………。」

「其の御敵とは誰が爲させられました！」

と、美代は屹と開らき直つた。凜々しい眼に涙滴を有つた、其の淸しい涙の眼が、宛も輝き亘るやうである。

「知れたこと！討手なりや敵では無いか！」

尼公も其の白髮を一揮り揮つて、薙刀の柄を礑地と突れる。驚破大事！

「いや、私の申しまするは然で御座りませぬ。其の御討手に和子樣を孰れの御方が御招きになりました？」

「やア好う喋々と。――誰が招いたか？自身と來たぢや！」

「憚りながら其は御勝手で。益も無い此の御籠城遊ばしましたで、和子樣も、御餘義無い其の御發向と相成りました。倘も箇樣な御思し召立ちさへござりませねば、何私しも、此の淺猿しい御使者になど參りませう…………。」

「其を今其許に聞かや！其れ程に又た又一が歎惜かば、何故此の祖母が首取りに來た？」

赫と疾視むだ眼の獰惡さは惡鬼である。衝立てられた薙刀は閃りと晃つて、今しも渴えた血に飽くを怡べる猛虎の牙かの樣にも見える。其れにも怯れず、

「其れにこそ…………。」

と、美代は膝頭を一搖り前進めた、

「其れにこそ親で樣釆女正樣の御深意がござります。……此の御討手の正使は、釆女樣御所望で受させられましたのに御座ります…………。」

「其、其、そゝ其れ〳〵見や！愈敵じや…………。」

「先づ御待せを。其れが御深意の御仔細で――釆女樣思し召には、此の御正使、他家へと萬一御座りましたりや如何な暴氣き御待遇をも、御前樣御初め、城中の衆へ致されうも知れませぬ。其れも御開運の有る御籠城せとあるならば格別の事、現今の公儀を引受けさせられての御合戰、憚りながら御落去は眼前。――さあ其節に御武名高き戸川の御家の御恥辱ともある樣の事でござりましては御緣家たる淺野家の御情誼として在にも有られぬ御義。其是れの御配慮からして此の御正使を御自身仰せ蒙られましたる次第と私も承はり居りまする。恁樣の御深意、――先づ其の御心もじの淺からぬ處を何卒、御酌分け遊ばされて喃…………。」

「では、何かな？」と尼公は苦笑ひ、

「釆女殿厚意と云うで、戸川の武名を惜まれての此の討手とな？――はゝ近頃の芳志、尼も滿足に思ひます。ぢやが、其れならば何故一戰を快うして、當家の士が覺悟の臍をも見、今涸絕らうとする戸川が弓矢の矢鏃の固さをも世の中には見せても下さらぬ。結句は箭文、又た其許が使者、城中を魚拔ひにする見苦しい水攻、兒童の翫弄物めく花火殼の石火矢、乃至食攻の餓鬼道が苦患に陷すは、其でも緣者の厚意かな？武名を惜まるゝ芳志かな？」
と、再び冷し氣に苦笑はれた。

（三十一）

「其の御義で。」　と美代が忙しく言ひ出でむとする端を、尼公を抑止て、
「言やんな〳〵。其方が言ふことは、既う好う知れてある。無益の籠城、多勢の難義、公儀への不忠とか、領民への不慈とか、青表紙の生學者めく講釋でもあらうが喃、其は言はいでも尼も存知じや。私も此の老齡、知らいで協らうかの。唯だ肥後殿先祖達安以來今で四代、取り傳へた弓矢の家が現下斷絕る………。」
「さあ、其の御斷絕に爲りまするは御運命、其御運命を兎角致さうと………。」
「默止りやれ！まあ私が言ふこと熟う聽きやれ………。」

敵とは有るも、又た長上への禮義である。其の言ふ處を諦聽きて後、釁隙もあらば犇と駁はむ、今は姑く。と美代も謹むで差控へた。尼公は彼を說伏せ得たりと云ふ氣色で、語氣も稍和柔かに。
「如何にも運命、斷絕るは運命じや。決して公儀を恨むでも無い。唯だ縫殿が不處存で夭死を御爲れたからで。此れも其の運命で。爲む方も無いとして。誰にも彼にも恨みも辛みも無いは無いじやが。只だ此城を汚目〳〵渡して、他手に懸くると云ふが殘念じや。其れで尼初め、城と一緒に滅亡せうと言ひますじや、喃。」
餘りなる御身勝手。旣に自ら運命と云ふ、其の運命の甚麼たるかをも此は又た知らざる愚論。這麼は駁擊では。否や其の迷夢を警醒さでは、と、
「何が然樣に御無念でござりまする。公儀へも御不足は無い、世間へも御恨みは無い其に籠城との御沙汰とは些と御矛盾で………。」
「默りやれ！」　と又た一喝………。
「其方は乞食が本望か？」
「え？」

「餓死が身の面目か？」

驚駭いた美代は其眼を凝視ると、

「お主にしてからが然樣じやらう。何處の誰某と云はれた士が、家も無くなる、城も亡くなる、物喰ます術も失ふて妻子を引伴れ、眷族が手を拉て、他の門脊戸に漂泊ひ。食給べい——湯水下され！——卑賤い者共にも首を下げて命一つを持餘ます。人に後指指された果が、野原の飢死！野犬の腹脹らして憂名を世に流す。それ好いか。其れとも一戰に討死して、扨も那家の散際の好さ、流石は櫻花といふ武士の手本——と末代に名を遺すが好いか。さあ孰方じや喃。

其義分解たりや匆々に去ね。私も遇たらはござらねど家老の木工に何角と云ふて、口强をする、一條で行ぬ女子と聞きましたで、遇うて理解と面倒を見ましたじや。さゝ早う往て又一殿に然う言やれ。戸川が上下に芳志とならば今にも其の人數此處へ進めて、城へ蒐りやれ。祖母は見る前討死して此の白髮首其手に與まそ。兒童遊戲の水なぶり廢めにせい。其方も武士の子じや。と憖う叱斥たと屹と言やれよ。然らば…………。」

と立たれる。起れては——と美代も血眼。

「いや御前樣！」、　と覺えず突と立つた。

つかつかと走り蒐つて、尼公の裾を無手と掴むと。

「無禮者！」　と薙刀の柄は來たのである。拂はれて美代は堪らず膝を衝く。

「無禮者！」　と再び雷霆の聲は響き渡つた、

「容赦すまじき奴なれども單身で使者に來せた健氣に愛でゝ一命を與るれば、甘へてか手强を爲をる！拘立てい。それ！」

容貌こそ、形裝こそ、目醒む計りに整頓ひて、渇仰もしぬべく愛たしと見る女房なれども、其の所作の憎さ〳〵。御前樣をば敵手に取て、此方連をば蟲螻とも眼に措かぬ處置振憎や、今目に物見せてと、固唾を呑むだる彼の女中原は此時はら〳〵、、、はらりと、

「立ませい！」

暴氣く美代が手を拉た。

如是る女輩の二三人、四五人、投退くべきは案の手の內と思つたなれども、然しては、「あの老人が！」、と美代は弗と泛念むだのである。其れでも無念は無念である。遽爾にも起ち離ぬるを。

「立ちませい！」
「いや死太い！お臀の重い！此樣なお臀で敷いたりや亭主は平太蜘、些私等が癒して喃。」
「それ好い、さア胴揚げじや。天井落しの二三度したら、少しは輕くなろ。さア胴揚げじや。」
花と見し美代が裲襠も、此の暴風の手に、寸斷に裂かれて、雲と擬へる垂下髮の鬟もほつれ〳〵。笄は折れる、櫛は散る。恁くて玄關に拘き行かれて、彼女は駕の中に壓し込められた。

（三十二）

無念を堪へて、恥辱を忍むで、彼等が爲す儘に委せた美代は、最初の美裝も花の一時。塵に塗れ、泥に汚れて、哀れ見る影もなき冬の樹梢。寒さに苦しむ深山鴉の尾羽うち枯らされたる淺猿しさ、殘念さに、彼は敵城を追儺はるゝなり湛淚の亂次〳〵、駕の中で泣き伏した。
「何んの泣かれるか。此れ程に爲課せた使者の役、又とは無い。御手柄々々々。なに爲損じた？いや其樣な目の沒い事で。お見やれ城は既や落城じや。今一蒸じや……。」
駕の扉に居倚りて且つ慰藉め、且つ囁語くのは彼の眼の光つた惣髮の老爺、卽ち附添りの老黨である。其の老黨とは言はでも知れてゐる彼の人の忍姿。本體は山鹿の老人。老人は間に合せでも甚麽でも無く、眞實に我が思ふ壺なりと笑壺の笑面でゐる。
「私は千、千代にも最う對はす顏がござりませぬ。」
「甚麽じや、又た枝葉を言はれる。内藏の抑止たは彼りや孝行の誠。御身の出られたのは若殿への忠義と、恩愛の情。兩つながら相行なひて相悖らずじや。況して首尾は上々じや。」
「那樣に仰せられましても私、私は此の御使、爲損じたとより外は思はれませぬ。いえ確に爲損じました！大事な若樣の御顏へも泥を上げました！」
美代は只顧慟哭く。聲こそ立てぬが物見の簾の波打つ如くに震撼ふのは、彼が身を悶えて苦惱むのである。
想へば其れも道理であらう。彼が此の御使をと望むだ時、子の内藏助は遮つて抑止たのである。言を盡して諫めたなれども美代は聽かなむだ。此時の彼が肚裏には、尼公什麽に猛しと雖も既う是れ老る御齡である。一旦の籠城をば思ひ立たれたも、寄手は日に强る、城内は刻々と弱つて來る。川々の水嵩は倍す、城櫓は頽れる、兵糧藏は三棟まで燒失る。箭文

の暖ひ、石火矢の威嚇、其の弱り目に乘むで那の老婆樣に御孫の可愛さを切りに說いて。戶川の御家は再興させう、城内の人數は悉皆救助けう、其の御斡旋の代として此城をば異議なう和子樣に進せられませ。然すれば若樣も公邊への御首尾、御前樣も御獨りの御孫へ莫大の御功績を立てさせられまする理由となる。御孫の和子樣御愛惜しと思召すなりや何卒——と其の愛情へ愬へなば、流石に彼方とて御淚も出やう、御氣も折れやう。然すれば上下一同の安堵、御代泰平の基。といふ此の健氣なる心の底には、又た賴もしき老人の助言と云ふもある。旁々、我が亡夫への面目や、我子の名譽といふもので、禁止るも肯かず出向いたのであるが。扨て行り懸つて見ると案外の失敗！彼の老猪めく尼公が牙に無念や蒐けられて、舌の矢彈も洞らばこそ。言掠められて手込に遇うて、意裏の半分をも盡し得ぬ中に見る通りに追回された。

甚麼面目があらう。此場を去らず思ひの儘の切死と、彼は衝上げる胸の幾回か思ひ擾れて。手近に寄る其の敵の刃を、と三度四度まで念ひはしたものゝ、然うなると先生の御身も其れ迄、噫！と唯其れ是れ而已で、彼は熟と、咬碎く計りの齒に、辛抱をしたのである。雖然と敵合は早や遠く隔離る、船は此方の岸に着く。此時を過しては愈々我が耻辱！と美代は淚の手に用意の懷劍を晃乎と拔いた。

「南無！」との聲は俄に聞えた。驚愕いたは老人、其扃を拔くと、あはや其の短刀は咽喉へ三寸。

「たッ痴呆！」

其の拳頭を礑乎と擊つ。短刀ははらりと落ちた。

「御身の樣な痴呆があるかッ！御身を死して擔當うた老人も汚目〳〵在るか。母親を殺した内藏が面目が世に立つか。折角の功名、今一時と云ふ際で其樣な痴呆た所爲をする。天下の阿房！御身が樣な阿房の腹に好う千代如きが產れた喃う。發狂婦！」

艀はどしんと着く。ゆらりと震蕩る。駕の中では其の反撥に俄破と倒れて、唯だよゝと泣く。

「母者、先生、好う御無事でじや。彼の合圖の火が揚るか〳〵と大抵案じて準備の八艇艀に乘りつ降りつして居ましたじや。」

母親の乘れる駕の捧に自身と手を懸くるは、淺野が大將大石内藏助、其の駕の上陸るを待ち兼ねてわや〳〵と群がり集るのは、彼の城内の足輕等が妻子である。

「御使者樣、御和睦はのう成就ましたか。御前樣、大木樣、私が拙夫はな？」

安否を案ずる母親に手を引れた、鼻喰ひ垂らした十一二の娘の子、

「奥樣よう。私が父樣兄樣、何故伴て來て下さらぬよう！」

（三十三）

寄手の大將淺野殿の御乳の人で、總指圖方といふ大石內藏助が母で、人格に於ては申し分無し。殊に城內の尼公は、其の乳を上げたりとかの又一殿が御祖母樣同樣の御方。御情誼は十分なり。其の御情誼と、彼の人格と、御縹致と、辯舌とを兼ねたる此の御使者の美代殿が出向はれて、事品を好う計らはれなば御和睦は眼前の事。然すれば我が本夫も助かる、父樣も出られる、叔父樣、兄樣、從兄弟、弟 可愛い孫めにも生て遇はれます。御慈悲！御情け！難有たや辱けなや、嬉しや〳〵と、生捕の女房子供、婆も娘も、美代の出立を言ひ聞かされて、城の前面の湖の岸まで引出された時には、掌を合せて、珠數を揉むで、其れが晃耀く鋲打の駕を救世の菩薩の尊像を容れた龕子ほどにも、感涙を流して伏し拜むだ。其船が出た跡でも、彼等は偏に其の成功を祈つて、前途を只願祝福した。況て前岸の城門が開けて、湖上迥かに其の戀しい夫や懷かしい父兄、孫めが息才の面を見た際の彼等が騷

動は、幾んど其の歡喜極まつて狂氣の樣にも泣き喚いた。死したる人の蘇生るが如く！然ば、彼等は安心の胸を撫たのである。あゝ先づ無事で居て與らしやれた。今に彼の亭主や父や兄や孫にも手を把て遇へまする。あゝ早う！其れに就ても御使の御女中は什麼爲されたか？御歸途の手間取る事よ！御首尾は好からうと思ふけンど。と心々に、思ひ〳〵に、一刻千秋！遲や、遲やと待つ時刻も良過ぎて、お美代が船は漸やくに戻つて來た。やれ嬉しや、其の御消息は、と彼の駕を押取り圍むで――出る姿を見ると彼等は實に吃驚いた。散々である！落花と謂うか、狼藉と謂うか、衣服は寸斷々々、頭髮は攙れて、曩刻の天人と見た嚴美には太くも異つた五衰滅色の形相と云ふのに、彼等は先づ泣出した。

「奥樣、こりや如何爲されたじや？、衣服が――お髮が、よう！」

田舍女の其の鈍眼にさへ扨は珍事と見たのである。

蕭然として路傍の葛石に腰うち掛けた美代は、多時は顔も得揚ず。嗚咽のなるべし、其肩頭は波風の激しく打つやうである。

「奥樣よう、如何爲しやれたで？」

「御前方に――合せる顔も有ませぬ…………。」

「ぢや御和睦は…………？」

「…………。」

「……ぢや、成就ませぬ？…………。」

「おい、のう！」

「ぢや、出、で丶丶出來ませぬ？――あ丶出來ない？出來無いかよう!!」

其の場に居竝むだ嫗に嬶、小兒に小娘、七八十人は唯だ身を悶えてわあい丶と號哭く。賴憑ゝ綱も最う斷れたである。斷るれば落城！彼の、我が愛惜しい父夫、兄弟、孫。其等も皆此の湖の藻屑である。噫乎！旋て兒島へ押し流されて、魚の餌食と爲るのである。老人は此等の慘景を右視左視、漫ろ其眼に暗涙を泛めた。猶は彼れ内藏助はと打覗やられると、同じく思案の腕を組むだ彼、

「む丶、衆の者、其場へ出い。内藏助、唯今確と申し聞すべき仔細がある。」

彼は突如威儀嚴格に將几に凭つた。看得！十六とは云へ大柄のめいきと大人然て、其の打裝も天晴れ大將、聲音も面色も頗ぶる慄悧い。

「拙者、彼れなる船中で、今城内の樣聽いたがな。尼公を初め、家老の者共も皆な和睦は

不同意じや。但し不同意に可い。其は固より意地――刄刀の手前とも有らうが喃。有るべき事か、此方使者たる其の人に對して無禮の雜言。剩さへ、見やれ、予が母者を捉へて不法の手込！彼れ體、散々の樣にして追囘した、喃！抑も此の使者たる、淺野家からとは云へ、大公儀の御沙汰を領けたる討手の大將よりの者と申せば、卽ち覇府の御使者じやな。其者に對つて恁く迄に振舞うとは重々の大不敬。既や武家の法にも外れた、尼を初め其方共一族の者も皆な亂民じや。な。卽ち一々首打斬つて獄門にも梟くべき國賊の黨類じやぞ！其の上にも其方共、其の國賊の妻孥と云へば、是れ亦た死罪、流罪にも處せらるべき御咎の者。喃――唯今より其の覺悟せい！」

（三十四）

父亭主の首斬らる丶と云ふにさへ、身も世もあられず思ふ矢先へ、其の亂民の餘類と云ふ廉で自個等も死刑に流罪！彼等は唯だ凶夢かと驚駭いて、

「殿樣！御無體じやッ。私共何事にも知りまッしえんに、命取らしやるとは御無慈悲じや！。」

「其方等は無慈悲と言ふか。」

と内藏助は睨め廻した。

「御無慈悲じや！御無體でござります。私共御合戰が何故だかはや、頂で不知ん云ふもんで…………。」

「不知んと云ふても御法の表面は一家親族皆な同罪じや。な。例へば其方等は人の軀體の手足や爪じや。其の手足や爪が何事不知んでも肝腎の胴體たる主人が不養生せば其の手足も爪も皆な死ぬは。な、其道理じやで。父や夫が那の城内に在る以上は其の方等も賊徒の餘類、逃れぬ罪人じや。——會得たか？」

「はい。」

「然し又た、其の手足や爪共が、主公たる胴體の不攝生を支䧟へて、酒を飮まさず、身の毒を爲せず、目口の慾を戒愼ますれば、死ぬ壽命も又た延びる。喃其れじや。既に是れ死したる者なりや爲方も無いが、未だ呼吸はある。養生もせば癒ると云ふなりや其方等も、其の養生を主人の胴體に勸むるが好いとは有るまいか？」

「はい、御理解は會得りましたが如何すれば好いとでござります？」

と恐づ〱出たのは、曩刻よりして孫よ〱平よ〱と、最も善く泣き、最も善く喚いた老

婆である。

「むゝ、如何すれば好いと問ふのは、其方は予が指圖に附いて、其孫をも救ひ、其身も助かりたいと云ふのじやな。」

「被仰る通りでござります。：嫗もはい、此の老齢になりよりまして、唯一人の孫、平藏めを殺しましては生て居る瀬もおざりませぬ。御指圖で助命りますなら何卒や——はい。」

初回、彼老婆が眼裏には其の愉悅の波が寄て來た。其波と一所に寄て來たのは彼の七八十人の媼婦小娘、飢たる頰に棚から牡丹餠が落て來た——其よりも彼等は歡喜むだ。

内藏助が將儿を押取り圍むで、其の本夫や父、兄や弟に、自己が躬をさへ救護るゝとならば、什麽ならむ爲事、何樣なる難義とあらむも遣て退けむ、爲課せて見ませうと、喚くは！我鳴るは！異口同音に——其の猛勢や風雨である。

「むゝ、聞屆けた。然らば猶ほ内藏助、其方等が臍を固めさせうが。其方等は卽今、何事も知らぬ其方等を捉へて御法に當るは無慈悲じやと申したな。——むゝ、無慈悲？——それ既に御法と有るさへ不知者の命を奪るは無慈悲と云ふ。那の城内の者たりや什麽じや？法にも掟にも外れた謀叛、籠城を企圖て、剩さへ無理無體に其方等が一家や親族の何事知

らぬ父兄を魚の餌にせうと爲る。甚麼たる無慈悲かな！其れ憫れむで此方より使者を送れば、叉た其の我意に唯だ募つて、手込の不法。和睦は否やじや、城と一緒に滅亡せうと云ふ、甚麼たる無體じやな！

但し、其の不法無體も唯だ那の尼殿に家老物頭の四五人じや。今も云ふ何事知らぬ其方等が父兄等に罪は無い。仍て味方の陣に來らば、悉皆助命！内藏助、此の拜領の采幣に懸けて、叉た此の重代の双刀に掛けて虛言は言はぬぞよ。屹と救護くる！」

彼は將几を突と立つて、其の采幣を天に捧げ、黙禱多時くして、額に當たるを叉た執り直して、腰なる双刀の兩つの柄を丁々と拍いて。

「急々如律令!!」

「御難有うござります！」

「ソレ行け！後れるな。——船子、準備の快艇をッ！」

北山颪に細漣立てゝ、漫々と湛へたる此の湖海の岸邊を指しつゝ、内藏助が一號令の下、看る〳〵艪聲を勇ましく漕ぎ寄せたるは八挺立の快艇三隻。其を眞先にして、笹瀬の沿岸、兒島の海邊の漁舟三百餘隻。豫て土俵船として集へられたるものゝ三分が一は、彼處の堤

の陰、此處の葦の茂みより引掛け〳〵、ひた〳〵と此時漕ぎ聚つた。

「乘れ！お主等銘々、其の大事な本夫、父、兄共を背負うて來よ。行ッ！」

内藏助は采幣をはらりと揮つた。

先生が感歎の手は覺えず額上に加へられて、母者人が勝へぬ笑顏も玆に初めて開らけたのである。

（三十五）

此時、城内の光景は什麼？

尼公の號令は嚴しく門々に加へられた。吉澤大木の兩家老は、自身城中を走せ廻りて持場〳〵の守備を堅固にと戒飾めた。是れ最も時宜に應せる注意なるべし。何者、寄手の總攻は如是る時機にあるものなり。使者を辱められ、和平を拒否れて、其れが憤怒と斷念とは、兵を進むるに尤も適へる、所謂る敵の開闔には必ず入る。其勢を弩の如くし、其節を機の如くし、以て其の勝ち易きに勝つ者なればである。

果せる哉、追手の對岸は色めき立つた。艇は八方より聚合つて來たのである。此の注進に心得たりと物見の櫓に馳せ上つて、籠手を翳した一番家老の吉澤四郎左衞門、

「むゝ來るは〳〵、敵船の數百餘艘！——兵共、それ、巨礮の射方用意！」

早朝の間は頃日の霖雨も纔に霽れて、空と一つの湖海の面を射る陽光も閃爍と、燦たる旌旗、爛たる甲冑、突き列べたる楯、張り亘したる幕の紋々も畵一も看謬らぬまで見え渡れるが。午下よりは再た陰雲出でゝ、前面に近き吉備の中山、弓手に續く庇山、背後に遠き見島の瑜珈山も朧ろ〳〵と、看る間に小雨の鎧の袖に注つて來た。然なきだに湍鳴る河々の落込む濁水は、石垣の根石に堰れ、柵に衝りて渦巻く浪に水煙の潑々と騰れば、彼の三越路の彌彥ならねど、青雲の棚引く日すら天隠す狹霧の立て罩め多てなるに、今は又た細雨である。五町の餘を隔てゝ寄せ來る船は、薄紙に覆まれたる墨畫の樣に、物の其れとは纔に見ゆるも、乘人の平人か、武者か、女子か、男兒かと云ふも判別かぬなり。唯だ不可思議なるは、貝が立たぬ、幟小旗も無し、散ばふ木葉の押されつ流れつする樣なるも。鯨浪は顚がる、人は多勢。既に是れ敵地より來る船ならば其者は敵兵たるに相違なし。——こざんなれ敵の詭謀！

「擊ッ！」

と吉澤は一喝した。折しも船の眞先なるは一町が距離に來たのである。巨礮の火繩は刺さ

れたのである。堂！と響く砲の煽動は水の面に洪浪を激して、照星も差へず、其船の舳先二尺餘りを擊碎いた。船板は微塵、哀れ船は看る間に沈沒むだ。

「喃い！助けて！」

「救けて喃う——！」

「呀、女子の聲じや‼」

城門を鎖固めた彼の足輕等は此の叫喚に吃驚いて、群々と出たのである。出て見ると女子！然も其の浮つ沈んづ救助を叫むで、此方の岸へ流れつ泳ぎつ、寄る其の女子共は、個は什麼、我が可愛の婦娘もあれば、可傷しの姉妹、大事な母、年老られた祖母。從妹も居れば姪も居る。足輕等は狼狽た。

「こりや此方じやよう！氣を確に泳げ。そりや其木へ捉まれ。此繩を攫れ！」

繩を投ぐる、板を打込む、見るにも堪られぬは早や具足脫ぎ棄て、下散を斷つて、自身と湖へ、彼等を救助んとて泳ぎに泳ぐ。

驚駭いたのは大將の吉澤。素破こそ敵の謀計！愆くては此城爭で堪へん、管うな那の船、其の泳ぐ奴ども一所に擊て取れ。擊て擊て！との下知をば聞けども、石火矢掛の足輕も、

弓手も銃手も、此時追々と漕ぎ寄する其船はと見れば、乗組めるは皆な我が眷族。甚麼と矢彈の向けらるべきぞ。悉皆號哭た。

「えい汝等未練！彼の敵何故擊たぬ？」

「否や彼りや敵じやおざりませぬ、私等が妻子で…………。」

「いや其の妻子が卽ち敵じや。擊、擊、擊ッ——！」

吉澤は此の賴み難なき足輕等の手を藉じとか、自身巨礮の傍へと倚つた。船なる妻子は、又た足輕等と見るより一度に手を擧て、

「父様のう！良人よ喃う！迎へに來た。早や出やしやれ喃う！」

四郎左は、此の呼聲の音を疾く歇では、と彼の礮に彈藥を裝むと爲た。が、無い。無い。無爲のである。火繩は！と見れば、無慘——一人は其火を踏滅して居る。

「やッ奴輩！」。

大刀の柄に手を懸くる。見るより入水！

「やッ！」

彼等は皆ざんぶ〱と、塀より湖へ蛙飛び込む水の音！跡に呆れた眼を睜つて、犬居に堂

と、歌膝めく胡坐を組めるは、吉澤唯だ一人！

（三十六）

箭文に遠攻、日に其痕の高まり行く石垣の水嵩を見るにも、心は燥焦る。厭氣は倍す。豫て期したる華々しき討死さへ協るか否かの候的すら今は覺束なき、所謂る弓矢の大御神にも見離されたる太も墓なき武運の末てふ籠城の情けなさを喞ちては、人をも尤むる。天をも恨む。其處は凡夫の淺猿しさで、憖ゐの意地立を悔む心さへなか〱に附く。其の鼻尖へ、女房子といふ香餌を投與られて、大象すら牽ると云ふ髮毛の綸で引寄せられては、鬼味噌所望の荒者共も、鐵心も石膓も、意氣地も無く、血を流すよりも涙を流して、庭瀨の城の追手の守備は、今や空虛。彼の攻るに先つて、我と自然らに敗れたのである。

斯くと聞きたる城中の諸手は鼓譟めき立つた。妹尾口の搦手、倉敷岡山兩口の守兵輩も、追手の門際には我が妻子等の迎へ船つ、有繫に其等と寄手へ降參と迄は思ひも附かぬが、責て戀しき一目をと云ふので、奉行の制止も頭人の號令も上の空なる、風に吹かるゝ浮雲の浮足にふら〱と來て見ると、又た驚駭いた。

大將と賴みたる吉澤四郎左衞門、大木木工、其餘誰彼れと名を呼ばるゝ程の首立てる武者

用人中老物頭の面々は、追手の渡櫓の內、二の丸の馬出の廣場の芝原に突と居列むで、尼公を上座に、今か最期の別盃を取り交すところで有る。

其の人數は五十餘人。彼等は早や頼憑れぬ足輕仲間雜人原に反かれて、今は籠城も無益し、死なば諸共にの唯だ最初の約を差違ず、潔よく腹掻き切て、後代の美名を亡き屍の上に遺さむの、思ひ斷たる覺悟とは正しく見ゆる。

細雨降る空の雲は低し、一株ある松を小楯の鎧の袖にはら〲と注るゝ滴雫は、涙とは流石に無きも、戰ゆる籠手は眼に行くなり。梢を渉る風の音は折柄の唱名の聲を聞かせて、西方へと靡く旗の手もいと著く其場の悲愁を副へてゐる。

尼公は、一座を看渡された眼を、彼の今來し足輕輩の方へ更に注がれて、大木へそれと指揮を爲らるれば。

「ヤアお事等、今迄の奉公、太儀とは御前樣にも御覽せらるゝぞ。城中も早や恁うなる以上は籠城も益無し。其方等が妻子に悲歎を懸けて可惜らお事等が首失はせむずるも不憫と御座あつて、唯今此場にて御自害ある。其方等は一同の最期を待ち、御殿に火を放け、扨て後に殘れる女子等が供をして寄手に降參れ。箭文の表面でも其方等が一命は無事であらうに、構へて狼狽るな……。」

大木は恁く言ひて後、吉澤に悄と目授をした。

「むゝ。——尼公、御別盃も早や一巡にござりまする。然ては御支度！餘の義は木工意得居りまする。拙者が御先供。先づ事の爲體、熟う御覽じて！」

吉澤四郎左衛門、言ひも畢らぬに一家老の一番腹！人々の手本に爲よとか、但しは自己、持口を先づ破られたる其の陳疏にとか、短刀馬手に、肌着の襟押し寛げて、今や冥途の露拂！あはや傍腹へと、云ふ其の刹那。

「待た！」

同時に追手の松の陰より、石塊一個、電光の射る勢もて飛び來りて、吉澤が拳頭へ發矢！彼は覺えず其の短刀を取り落した。

「ヤア何者？」

と、看顧る彼の土居をするすると降りたる陣笠に襲着の武者。

「粗忽——粗忽——吉澤殿ともある近國への聞えた武士が、無謀の籠城と有るさへあるに、此は又た何事！甚麼たる事おざる。御家老たる用意、濟み申すか！」

天へも響けの大音聲に、然しもの尼公も喫驚いて目を睜られた。大木を初め、其場に並み居る五十幾人、傍邊に蹲踞まれる二百餘人の足輕等さへに、唯だ打魂消て、天より降つたか、地から湧いたか、敵か、味方か。掻繰り取つたる陣笠、脫ぎ棄てたる簑の下より、白羅紗の陣羽織に、黒羽二重の小袖、四邊も輝やく黄金作りの双刀嚴めしき壯年の武者、骨柄爲く迄遑ましきが眼を瞋らして突立つたのに。いゝいあなやと唯だ瞻上げる計り、呆れて口は塞ぎ難ねた。

時に彼の武者は、恭しく尼公に一禮して、

「御驚かせは御道理。但し我等は怪しいとも御座らぬ者、御孫淺野又一郎殿家老、當寄手の總指圖方承はつたる大石內藏助！御前憚からず擧動ひましたる唯今の義どもは、幾重にも御容捨を願ひまする。」

（三十七）

「怪しいとも無い」どころか、其者は誰あらう、寄手の淺野が大將たる大石內藏助。敵も敵なり天晴れの敵！箭文、石火矢、剩さへ今の婦女原を船で渡したも蓋たは皆な這奴が所爲。今救助かるべき城中幾百が命に換へても素奴が素首をば見たや。生捕て其の臠肉、

一片々々に剝いでもと念はれたもの。其者が出たのである。尼公は忽地其の氣色を變へられたが、例の剛健の本性。急迫るのを憎さ氣な苦笑に換へて、

「ほゝう、內藏かの。名前は豫て聞きました。其方も苛う作略家じや喃。」

彼の鷲鼻越に睨め居られる。眼の光は、霜結く原に輝き渡る月鏡かと物凄じくて、切下の白髮の動くは、薄の枯穗の寒風に靡くなんどの樣である。

「御賞讃、辱けなう承はります、我等も涯分働きました。」

と、內藏助は氣も無い風でゐる。

「其の作略家が、自己の隊にのみ働き足らいで、當城へまでお在しやれたのか？」

「いや我等がのは、我等が隊には働きませぬ。戶川家御爲に周旋きましたるで……。」

言せも果てず、いゝ、あら可憎やの尼公が牙は咬鳴らされた。

「小間尺れた和郎な！當家の爲に周旋いたとは好くも申した。箭文に水攻、婦女原さへも寄越して當城の弓矢を有るが無しに爲て與れました、其の作略の禮は今言ひませう。四郎左、木工、先づ素奴、引縛して喃！」

「はゝはゝ、御騷ぎやられる迄も無い。縛すなりや尋常に縛されませうが。——今承は

れば城中の兵、命助けう。自害の後に寄手へ降參れ。箭文に就いて寄手へ御出やるに、右箭文の本人、討手の總指圖方たる大石內藏助を首に爲されて誰が其の助命の義を計ひますせうか喃？其れならば此の御自害も無益。御憐愍とは假の名。やい、やはり士卒に無理死を御爲しやるのじや。」

はゝゝと哄笑ふ。哄笑れて起ち掛けた兩人も思はず躊躇つた。此は一理である。何さま助命の箭文を射た其の本人の大石を亡き者にしては、城內の足輕等を出した處で皆な縛り首。是れは病痾の藥劑を服んとして、先づ其醫の膽を抽くと云ふ昔話にも似たるもの、其理に當る。と彼等は尼公の面を視た。視た尼公の面は、黑煙も噴ちさうである。

「やア又してもか！曩刻のは女子の上に使者じやと云うで容赦いたが、其方をば遁さぬぞ。――此場なる雜人共、其方が方へ遣うと云ふたは一時の好意。好意は爲うと爲まいとが此方の隨意。言ふ通りに其方が首斬つて再た籠城する！寄手の大將、然も可憎い其方が首見たりや城中も興奮る。尼も冥途が安くなる。寄手も亦た無理攻にも攻う程に喃、此方が所望の切死も成る。旁々じや。はゝゝゝ其方は助命ぬ。謝禮は死骸へ言ておませうぞ！」

「ほう、其れ迄の御所望の首。理由も無い義。進せませう。但し――。」

と、傍邊を睨回した彼は、再た起むとする吉澤と大木が方を更に屹と覗て、

「御兩所は、內藏助推參を、甚麼御覽じた？」

兩人も這回は猶豫はず、

「又た開城を勸告る使者…………。」

「はゝはゝゝ兒童が翫戲ではおざらぬわい。開城は不同意、和睦は否じやと那の女子使をすら彼程の手込にして還された其後へ、復た男兒の我等が甚麼で！――はゝゝゝ內藏助とて然樣不要ぬ首持つても居らぬ。又た御分等が肯ぬと云ふを是非に和睦せう、身を殺しても意地張る御事等が首繼がう、謝悔つても其の一命助けうと云ふ迄に仁者でも無い。拙生は武士。義には勇む、忠をば存ずる。但し、敵は敵と見る。敵と見る其者には然ばかりの情誼は有たぬ。

言ふにも及ばぬ。此城、今一月と此儘ならば、堤の高さに水は達く。然すれば城は唯だ昔日の高松じや。既に其れをも御存知で尼公を初め、各位にも自害とある。一應道理じや。卽ち其の攻めざるも落つべき城、棄て置けば唯だ自滅とある其の城中に、眼前の勝利を占めたる寄手の一人たる內藏助が甚麼の所要で入つたか？さあ、右に云ふ犬死大嫌ひの拙者と

いふが單一人推參した——其理由と云ふを判じて御見やれさ。」

（三十八）

判じろと言れては其解に苦しむ。此の臺所見、甚麼の處要で此場へと出たか。抑も城將の首取つて我が功績とする丈けの事ならば、尼公や我等が自害した跡の死首拾うても濟む事である。又た大將の分としては此程の仕附けたる圖に、我隊を指揮して一番乘をと心懸くるが當然なるべきを、其を爲ぬのも不審である。其のみかは、曩に我が一番腹をと座に直りし際には、礫石を飛ばして、短刀を奪うて、家老の役目が其れで立つか。と嚴しく詰問つて我を押止めた。其の役目とは甚麼であらう？之を要するに或は苦め、或は和め、上げつ下げつ、城中の上下を死しも遣らず活しも遣らざる此者の所爲は、奇怪と云ふより寧ろ我等を其の掌上に弄むで在る樣なるが恐ろしき。誠と此の大石は、先年釆女殿病氣の折にも不思議の振舞して其の服藥を偖めしとか聞く。殊に彼家には山鹿素行といふ音に響きし軍師も居る。想ふに此の內藏助、其の山鹿が奥意を傳へて、兵刃に衂らずして此の必死の堅城を落すといふ手段を運らしたるござんなれ。然程の巧還しき者なればこそ看る所尙だ二十歳の前後と云ふ齡なるに、此の大任を擔當げて、幼稚の大將を背に負うて、一萬に餘る諸手の軍勢。然も岡山松山など大藩の物頭輩に、口をも指させず。僅か五萬石の小藩の分として、討手の正使、城攻の惣大將たる威權を墜さず、我が處存の隨に此れ迄の策略を爲遂げたること。敵とはあれ、想へば、噫、天晴れの士！既に夫れ如是ぞあるならば、若かず先づ彼が意衷を聽き、其の入城の仔細を訊問して、其上にて兎も角も爲りなむには。我等は既に死を決めぬ。此心をだに動かさずば鬼とて神とて、甚麼の畏怖か！いで然らば。——と吉澤四郎左衞門、押し弛げたる襟搔い繕ひ、語氣をも沈着めて、

「申さるゝ處、我等未だ其意を得ぬが、降參、開城の使者と無き以上には此方とて無體の義は得申すまい。先づ熟と貴所が腹中の仔細を申されて……。」

「ふン——何故に其の開城を、然は拒否まるゝ？」　と內藏助は含笑むだ。

素破こそ！と尼公は再た短刀、手に取直さるゝを、吉澤は眼をもて禁止めて、

「問條ともござらぬよ。今其を言はるゝか。討手も向ひ、箭合もして、敵味方の色目決定つたる今日に……。」

「いや我等がのは、其の今日に到られたる籠城の最初の發念よ——。何故、籠城とまで緊詰められた？」

「異な問理のう。父祖重代の此の居城を闇々と他手に渡す……。」と大木は遮切た。

「他手に與すと云ふ迄に貴所等は何事をお爲れたか？—公邊に御愁訴も爲されたか？」

「ナニ愁訴？」　と兩人は目を看合せたが、

「愁訴の暇も甚麼有らばじやで。——有れば爲まする。殿が御死去は早急な義。其上に繼嗣も在さぬ。御養子の願、其是れとの評議の中に沒收との火急の御沙汰を受けたるで、其れで餘義なく恁く籠城じや。——有れば爲る。其道も暇もおざらぬで……。」

内藏助は遽に愁然と、天を仰いで、

「其故で、籠城？——其義を我等は申すのじや。曩に御分へ問ひ申した、家老の役目が立つか立たぬかと、其を申すじや。

家老の役目たりや、甚麼おざる？所謂社稷之臣！時誼に依らば君を輕しとし、社稷を重しとする其仁じや。尼公其餘が假令此の籠城思し召立たれうとも、其の不法の御企圖を諫めもし、斥けもして、飽く迄も當家の再興を愁訴する。——再應三應の願を上げて戸川の御家を斷絶さじと爲らるゝのが御分等が職とは有るまいか。其邊の勘辨、何故附れぬのじや。此の籠城せば主家の再興、成るとでも思はれたか喃？

其は血迷ひじや。加之らで、沒收は定法。其の定法の御沙汰なされた公儀に對して甚麼御恨みも無い。曩刻の使者にも申されたも、其の御恨みの無いに不法の弓矢！こりや義理の意地では無うて、下郎愚民等がする頑意地の一揆、徒黨じや。——盡すべき自己が任をば盡さいで、愚民等が一揆の荷擔をお爲る。御分等、冥途の御先代以上の殿から其等の御咎受け爲しやれた日に陳疏を什麼と召さるゝな？怪しからぬ義じや。

扨て其の先代の殿。土佐殿、玄番殿などの御用意に、其等の義共も無つたかな？—何に無い事がござらう！土佐殿は御兩個の御弟でに。玄番殿は御一人の御弟に御分家と有らしやれた。御分家とは甚麼じや。御本家の殿が御夭死、其餘御家危難とある時の支へ柱——控の杭じや。卽ち今回の如き御變事ある節の御用意じや。此事御家臣たる兩所には心附無しともあれ、現在玄番殿御配偶たる尼公には其等の御深意、御酌取も無いとは有るまいに。右等前後の御思慮も無く、唯だ我意にのみ募らせての御弓矢。甚麼たる無念の義？」

と、内藏助は言ひ了つて、漫ろ其眼に暗涙を泛めた。

（三十九）

横紙は破るべからず、逆に車は推すべからず。道理切めたる大石が忠言には。可憎し、小冠

者一睨に！といふ尼公が眼さへ、伏目になられた。況て吉澤大木を初め、並居る頭人奉行諸士足輕等をや。彼等は唯だ醉へるが如く、醒めたる如く。何さま血迷か、愁訴の手をも盡さいで一途に籠城。言るれば逸まつたる仕義。固より一命を主家に捧げて尼公の御前途にと念うたも、忠義とこそ思へ、一揆徒黨とは情けなや。なれど御法を表面として論ずれば其理に落つる。但し諸事は擱て、所詮は唯だ當家再興ともあらむ程には、我々が其の非義の弓矢の罪彈されて、縛り首の汚辱！是非なし、亦た愛惜むに足らず。其れに就ても此の大石が計圖と云ふは什麽奈何。と彼等は皆な拳頭を握つた。胸裏には間なき警鐘を撞く樣ならむも、身動も爲ず、眼は彼れ内藏助が唇邊を絕か凝視る。——然有りとも知らぬ氣なる東風は、飜りて清爽かなる音を立てゝ、松の樹梢を靜かに渉る。

更に、一座の眼を看回した大石は、其の懷中より徐ろに一通の書を取り出して、高く彼等に其を現示したのである。

「視られい、方々。此の御書は、御分家賴母殿より各位へ下されたる御自筆の狀と御座るぞ。御兩所、先づ御拜見……………。」

扨こそと了解た兩人が面には、勝へざる欣喜の微笑が泛むで見えた。

「辱けなや内藏殿。御肝煎の段、先づ御禮申す！」

兩個は急ぎ其書を受取つて、恭しく押し戴いて、封緘をとく〳〵と尼公に面ひて讀み上ぐる。其文は恁樣で有る。

御使淺野又一殿より軍目附たる依田筑州へ歎願の仔細あり。我等次男犬千代を以て縫殿殿跡目相續の義仰付らるべき趣にて、猶ほ新知五千石、撫川に於て下だし置るべきとの御内沙汰、既に筑州より我等之れを承はる。就ては其城、開渡しの義決して異議これ有るまじく。常松院殿義は右撫川へ動座。其方其初め城中の諸士、雜人輩に至るまで一時差控、屹度愼み罷り在るべく。自然自儘の切腹等仕つり候はゞ犬千代爲なるまじく。呉々も公儀御不審此上にこれ無き樣、戸川家名の爲め、我等より嚴しく申し進じ候。委曲淺野殿家老大石内藏助演述に及ぶべく、諸事同人指圖たるべきもの也。

云々との文言の後紙に、延寶二年寅十二月二十八日。署名は戸川賴母花押。宛名は吉澤四郎左衛門、大木木工、以下惣中へ。——紛れも無き分家其人の自筆の狀、且つ安堵の內書である。

讀み畢つた兩人は、限りも無き歡喜の面色とある中に、亦た量りも無き慷慨の意氣を現は

した。尼公はと視れば、手にせられた短刀も早や放棄てられて、力無き掩首と云ふのである。

「御兩所、先づは祝着の御義で。御返辭異議も有るまじい喃！」

内藏助は睨め居えた。

「辱けなき御沙汰。右等の段々、偏に尊公御執持の義と、芳志、申しも盡し難たう。——筑州樣への御前、宜しき樣…………。」

と有繫の兩個も蕭々と頭を下ぐる。噫、主家だに再興ならば、我は見事の腹搔き切て、暫時ともあれ天下の弓矢を當城に引受けたる、義か、不義か、其は兎も角も、唯武士らしき名を亡屍の上にも謳はれむと念ひしものを！

「御異議は無い喃！——承はつて滿足じや。但し筑州への御謝禮、貴所等唯今口づから御申しやれい。」

「口づから」とは何事かと異しむ兩人が面前を内藏助は衝と起て、彼の土居の松の根方に再び立倚るよと見えたるが、其の懷中を搜りて又もや取り出すは暗號の烟火。燧もの手快速くして火を點せば、堂と響きて白煙と共に宙天に閃めく雌雄の龍！

對向の岸には貝の音頻りに、凱歌を揚りて、看る〳〵其數を倍せる曩の快船も三百餘隻。これに取り乘れる直鎧の武者も七八百人。淺野家の山道に鷹の羽、依田筑州の圓相の中に八幡の二字ある大小の馬印を前後にして、秋篠や外山の峰に散る紅葉の風に揉れて群れ集るやうにも、此方を指して押し寄せた。

（四　十）

「おゝ又一殿か。」と然しもの尼公も徵笑る面の眼にほろり、、、。若殿は猶其の御膝に摺り寄られて、

「祖母樣のう、御前樣は知らしやるまいがな、内藏は、祖母上や城中の者を、強い武者、忠義の人、其命を助けたい、軍を爲ずに、戸川の家を立てやうとて喃、諸方の隊口から攻う〳〵と言て參るのを否じやと言うて、犬殿が家督をも獨自して計ひました。好う禮言うてや…………。」

「むう。」

「其外に、其事で心配しましたは、美代と那の老爺じや。——祖母樣は何故、其れ程に骨折つた彼の内藏が母者を、那樣な目に遇はしやれました？」

「やあ、では美代、其方も？」

と尼公は目を注がれる。其眼には十分感謝の意が見えた。

「其れでまだ内藏はな、依田殿に、祖母上初め、四郎左、木工が事をまで歎願うたので、御咎は總て御赦免されの事になりました。喃う祖母樣、内藏は善い人でござりませう？」

僞り有るまじき若殿の御口よりして「當家の爲に作略けり」と云ふ大石が語の意味も玆に愈〻明燎、火を瞭るが如くとなつたのである。頑固かりし意地も融解れば、素是れ胸懷落々たる淡水の如き老尼公。況て大石には既に心服の膝を屈りたる四郎左衞門に木工。更に其の内藏を翼けて、此の再興の爲に、其の助命の爲に、軀を虎穴に投じて幾んど其牙爪に罹らむとせる母なる人、老爺なる者にさへ出られては、今更ら我は全然の靑盲、耳鼻と云ふすらも無き木偶ともなる。口惜くも有り、慚愧くも有り、額を摩りに摩られた尼公は、

「美代か、其方には面目も無い……………。」

「恐それ多い。」　と彼は歡喜の涙をはらはらと、

「實と、私は内藏助が母。――殊に勝入樣には御曾孫、紀伊守樣(之助)には御孫、御前樣御祖父樣に當らせられまする、國淸院樣(輝政)をば叔父上と致しまする岡山の池田出羽が

娘にござります。然すれば、御前樣は、憚りながら私とは再の御從姉。――上下の別こそ御座りますれ、右樣の御肉親さへでござりまするもの。御身の大事とある今日に些少の動作致せばとて――。別て爨程のは此方より申し後れました私の過失、御謝罪は美代より致しまする。」

先方の謝狀に花を持たする、三指の凛とした身の系圖に、再び驚いたのは兩家老、

「いや然樣な御方で？存せぬとて重々御無禮の段は平に御容赦！　扨て其の別て御肝煎下されたと云ふ那れなる老爺殿は？」

名指されて老人はあはゝと哄笑つた、

「出る幕とてもござらぬ者が、員の加役じや。唯だ天下靜謐の爲ともあらばと存じたまで――！は〻固より名も無い者、無名の爺じや……。」

「いや、紅は園生でおざる。――山鹿氏かな？」

「はゝ、鹿とも猿とも、穴籠りのはいゝ古貉でおじやろ……。」

「おゝ穴籠り。爺どの、其穴も少時の間じやぞ。」　と筑州は打笑はれて、

「扨て尼公、幸ひなるは來正月に執行せらるゝ御二代樣(台德院殿)御年囘の大御法會じ

や。右御法會には大赦が御恒例。其れに便つて筑前委細の義を進達いたしたで、遠からず、御自分等も無爲、又た爺殿も穴籠の窮屈も解けうかな。先づ其れ迄は御愼みじや。一同も然は心得い。——兎角は目出たいに、内藏、そい、それ……。」

「御祝盃、持ちませい。」　と大石は聲高く命じた。

上使の役目相濟みたる後の筑州に、彼の公の私てふ方便の好き耳を聞かされて、既に是れ主家は立ちぬ。此上は尼公が御身は？自個等が身上は？と次間なる紙襖の陰に、掌には汗、口は固唾と窺ひ居たる奥表の男女等、唯だ歡喜の吶喊を一度に揚げて、

「恐悦の義を申し上げまする！」

盃は持ち出られた。筑州は徐ら把上げて、

「老人、祝言を……。」

「はゝ年役に、然らば白髮に免ぜられてな……。」

内藏助に連吟の目を授せて、老人は四海波と謳ひ出だせば、

「憚りながら私が一手。」と美代は一座に會釋して起ち上がる。國も治まる時津風に、庭瀨の庭の松柏も枝をば鳴らさず、扇を鳴らすは尼公と家老が手。相に相生の連舞にと立たる

ゝは又一殿。神と君との廣き惠みを旋て其の可愛き腕、鮮かなる手許に一つに納めて、

「祖母様、一同……………。」

「御目出たう、存じまする。」

中

（一）

延寶は八年に終つて、天和となり、貞享となり、元祿と改元してより此に十四年。彼の、庭瀨の落着から年を歷ること二十七。大石内藏助、今玆は四十三歳といふ、分別の輪飾を十年ほども潜り越したる貫目男、壓手も重量も十分に利く、近國に鳴り響いた家老となつた。

此の二十七年間の變遷を云へば。淺野釆女正殿、延寶三年の正月に卒去ありて、嫡子又一郎殿家を繼がる、時に年九歳。幼稚の家督、本來ならば、減祿、城地替とも有るべきなれども、去年庭瀨の城受取の事、敵味方に一人の血をも流させず、二月にも足らずして然ばかりの堅城に、無爲、靜謐の功を收めたること、拔群の働き。併ながら是れ其家智勇の臣に富み、平日の鍛練其宜しきを得たるに據れるもの也。との御褒詞ありて、又一郎長矩

家督御禮、御目見の節は、黄金百枚、祐宗の御太刀一口これを下され、諸事殘る處もなき殿中の御首尾。

大殿御死去の悲歎の中の喜悅とは此事。といふ其れと前後して、又た喜悅の中の悲歎とも云ふべきは、山鹿先生の御咎の免除であつた。隱然赤穗の重鎭を做したる乘行老人の江戸下りは、播磨の名花を東都の空に移さるゝの念、殿又一郎殿の御惜み、況てや大石母子の哀別は言ふべうも無しとあるもの丶、王事盬いこと無し、或は公廷に翳さむ袂を、私情の絲もて縫ひ留めむ樣もあらずと云ふので、泣く〳〵の袖を別つたが。但この際に、老人は、其流の奧義の一卷と、忠孝の訓示幾箇條かを大石に與へて。庭瀨の功名、世に顯著しく知れ渡れるは、御身が智勇の衆に勝れたるに由るとは云ふもの丶、亦た御幼年に似ぬ又一郎殿が御利發、克く御事が忠謀を容させられしからの御僥倖とも云ふべきである。必ずよ、御事自身が功に誇らず、身の譽を此君が御恩と思へ。此殿既に御事を二つ無き者と賴憑せらる、御事亦た其心を一つにして些少も御家の爲に如在を存ずるな。凡そ忠孝の要は、唯だ愛に在り。君をば愛して且つ敬を致せ。親をば愛して且つ自ら警めよ。愛敬の至れるものは克く鬼神をして感せしむ、況んや人をや。我が兵學の要も唯夫れ是れ而已。と、懇

くて先生、東都に行きて帷を下ろすこと十年、貞享の二年九月にいたりて病て沒せらる。年を享ること六十四。其墓は現も牛込の宗參寺に在り、志ある人は行て尋ぬべし。

舊話休題めて、此の元祿の末つ方には江戸の形勢一變して、文學も旺に興つて、工藝も太く進むで、政事も頗る巧妙になつて、賄賂も盛んに行はれて、惡所場も續々殖えて、人情甚だ浮薄となつたが、其の結果、市中の繁華は大に倍して、所謂る「新屋敷」は初まる、「門前地」は起る。湯島の聖堂新たに成りて、天神の地內、德に入るより先づ色酒に溺れる門が開けると、東叡山の學寮業を挪めて、不忍の池畔に、瑜珈三昧を娯しむ蓮見茶屋の軒、赤暖簾の影が閃めき渡る。此等の場所は皆な彼の門前地と云ひ、新屋敷と云ふに屬するもの。卽ち古町(天正入國の際に立てたる町)には地子錢無ければ、自から其筋にて取締らるゝ商賣の掟も嚴格きが、新地には地子あり、隨つて地子苦あり。との當時の洒落も考古學者の材料に殘る。其れには又た其の、出入相償ふべき餘納てふものを附くるのが幕府時代の所謂る大目。此の怪しからぬ目の偏る所へ玉も集りて、湯女と云ひ、踊子と云ひ、後家と云ひ、比丘尼と云ひ、果には蔭子、野郎など云ふ異類異形の化粧の魔ども、正德の初年まで府下各所に群居して、其の喧嘩騷擾の煩累きには當時の支配たる代官も奉

行も、終末には其處置に困苦むだとある。此も其のお手數者の一部であらう、その湯島の新門前、所柄とて「梅の木」てふ奇怪しげなる小料理店の奥に、酒酌み交してゐる對向の武士の客がある。

時は是れ元祿の十四年、正月もまだ松の內。座に侍べる少婢共の仕着、いづれ伊藤の松坂織らしきも、新裁の袖口いと鮮新しく、奴元結の銀紙にも、歳暮の小玉銀の豊裕けき懐中の春を徴見せて、李の頰に胼胝だらけの手を中てながらちよぼ口の世辭笑。

「安井樣、今日は何故に然う御鬱ぎで。蟲が出ますよ」。　と銚子を把る。其れを盃に半分注けて、

「蟲よりか金の出方に窮困てるのだ。――時に藤井、彼奴什麼したらう？」

「待たするとて城下の松原より長いじや無いか。もうこれ燈火が點く。」

下戸の藤井は膳をせゝつた箸を投げ出して、額を叩いて苦笑した。

此の兩人は江戸詰の淺野が家老で、藤井と云ふは、彼の藤井又左衛門。安井と呼ばれるは、國許に居た治左衛門が悴の彦右衛門。彼は年紀二十八九の顚ぶる好男子、這邊の山猫等にも先づ鼠鳴の料になりさうな質である。猶又た其等兩人に待たれる松原とは誰？高家の筆

頭吉良上野殿が公用人の松原左仲、當時名代の收賄家である。

（二）

兩人が喞つ端に、燭臺は來る。其の紙襖の啓くのを待難ねたかの樣な庭の梅が香は、早咲の幽懷いところを夕東風と伴れ立て、芬と此の座敷に入る。

「あゝ好い馨氣。――おや？」

と少婢は振向くと、這囘のは腸樽の腐敗た臭氣。曖！と「旦那お危ない」と云ふ聲が先導で、「あゝ醉うた。――　いや御兩所、御待難ね。松原左仲、酩酊いたして苛う遲刻した。時に……………。」

とおろ〳〵、其邊を異し氣な眼で眴はして、

「御兩所切りかな？」

何者かの在ぬを不平といふ樣な面色してどつかり坐るのは、彼の吉良家の公用人なる其男。

彼は、安井が「先づ」と指す盃を横風に受けて、

「何か。御兩所で、下相談もなされたのか喃？」　と頤を突き出す。

下相談とは甚麽か。生醉本性違はぬ、稍改まつた處を見ると孰れ何件かの密議でもあらう

が、其は姑づ後段の話説として。玆に此の新來の客、松原左仲なる者の風體を見ると、年齢は四十一二、酒肥りに肥つた盤臺面は、頭の禿と其の區域を劃たぬ迄に照閃さして、鈍栗眼に似ぬ其の薄き眉毛を、有るか無きかに又た細く剃着けさせて居る、此れが當時の「木挽町眉」と云ふなる粋の粋なる歌舞伎風なりとかや。衣服は黄八丈の御召縞に、藍鼠の羽二重の下襲を二枚程、黒縮緬に何某家の副紋を五つまで歷々しく染め出させて、紫色に贋せた藤鼠の圓打の紐。此の羽織が抑も其の侯家への出入を衒つて。其紐が又た蹴鞠の甚麼とかの免許といふを眩燿かす賓。帶は煤竹の獻上獨鈷、此も其の身錢を費りたるにあらぬは著るし。

もう來月が臨月かと云ふほどに膨脹ました懷中の紙夾を一搖り搖つて、

「如何じやな、内匠殿にも其の御内話、成されたのかな。」

「いや、未だ…………。」

と藤井は手焙に翳した掌で鼻の邊を撫でながら、

「……大夫の方の御話が決着ん程には、手前方では何とも早で…………。」

眞顔に頭を抓くと、對手の不平は愈不平。

「判つとるじやな。決着るのは我等が方寸の裏——其りや各位にも豫々其段な申して有る。唯だ其の分配じや。な。實は今日も其義に就いて築地から神田橋、番町から駿河臺、御茶の水から本郷へ迄も廻つて、終日奔走して、唯今が其の歸途といふじや。此方は其れ迄に肝煎つて居るのに各位は、—— 未だ其の御内話も成されんと。餘りなる御手延じやな。」

彼が隱し藝なる捩上戸の捩方がそろ〱初まつて、什麼なる密事をも饒舌り出し難ぬと看て取た安井、婢共にそれと目を授せると、此も同じく差心得た眼で挨拶して、銚子を換る振にて次間へと行く。

「まア御靜穩に。」　と、安井は彼との盃を交換て、

「大夫、其りや不可んですなあ。分配と云ふのが分配じや無くて、貴方の御話じや全奪ですは。責て半額を私共に下さればだが、三分割の、貴方二分取では、此方の立前がから皆無ですなア。」

「そりや當然の算盤じやがな、原來が……。」

と佐仲は火箸で、稍暴ぼく炭を撥けて、

「其金の一分が貴公等よ。一分が我等さ。殘り一分が我等旦那で、其中には御饗應の指圖

萬端から、勅使御歸京後の内匠殿、四品の御執奏の手數料まで入つて居ますじやは。究竟貴公等は濡手で粟。何一つ骨折らるゝ事無くて千兩からの金が入る。恁麼甘い口が再と有るかい。立前が無いなぞとは以ての外な！」

（三）

彼等の對話で既に其の梗概だけは了解つて居る。更に其の詳細を訂ぬると、魂膽の卑劣さと云ふには猶ほ驚愕く。彼等は已に主の身を咬ふ身中の虱。武士の風上、どころでは無い、幾んと人間の部類にも入れられぬ侍畜生。犬彘だも猶其餘を食はざるべき痴者の、曲者の―其者が播州赤穂五萬石、淺野家の御家老樣と云ふのであるから彌驚愕く。

今茲元祿十四年の三月には、年始の賀儀として京都よりの勅使が下向る。此は毎年の例であるが、其際には右の饗應の御役と云ふを諸家の大名に命せられる。是れ甚だ金銀も費り、人手も掛る、其の家々に取つての痛事であるから大概は御免を希ふが、又た或る野心家は、其の御褒美の位階昇進といふのを目的にして、我から進むで企望むのも有る。殊に今回のは例とは違ふ、當御代（五代將軍綱吉公）の御生母　桂昌院尼公が一位昇叙の御使と云ふをも兼ねらるゝと云ふのであるから、其の饗應も格別の御手厚と有るのだが、又た其代とし

て御馳走役には出格の御賞旨といふのが有つて、事畢つて後、彼等が殿中の席次を進めらるべきは勿論、從五位下の諸大夫の向は、一躍して四品の侍從にも昇進が協る。と云ふ下馬評は前以て頻に立つて居る。

四品の侍從！是れ當時に於ける平大名が前途の榮として、金銀や賄賂で買はれるならば三年の收高を一年に歛げても！と其喉を鳴して其選を冀ふもの。卽ち其の四品となれば、第一が、天下の樞機を握ると云ふ老中と、位階に於ては同じ班となる。隨つて拜謁の儀式、坊主（殿中の）の奔走、往來の供立、持鎗の數、臺傘、沓箱、引馬に挾箱、屋敷の構造までも差違つて來るので、金銀に飽て、榮耀に倦むで、唯是れ虛榮の人爵と云ふが外には甚麼の企望も目的も無い、泰平至治の御代、墓ない生活の御大名には、棚にある牡丹餠の、各取りたいが、只其の機會を得ぬと云ふのに悶えて居る。其れが其の侍從！其の踏臺の機會といふのが今出たので有る。飛び附たい程に彼等は噪ぐ。然して其の悶々たる者の一人で在られるのは曩の淺野又一郎殿、今の内匠頭長矩である。

其處へ彼等は乘け込むだ。此の館伴の御用首尾好く參れば、御家の先規に絕て無き黒袍の御裝束、如何でござります、一番御肌が袒がしやれては、と云ふ其の肌袒の費用が金三千

兩。彼等が着服の手品の好餌とも哀れ御存知なき内匠殿は。うむ宜からう、予も所望じや、其方共肝煎つて見よ。との御允許が内々出たので、此で兩人、其の談合を持ち込むだのが、彼の高家の筆頭吉良上野殿。公用人の松原佐仲が右の萬事を擔當むだが、唯だ折合の着かぬと云ふは其の三千兩の分配で。松原は三分二を寄與せと云ふ、安井と藤井は、其れでは此方の手が拍てぬと云ふ。拍てる拍てぬの押問答の紛糾の果が、端なく彼の佐仲が唾壺を叩く暴けなき音と代つた。

「……なりや什麼でもお爲れ。怪からぬ義じや！」

怪からぬとは何の口で言れた義理かと思つて見たものゝ、這奴を怒らして了つた日には固より此方の根も葉も無くなる。然ればとて看す〱の利儲を捲き上げられては、犬骨折つてたかゞ一人前五百兩宛。惡くは無いが、其處が畜類。馬鹿々〱しくも有れば厭氣の料見も指して來る。

其處を程好く圓滑るにはと、

「未だ來んかの。」

安井は少婢に耳語くと。

「泥醉て居ますよ。—來は來ましたが……。」

「ゝゝでも關はん、什麼せ合子だ。疾く來させろ。」

「は。」　と少婢は起て行く、引違へに、

「おや此座で。まあ嬉しいこと、安井樣……。」

蹌々と入つて來たのは、名は優しい初野といふ當地名代の踊子である。踊子と云へば太と妙齡う、物羞し氣の繊弱かにも聞えるけれども、此は年積つて三十にも庶き大婆！其れが又た泥々に爛醉て居る。其の爛醉てゐるのが又た、什麼な緣かや、松原佐仲が入魂の女とある。其の入魂と此方であるのが、彼は又た如何なる蟲か、觸られても怖毛が立つと云ふもので、毛蟲遇ひに爲る果が、何時でも悶着る、先づは因果同士。佐仲が面相は俄かに崩れた。

「初か、おゝ好う見えて與れたな。さゝ此座へ來て坐られよ。」

且つ席を避け、且つ其れを劬はる爲體が、從前の苦蟲とは打て變つたので、婢共はくすくす、〱。

「御一盃頂戴な。」　と初野は未だ嬉し相にして手を出すので。おゝッと心得たと佐仲は逸

早く、
「そりや此處に有る。」
出された盃を突退けて、
「貴方のじやござんせん、安井樣ので。—ねえ安井樣！」

（四）

安井ははッと爲た。お志の有難た迷惑は此座に於ての最負の引倒し。什麼泥醉婆の無遠慮とても其人への羽向勞に聘むだ趣向が目に映えぬとは、然りとてはの無面目。殊には此の姉とも見るべき婆垂に追回されては折角の好男子の沽券も下がる理由。恐ろしや、と彼は我知らずに坐蒲團を辷つて、
「馬鹿な！」
「おや安井樣、何が馬鹿ですよ。御盃を戴きたいと云ふのが馬鹿ですか。」
と、初野は此の安井に、疾から沁々情話を爲て見たいと思つたのが、機會が無くて、心私に悶々して居た處へ今夜の出會。飛着きたい程に念つてゐるけれど、其處には他目の關がある、切て盃をと—其れは盃では無い、其人の心緒をと、要求にかゝつたのが情げ無く

刎附られたので、爛醉ては居る、勃と來て、
「甚麼が馬鹿ですよ?!」
愡てはと見難ねた老人の藤井は仲裁心で、
「こりや初、今晩は此方が亭主じやぞ。御客の佐仲がお盃、頂戴くが好い。」
「おや、桜原樣が御亭主に爲なすッた事が何時有りますえ。何でも他の御馳走さ。然して揚句にやぶう〳〵喑つて、蠟燭の點片まで携つて御歸んなさる………。」
「呀、お主！」 と佐仲は叫つたが、爛醉た其眼は凄く變つた。
凄くも爲らう、這麼に照侮されて、緊々罵れて、剰さへ異な素振を彼の無遠慮に炫着けられては、太陽干の惠比須の假面とて色が變はる。況んや醉むでは頗る難癖しい、醒めては中々悋氣のある、傲慢の、旋毛曲の佐仲に於けるをや。佐仲は持た盃をぐゝッと突出して、
「藤井氏、お飲せなさい！」
「誰、誰に？」 と彼は震へた。
「誰では無い。此の女子に。——さ！」
「私や厭ですよ。其樣氣障な盃は……。」

焦燥たい初野の疳癪は、濫みに八的りの爆聲で發る。
「ちや、大夫、私が御合と云ふを……。」
と、廢止ば可いのに安井は手を出した。
「や、貴公。拙者、貴公に、何時合むと囑み申した。や、彦右。——こりや貴公等は此なる女子と腹を合して拙者を玩弄物に爲ッしやる喃。—いや然樣じや。こりや彼の金子の分配の多寡を根に啣つて我等に恥辱を與やうで喃。—佐仲確と覺えて居る。貴公等も覺悟お爲れい！」
傍なる刀を押取つて彼は漫らと捻くり廻はす。此が毎度の奥の手と云ふ酬い酒。然し抜たとて多寡の知れたる赤鰯、猫すらも看向も爲まいが、場所が場所だけ、事件が事件だけに老人の藤井は節分の鬼ほど其物を恐怖れた。賴浣むは初野、樣々と云ふ體で目で拜まれて、
「其樣面倒臭い盃なら私が飲みますよ！」
初野は引攫つて、嗎と飲むで、
「あい、御合盃。」

其盃を自分に指して呉れるかと、心待に待つた佐仲は、再度目的が安井の方へ逸れたので、最う赫と、其眼も眩むで、
「汝!!」
拔うと爲たが、一向拔け無い。拔け無い理哉、彼の婦子が三人掛りで、二人は其肱に、一人は其腕を押へて居る。
「まゝゝ、此處は御身分じや。旦那名前じや。短ゝ御短氣じや！」
藤井も婦子も一緒になつた。漸々と其刀を取り上げる。其隙に、安井は何處へか。—初野も續いて、—跡は煙！
漸く吻と息の出た藤井、
「御腹立御道理。おやがな、然し那女ばかり婦女じやござらぬで、又左衛門、必と美いのを御執持しまするで……。」
「むう。」
「今晩の御謝罪にな、三分二は勿論の事、猶其他にも喃。—元々御同樣の餘納話じや。這邊で御腹を立てられたりや、御自分も詰らねば、我等とて虻蜂取らず。な。成る堪忍が堪

忍かじや、何も是れ商賣附じや……。」

「ンむ。」

「彦右は弱輩。那樣な者にはな。ソレ先づ、これ……。」と手を握つて、

「御手附じや。一總ては老人に御委しやれ。」

錚然と音のして袂から袂へ忍ばせた小判の額が十枚程。毘沙門の面も、布袋と變つて、佐仲は其金を撈りく、

「むゝ、——然し此りや、別口じやな?」

「如何にも、はゝ御肴料。——婢子共それ御駕の用意、然して別に御料理も……。」

（一）

淺野内匠殿、延寶三年正月に家を繼れて、同じき八年に叙從五位下、任内匠頭して、今歳元祿十四年まで二十二年。御年は三十五。

三十五と云へば、血氣熾んの勤仕盛りの年齡と云ふので有るけれども、外樣の、平大名とある悲しさには、幕營樞機の任に當る、所謂る「御役附」と云ふ企望は勿論、位階昇進の前途も無くて、此儘で行けば猶ほ廿年が殿樣で在られた揚句が。年罷り寄り候ふに付戀居か、然なくば七十までも長命られて、城内の杖御免位ゐが落着である。沒趣味い!

原來が利發であるに、功名の念頗る激しい質と有る内匠殿は、溜席に居や杖などの御免を狙つて居られる理由のもので無い。殊には藩祖長重朝臣の遺訓と云ふのもあるに、又た殿の御祖父長直侯が、彼の山鹿の老人に諮られて、藩内の始末方覺書といふ書を書遺された、其等に據れば、一藩の武備を充實さむには平日より儉素を守りて、金銀の用途を節するに在り、と云ふのが大趣意で。猶ほ山鹿氏の餘錄と云ふには、赤穗の地たる三方(東南西)海に面して、雨寡なく、薪木饒かなり、以て鹵を開き、鹽を爨るべし、是れ百代の利也。といふ言が其の第一條に記してある。固より經濟の眼に脫落なき此殿の事、早速其の計畫を立てられて、從前の鹽濱に加ふるに更に新濱三十餘箇所を以てせられて、其の地所見立、濱年貢取立方、其他全般を、彼の家老大野九郎兵衛に申し附けられた。

彼は前にも云ふ算勘には長けたる男である。殿の御心は、國を利し、民を利し、藩庫を富裕にして、以て萬一の變に應ずるの資と爲すと云ふのに在る。素より美事、人其人をさへ得たならば上下共に其の慶に之れ依たであらうが、奈何せむ其の惣奉行が彼れ九郎兵衛其者であるから、折角の利も下には歸せずして、民は唯だ名詮自證の鹹き目にのみ遇は

された。

雖然も、濱は成たのである。鹽は見事に取れたのである。只だ製鹽者は其の苛税に苦痛むで、歎願、愁訴と、果には其の不穩の擧動と云ふにまで到つたが。其れが悲涙の滴露の結晶が殿の金庫には一萬兩、九郎兵衛が屋敷には亭座敷一箇所と二斤前の藏とが出來たのを、身も堪られぬ苦々しきものにして、殿に强き御諫を進げたのが大石である。

先師の山鹿が製鹽の策を建てたは、全く領民の利益、即ち濱方行立の爲めである。然も斯民の利益は殿の御利益、所謂る民足れば君も亦た足る、情けは味方仇は敵、鹿臺の財も鉅橋の粟も民叛き國離れなば誰と共にか之を守らむ。武備とは金銀の言にあらず、城池の堅固は決して旗幕の華麗なるを申すには候はず。此等の事御存知なきとは在まさぬを、如何にして慾くは御心の昧みけむ。唯幾重にも御領民の行立方に御意を留めさせられて。と彼は二度三度、四五度に及むで苦諫と云ふを獻つたが。情けなや、口に苦き良藥は、目を娯ましむる黃白の色鮮きには若ばぬかして、殿は竟に彼が忠言をば納れさせず。剩さへ內藏助は煙たき者、共に語りて不興らぬ者として、後には御前を遠斥けられた。

大石旣に黜貶けられると、傍に殘るは大野に安井、藤井、伊藤の鼠輩である。此等が頻りに名利と煽動る。流石に色酒に現を拔して身分を忘れられる程の殿でも無いから、髮姿を聘く、舞踊に狂ふ抔いふ、其等の驕奢に耽るとは無きも、金銀が餘裕つて御所在が無いと、只だ濫みに勃興るのが虛榮の念、即ち位階の昇進だ。什麽かして五位の朱衣を四品の黑袍にして欲しい！元三初めの御式日にも殿中で威張つて見たい！目下の御企望は唯だ是れのみで有る。

成る程其望も無理はないので。下乘橋（大手三の御門）で下乘をしても、「赤蜻蛉」といふ五位の服と、「黑天神」といふ四位の袍とは、實に其の天神樣と蜻蛉ほどに見榮が差違ふので、成るならば矢大臣の駈落よりも黑出立の高當の方が好い。一方は疱瘡子の戶惑かと嘲笑を以て迎へられるに、一方は、あゝ四品！と尊敬をもて頭を下げられる。是れは誰しも—況んや負嫌ひの、功名の念鬱勃として斷えず胸間に磅礴せる、性急の內匠殿に於けるをや。

「如何じや兩人、那の內談は首尾好う進るかな？」

安井藤井の兩人は先づ頭を下げて、

「上州樣（吉良）、右は悉皆御領承にござります。但し其儀に附きまして喃。」

と、藤井は更に低聲になつた。

（六）

藤井又左衛門、何を言ひ出すかと内匠殿は屹と視られると、彼はいゝと恐る〳〵に、

「此度の御用に附きましては諸家樣ともに中々御競手が多分なさうにござります。既に吉良樣へ御頼み込みに成りましたる御家のみでも、佐仲話に由りますれば、早や七八家樣と申しまする。―で、此よりは唯だ金子の御競合。―私共も前途如何と焦う心痛の致しまする。」

「むゝ。」　と多時く御思案の體であつたが。旋ての事に、

「然て、入費と申す。何程じやな？」

「先づ五千枚ほどの額にも御座りませうか……。」

と氣色を窺ふ。彼等は酷い奴！三分一の不足前を又た殿の御懐から騙り取らうと爲るのである。

「五千金とは寡からぬな。然まで多分の費用とは………。」

と、腕を組まれる。事物の釣衡てふを御存知の殿が胸には、五千兩の小判の量目と、四品の侍從の位階の尊榮と、孰方が重要いか、今は其の衡が迷つて、裁斷の分銅が窮困てゐる。

殿は呻吟れた。

「其の、五千枚の金と申すも吉良への進物のみじや喃う。―御用となれば、又た莫大に費る………。」

「御意に御座ります。御役の御沙汰でざりますれば、―先づ二千兩？―其邊御入費はござりませう喃？」

合しては七千兩！當時に於ける七千兩は、殿が言はれる其の「莫大」の金。下世話の「千兩地面の角屋敷」が七箇所買へる。猶ほ、兩に一石五斗の相場とすれば、卽ち此の七千兩は、赤穗五萬石惣貫收の約五分が一の額に當るので。

「何故又た、然樣に要るじやのう？」

「然れば、諸家樣、皆な御張合の姿と相成りましたるで……。」

と。安井は應へた。

「何故然樣には又た張合うじや喃？」

「殿樣へ御張を、と申す義さうに御座ります。」

「むう。すゝや？」　と殿の御面色は異しく變つた。

「御張の對手は筑前樣、長門樣、奥州樣等の御分家樣方で、孰れも御本宗持の御方樣、で、究竟は、御本家樣御威光争ひか抔どの樣に、下々では此義、申し觸し居ります趣にも承はり居ります。」

「やあ、甚麼じや?!」

と、殿の御唇は顫へて來た。原來が此殿の質として、彼の負嫌ひも亦た太甚しいとある上に、御本家たる藝州家に對する御心入と云ふも極めて深い。其れが本家の威光競爭！此の競爭に負たとしては我のみかは本家の恥辱、武門の瑕瑾！とある程に聞れては此は成る程堪らぬのである。宇治川の先陣、一の谷の一二の驅、敗北を取らばもう世に立たれぬ迄の仕義。と、一途に思ひ迫られては一時に赫と、

「では、意地でもじや喃！」

「先づは其樣にもござりまするが、這處は其の、なあ、御勘辨どころかとも御座ります。」

藤井は故意と引摺る如くに應へて見た。然うなると殿は彌よ、

「何故勘辨かッ！」

「實は、御無用かと存じまする……。」

「何、何、何故じや?!」

「七千兩の御金と申せば、右の莫大の義にござります。信心も德の餘り、殿樣御昇進遊ばしましても御庫が空虚と相成りましては差向ての御勝手にも窮困りまする。で、先づは物有ての種子、業平も飯食うてから杜若で、花よりも何とやら申します。無益の御競爭も要らざる義かと喃……。」

「苦う無い！予、予は手許不如意と有ても——。本家の爲じや。本家名折じや！」

曲彔を撼つて、膝頭を叩かれて、

「當地に金子は如何程有る？國許金庫には何程じや？無くば領内へ申し附い。假令一萬が二萬枚でも、這處は意地じやぞ！覺悟致した！」

（七）

「十歳で神童、廿歳で才子、二十五からは尋常の人。」てふ俚謠の意も憶ひ起される内匠殿、輔導其人を得ぬのと、功利の念に急なると、御父采女殿より稟得られたる腦症との三者の合併からして。無念やな、貧じ魂の意地のみ劫じた發狂めく容體と爲り了られた。人間覺に松に如かず。彼の庭瀬の城なるは亭々として千載の蒼色を更めぬのに、人は飜つて此の

光景だ。大石をして彼を憶ひ、此を聞知しめなば、今昔の感にも、遇否の歎にも痛く撃れて、猶且つ主家の今後を太く氣支つて、彼は什麼か驚き、什麼か慨き、更に泣き且つ狂するでも有らう。

其の大石は、目今湯治として道後(伊豫)に在る。赤穗の留守には二番家老の、彼の九郎兵衛只だ一個。

處へ早馬！其の使者は近習役なる灰方藤兵衛、彼は江戸より赤穗まで百五十五里の長途を七日に打つて、今や城中に着いたのである。吃驚いたのは九郎兵衛、何事の急變かと急ぎ登城して、

「いや藤兵衛、御太儀々々。仔細は甚麼かな？」

「殿樣益々御機嫌よく入せられます、御同樣恐悦の義。――扨て御使の委細と申すは、此に…………。」

と首懸の革狀箱より取り出す一通は、宛名は大野九郎兵衛殿、署名は安井藤井の兩人。九郎兵衛に懷中の眼鏡を忙しくして彼の狀押し拔き、一わたり見たが、

「甚麼じや！貴公、此樣な使に百五十里をお出やれたのか！痴呆ッ！」

唾吐く樣に其狀を突如に投附けて、彼が癖なる額越の眼。

「叶らぬ事ちやは！殿が其樣な虛呆た山氣を起されたとて其の尻馬に騎つて一緒に噪ぐ、彦右又左の馬鹿！――彦右は未可も、又左が那齡で異見も申さず、殿の無理を道理と、狂者の褄に火を着くる。――お主、歸府つて。又左、お手前、齡は幾歳になる？と九郎兵衛が申したと然う言やれ。有頂天氣なッ！

國許の庫金は、殿が其樣な遊戲にお費やる理の金では無い。此は確と我等封印を附置いて、御子々孫々、御末の代まで遺される用意の御金じや。侍從が何者じや。四品の高位に昇しやれたとて位階で腹が張り申すか。位倒れの貧乏が御好なりや諸侯廢めて、京都へ上つて、青公家の仲間入なされませ。と此等も我等が申したと殿へ申しやれ。怪からぬ羨じや！」

算盤盡の彼れ大野が料見としては此の劔もほろゝも有理である。然し喫着されて餘り芳ばしからぬ劔鑿と謂ふを此丈けに咬らせられて、御使者たる藤兵衛、些とは血相も變異ねば協らぬ境目と有るのに、一向平氣も不審であるが、猶莞爾と、

「いや未だ、他に內見の御狀と云ふがござります。其の御返詞は明朝猶ほ私伺う事とし

て、此狀、熟と御披見下されて……。」

襟の縫ひ合せから叉た一通を太切さうに取り出して、彼は秘密と云ふ樣に大野に手渡して、長途の疲勞もござるから私宅にての休息御免。と言ひ棄てたなり、其席を退て行つた。

もとより人拂の小書院の奥、次間には臺子に煮沸る釜の音が颯々として、廣椽の鬼骨障子の上段には申刻の夕陽の薄寒い影が殘つて、餌に飢えた鵯めが手洗鉢の南天燭の實を狙つい、い、てきゆうと啼く。傍邊は鼠一頭居ぬ閒寂閑！

那麼だらう？と九郎兵衛は其狀を叉た手に取り上げた。

「むゝ署名は無し、内書として有るな。」

い、い、はて心得ぬの思入が十分有つて眤と凝視れたが、其處は蛇の道は蛇、彼は甚麼をか了得顔に首領いて、

「然うじや……。」

と、悄々地披いて見たが、果然、其の、然樣であつたか、圣禿鼠の照耀するのを三つ四つ叩いて、

「むゝ、然樣じや！いや中々那奴等、味を行るわい　此の乃爺を師匠番とは、こりや出來

た……。」

（八）

安井藤井の内書といふが那樣な事を認めたかは、遽に崩れた九郎兵衛が笑面を見ても直ぐ解る。彼等は其の盜竊の夥伴として彼を頼むだのだ。卽ち國許の金庫から今回の入費の半額以上を出さすとして、其の幾分を彼等三人の懷裏に賺る。然して其の不足を補ふの名義を以て、領内の田畑、鹽濱、山林から段錢を取る。猶ほ其れをも好い程の名目を附て彼等が仲間で分配ると云ふ、聚歛に兼ぬるに盜贓を以てすと謂ふのにある。

言語道斷、奇怪至極、人面獸心、人非人！と什麼な文字を列べても飽足ぬ彼等が所業とは有るのだが、那麼道斷や、奇怪や、不忠や、不義やの、詮議にも番木にも掛らぬ九郎兵衛爺が胸裏の混雜は、盆と正月とが一所に來た樣な心地になつて。帳面といふ物の有るが怖さに。あゝ可惜もの、那の爲寢金が俺の自由に出來たらば！と横目に睨むで垂涎を啜つて居た其金が、明日からは公然晴れて、己が勝手の使用が成ると云ふのである。彼は下城する時も莞爾、自宅へ歸つても莞爾、居間へ入つても、算盤を持ても莞爾。早速息子の軍右衛門をも喚寄せて、仔細を話して、彼にも其の莞爾の喜悅を頒つたが、猶ほ其の包むに餘

る嬉しさが頰に溢れて、胸に躍つて、鎭守神樂を見るかの如く、馬鹿囃子を聞くかの如く、其の鼓噪ぎで其夜はまんぢりとも睫が交されんで、明け遠き夜を漸と明かして、陽が出てから些と昏々となると。

「物申う！」

灰方藤兵衞が來たのである。福神の影向、と驚いて蹶起て飛んで出た大野は、

「いや此りや御早い事。さゝ先づ此方へ。」

上座へ直さぬ計りにして。昨夜逮てゝ認めた返書の二通。其一通は表向の請奉書。他の一通は彼の内密の打合せ。糊太大に封緘して、

「扨て藤兵衞殿、昨夜一夜勘考したが殿の御所望も無理からぬかい。御勝氣の上に、御壯齢い。愍じ乘掛つた船となられては其艫を後方にも押せまいか喃。御餘義もござらぬ、我等一向同心いたした。仍て此の返書。――此の一通は殿の御前で御披露なされ。又た此方のは内書の方じや。安井藤井雨人へな。間違はぬ樣、宜しいか喃。

就ては金子じや。此は奉行の前原(伊助)が病氣によつて悴軍右衞門が御鍵を預り居まするじや。後刻右を御渡し申すで、先づは緩りとな。――萬事は我等心得居る……。」

固より同穴の狐狸、主人は何を心得居るのか、客は何を心得させせられるのか、彼等は半日の餘を閑談に費やして、其日の午過、軍右衞門は自身金庫から金函幾個をか取り出して、自個が宅にて駄荷に作つて、其の翌朝藤兵衞に渡して、赤穗を發足した。

恁麼手品の我が留守中に行はれたとは夢にも知らぬ大石内藏助。其身は近者神氣を損じて、事物を爲るにも面白う無い。此が往昔戰亂の世とも有るならば、領境の守備、人馬の調練、夜以て日に繼ぐの倥偬ので有らうけれども。泰平の御代の有難さには、街道は逆木の代りに盛砂を播て、人は鎗太刀より大事の藝と三味線を持つ。士風の頽廢は慨くにも餘りあると云ふもの、其の頽廢が結句治世の基因。弓は袋に、刀は鞘に、血腥さい場所と云つては、江戸では四日市、大阪では雜魚場に限る。

恁麼世の中には骨の有る奴が馬鹿を見て、手の敏い者が勝利を占て、御無理が有理で、御痴呆が怜悧で、箒で庭を掃き、舌でお髯の塵を拂る藝等を覺えねば、立身も出世も出來ぬ。其れは内藏助も熟く知てゐる。知ては居るが愍ゐ身に禀つた一見識と、師の山鹿から享けた教訓とが寧ろ邪魔をして、世に譏げるでは無いが、彼の娓々嫋々たる輩と身を伍する事が何分協らぬ。況んや其身を顧みれば、小祿とはあれ赤穗五萬石の國老。事有る時は其一

藩を背負て立つ重責と云ふを擔當うて居るので、殿は什麼御辛からうと、仲間には什麼輕蔑られうと、其の堪忍を爲るのが忠義。此邊が汎々もと言れた師の遺訓に我が節操。と目を瞑つて、逹てず、噪がず、表面には所謂る伴食の冷水雜炊、裏面には烈々燎るが如き火を裹むで。我未だ四國を見ず、此の閑暇を幸ひ、一衣帶水なる伊豫に航り、彼處の武備、藩政から、人情、風俗、其等を豫て熟と視置かばや。と恁う云ふ肚て、病氣を口實に、暢氣極まる湯場遊と出向いたので。

（九）

大石が赤穗の留守宅には母の妙貞尼（以前のお美代）と内方のお岸、其腹には子女が四人。初子は女子にして、次男は吉千代、三男は大三郎。其の惣領と云ふが主税にて今年は十五。彼は尙だ前髮立の兒童ではあるが、身材五尺に餘りて、膂力三人に敵し、兵法の捷業一藩に並ぶ者なし、智慮拔群にして老成の人も及ばず、希代の若者、末賴母しき仁體、內藏助天晴れ良き兒を持たれたり。とは當時の文書にも記してある。然れば父も我が留守中をば此の主税に托けて、事有らば——意せよ、努め油斷すな。と囑けたのが讖をも作したか、果然此の事件が出來たのである。

主税は風と其の書齋で耳を欹立てた。門外に駄馬五頭ほどの鐸を鳴らして行く音響がする。誰が旅立か、と庭の築山から窃に覗ふと、駄馬は明荷の薦包を重げに駄けて、一頭につき宰領の足輕が三人宛、都合十五人。其後からは不思議！昨日江戸から急使として來たと云ふ灰方藤兵衞。彼の大野が息子の軍右衞門と袖を聯べて睦し氣にして行くのである。睦し氣も好いが、彼等は酒氣を帶びて居る。聲高に談して來た。其の聲高に談して來たのが我が屋敷の前まで來ると、急に其聲を潜めて、笠を俯向けて、急歩に行く。其又た急歩に行く容が人に逐はるゝ——全然歩を竊むと云ふので、猶且つ伏目に我が門內を窺込むだ爲體が、旁々以て寡なからぬ不思議と、主税は奇異むだ。

灰方藤兵衞は小野寺重內が妻の弟である。重內は京都の留守居役として彼地に在れども、猶其の養子幸右衞門は部屋住とて當城內に居るのである。久々での歸國で有るから、彼家を音訪れぬことは得も有るまい。有らば甚麼とか此回の御使の趣をも話したらう。委細の義にあらずとも切ては其の槪略でもと、主税は出向いて見たが。其望は畫餠に了つた。藤兵衞は其甥の家へも立寄ぬのである。然らば大高源吾が方へは？遠緣ながら此も其の親戚であるから。と主税は又も其宅を尋ねて見たが、同じく無益。梨

も礫も無い。夫れでもと猶其の友、其の知己、と二三軒、四五軒驅け廻つたが、甲も乙も不得要領、募るは唯其の疑念ばかり。

と云ふ中に聞出したのは、昨日大野が金庫へ行て、窃に其の戸前を啓けたとの事である。

扨は、果然。——〻は那の駄馬が？あの明荷の薦包が？と、取り敢ず金奉行の前原伊助に仔細を訊うと。彼は以ての外の熱病といふので、無念やな、言語も通せぬ。勘定奉行の岡島八十右衛門、藏奉行の貝賀彌左衛門、此等は勝手方に關係はる其向の役人とはあるものの、掛りが違へば、金庫の出納には、立會れも爲ねば、又た立會せも爲ぬのである。此で主税は術計盡きた。

彼の明荷の樣、駄馬の數、其れより積算れば金子にして約四五千兩が額はある。有繋に彼等、其金を攫つて逐電とも有るまじきが、兎角に行方が知れねば、心も落居ぬ。寧そ今より一騎揚げて！と勝立も取つたが、其れも不可ぬ。前方は近習役に金奉行、此方は部屋住。誰が指圖で然樣の義を問はれるのか、當方は老職九郎兵衛殿命令で何處其處へ參る者、殊に此の綑荷の中には何物がござるやら我等は存せぬ、貴公一存で此の老職の封印を切る積のか。と云はるれば其ッ限り！指を咬へて、其儘悄々と、あゝ其迄である。

是非なし、彼等を追ふ脚を伊豫へ向けて、急ぎ父上に此の始末を告げ申さむ。其事よ！と主税、直ぐ此の槪略を物頭にして我が大叔父なる進藤に語て、其手から船方奉行の判を乞ひ得て、父の内藏助急病との名義で、彼は其日に坂越の港に赴いた。坂越は城下を東北に距ること一里、海深く、潮平かにして、瀬戸内通ひの船舶の日々に出入する湊である。

（十）

大石主税は坂越に着いた。船方の役所に就きて、伊豫の三津濱行の便船やあると尋ねさせたが、船は有る。金比羅丸、天神丸、吉川丸、何れも五百石から七百石積までの、瀬戸通としての大船は繫泊て居るが、甲も乙も春氣南風の風雨を氣障つて、今日明日には此港を出帆しやうと云ふものは無いと云ふ。主税が意の焦方は一通りで無い。

然りともと、船頭を喚出して樣子を訊すと、御前樣方は知らしやるまいが、此所から伊豫の三津へ航くには、播磨灘、水島灘、風早沖の三所の難所と、來島瀬戸、黃金礁の命賭の惡潮があり、日和見た以上にも見決めぬけりや出船は恊らぬに、殊に此の二三日は春氣ちふ强風が荊含むで居る。水島邊りで此の南風に撞着した日にや巨大え菱垣船でも木片微塵だ。況て俺等が小船！こりや到底もが能んねえ事で。と彼等は取り合ぬ。

「道理じやが喃、私は親父の病氣と云ふで道後の湯場まで是非急行んでは協らぬ身じや。で喃。什麼か心配、叶るまいかな？」

「御急行ならば陸路を行ッしやい。惡い事は云ひませぬ。藝州へ越さッしやれてな、小深・(宇品)から乘船じや。彼處から三津は十八里、風さへ順けりや一日路じやで、安藝へ御越しやれ……。」

其の注告は親切のである。雖然も其の陸路！急馬で行くと爲てからが、播磨、備前、備中、備後、安藝と五箇國を踰て、此の道程が約六十里、其上にも十八里の船路を控へて、其處でも風待、潮待等を爲せらるゝとなれば同是四日五日は費る。あゝ父者の御出先が陸ともあらば！何故又た此の人馬の便無き海向ひへ故意に御出向なされたか。日來の御用意深いにも似ぬ。と主税は今更ら父の不注意を怨むで、我知らずにほろりと泣いた。

「いや若旦那、貴君は確か大石樣御子息樣で？」

と、其群から身を擢出でた者がある。其は後走に今來た男。

「おゝ私は其の忰の主税じやが……。」

「これは御見逸、――私は大阪に居りまする天野屋利兵衞。御屋敷へも度々出ました者で……。」

「利兵衞か。あゝ好い所。」

と主税も覺えず其身を進めて、

「父者が御不快での……。」

「えッ御病氣?! 然て何、何處に何う爲されます？」

「道後に居ます。私は其の急報を得たで一刻も速う參りたいと、喃。」

「呀、道後？松山ですか。あゝ日利が凶いなア！」

六尺に近き巨漢の、大褞袍に圍括帶して、濱松の根方に雙脚を踏み掛け、大の眼を海面に凝して南方の空遙に睨むだ爲體。全然繪の樣で、悽愴くも亦た賴兕くも見えた。

「駄目だ、親方。あの雲行じや！」

と四五人の船頭は嘆いた。利兵衞は深き慷慨の語氣、

「駄目は知れてる。然し順風だ。四合に開帆たら乘越せやう………！」

「やッ出帆なさるかッ？」

彼等は眼を睜た。

「むら、出船さう。――大石樣にや俺も御恩がある。彼方樣御病氣と聞ては俺も安閑としちや居られ無え。況て御子息樣御心を察して見ると俺も涙が飜れて來る。甚麼播磨灘、多寡が十六里、今夜出りや明朝には高松へ着く。敵はんけりや其から御馬だ。――なあ若旦那、向路へさへ着きや可でせう。」

主税は夢かと、

「ぢや、便船――お呉りやるか?!」

「理由もでんせん。俺が船は觀音丸、六百石だ。昨日鹽を積仕舞て此から玉島へ莚の買出しに行きやす處。三津は航路でです。俺は御見舞に是非參じてえ。――やア船子の、船足を六分に張て、帆綱の控を三段に爲ろ。然して船玉樣へ御神酒を上げて、銘々も潮垢離を一心に取れ!」

月魄は出でたれど朦朧の影を濱砂に慘く映すのみにて、濃靄に裹まれたる海面は近き淡路の島山すら其處とも分かぬ。南方の空より勃々と起る雲は生温かき微風を遠く伴ひて、甚麼とも得知れぬ腥氣を人の面に撲つのである。轟々と響く沖鳴、蜿焉と來てはさら〳〵と引く畝り浪、孰れ魔神の大息を吐く呻唸かとも想はれて物太と恐怖しき正月十八日の宵の

空。覺悟ながらも此船の明日の命を危まぬ者は無いのである。

（十一）

巨蛇の吻く息かと覺ゆる血腥さき大南風は、惡魔の鞴をもて煽ぶるが如く一頻り〳〵落し來りて、石を飈げ、巖を顛ばし、山を碎き、水を逆にす。其毎にあはや吹截られんず苦惱む樹の枝は、北に靡き西に偃し、颶々との悲鳴を擧げて神に天に救護を喚ぶ。大雨は唯だ盆を傾へして、其の暴風に揉まるゝ狀は、天河の倒まに墜つる瀑布を、更に横さまに擬くにも似て、之に觸るゝ者、牴らふ者は人も馬も唯將に薙ぎ仆されんとす。天地晦冥、宇宙茫漠、四維震動して八紘爲に顚覆る。此の大暴風の中を、陣笠に飛び來る雨の箭先を避け、桐油の袖に眞面より襲ふ風を凌ぎて、崩るゝ家、飜ぶ板片の間を縫ひ〳〵、松山より三津濱への街道を一散に馬上に奔るは大石内藏助、彼は幾んと其命を辛々にして、港口なる小山の麓に來て、一息吐いた。

彼は什麼甚麼の要ありて這處に來たのか。内藏助は前回にも云ふ如く道後の湯場に居たのである。此の暴風雨の初め、湯宿の主人の云ふ由を聞けば、今年は去暮より寒氣凜烈くして雨寡なし、其れが此の四五日以來催ほしたる這の南風を吃ひなば什麼ならむ春氣の大風

雨とや成りぬべき。往來の菱垣船、濱方の漁舟、抑も幾十幾百をか[illegible]破て、海底の藻屑、魚の餌となる人の數々、あゝ想へば不愍の者！と、其唾も乾かぬ、未だ一時とも經ぬ中に果せる哉、此の大暴風。彼は樹を抜き石を倒すと云ふ凄惨さを覩てゐたのであるが、旋て突と起た。其意に謂へらく、

澳遠く岸近らざらむ船の難破は之を何との爲む方無からむも、湊間近き程の船は、人の力、金の威もて救ふに救はれぬ事の有るべきや。當藩に於ける其等の手當は蓋し十二分なるもの有るべきも、我も二月以來此地に客として軀の病痾を癒すと云ふ恩惠を得たり。然らば身の力の及ばむ限りは亦た此土地の爲に盡さゞるべからず。と恁く意を決めて、舍の男女の抑止るも肯かず、準備の路費を逸早く懷裏にして彼は單一個、六里が路を直線打つて今此の濱邊に着いたと云ふが其の次第。

看れば、海面の暴れ方は、唯是れ目も昏れ心も惑ふと謂ふべき的！幾十艘かの湊口一町が邊方に繋れる大小の船舶は、其の克る限りの碇、纜綱の力さへ効無きまでに搖擲れつ、戛撃ひつ、既や其の十二三艘は舵も碎け、舷も破れて、朽たる骸骨の肋骨に似たる胴の間よりは積荷を狙ひつ攫はむとする巨浪の暴威を防ぎ難ねて、船頭水夫等は必死の叫喚、

宛然餓鬼の食を鬼の奪ふに、泣つ號びつ互迭に救護を索むるが如くである。然も有るべし。怒濤の高さは一二丈！其來るや檣柱の半分を掠めて、其去るや船をも人をも掴みて行く。

「あれい喃う！」と叫ぶ婦女の聲。

「助けて呉れ――！」と號ぶ男子の聲。

遙か此方の岸に聚合へる漁夫も水子も、あれゝゝよ！あれゝゝとは云ふなるも、彼の洪濤に怖れ、其の暴風に蹣きて、踏處も决らぬに動作き敢へず。

「あれ救へ！那の船に綱を送れ！送らば褒美じや。此の百兩じやッ!!」

小山の麓の小凸所に突立ちて、金財布を眞額に、高く呼はる武士がある。其れは内藏助。

「ナニ百兩だ？」

「おう百兩だ！」

「百兩だら行ンべえか？」

「行れ〳〵！百兩だッ!!」

重賞の下には例の死士ある彼等漁師は、命綱てふ麻綱の太大を腹に緋着け、今や逆卷く其の暴浪に飛入て、彼の破船にと、云ふ其の刹那！

六七百石とも見ゆる大船の、檣も折れ、艫も毀れて半分は潮に浸りながら、猶沈まず、又た一頻り來る暴颷に吹れて、箭を射る如くと見えし船、此濱の出岬の巖石の鐵壁とも看えたるに地響さしてー と看る間に舳先より滅理々々撻とー兩斷に裂けた。乘人の七八人は濤に捲れてー復た浮上た！

「それ！先づ彼船をッ‼」

「合點だ‼」

暴れに暴れ勝る洪濤を推排け、水煙を潛りて泳ぐ人。進む船！

彼の大船は微塵と碎けて影も留めぬが、乘人は兎角して悉皆救助はれた。其の救護れた者の中には、大石主稅と、天野屋利兵衞！扨は其船は、彼の陜越を昨夜發た、弘誓悲願の觀音丸？

（十二）

「春氣南風は三日」といふ此の暴風雨は一晝夜に息りて、拭ふが如き晴空に湯峯の山松愈々蒼く、熱立てる石湯の煙 益 白くして、道後の湯場は昨日より一段の春 色 を麗かに添へて來た。

一浴又た一浴、靈泉の効に軀體の疲勞を癒して、元氣漸く舊に復れる主稅と利兵衞とは、こゝに初て父にして又た命の親なる内藏助に赤穗以來の種樣の事を物語る。其の物語は聞く事毎に大石が剛健なる膽にも鍼刺す如く、心も愕ろかるれば、眉も皺まれて、

「暴虎馮河の 戒 は守らで協はぬが、注意は天晴れじや。但し、難船の危難、姑づ措くとして、聽棄て難いのは其の藤兵衞と軍右が始末じやな。然りながら白晝に駄馬を牽かして其の曲事を演て見すると云ふ彼等の大膽とも有るまいが。兎角は九郎兵衞執計ひが其意を得ぬ！利兵衞、其方は、甚麼か聞込の筋も無いか喃。」

利兵衞は其の奴 頭 に掌を中てゝ、

「大野樣御義に就いては些と聞取りましたる件もごはります。鹽濱から齎らしやれた金、其を堺へ廻して彼處の田地を買はしやれます。ー然たが、こりや御庫の金まで盜出いて、と迄の事にはごはりますまい。ー萬一堂島の米買か喃？」

買米と云ふも有るまじき義で、彼が小膽では、一擲千金、輸贏を咄嗟に試みる抔の一刀兩斷たる撓業は克ぬのである。況て其處には藤兵衞が一枚居る。攷ゝ江戸家老の安井藤井が部下！大石は此件たる大坂其他に非ずして、江戸と國許との關繫と見た。

「江戸表には、事件ばし無いか。」
「聞きませぬ。―出火、出水、其等も無し。目下急に金の要る―巨大い投機事！聞きませぬがな。―唯だ、此の二月に、京都の勅使が御下向とござります。下説では上様の御母様、桂昌院様とやらの御位階の御宣下をも携たしやれまいてと…………。」
「ひう？」
「勿論、其れは御慶事。で、其の御馳走役に爲らしやれた殿様方は御席が進むとやら、御加増とやら。で苛う諸家様とも御張合の、御散財とか、先度の書通にも見えました。」
「ふう。で、其の………。」　と大石は稍多時く目を瞑ぢた。其後で、
「御掛りの高家衆御名は、無つたか？」
「ではりましたで。えゝ、品川樣、大友樣。―其れから御筆頭、惣御式御掛りが吉良上野樣…………。」
「むう！」　と彼は、啓けた目を再た瞑ぢた。腕を拱き、首を垂れて左思右慮ふと云ふ爲體が尋常事ならず見えたので。驚いたのは主税、
「父上、右は？」

「いや。利兵衛。其の御馳走役は既うお被命たか？」
「宇和島樣御分家の伊達左京樣。彼方が仰せ付られに成りました歟の樣に大坂でも云ひよります。」
「ぢや、倘だ、御一家切りなのじや喃？」
「はい。」
「では、―其件じや！―あゝ其件なのじや!!」
と、内藏助は天を仰いで大息吐いた。
「其義なりや父上、結句恐悅とはござりませぬか………。」
と云ふ主税を睨着けて、
「甚麼が、恐悅！第一殿が―此は申すに憚りあるが。彦右に又左等、決して其人で無い。況て高家衆惣御掛りが那の吉良殿とある日には。―あゝ此りや大事件じや喃！」
言れると利兵衛も氣が注いた、
「如何にも。然れで。―何さま吉良樣じや先年の龜井樣御騷動もごはりまいたな？」
「うむ、其の龜井殿。其、其れ其件なのじや。―但し右等は倘だ推量じやが、推量通りと

有ては事變！
主税、お事卽時當所を發足て父が使者に江戸へ行て與れ。身も直ぐ是より赤穗へ歸る。—利兵衞、其方も破船の事濟いて後、身が方へ來て與りやれ。其方も御扶持人—兎角は御家の大事とも知れぬで喃……。」

（十三）

軀の疲勞は未だ癒ざるも、父の命令は君家に取ての一大事の要件と有るのである。主税は卽時に身支度する。其間に內藏助は殿への內書と、同列兩人（安井、藤井）への意見の狀とを認むる。利兵衞は先づ疾く馳りて松山に行き、其處より早駕を雇うて三津の船場にて小深行の快艇を艤装て待受くる。恁くして主税は其日の暮程に三津濱を船出して、安藝より江戸への二百幾十里の長途を、星夜兼行下向るのである。

此の兼行が果して其効が有たであらうか。話頭は此より前に復つて、彼が江戸着に先だつ彼の松原と安井藤井、乃至灰方大野等が其後の消息を漏すと爲る。

湯島の「梅の木」に於ける松原佐仲は、近者に無い失敗の歷史を其の銚子の口碑に遺したのである。是れが常人とも有るならば、什麼な田樂（二本指の醜名）とて彼樣ほどの味附

を面皮に塗られては、先づは木芽の些少か面目を廝くとも有るべきが、彼は平氣である。其の翌晩も翌々晩も、或る權門の客に誘はれては彼所に出掛けて、彼の老妓初野を侍らしては厭味を云ふ。愚痴を列べる。他の見る目も氣毒といふ程で、酌取る婢子も、連れて來た客も、又か！と辟易するので有るが。彼が氣根の豪さと謂つたら、君を思へば徒跣で車の榻へ九十九夜通つた某少將の確かに其上手を行くに、又た此の老妓初野なるものゝ辛抱の強さと謂ふものは、錦木は千束と朽ちても、今に埃攫が來て拾つて行くよといふ氣色で唾さへ吐掛けぬ。其の唾さへ與れぬ情れ無さの原因因緣は他でも無いので、彼の安井が我への同じ沒情さの疳癪を、彼は此の禿顱に浴せ掛ける、—實際其故である。

厭味も利かぬ。愚痴も受附けぬ。金—其れは出さぬが、威光で脅しても、腕力で壓着けても、劔舞の奥手まで見せても什麼な効驗の無いと云ふ上に、初野が無遠慮は又た手放しで豪い惚氣を云ふ。「拙夫の安井も宜しく」などは朝飯前で、時としては佐仲ならざるも亦た聞流しの、手に懸けでは措き得ぬ言をも嘆く。

佐仲、倩案ずるに、我が此戀の敵は到底も安井である。那奴彥右め、我が面前では好い言を云つて、大夫の御寵姿、甚麼、拙者が、全然の濡衣、其の關繫の無い證人は幾干もご

ざるが、御不審とあらば如何な神文でも。と、甚麼の神文！三文の盲判が聞いて呆るゝ、他を虛氣の盲目に爲た！又た縱令ば、其れが實際濡衣とした處で、彼は我が爲の邪魔物である。邪魔は除かざる可らず、妻敵は討たざる可らず、戀の鋭刃は硏がざる可らず。猫でさへ其の毛嫌はれた復讐の爪は磨いでゐるのに、況や人間をや。と今夜も爪彈かれて散々怒つて、漸やく傍人に和められて、駕に壓込れて搖られて歸宅る途中の夜風に、思はず身慄をして、嚏をしたのが、其が一回ならで三回四回も連續に出たので。あゝ今頃、乃公が事を不好く噂つてる。其れだ。其れに違ひない！と思ふにつけても、遺恨の念は、過飮の嘔氣と共に胸腔から咽喉に衝き上げる。

如何して吳れう喃。那奴彥右衛門！彼奴等が悧囑を倖ひ、思ふ樣金錢を捲き上げて、而して放擲を吃はせるかな。――いや其れでも未だ面白うない。那奴は淺野の家老で居る。――其の淺野の家老ぐるみ引潰して、素奴、素浪人の、編笠一蓋の天竺として與れうかい！

（十四）

慊らぬ戀から松原佐仲は人格相應の惡事を計畫むだ。彼は今回の御馳走役を淺野家に落札して、主人たる內匠殿には些と氣毒ながら此る彥右と主從の緣を結ばれた一期の不運、殿中での落度を爲せて、先づは閉門か減知か蟄居。然して安井を其家から放逐させて、彼の編笠一蓋の天竺浪人。破扇を鳴らして定文句の「翠帳紅閨」の江口の曲を顚聲で謠うて來るのを聞きながら、俺は彼の初野を傍にの、大盃で、「何時の間にかは隔つらむ」の素奴が啼語を酒の饌に爲て與れる、ゝゝ、それ切ての腹癒と云ふものである。可矣々々、心得た。と其の以來は肚裏では「彼奴等」と睨着てゐる安井藤井と殊に心易く酒を飮む。自己が主なる上野殿へは切りに執り持つ。或る時は佐仲紹介で、內匠殿も鐵砲洲から本所相生町の吉良家屋敷へ出向はれて、內々の對面。當日の苞苴は、黃金、白銀、紗綾に縮緬。上州は茶湯が御所好だと云ふので、赤穗家重寶の何やらの天目といふ、銀五貫目の折紙附の名物まで持參せられたので、上野殿父子の喜悅は一通りで無い。

匆速右の天目で茶を點てゝ、上州も子息の左兵衛も「あゝ服心が結構や」との虛世辭を散々。其れから難解らぬ茶湯の講釋から鑒定の自慢話。旋て懷石の膳も出て、中酒となつたが。原來が武骨一邊、如是る遊技には一向に不案內なる內匠殿には、珠光が何者やら、利休が甚麼やら、其れが作とか銘とか云ふ大人國の耳搔めく竹の匙で、安倍川餠の青豆粉ほどにも甘からぬ苦澁き粉を湯に攪立てゝ嚥されて、揚句が甚麼やらむ勝手の知れぬ料理。我が

所好める弓馬槍劔、武道に闘つた肱の張る談等とては一切皆無。癇癖を切らして、氣を悩鬱して、一日三秋の思を做して、不快の極度に辛う〱辭して退られたが、亭主方では此の來訪を至極滿足なるものに思はれて、

「他所からも種々の懇囑はござるがな、御手前樣なは別格じやで、明日にも仰せ付られのこれ有る樣進達申そ。いや營中の義は誠と愚老が隨意じやでの、萬端は御心安うな。又た四品の御所望も其の意得申した。總ては愚老に、愚老に………。」

といふ吉良殿が立掛けの耳語。

果せる哉其の翌々日、殿中よりの奉書到來、内匠頭殿五つ半時の登城で、來る三月、勅使下向の節、接伴—卽ち御馳走役を仰付けられて、難有き旨の御請を爲せられた。其際、諸事は相役伊達左京亮申し合せ、當式惣掛り高家吉良上野介指圖相受け相勤むべき事。との月番老中が口達である。

淺野が江戸家中の多勢は歡喜むだ。就中安井藤井の兩人は、「此からだ」と手を拍た。吉良殿も彼の約束の千兩を他にして、猶ほ折々の人情あるべきを暗算にして怡悦れたが。佐仲のみは内々舌を吐したので、

「見ろ、彦右め、今、吠させるぞ!」

其中に、不快の感に怏々として、心頗ぶる愉まざるは内匠頭殿。其は彼の會見の日に端を啓いて、御式惣掛り吉良上野指圖相受け相勤むべしとの仰渡されの時に勃發し掛けた、例の疳癖。其が原因を討ぬれば、彼れ吉良殿父子主從の人格を看破れた其からである。

苟にも高家筆頭として、四位の少將たる名爵を辱なうせる上野介其人が。彼日の動作たるや甚麼事であらう?全然我が身傍に召仕ふ醫師、茶道、童坊、其等と太だ選ぶところが無いのである。那れが彼の茶の禮式か知らぬが、第一が武士に有るまじき無刀。次には其の應對の卑屈さ、醜汚さ!只願我が贈遺の美を稱揚て、我が意を執るに汲々たる者が其の瞼中に視えて居る。剩さへ彼等は我を玄關まで慌遽しく送り出て、我が乘れる駕の棒にまで其手を懸けた。況んや彼の佐仲なる奴の如きは、土下座する、砂利に匍匐ふ、宛然狗犬である。實に面に唾するだも猶其の穢汚はしきを感ずる奴輩である!

贈賄は士の恥づる所で、請托は君子の卑しむ處。我既に此過を犯して其の汚濁を啜りしは今更ら悔むに効無きも。亦た其を再囘して、身を彼の紛々たる奴輩の中に投ずるに忍びむや。然も上命は那の茶道にも比しき上野めに其の指揮を受けよと云ふ。あゝ之を甚麼と爲

む。彼奴等が手足の下に我身を置くは、恰も犬畜の卑しきに交りて、猶其が命を待つが如きもの、武夫たる內匠に然る事の成るべきか！

彼の緊急たる一轍と謂ふから、殿は其の中心の悶々に責苛まれて、殆んど耐へ難き迄のものに爲つて來られた。

（十　五）

抑も高家なる者の濫觴はと云へば、古い武家制度の講釋めくが、高家、即ち高貴の家門で、土岐と云ひ、六角と云ひ、京極と云ひ、今川と云ひ、其他、畠山、武田、由良、品川、大友等、何れも足利より織田、豐臣、德川氏の初世に至るまでの名門華族で、其の名門の滅亡れたのを取立てられたのが此の高家。然れば祿は千五百石高の寡少いにも關はらず、席は雁間、官位は從五位下の侍從から四位に歴叙つて、少將を其の前途とする。然して其の職務はと問へば、公家武家の中間に立つ取次役。取次役と云へば尙だ聞えは好いのであるが、其實、此の双方の交際を執持つ、露骨に云ふと幇間役で、又た或る意味からは、諸侯が位階昇進の口入宿とも謂ふべきである。

旣に是れ位階が高くて、俸祿の低き、當時で謂ふ「位倒れ」。猶其の職務が高等幇間の兼口

入業と云ふのであるから、高家其人の人格は言はざるも猶は知れたるもの。然れば彼等は、其の已むを得ざる需要からして、金錢の前には恥辱も無い。位階も無い。外聞も他目も無い。彼の吉良殿父子が、內匠殿の獨の棒に手を懸けられたも、式臺で膝を屈められたも、是れを彼の幇間の常態、口入の追從と看れば甚麽の理由も無い。寧ろ其の境遇の憫れむべきに宜しく同情—も克ぬに爲てからが、唯一笑の輕きに附して已むべきもので。況て其れが用人たる松原佐仲！此の泛々たる輩に至りては、土下座を爲やうが、砂利を掴まうが、踊ればとて跳ればとて、只其の猿とも山雀とも看て過かるれば可いので有るものを、其處は發明でも、世味てふを、甘いとも酸いとも辛いとも御存知なき一本素の內匠殿とて、我さへ市朝に撻たるゝが如く恥かしくも、武士に有るまじき所業として腹を立たれた。

とも知らぬ佐仲は異むだ。凡そ此の御馳走役なる者を命せらるれば、其の諸侯は、例として指南番たる高家の公用人を我邸に招待て、謀合せも爲、且つ饗應に其の歡を買はるゝと云ふが本來。然るに今日で五日に經るに未だ其の案内が無い。安井に藤井めも其後は什麽したのやら我を伴出して酒も喫せぬ。怪からん奴！忘却たのかな。其れとも旣う愆う仰せ付ければ此方に用は無いと云ふのかな。然樣した義理では有るまいと云ふ、彼は其の義理の

催促に今日は出掛けた。

彼の光々たる額、便々たる腹で、鐵砲洲の淺野が上屋敷の表門から砂利石を小股に踏むで、内玄關から「物申う」と觸込んで、

「吉良上野介家來松原佐仲、此度の御役に附いて、主人申し付の義がござつて參向致した。安井彦右衛門殿、藤井又左衛門殿、御兩所の中に御意得たい。」

と公然に言ひ入れた。

吉良殿と云へば當家に取つて差向いたる太切の御人、其家の家來衆とあるからは此れ亦た等閑ならぬ客、先づ〳〵と云ふので淺野の給人は、彼れ佐仲を奥書院に案内した。茶が出る、煙草盆が出る、菓子が出る。引續いて右の給人は又た改めて出掛て來て、

「扨早や折角の御入來、處うが生憎くや彦右衛門又左衛門兩人な主用で他行仕りまいたるで、御用の筋ども、留守居彌兵衛が承はりたうと申しよりまする。御都合な如何おざりませう。」

と、赤穗辯で如何にも慇懃だ。

「はゝあ、御兩所とも御他行かな。其れは早や折悪いこと。餘義もござらぬ、其の彌兵衛

殿とかに御逢ひ申さう。」

「は。然らば、暫時。」　と給人は鄭重の會釋して出て去つた。

佐仲、傍邊を眴はすと、此の座敷たる然ばかりの廣間とは無きが、建築の結構、襖障子の華麗さ、流石に藏入豐裕なる富貴の相を床間の掛軸の福祿壽の大幅にも現はして。香盆に花瓶、何れも古代の唐渡の珍奇の器である。

「はゝあ、此幅は雪舟かい。圖柄が些と中だが、其れでも銀二百枚は確かだな。其れに表装が好い。天地は解らぬが、周圍は太閤切だな。—むゝ花瓶、雲鶴だ。此れも無瑕なら金十枚、—はゝ又たお強求かい。」

彼は最う此等を行掛の駄賃に算入して居るのと見える。

（十　六）

待つ間程なく下座の紙襖がさッと拔けて、現た人を見ると佐仲は先づ驚とした。年齡は七十四五、八十にも老らう。頭は白髪で黒き毛髪は些少も無く、肉落ち骨瘦せて宛然仙家の鶴めきたる一個の老翁。其れが唯の仙鶴と有るなら吃驚かぬが、彼が眼光は寧ろ鵰で、厚く白き眉の下から悽愴じく人を射る。皺むだ鐵肱を古松の枯枝ほどに如龜と現は

して、此の餘寒にも綿無の素袷一枚。肩の傷むだ緞子の肩衣、小倉の袴。腰には角鍔、素銅作りの擂木といふ大脇指！其者が惣義齒かと思はれる鬼の齒を剝き出して、

「御手前が松原殿とおざるかな。拙者は當家留守居役、堀部彌兵衞 源 金丸！」

と腕を張て會釋をした。が、會釋で無うて、全然果合の名告のやうだ。然も其聲からして胴魔聲の、膽先にぐッと徹へる。

抑も此は甚麼といふ怪物だらうと、佐仲は少時し呆れて見て居た。何處の阿呆が百人一首の上句取を爲は爲まいし、初對面の口誼に源の金丸！惘れ返つて物が言はれぬ。但し此の擬勢に恐怖れて此儘引込むのも聊か殘念、可矣々々此方も負ずに。と佐仲もなか〳〵茶人である。

「御名告で承知いたした。拙者は三河の東條吉良館の御後裔、從四位下左少將兼上野介義英朝臣が臣下、松原佐仲藤原佐仲。以後懇親に…………。」

遣り返しては見たもの丶、馬鹿々々しくもあれば、好笑くもある、小腹も起て來て、甚麼やら自分が阿呆遇ひにも爲れた心地。對手を見れば、苦笑りとも爲ぬ。

「今日は安井藤井の兩人は、不在とござるかな？」

「他行で御座る。御入來の御用向は甚麼おざるか喃。」

恁う四角四面では懇話も協らぬ。と佐仲は且つ弱り、且つ業も彌煮えて來た。

「他行とあれば致し方も無し。又た貴所とは初對面、御懇話の叶るか叶らぬも存せぬが。然し承はれば當家留守居をお勤めじやとな。御留守居とあらば當地模樣も案內じやらう。凡そ從來の先規として、勅使御馳走役仰せ付られの諸家方では、指南番たる我等方へも使者を越されて、且つ公用人たる拙者式をも御邸へ招かれて、御主人自ら夫れ〴〵の御會釋もあり、種々御心持もこれ有るのが、先づは例。然るに當家に限りては被仰付後今日で五日になるまで梨も礫もじや。勿論、先度は御入來も爲されたが、其れは其の以前の事。肝腎の今日に其の御沙汰もござらぬは如何體の議かと主人甚だ不興せられて、佐仲參つて承はれとの內意と御座るので、態々參向た。

右は、先規、全然御承知とござらぬのか。若くは御承知でも御失念のか。或は他に御所存ばしこれ有てのか。彦右又左兩所には其處の邊、不案內とはおりやらぬ理由じやが、什麼お爲れたのか。貴所からでも可し。屹度御返答、承はらうで！」

と、、、、扇ばッちり！卽て傍の溫茶一碗に其喉を霑して、膝頭を前めた。

恐縮るかと思ひの外、這の老古怪、悧手とも爲ぬのみかは、皺首を左右に掉て、

「心得申はんな。主人内匠頭仰付られには、何樣上野樣御指圖とはお座たさうなが、但し右は殿中での事。御邸へ使者を進らせい。公用人たる御自分共を屋敷へ招け。心持の會釋を爲ろ等、一向御老中樣御口達の表にも見え申さんでな、當方では其等一切、用意とも仕つらぬ。—但し、其の「心持」とは、何樣の義を云はるゝ喃？」

「知れた事！」と佐仲は最う稍燒擂木の目を瞋かして、

「其の指南番！何も知らぬ内匠殿如きに指南を爲る。其の手數たりや何程の事……！」

「では其の手數料、寄越せと云はるゝじや喃？」

源の金丸の翁は、いゝ、いゝあと冷笑つた、

藤原の佐仲の朝臣も、大童だ、

「如何にもで！其を「心持」と我等は申す！」

「然らば、金じやな？」

「勿論の事！」と倘だ咆哮る。

「地體、高家衆と申す御役は、何御職務かな？」

と老人の聲は遽に潜つて、且つ其面も微笑を帶びた。

「えッ？」

「やさ、高家衆の御職務と申すを聞き申す。—高家御役は、謝禮の取て他に禮式の指南をする寺子屋坊主、香茶の師匠と同樣の者とでざるか喃。あゝ、あの上から御戴きやる御知行は、甚麼の爲かな？」

（十七）

高家御職務はと問はれたには、流石の佐仲も辟易した。高家の職務は甚麼である？公武兩間の御取次、勅使下向の際の御饗應役。其の御馳走の元方を命ぜられた大名に儀式萬端の指圖をして、諸事手落無き樣、武家の面皮を虧かざる樣、上樣の御滿足ある樣にと爲るのが卽ち彼れ高家の役。其れが爲に幾千石の祿と云ふのを頂戴して居る。それが内々は兎も角もとして、表向指南料を其の大名から強請る等と其筋の耳朶に立てられたら「役義不相應の取計」との殺度が下つて、「思召有之、御役御免」の痛事は必然來る。其を此の頑爺奴小楯に取りをツて、俺が要求を擯斥つけるか。憎さも憎いが、又た此方からの齒の立て樣も無いのである。

齒の立て樣は無いが、此儘汚目々々指を咬へて引退るのも殘念だ。什麼にか爲て與れう。況て初野が事もある。到底此の屋敷の奴等と行末永久く御懇意をお願ひ申すとも無いのであるから、謂はゞ現下取るのは取得だ。取ぬは非理だ。と彼は其の悄々と引込む器量の醜さより、今日の立前と云ふ方に重きを置いて、哀訴と微笑とを左右にして圖太々々しくも出掛けた。

「御道理！いや然樣御出やられると此方一言も御座らぬがな。其處は其の公の私、所謂る人情と申す奴。はゝはゝ、有り樣、我等の木片高家は恁樣な機會が附目でな、御當家樣如き富貴の御家に御縋り申す、其れで先づ持續が叶るとも申すもの。—殊に又た當方樣でも其樣に情無くなされた御義理とも御座るまい。此度の御役仰付られも、呉々との御依賴からして我等主人が御執持。又た其上にも四品の御所望。其等は安井藤井御兩所が熟く御存知で、貴所も重役と在られる以上は御承知無いともござるまい。なあ、何事も詠と歟、世の中は秕相持じや。で、何か其處をな。是非………。」

其の言狀たる、淺草の溜から來るてふ松右衛門なる乞食を依然だから、彌兵衛も呆れて。抑も此れが武士で有るのか、非人のか、何樣這般な者を對手に爲れては殿の御腹を立れる

のも、彦左又左が御前不首尾と爲つたるも道理だ。と熟々と其面のみを凝視てゐると。其れを對手は又た、吾れ說得たりとも思つたのか、

「申し難ねたが、時分とござるで、御有合の掛合を………。」と又も哀訴だ。

彼は酒飯を振舞へと云ふのである。然し、是れは武士の法として、乞ふも恥づべき義と無いので、彌兵衛は心得て其を齎來らせた。

「此は御造作な。」と佐仲は大盞で仰飮り附る。醉て強奪らうとの肚でも在るらしい。

「なあ御老體、如何でござらう。唯今の悃願うた趣意物は。—御指南料の、心持のと申したは我等が申し損じとして、平たく打破つた處で其の御助勢は……？」

と、這回は些と强談的。

「主人內意は、—四品の義な申すも更で、當御役も、御免の願うと申し居らるゝじや……。」

「やア?!」と彼は吃驚いた。

「で、では御役御辭退？詰らんじや御座らんか。那程の御配慮で、又那程の御入費を掛られて、蚫蜂取らず……！」

「蚫蜂は取いでも、恥辱の目は取り申されぬじや、辭退とあれば！—又た眞正の恥を知る

武士とござれば、怎樣の御役は勤まらぬでの…………。」

「むう！」 と、佐仲が腕は組れた。

「勤まらぬ！—其の勤らぬは御勝手として。拙者への千兩、主人への千兩の約束は什麼なさる？」 と既う是れ純然たる豪盜的！

「誰が然樣の約束いたいた？」

「安井と藤井………！」

「はゝ其りや兩人が勝手に約束を申したじやろ。—當人共で…………。」

「いや當人共で無い。内匠殿も承知の筈！殿に逢はう！ 殿を此席へ出し召され!!」

「呀、甚麼じやと云ふ！」 と、彼の鵰の眼と古松の肱とは、變異い光輝と危險い形狀を見せて來た。雖然も敵手も乘り掛つた船。

「五萬石でも大名たる者の口から出た言が反古にや爲るまい！貴公等如きの人間じや分解んから殿を出せ！松原佐仲、内匠頭に直談判せう!!」

酒には醉て來た。然も其酒は彼の酣い。酣い酒と、失望と、業腹とが混亂したから彼は前後錯雜に愬うは啣いたも、生醉は猶且本性差違ず、彌兵衛が拳頭の彼の大脇指に懸りかけたを見て、此は！と驚とした。命が物種、卽ぐ逃やうかと思ひは爲たものゝ、其も殘念。何物をか？と彼の下々の下司根性から、

「貰ッて行くぞ！」

過刻から目を着てゐた雪舟の大幅。其が欲いが、嵩張り物だから、儘よ！と靑磁の彼の雲鶴瓶を引攫つた。

「やッ盜人！」

什麼が溜らう、老人の手が其肩頭に懸ると見るや、佐仲が軀體は宙を舞つて、障子を破つて、庭石に頭顚倒！抱いた花瓶は、瓦羅利と毀れる。其物音に、いゝ、いゝ、ちゆッと鳴て、ぱッと起つたは、折柄其處に餌を啄つてゐた、鶺鴒であつた。

（十 八）

佐仲は出掛に上野殿御父子へも耳打をした。「晩には好いお土產を持て來て上げられませう。へゝゝゝ。」

豈夫に然樣も云ふまいけれども、意味は正しく其れで有るので、駄々子が宿下り乳母の其の歸宅を待つが如くに。土產とは甚麼であらう？金銀かな、反物かな、茶器かな、馬鞍か

な？其は何物でも可いのである。出入の呉服屋、骨董舖、伯樂、其等が見て引取價段を貴く買て行く物品なら夏の小袖、冬の帷子、勿論難有い。猫の糞でも犬の死骸でも一切管はぬ。牛溲馬勃敗鼓之皮、收めて以て金に爲るのが我家の良であるから、あゝ待たれる！其の良臣の佐仲が歸邸が。

「父上、遲いでは御座りませぬか、最うこれ日暮でござりまする。」　と左兵衛は仰いでは緣側の晷脚を見、俯しては時計の針を覗かれる。

「然ればのう、待たする喃。—いや然し遲いが花じや。櫻でも牡丹でも名花ほど遲う咲きよるは。其れに彼者が辯口、又た種々の甘い言云うて彼方を歡ばせて、其上で多分の物品を占領て歸る。—先ず氣長う待つが好い。」

上野殿は銀の手爐を撫で回されて、其火で一服、香を聞くと國府の一本煮、某家の人情とは問でも知れる。

「何れ馳走と存じまするが。——然し好う氣張りまするな。從前には無い程の例とござります。」　と子息は嬉笑ふ。

「勿論、好い口じや。赤穗は表高五萬石でも內々は十萬石餘で、殊には安藝が控へて居る。

其には又は四品の那羨で喃、旁潑みやるが。先づは恁樣な財口でも無うては此方共がじや。は、、、、。」

愉快氣な阿父樣の微笑も出る。

「先度の天目は如何ござります？」

「む、好作の。唯だ時代が些と若いが、元末明初かな。海鼠の工合も申し分無し。五貫目の價値は無いが、三貫目は確かじやらう。—那品をの、本鄕へ賣附るのじや………。」

「へゝえ、那館へ？」

「過日、數寄屋の道順め（御數寄屋坊主？）が些と申した。天目の佳いのがと。—で、那器を那家へ鬻る。な。小判二包（二百兩）なら憎うも有るまい。些少と利潤じや。」

「好話ですなあ。其れにや彼儘では些と。—荒浪の銘箱に入れましては………。」

「勿論じや。俺も彼の空箱から思ひ着たので。寸も大概合ひますのじや。」

四位の左少將殿御手許が、恁麼詐欺物の問屋であるとは、實際驚愕くが。又た實際彼が庫裏の富てふものは、恁う云ふ理由の罪惡の塊で積累れたのだ。

「天目は右で片附ませうが、那の四品の寸法は什麼でござります？鉗込られまするかな。」

と、　子息は流石に心配の面色。其れを倚弱しと云ふ樣にはゝゝゝ、はッはッと嘲笑て、

「何ぉ言やるぞい、外樣の分家が侍從になつて、式日に黒袍が着られうかい。暗算にも……

……。」

と、此の頭目紛盞には左兵衛も魂消た。

「ぢや、猶且、御手加減で？」

「應さ、其餌を播ぬけりや魚は寄ぬじやで。御身も今後も有る事じや。」

「へゝえ！」　と左兵衛は感服した。何樣此の富を造るに方を選ばず、唯是れ巧悧の手段を競ふ父が敎訓は、後學の爲と云ふより寧ろ無限の趣味を感ずる、「へゝえ」も「へゝえ」、其の「今後」の其先は如何なる微妙の法談かあるか、其れを聽聞むと躬を摺寄せる、時も其時！

茶道の一人は慌遽しく駈て來て、事有り氣に手を支へる。其後から又一人。三人目には彼の本人の松原佐仲。額上には膏藥、腕には白布、近習の若侍に腰を推されて、

「御前樣ァ！」

泣くが如き聲音を出しながら丁々と來て平然と坐る。

個は什麽、と度膽を拔れた左兵衛より、上州は氣も半亂と駈寄つて、

「佐仲、佐仲！如何—如何した?!」

「御、御前樣！佐仲、手籠に遇ひました。淺、淺野家來の畜生奴等…………！」

罵うかと思ふと、佐仲は泣出した。

待に待たれし其が齎らせし土產や什麽？でん〳〵太鼓の皮ほどに撲俛されし頭の瘤、笙の笛とぞ聞ゆる哀れなる彼が啣言。始終を聞れた上州も左兵衛も、小豆飯に魚どころかは、ゝゝ、ぐッと嚥下むだ鹽握飯の痞塞し如くに、唯目をのみ白黒された。

（十九）

彌兵衛が口から彼の始末を聞かれて、内匠殿が頃日の餾飲も稍降つたのである。

「好う致した。上野めも其の佐仲奴から委細を聞かば些と懲るゝであらう。好う爲て取せた。右に就けても心得方の然で無いは彥右と又左めじや。彼等へは嚴しう申し附け。又た予は、此度の御役御免を老中方へ進達せう。——四品の所望など、あゝ無用の義で有つた。」

此の御心が今二月前附いたと有つたら、淺野家は長久。泰平の御代の繁榮を壽ぐ松の御廊

下を血にも汚さず、堅氷の竃を太刀先に碎く雪の白無垢を朱にも染させず、百世の慘事として泉岳寺畔、累々たる四十七基の石塔婆に老幼の涙をも濺がせずに濟むだであらうに。其れが所謂る一頭の馬、かくべからざる企望を四品の黒袍に懸けられた心の狂ひから、國破れて山河亦た共に空し。運と謂うか、命と謂うか、抑も人か。否な蟲だ。其れは俗に謂ふ獅子身中の蟲。彼の襄に人外の人非人として讀者にも告げた、安井彦右衛門と藤井又左衛門、其奴に一味の大野九郎兵衛。此等の蟲群が、一つは殿の性根を嚙むで、赤穗の家の土臺を蝕らして、折角の礎石たる大石を有るか無しにして、私慾を働らく。遠く起因を尋求れば則ち其者なのだ。

明瞭に其蟲とは未だ目は着けられぬが、彼の吉良殿との會見以來、怪からぬ者として内匠殿の苛い不興、御前太だ不首尾となつたる安井藤井は、此日は實に藝州家、其他へ、猶ほ當御役の内相談として出向いたのである。歸宅て見ると、此の騷動。彼等は聞くなり唯膽を潰して御前へ飛で出た。口も吃れば色さへ蒼褪て、

「御前、御、御前、承はりますれば今日、本所より、佐仲、御邸へ見えましたとな！」

殿は彌兵衛を御相手に、彼の佐仲退治の快談を餚に、今や一盞を傾けられたる其の所。

「兩人か。――如何にも今日那奴めが來た。」

「承はれば。何か口論ばし――粗暴な義共もござりました歟に………。」

「うむ、那奴か。ありや盜人じやぞ。仍て彌兵衛が盜人扱ひに爲た！」

御鼻息は頗る御荒い。兩人は此の猛勢に恐縮して。我身の上すら危殆れて、更に眼を竊むで彌兵衛を視ると。這奴、柴又の帝釋ほどに鯱張つて居る。

「右につき、兩人、悄と、内分の義を伺ひたう御座ります。――御人拂の上、猶ほ御酒盃を暫時御控への程………。」

不處存者とは疾視まれても、家老は家老。其職に對しての言上と有る以上は無下にも爲られぬので、殿。

「むゝ、人拂？――衆、遠慮せい。但し彌兵衛は居れ。――又た酒盃は苦しうない、身が持藥じやぞ。」

大盞は益 御唇に觸れる。

此時は宵とは云へど早や戌刻。二月下旬の風猶寒きに、殿は御酒氣で且つ大火鉢を抱へて居られるから御寒じも無からうが、今來た兩個は火氣も無い獨の内に搖撼れて、陸尺が踏

む薄氷のぱり〻〻と云ふ音を聞ながら、空腹で歸宅た儘の、いとゞ寒さを彌増す處を又た此の御廣座敷へ出たのである。例もであれば、手焙も御免。彦右は飮る口じやから一盃喫め。又左は飮らぬが熱茶なと遣はせとも有るものを、頃日の不首尾で其麼御意も無い。況て今夜は其の不首尾の原因の松原佐仲が不間を働いた其後と云ふのであるから、冷酒一盃、温茶一碗、下さらぬのは是非も無いが、然ればとて御自分樣のみは好い御機嫌の、温かさうな御顏をして被爲入て。寒からうとも、空たらうとも。此方の腹の蟲にも御恕念の無いは、主ながらも恨しくも、情無くも有る。

と、憖ら彼等は肚裏では嘟語てゐる。處へ平日から極交惡の、頑固爺の、殊には今日の敵手方。謂はゞ我が計畫の仇敵たる彌兵衛めが胴魔聲。

「御兩所、疾う、殿樣御待兼とおざらしやるじやは！」

此言が兩人の、又いゝ、と癪に觸つた。

「控へさッしやい！——聞けば佐仲へ手強ゐ爲れたも御自分じやとな。地體、佐仲、彼者が身分を什麼思はッしやる！」

「盜人じや。はゝ姦盜じや。唯今も御意の其姦盜の身分と有るから此方も其れ相當の成敗して遣り申したじや。」

「姦盜とて、彼は床間の御花瓶を、貰うて行くとて抱へたとか申すじやな。こりや酒興の餘り、醉ての戯爲、世間にも往々有り内の事、其れを然樣な手籠をお爲る。こりや上野殿御面へ泥を塗らるゝ同然じやが、計ひ樣も有るべきを、餘りの仕向方、年甲斐もござらぬお始末じや。」

（二十）

年甲斐も無いと云はれて、彌兵衛老人勃氣に怒つた。

「怪からん！酒興の甚麽のと、御床にある花瓶を攫つて其が盜賊に相成らんか。盜賊は捉ゆれば斬るが法、活て還したは寛大の義じや。」

「いや其れが間違、高家衆など云ふ者は…………。」

と安井が出るのを。

「高家の者は盜人かッ？」

と、殿も同じく咆哮られた。

「然樣にはござりませぬと、彼衆はな、皆な苞苴、彼の袖下と申すので生活き居られます

る。然ればこそ殿樣にも過日御出向せで種々御進ぜられの御品も御座りました程の事。箇樣の始末は右申す有り內の義で。其を彌兵衛如くに一々咎め立致しましては、第一、御役が相成りませぬ。」

惡功の藤井は言巧みに、或は和め、或は佐仲を辯護した。辯護するのは卽ち自己が利益を計るので、其には倔强の證據とあるから先日の贈遣の事まで言ひ出した。殿は磕地と。

「ぢやから予は辭退と決心た！」

「いや其りや相成りませぬ義で。」　と安井は入れ代る。

「何故成らぬ？」

「今日は二月廿六日、勅使御下向の三月初旬には最早や十日の前後より外御座りませぬ。唯今に至りて御辭退など、協りませぬ義で。」

「協ぬと云うても予が病氣じやと申せば其迄じや……。」

「否や、」　と藤井は又た伸張り出して。

「其れこそ御大事で、間違はゞ御家名にも關はります。いや其りや到底が協しやれませぬ事。」

其れは或は然樣かも知れぬ。御城では奥も表も、桂昌院殿從一位の宣下と云ふので、目出度い〳〵と颯々き渡つて、此の勅使兩卿には、成るが以上にも成る程の御馳走をと云ふ其の端へ、饗應役の內匠頭殿御役辭退。然も其の御免願が假病だ等ゝ露顯た日には、それこそ大變。半知か改易か、本人の永蟄居位ゐは甚麼でも無い。實に淺野家御一大事と、藤井か開き直つたのも道理である。

「では、如何致す？」

と、殿も些と弱く爲られた。占得了！といふのは兩人の面。

「さ、其義ゝ——御人拂の上、兩人、熟と御內意を伺ひたうと申すもの其等に御座ります唯今に至り然樣の御意遊ばせばとて右通りに相成りませぬは知れたる御義。然すれば矢張り上州樣御指圖に御附なされて此の御役、滯りなく御勤め仕舞と申すより外は御座りますまい。然るに、其の御依賴せに相成りまする彼方樣御使の佐仲を、右樣手强な目に御遇はせなされて、如何此義を遊ばしまする御料見にござります。下世話にも憎い鷹には餌を飼へ！假令佐仲、同樣不束を致せばとても大事の前の小事、若し此義上州樣御腹立にて、殿中にても御復讐ども御座りましたりや什麼こざりませう。御屋敷でこそ私共御側にも居り

ますする、營中にては唯だ御一人、抑も御前には其砌に什麽遊ばしますす？」

「むう、然らば如何致す……。」

「御餘義も御座りませぬ、御和睦、――彌兵衛には氣毒ながら切腹致させて、彼家へ御謝罪。――なあ彥右。」と、藤井は目授した。

「やあ協らぬ！」と殿は御肱の曲彔を遽に擊れて、

「協ぬ〳〵！身が如何に難義すればとて咎も無き家來――彌兵衛に切腹さする等以ての外な！――今日の事根に持て、上野奴、予を恨んで、予が家斷絕にも及ぶとなりや其迄じゃ！協らぬ事！」

兩人は此の御氣色に再び吃驚いて口を噤むだ。彌兵衛はと見れば、彼の鯱張つたる軀を倒して御前も憚からずわいゝッと泣く。殿は其等を睨囘して、益目を睜られる。

愁る處へ近習の一人、一間を隔た御次からして、

「申上げます、灰方藤兵衛。唯今歸着、大野軍右衛門同道にござります。」

（二十一）

灰方藤兵衛と大野軍右衛門、唯今歸着の旅裝を其儘で、御召に依て内匠殿の御前へ出た。

出て畏まつて其座の容子を窺ふと。甚麼やら知ぬが殿は殊の外なる御息卷。紛々たる酒氣當るべからずと云ふ氣色であるのに、老人の彌兵衛は聲を放つておいおい〳〵號泣て居る。我が親分と賴む安井藤井は只顧恐縮の容體を作して、兀然と手を束ねて居る。甚麼だか解らぬ。解らぬが何れ平事では無いので有らう。箇樣な時は餘り御鼻息の眞面ならぬ場所へ差控ゆるが專一。と兩人、遙か末座の片隅に平伏すると。

「軍右衛門、藤兵衛。參れ。――や、何を遲疑――近う進めッ！」

彼等は土壇場に引出だされた。其處で恐づ〳〵、

「御前樣御機嫌の體を拜しまして、私共恐悅至極……。」

「いや機嫌好う無いぞ。――國許では甚麼と爲た！」

「九郎兵衛、申上とござります。御馳走役御願はれの義如何にも御尤。右につき御入費の段な御國許にて如何樣とも用辨の仕りませう。先づ差向まして金六千兩、送達の仕ります。と愼樣の口狀で……。」

「其の金子警護として軍右衛門も參つたか。」

「御意通りに御座ります。御金奉行の伊介、重病とござりますので、私、其の名代に……。」

「うむ大儀。――口狀は其れ計りか。」

些少は御機嫌も愈つた體で御言葉も稍落着いて來た。其れは六千兩の金銀が來たので。然らば其金で、と弱いが御思案も出たのである。

實に殿が此時の御肚裏と云ふものは、紛糾錯雜で、前面に一歩、後面に一歩。踏跙と謂うのか、逡巡と謂うのか。御役は勤めたくも在せらるゝが、醜穢はしき上野連には其頭を下げたうも無し。で、是非なく御免を願うと爲らるれば、大事な御家名に瑕ると云ふ。所謂る板搾の血を吐く苦惱！仍で清水の舞臺といふから地獄の釜へも飛び込む御氣で、幸ひの今着た金子で、殘念だが上野の面を粘り、佐仲への膏藥代をも多分に與せて、唯だ其の御饗應當日だけを無事。愆て御用を濟せたならば、武士に有るまじき鄙猥き行爲をしたる身の過を吾と延きて、弟の大學を家督に。予は隱居。清泉に汚腸を滌つて、皎月に濁氣を呴いて花と鳥とを半生の侶。あゝ其事じや。

分別も爾く決着たので、彼の熱腸を衝上ぐる如き怒氣てふものも幾分か其の炎焰を降下て。殿は稍其の平日の殿に復つて來られた。

素敏い安井は愆くと見るより、

「藤兵衛、口狀の外の、御請書は？」

藤井も與に目授をするので、

「は、御座ります。九郎兵衛、御請書………、」

「覽せい。甚麽じや。」

「は。」　と藤兵衛は首懸の彼の革狀箱から取出したのだが、彼は其實未だ突掬て居る。燭火は遠い。剩さへ些と近眼と來てゐる。一通と思ひの外なる、彼の請書と共に九郎兵衛が安井藤井の兩人への內書と云ふをも、重疊た儘で、無慘やな御手許へ出したので………

………。

「むう、內書！――內書とは？」　と殿は口裏で呟かれたが、其は一同へは通じ無かつた。

「ふう？」　と封緘押切て、讀み下される。――突然として變つたのは其御面色！

「彥、彥右又左藤兵軍右！――う、汝等此、此りや甚麽じやッ!!」

足下よりの禽どころで無い、火山勃發して巖石蜜粉、紫電空に迸つて黃風地を捲くの猛勢！手近に居た藤井が領髮を掻擢まれて、有合ふ扇で其の兀たる禿顱を隆々々！

「彌兵衛。素奴等引縛れッ!!」

蒼くも赤くも、彼等が面は皆蔭煙に紛れて、五色混淆せる灰色と悉是變つた。其中に纔に手を扛たのは彦右衛門、

「こりや御無體。私ども、何御咎!!」

「言うなッ盜人!——彌兵衛、其の書面、ソレ讀上げい!」

「いや暫時く。主税、唯今其席へ出まして申上げたい理由が御座ります。」

づかづかと御次間から趨り出たのは、同じく今着いた大石主税!

(二十二)

大石主税、今年十五の古今の美少年。内匠殿も彼をば特に可愛き者に思し召れて、父の内藏助には御疎遠であるが、悴の彼へは倒つて折節の御消息もある。時としては百五十里の遠路を隔てゝも、珍しき品が手に入た抔と、脇指の小柄、目貫、印籠の類。彼は書を見事に書ればとて、筆墨短冊等をも御使の序には下させられる。先づは御實弟の大學殿同樣の御待遇。思へば思はるゝの俚諺で、主税も殿をば主とも兄とも、嬉しくも辱ない御方として、此殿の爲ならばと命賭の海をも航つて、猶身の疲勞の愈ざる中に、二百幾十里の長途を一刻も疾くと驅らせたが、天の君に祐せざるは彼の暴風雨。彼は此の暴風雨の爲に安藝では西條川、沼田川。備後の葦田川。備中の大川、河邊川。岡山の西大川、東大川——と書立てると、長唄の山盡しでは無い、道中記の川盡しめくが、實に其等の川々を初めとして、揖保川、加古川、兵庫の生田、尼が崎の武庫川等ど、其他平日は名も知られぬ潺湲流れの小川ですらが、逆卷く濁浪兩岸を浸して、人の背も馬の蹄も立たぬと云ふに、其處では二日、此處では三日、激甚しきは五日六日、十日と迄も悶搔き足を停められて、正月二十二日に安藝の小深を發たものが、今日は二月の二十六日、——三十五日目に江戸著したのである。

此間の困苦も、艱難も、思ひ窶れる計りに氣を焦み燥つた事も、御話申せば長いであるが、那麼閒言を今語つて居いれる場合で無い此の始末。手討とも有りさうな氣色であるから、主税は慌忙て、

「殿樣。まゝ暫く暫く。如何樣な落度御座りませうとも御名代をも勤めまする彦右殿、又左殿。御手からの御成敗は餘りの御義に御座ります。」　と身をもて隔離た。

此の仲裁に出られては、巖をも碎かむ殿が御拳頭も、其の暴濤が一壺の油に撞着た如くに

稍婉々と。――雖然も御呼吸は尚だ大蜿りに蜿つてゐる。

「主税。甚麽じやとて來た？」

「父が使で出まして御座ります。――殿樣、御馳走の御役は？」

「這奴等に騙かされて役と成つたは！其、其事、今知れたるで………。」

遺恨の御拳は猶ほ顫々と震へて居るのを、主税は辛くに以前の御座に押直し進らせて。扨て其の殿が御折檻の謂由から、惡事露顯の顚末を承はると、彼の內書の齟齬。-主税、これ見よ！」と抛げ出される九郎兵衛が諜合の手紙を取上げると。

「聲高う其座で讀め！」

「は。」

「讀め、讀め。讀で聞かせい！汝等、九郎兵衛奴と諜じ合せて。彥右又左奴兩人は當地に在つて予が手許の金子、國許から參る金子をも入費々々と申し立てゝ橫領する！九郎兵衛めは國許で役目の入用多分々々と申し觸いて、領民から段別の課役を取る！其の課役錢をめ金庫へは納いで三人で割賦する！其等の談合に藤兵衛と同道させて軍右を越いた！今回の六千兩も、名旨のみで內實は三千兩！右餘は千兩宛三人で分奪ると云ふ迄をも認めをッた！ちゝゝッ三人の畜生！狗鼠!!惡魔!!!其の面皮、引剝いでも飽不足ぬッ！」

殿は猶ほ遣る方もなき腹立に逼られてか、召された羽織も彼の扇も、寸斷に、滅理々々に引裂き棄られて、再び洶湧る無念の忿怒、血迸る眼に御憤涙をすら潸然と流されたのが、理り切て哀れと見えたので、主税も落涙、

「一々御道理とござりまする。但し恁樣な義も御座りませうかと、父義も苛う心痛致して私義を差立てました。此に呈書が御座りまする。御成敗は姑く擱れて、先づ御覽の程………。」

と、主税は謹むで其を御前に置く。

此間の彌兵衛が巨眼は、彼等四人が面上に注がれて、すゝ、すッとも云はゞ卽ぐ攫み拉がむの其の見脈。畏縮み上つたる彥右衛門等は猫の前なる鼠の體、一刻後の身の運命のみ案じ詫て我知ずに出るものは念佛と、扨は冷汗。

（二十三）

內藏助の意見書には甚麽事を認めたか、殿は一應御披見の後、噫乎！との御歎息、腕さへ組れて、

「惡かつた、予は。――内藏、容認て吳りやれよ。――主稅、委細は其方が口狀にとある。何事を承はり參つたか。」

悄々たる御氣色、後悔か、慚愧か、不覺の御涙さへ愈御袖に餘ると見えたので。

「難有き御意。父内藏助承はり及びましたりや如何計りの歡喜に御座りませう。――右、私へ申し聞けましたる口狀は、唯、御堪忍！其れのみに御座ります。何事も唯だ此際は御胸に忍ばせられまして………。」

「然樣申したか。面目無い。予は實に内藏が云ふ、性急じや。あゝ、一途であつた。――書面にも有る、外樣大名が分家の分として四位の侍從など、先例も有らぬ事。如是る非望を企つるは其家の先祖が祀を絕ち、姦邪の小人に魅られて、其身を失ひ、世の笑を招くと云ふに止まる歟。但し此の書面到着の折、右の御馳走役被仰付これ無くば重疊の事。若し既に被仰付後とあらば、唯だ神妙に諸事相勤めて、指南役上野介が憎惡を買はず、先年の龜井隱岐が不幸の二の舞を爲ざる樣、幾重にも、右の堪忍をと云うてある。誠に百里の遠方に居て予が眼前にあるを見る樣じやはよ。――彌兵衛、此の書面の見よ。」

「眞實、一言の御座りませぬ。彌兵衛め、誠に匆速りまいた。」と老人も俄に悄化返る。

此で一座は忽地無言。殿も當面の思案に暮れられる。彌兵衛も前途の始末を案ずる。安井等四人も尙だ身の運命の善惡が決定ぬのに、自個が首の繫がるべきか否やが不安心ので、肚裏での動悸と云ふものは一通りで無い。其苦し紛れから案じ出したのが、藤井の一策、

「恐れながら又左衛門申し上げまする。段々との御理解、御折檻まで戴きまして一同身も世も在れませず、天罰の恐ろしさを覺悟致したに就ましては、何卒や御謝罪の一功を立て、殿樣御安意の成りまする樣にもと存じ居りまする。――主稅殿、彌兵衛殿、此義御兩所からも喃う、何卒御執持………。」　と、彼は只願に額を疊。泣くのである。

涙はぽろ〳〵と飜して居るが、其が果然悔悟の滴露やら、但しは廊下で舌を吐す其の同類の唾の垂溜やら判然ぬので、彌兵衛も主稅も迂濶とはと差控へて凝視て居ると。彼が尾に接いた安井に藤兵衛、軍右衛門も一度に頭を擡げて。御謝罪の功を、一手柄をと、哀訴に歎願。是非に〳〵と、其聲たるや幽鬼の墓所に集鳴くに髣髴てゐる。

「其方等は、甚麼と爲る意じや。」

其意が彼等の又た言ひさうなもの。當座の一命をだに御預け下さらば、四人一同、明朝早速彼の本所の屋敷へ出向き、手の甲を足で摺ても上州へ賴み、佐仲を和め、殿樣無二の御

味方として此の御役首尾好く御勤の成りまする様、神文に誓詞、牛王に血判。双刀の手前にも、氏神の寳前にも誓詞を立てゝ、屹度爲遂げて御目に掛けると云ふ、其に更らく僞りの無い證據としては、父母妻子親族までをも人質として差上げますると。早や軍右衛門に藤兵衛は鼻紙に起請を書いて、痛い爪を引剝がして血判迄もして、安井に藤井共々に御前に差出した。

「其方等、眞實此書に相違は無いか。」

今の諫言の堪忍と云ふのを、又た一途に守らうと爲られた一途の殿は、同じく一途に彼等の口狀を頼洸しきものに思し召れて、其れが彌縫に一任し様かの御心も自から着いて來た。

遣る瀨の無いとは恁麼事！

（二十四）

御許容は出たのである。翌朝彼等は四人連立つて、鐵砲洲の上屋敷から本所の吉良殿が住居へ出向いた。

噫、是れを什麼何と謂うか。其國の將に滅むとし、其家の敗れむとする時には得て恁う云ふ者が出て、事を謬る。漢家を簒奪う曹瞞も無いでは無いが、猶ほ勝賴を欺く跡部長坂小

山田の族が、好い事を言つて、君聽を蠱惑して、跡は野となれ自分一個を大事の者にして、彌との場合に後足で砂を蹴附ける。然も結句は共倒！是れを其迹から觀ると、其愚や及ぶべからざる如くであるが、彼の局に當る者は迷ふ、盗に鑰を借すの拙劣は古今を通じ、內外を俱にして往々にして之を見る、豈獨り此の內匠殿のみを尤んや。では有るが唯驚くのは、彼四人が爲す儘と云ふのに一任て、其の鑒察をさへ副へられぬ、其れが大膽さ！彌兵衛は、成る程佐仲とが喧嘩の本人、此は彼の屋敷へ遣れぬでもあらうが、其には倖ひの主稅が居る。彼は佐仲とは知らず知れぬ其交で、此れ程適當な人間は無い。殊に當人も行うと言ふ、其をも殿は猶ほ無用と禁止められた。其意に謂へらく、彼の上野は愛童の癖がある。先日も酒興の紛れに。貴所が手許に艶治き小性の心悧きたるも有るならば一個を惠まれよ、老人が足腰の撫で摩り、寢覺の物語の伽にも爲む、無心を爲た。此際彼を彼處に遣らば卽ぐ引止められて、思はざる彼に憂目を見せむ、可哀き事。といふのが其の肚裏で、

「苦しう無い、四人で參れ。」

爰で四人は放囚人。凡そ天下に離かるべき者の無い鐵鎖の脫れた猿であるから、木登り、

盗食ひ、甚麼を爲樣と其は勝手である。

「驚いたな昨夜は。え。甚麼と云ふ馬鹿な目と云ふよりは、藤兵衞、貴公が鈍痴さ加減には呆れて仕舞うぞ。旣でに首だッた………。」

彥右衞門が先づ口を啓くと、軍右衞門はペッと唾をして、

「戲談じや無い。三年が壽命は確に短縮つた。其の短縮めた命を生爪一枚で今日だけ助かつたが。又左、貴老は甚麼と思うな。此の結局は？」

此こそ彼等が甚麼よりも先に諮謀むとする緊急の問題。卽ち今日の四人連立ての出馬と云ふも、某る側からは其を意味するのぞ。問れた藤井は警告の咳拂を一つ與へた。

「靜にッ。——他事よりは我上じや。貴公等、藤兵衞が事を兎角と云ふが、其樣な義をむざくと。——家來共も居るでは無いか。」

兩人は首を龜縮めた。「あゝ寒い！」

「何しろ寒い。此の寒さの此の朝腹に、兩國を渡つて那邸まで行つて、——妙でも無いな。些と息休うかな………。」

藤井は意有り氣に看回すと。眞先に首肯いたのが安井で、

「至極、至極。——些と遠方だが、又た彼の家かな。」

「いや緣喜が惡い。」と藤井は首を掉る。

「惡くても野田の話もなりやしよまいがで、依樣彼家さ。貴老は棄花で我々は熱い酣、飮かけ山の山分話を緩々と願うと爲やうじや無いか。——それに軍右に藤兵か。可哀想に到着てから未だ江戶の酒味も知るめえ。埋寃は埋寃、人情は人情、一杯振舞て昨夜の虫納を爲せるのも御功德でです。諸事我々が執計ひと云ふにお任せなさい。」

と彥右衞門は八丁堀から、大川の方へは向はず、柳原の方へとずんく行く。

大槪の意は察したも、其れでも未だ幾分か正直な所のある藤兵衞は、

「もし、御家老。飮むのも可えが、彼方を終つてからに爲されては………。」

「おい、最う家老名目は廢て吳れ。今日から五一三六の御夥伴だよ。ヘン賴むせ、大將。」

「いや其れでも御用と云ふが………。」

「謝罪た擧句に間違へば首を斬られる、那樣割合の好い御用と云ふが勤まるかい。貴公も緊乎腹を決るさ。持て來た三千兩は手にあるだらう。那金を臀喰へ觀音の賽錢にして、隨德寺の喰殿建立の奉加にするのよ。其等は今寬々と御意得ます。まア悔々せずに來るとす

るのさ。」

（二十五）

話頭は吉良殿の方へ轉換て。上州父子も松原佐仲も、淺野家からの謝罪使と云ふのが來るかくと待構へて居た。昨日、彼の苛酷き目に遇せたのは全く留守居の彌兵衞とか云ふ國侍の頑固からの所爲で、江戸馴た安井藤井等の大概は知らぬ事。彼等歸邸らば肝を潰して、蜂に螫れた泣面乘げて謝罪つても來やう。來たらば散々窘責め附けて、其の謝罪料が金百兩かな。庭石へ投附けられて、頭や額に瘤を出來して、門前から突放された、器量は太だ惡いのであるが、其れが又た其の寡少からぬ膏藥代の原資と思へば、痛事決して痛からぬかい。はゝはゝ、殿樣、佐仲働き振は如何なものでござります。什麼にも其方が功名は一番鎗にも相當るな、殊には異額疵、名譽の義じや。と翌朝は主從、朝茶の心にも心嬉しくて、五時前の鳥影にも緣喜が祝はれて「御客」と叫ふ聲を今かと。「物申う」と訪ふ案内をも其れかと。待たがく、四時過まで、使者も來ねば、安井藤井等も其影を見せぬ。唯だ幻形の樣に目先に散つくのは、己が意中に畫いてゐる百兩の熨斗包！

「御前、如何致したのでござりませう？」

と佐仲は泣聲を出して訴認に及べば。

「然ればのう。」

と、上野殿も不興至極の思案煙草を脂下られる。

「父上、催促の使遣りましては？」

左兵衞殿も氣が氣で無い。

然う云ふ間に九時の時計が、ちんくく。

「こりや彌來ぬ喃?!」

上野殿は御面色が變る。——甚麼が來るものか、安井や藤井は今例の家と云ふ湯島の茶屋かで、彼の三千兩の山分の相談をして居る最中のだ。

「おや私の面を踏附に、——否や瘤の出來し放しに爲たのでです喃！」

と今回は佐仲も眞實の口惜し淚。

「父上、餘りの事でござります。私、自身參りませうか？」

と左兵衞も勃氣に逸り立たれる。

「いや、待て。」

と、天井を睨み詰られた上野殿、良多時して、

「可矣！彼が彼ならば此方にも其の料見がある。――供をと申せ！」

佐仲は其の容易ならざる氣色に吃驚いた。

「何方へ今から成しやれます？」

「登城を爲る！」

「えッ御登城？」　と左兵衛も摺倚ると。

「むゝ老中方に逢うて進達する。――内匠頭、此程參つて、此度の御役御褒美として四位の侍從を執持てと強て申したが、然る先例は無いと刎附けた。――いゝ、すると昨日當方用役の一人を招いて、是非に先度の義を執奏せられたい、右前以ての謝儀としてと金子何程かを差出したを辭退したれば。有るべき事か。果には强勢に押募つて難義の申し掛け、口論に事托せ散々の打擲に及むで、彼を門前より突放した………。」

御用部屋までを壓し眩めると云ふに至つては左兵衛も魂消た。就中佐仲は、あゝ其では折角の熨斗包も形無になつて了ふのだが、噫什麼爲る。と危殆したも、旦那の聲色頗る厲しいので徒だ愕々と。――起身上つてごほ〱と咳れるので、傍の茶を注いで悄と差出す

と、上州は其を一口飲むで、

「……賄賂囑托、執持の義は兼て嚴重の御達もあり、百箇條の御表にも歴然とこれ有るもの。右を犯して内匠頭然樣の義を申し出る。加之か恁く手强の沙汰。上野介面皮もござらぬで直ぐ押掛てと存じたなれど、又た喧嘩兩成敗の御條目を重んじて一應貴所樣方御内聞に達し置く。と恁う云へばな、老中方から彼奴へも、本家の藝州へも内沙汰がある。其處で彼奴等も甚麼か爭はうが。兎角は佐仲、其方を毆打たは實事じやから、藝州から謝罪が入つて。ソレ使者が來る。金子が來る。――藝州と云へば赤穗連とは違う大分の身上じやから、今の百兩が千兩にも二千兩にも爲る。な。然うして與るゝ。其の趣向じやは。で、若し、其でも沙汰無しならば。其時は荒療治じや。赤穗五萬石、潰いて與るゝ。身も其程の罰利生はある。――で、急ぎ登城の致す。供をと申せ！」

凄い氣色の上野殿は、其又た底に不氣味極まる嘲笑を帶びて、朝服に身を改めて玄關に出られた。――黒羅紗に銀金具、山の字の鎗は、其の一時の後、大手の大下馬の供待の中に立つて居た。

（二十六）

元祿十四年三月十一日に、勅使柳原大納言資廉卿、高野中納言保春卿、院使淸閑寺中納言凞定卿、何れも東海道を無事御下着ありて、品川の晝食。八半時には辰の口なる傳奏屋敷に入らせらる。御饗應惣掛り吉良上野介。同掛り品川豐前守、大友近江守、畠山民部大輔、御饗應役淺野內匠頭、伊達左京亮は、或は出迎へ、又は御待受と早朝より其の持場々々へ相詰めて。乘輿の道筋には當日加役の諸家の警護人、往來を警しめ、辻々を固めて、盛砂、敷砂、番手桶の備殘る方もなく。着館の後には御表使、御內所使、大奧の女中使と、表裏より立交り入換る駕の數々引も切らず。出役の目附方が制止、賄方が荷運び、御用達町人が御用聞、水汲、御膳所、諸雜人が出入混雜、言ふに詞もなき程の其中に。甲某の大進乙某の少屬などいふ一時靑侍の京都の商人等、道中の日焦に色黎く、贅六てふ目印の眉毛下れるが、納豆烏帽子仰け額に冠りて、水干の領附巽しく、武者窓に、門外に、物珍らし氣に往來の東都の春を眺めて居る。其を又た覩むとて打集へる男女に老幼、折柄彌生の花の錦を混交せたる街衢の賑ひ、旅館の前は宛然の朝市。

屋敷の內も、廊下を駈る、書院を趨る、人々の奔走繽るが如きの其最中に、內匠殿は火鉢と吾と單二個限り、所在も無さに火箸で灰を搔均しては又た搔崩し、搔崩しては又た搔均

し、詰所の外を慌忙しげに起振舞ふ人の狀を眺めては、無聊に堪へぬあゝとの生欠伸、

「如何致したな上州は？先刻逢うて今日の諸禮を種々訊問たが、後刻と云ふて往なれた限り、姿も見せよらぬ。——もうこれ二時？相役の左京は何か頻りに奔走の體に見えたが、此方には一向沙汰も無い。——はて喃！」

小首を傾げた其眼で見られると、膝元には飮歇の茶臺が轉がつて、茶は何時か覆れて居る。

「坊、坊。」　と召ばれた。茶を拭せやうとの爲である。

「へーい。」と云つて駈て來たのは御城坊主の望月貞雅。此は豫ての「賴み坊主」で。殿中では彼の西の國で百萬石てふ大諸侯でも單の御一個、素湯一つ飮まれるにも不自由と云ふ處から、營中を我が巣窟にして居る坊主と云ふへ、常々不相應の手當を與へて、此者に萬事を賄はせる。卽ち其が「賴み坊主」で、登營後に於ける殿が女房役。此れ無くてはと云ふ程の重寶な者。

「召しましたか。」　と來て手を支へる。

「おゝ、此茶を………。」

と頤で指圖を爲られると。「はゝ」と坊主は懷中の白紙で其邊拭き〳〵、物言も極めて御心

易い。
「殿樣、尙だ御退散には爲らしやれませで？」
既に疑惑は御腹にあるのに、「尙だ御退散には」の「尙だ」の字が太と痛う御心許無くて、
「予は待ち居るじや、が？」
「何を御待せに爲りますするので？」
「未だ御兩使(勅使、院使)へ拜見も濟まぬ。先刻から其を待て居るじやよ。」
「えッ？」　と彼は吃驚いたが、其手を止めて、
「何仰せられますので？御拜見は疾くの昔——もう一時半程の以前相濟みまして左京樣にも御退散にござります。——何と何う殿樣は爲されたので？」
と、出入の殿の御大事と有るのだから彼が慌遽て、眼も眉も一所に聚せた。
「何。相濟んだ？」
此に初て、我が欺惘れたのを殿は漸く知れたので、看る間に面色も凄慘く變つた。
「坊！上野は居めさるかッ!!」
坊主は消飛んだ。到底、到底も、殿が其面の可怖さと謂つたら宛然惡鬼……坊主風情の到

底が對抗すべからざる者であるから、彼は消飛んで、仰向に反て、
「唯、はゝゝ唯！」
「詰所は何處じやッ！」
「唯は唯。——彼處で。」
「案内せい。——坊!!」
長椅の据踏碎いて、小刀の鯉口切て、内匠頭！蹶乎と起れた。

（二十七）

物の哀れを世に止めたのは今日の淺野内匠殿。彼の十日ほど前、安井藤井等四人の者が、本所の屋敷から歸つたと云ふ際の復命にも。昨夜の事件、佐仲をして一應の御謝罪を申し上げたれば、上州樣にも御面會の上。何の〱仔細に及ばぬ、酒興の口論は有り勝の事、殊に其の喧嘩の筋も當方のが十分の非理、佐仲めをば今朝も叱責り申した。匠作（内匠殿を云ふ）にさへ御意趣無くば我等方では毛頭々々。故々の使者大儀であつた。と御酒さへ下されて。——と正しくも告たので有る。其れより其後も音物萬端、此方では遺る所も無き手當をして、其度毎に彼方からも、手捏燒の茶碗、某禪師の墨跡、予には解らぬが返

物さへも越された程のこと。然れば予は十分に彼をば頼遡んで、此の御役中は覆滅もなき指南番、諸事落度なく引廻して給もる仁、と想うて居たものを、何事が意恨！——と其の内幕を毫知られぬから赫と爲られた。此は内匠殿ならざるも猶ほ憤る。況んや一途の、猛炎を裹むだ火山の如き殿であるから、暴怒激發、前後の差別も無くなられたも無理は無いので、突然に彼れ坊主の肩頭を捉まれた。

「案内せい！さ、上野詰所へ！」

引摺て出やうと爲られる。

傳奏屋敷は廣潤くも無いから、高家詰所は此間を三間ほど奥方へ距離た前方である。殿の御聲は早くも漏れたので、何事かと其の入口へ出られたのが高家の一人、品川殿。内匠殿が眼は又た疾くも其人へ。

「や、豐前殿！」

坊主を蹴棄てゝ韋駄天の如く走り蒐られた形相の恐怖さに、品川殿は「此は！」と一聲、後方へ退かれる。入口は端無く開けた。其奥を見られると、上野は同役の畠山、大友の兩個と相對座して何事かの談合最中。

「上野殿!!」

と内匠殿は既や血眼の、猛然と走り倚られる。

「や、内匠！」　と吉良殿も身構へた。

「好うも御身は！」

早や其の間近の、其の中間に。大事と見て突と入つたのが畠山殿、

「内匠。——貴方は病氣で無いかッ！」

「何ッ！」　と振顧る。

「貴方、先刻拜見の際罷り出られぬに依て、拙者當病と披露して御席相濟せ申したぞ。御席は右で相濟んだが、當病全快か。快癒れたか。——唯今御用中。猶ほ彼方でか養生せられい！」

内匠殿の此の前後を惑亂されたも一つは其の拜見に在るのである。饗應役にして兩使へ謁見も爲ぬとあれば、不束の落度に中られて御咎は眼前。其れで一面は身の大事！と勃氣と爲られた。

其れが聞けば、當病との事。先は大難が一時に拯はれたと思はれると、狂怒も自然ら其の

勢力を殺がれて、

「あッ。拙者、當病とな………。」

火鉢の前面に撑と坐つて、唯太息を吻かれて居る。

「此だから！」と言はぬ計りの目を、畠山殿は、一方には吉良殿へ、又一方には内匠殿へ注がれて、

「右、御意得た如く御席は無事相濟んだで、其義とあらば重ねての事と致されたが宜からう。上州も實は貴所御病氣を案ぜられてな、唯今も其義申し出られたと御座つた程じや。喃、上州御手前からも其段を………。」

老練の民部殿は目授に手勢で、只顧其座の無爲といふのを取計はれる。大友殿も兎や角と、品川殿共々に其口を添られるので、吉良殿も、

「今日の義ならば安意を爲ッしやい。――但し、其餘の打合ども御座るのかな………？」

内心鬼胎を懷かざるにも非ざる處か、其實、驚破と度膽を拔かれた上州は、吶と云ふ肚裏での大息で、

「………當日はじやが、此後は喃う。――御見やる通り我等も老衰じやで近頃は幾と健忘にて困却り申すに。又た御身も此の御役仰付られた以上とあるからは、我等からの傳達なと待れいで、諸事、御自分から、上野如何じや？那義は什麼？と切て出られて、當方不足を補助はれる様にとも有りたいじや。――御互に爲損せば共難義、で、喃。――先刻も、實、人して尋ねさせ申したが、御見やらぬ。眞逆詰所にとは存せいでの。――然りながら御用繁の當方から又た云へば、御身も彼處に引籠つてのみ居られたのが過謬じや。そりや脱落は五分々々で、喃………。」

言るれば實に有理の、此方も緩怠は重々とあるので、身の過を悔うるに吝ならぬ内匠殿は、今は飜つて赤面の爲體。

（二十八）

内匠殿の歸邸に先つて、傳奏屋整の始末と云ふのは早く其の鐵砲洲の上屋敷に知れたのである。家中の驚愕は唯だ上を下へで、騷動は鼎沸、紛擾。就中留守居の堀部彌兵衛、其子安兵衛、足輕頭の原總右衛門等は押取刀で、鞍置きぬべき暇も無ければ肌背の馬に鞭を上げて、主税共々驅出でむと爲る。是に續くは早水藤右衛門、萱野三平、大石瀬左衛門、其餘偘强の面々三十餘人も、高股立に素跣、後鉢卷を結びも敢ず鐵脛に宙を飛せて驅着むと

する。其の門際の出會頭、駈込むで來た徒士の一人は一聲高く、

「御歸り――！」

やれ御歸邸か！と一同は、寧ろ喫驚いた目を見合する。處へ御駕！

「殿樣、好うぞ御無事で喃う！」

と式臺へ出られるなり、狼狽えた樣に駈け寄つて、歡喜涙に咽ぶのは彌兵衞であつた。

「おゝ、身も今日だけは無事じやッたぞ。

右につき至急取紮すべき筋が有る。彦右衞門、又左衞門、兩人を召べ。」

殿は御奧へ通られる。少時して彌兵衞が其の血眼での言上に據れば。彼れ安井藤井を初め、藤兵衞軍右衞門の四人とも、過刻の騷動の混雜に紛れて何處へか逐電、雜具器財は依然ながら家内にも人氣も無しとの事！

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

主税は今堀部の宅で、主翁の彌兵衞と總右衞門、安兵衞に我が親族の瀨左衞門等と膝を交へて、自己が意見を語り了つた所である。

手に持つた温茶を己も知らずに啜りく、分別に惱めた頭を傾げて居る五十四五の老人は

彼の總右衞門で。三十二三の身材偉く、色淺黒く、顴骨暴れて、一文字の眉漆の如きが彌兵衞の子の安兵衞。思ひ離ねた兩人は呻く如くに、

「言はるれば、其義じやが喃う。今更ら彼方へ手遣ひも異な物かと案せらるゝに、殿が御内意伺はぬと云ふも後日の爲、什麼でざらうかい。――其は那の三千兩、彼奴等に持行れたとて未だ御庫には有る。貴所が旅費の中抔と申されても調達は相成るが………。」

と、只顧其の發意を危殆む面色。

「何せい、那の逐電で御腹立じや。御側の我等も途方に暮るゝ。其處へ又た本所が事を持出すは難義で喃う。」

と瀨左衞門も其の當惑の頭を抓く。

「ぢやで私が内々行て來うと申すので。自分一存では事の差縺れた際如何かと存するので各位が御存寄、伺うじや。別に御異見の筋も無くば。のう彌兵衞殿………。」

と主税は主翁の顏を見た。

主税の考案では、吉良殿方が什麼齟齬つて居るかと云ふが其の懸念。其れは父の大石が豫ての注意で、江戸詰の人々には、忠誠の士も、武勇の達者も多いなれとも、智慮には乏し

い。堀部原を初として、御馬前の討死は見事に成らうも、太平の裃肩衣の交際は如何あらむ歟。或は事速かに差逼る際會とも有らば、其方好に計畫へ。吉良殿は金銀さへ進ずれば什麼にも爲る御人。仍て別段用意として三百兩を今預くるぞ。賄賂は卑むべき方とは有るが、彼の利而誘之、亂而取之もので、現下の場合は少則能逃之、不若能避之に當る。小敵之堅、大敵之擒てふ武師の訓言を必ずよ忘るゝな。國を全うし、家を敗らざるを以て唯だ今日の上策とす。其が方便をば姑く問ふ勿。と道後を發つ際の忩々もの秘密の口授が、來て見れば着々として其の圖星に中たる。茲に於てか彼は其の秘策を猝に施して、此の急場を救はむものと今人々とも計つたのであるが。原等は切りに之を疑惧む。堀部の爺殿は唯だ溜息で、

「原因は我等が喧嘩からじやよ。謝罪て濟むなりや御事を遣るより乃爺が行く。――叶はずば皺腹屠つても上野殿腹立を解く………。」と直もの慷慨く。

今此の爺樣の下手に出られて、刃物三昧でも爲れたる日には其こそ大事。又た原輩が云ふ、殿の御計容を乞ふとしてからが、瀬左衞門が額を摩でた其の御腹立の際であるから「相成らぬ！」とあれば其迄の義。別に此等の人に名案も無いと云ふなく、猶且我父の密意に基

いて、我は斷行と決心する！後日に甚麽ぞの御咎あらば、我一人が其罪を負ふ分の事。然矣、然う爲む。

と主税の胸膽は固く決着つた。――其時は甲夜も早や戌刻。

（二十九）

「御前、未だ御眼覺で？――いや唯今鐵砲洲の彼所から若衆の使者が見えましたが…………。」と、立廻したる銀屛の隙間から軀を半分入れて、

「……いや、もし中々な美形でござりまする。――觀るは法樂。如何でござります、悄と御垣間見と成されましては………。」

額を叩いて、妙な手勢で、然も事有り氣の注進に出掛けて來たのは、彼の公用人の松原佐仲。――問ふ迄もなき其の若衆といふは大石主税。彼は此の夜陰を冐して、明日をも待れぬ主君の大事と、吉良が屋敷に出て來たのである。

時刻は人定過、寒氣は猶は身に沁み徹る。折角方纔温暖の出たばかりの衾褥であるのを、此が常事なら、假令公命と有らうとも起出られるでは無からうけれども。所好む方には身を役はれる。飽く迄斯道に忠實なる上州は、美形と聞いては聽棄の成らぬ事と、勃手と夜

具擦斥けられて、

「ふーん、然様か。――然て、何方に？」

三つほど眼を摩られたが、其眼は皿、と看る間に絲の樣になる。

「へゝ、私　長屋にな………。」

「何用じやとて來た。」

「手前へ依賴にな。――先日の喧嘩もあり、又今日の御旅館での事を案じて故々推參と云ふのでござります。私から御前へ好樣にと………。」

「包むだ金は？」

「手前へ五枚。御前へは三十枚………。」

とは噓で、其の半額以上を彼は既う着服して居るのである。其でも四位の少將殿とて、其樣手品の有らうとは御存知無いから、

「少分じや喃う！」

と眉には皺、苦笑を爲れる。

「御意通り、餘りの輕少で。此は何なら御返却の方が宜からう歟に存せられます。」

「返却するも宜からう。餘りに他を輕蔑た！」

と太い御不興。其處よと佐仲は膝を進めて、

「で、其代に、彼者を御留置なりましては如何とござります。其は中々、――先づ泛々とは御座りませぬな。」　と首を掉る。

甚麼さま其も名案である。殊に前日内匠の見えた時、些と謎語を懸け置いた仔細もある。彼の内幕、太だ吝嗇家と世上の風説にもあるのだから、或は其の賄金の代りに其の少年を寄越したのかな。おゝ然樣かも知れぬ。然らば亦た妙。と眉根の皺は良解けて、

「幾歳じやの？」

「十五とは申しまするが、大柄で、十七八とも見えまする。」

「些と過大の――。で、名は？」

「其名がで。――大石――主税………。」

「主税が甚麼じやで？」　と殿には分曉らぬ。

「主税！實にちからでござりまする。――其の眼から眉、頰、頤の工合。如何にも力の有る――力味の指しました――憖う、凜々しい若衆！いや辰之助（水木）の素顏など及びも無

い。昔の不破萬作、名古屋山三、——什麼でござりませうか喃？其れは〳〵其の見事さは、到底が不辨舌なる私共口上では述べも盡されず。先づ御秘藏の薄紅の八分珊瑚？那品が人間ので。又兵衛が浮世畫にも無い圖の形でござります。」

「苛う賞讃るが、實、然樣のかい？」

「然樣の甚麼……。」と、佐仲は突如軀を反らして、

「……御前が常々御讀み遊ばす太平記の那の鹽谷の奧方、早田宮の御女の西の臺な。あ、あ、那れでござります。私めも疎覺えに記臆て居りますが侍從があの艶話、あのそれ月も映らう本あらの萩の餅、波も色ある山吹煎餅、我落にきの女郎花の粟燒、白く咲けるは何の花ぞもの夕顔卷。那樣兒童騙しの惡甘いのではござらんで、三盆の砂糖に琉球泡盛、甘味が中に凜とした氣の持つた、其れこそ甘露梅に柳箸して、酔醒の喉に櫻湯一抔。すツきり、はツたり、價千金の風情と申す。厭味氣、辛味氣、油臭氣なしの粋一本の御若衆樣。——もし長口上は彼方でも退屈、御前にも御難義。論より證據の、御目が第一曇らぬ鏡。一寸と私方へ御微行の、內々師直といふ處を爲されませ。——甚麼の御人體！此の夜々中に……
……。」

主稅の艶色で、此の目の沒き老爺を眩暈めて、然して其の持參の百兩を全然と自己が占領める。胸に針やら刺やらの松原佐仲は、到頭主人の師直公を其の寢間から彼の垣間見と云ふのに連出した。

（三十）

主稅は獨個佐仲が長屋の奧座敷に据ゑられて、主人が歸宅の返辭の遲さを悄然と待てゐる。夜は既や四時半。深夜の寒は漸々として肌膚に逼るのに、火鉢の火は茲一尅と其の紅光を失つて、今は霜夜に集鳴くとかいふ心細い螢火小のが一つ。切ては燈火でも光明〳〵してと、幾囘か掻立てゝは見るも、下垂油の汚濁が多いに燈心が纔かに二條、百物語の其燈にも似て、座敷の隅は黯澹たる妖怪の世界といふのを我物顏にとか、鼯鼠でも有らうごと〳〵と時々奇しき音を立てる。疊は鐵、茶は氷。飲む物も、見る物も、所在も無きに軀を竦めて、頤を襟に指し入れると、萬感涌くが如くに胸臆を襲うて、我知らぬ涙雫もほろ〳〵と墜て來る。

あゝ什麼爲らう。此の御役が御無事と行うか喃？先刻の話では、安井と藤井が好い程の事のみ言つて、此方の主從を釣たに依て、旦那も腹立で、我等も其の執做には骨が折れる。

隨つて其の祟禍は内匠殿御身に行く。兎角は目下程其の厚志を當方屋敷に運ばれでは。と謎語では無い、最う强面の强求である。其の强求も怖れぬ、多寡が金銀。其の金銀さへ胸蹋なく支拂うて與れらるれば。——では有るが、其れが那の堀部殿、原殿等が伎倆では如何あらう歟で。猶ほ三千兩を持逃げ爲れた彼の御腹立の際とあるから、殿様の「可し！」との仰も、思へば覺束ない。

此に就けても父上。あゝ何故御出府とは無つたらうか。私に代つて當方へ御在とあらば、此式の御捌、御掌内とも有るべきものを！憎い鷹には餌を飼へとは此程の内命の一つであるが、其餌が、嗟、足りさうにも無い。

堰き來る涙が眼に溢れるので、彼は懷中の疊う紙を出して悄と拭つた。色白の臉が涙に洗はれて、其を又た二回三回拭はれたので、眼縁には紅色をぼ、、ッと！

「あゝ、成る程、那の薄色珊珠じやな！」

「で、御座りませう。」

と耳語き合ふのは、彼の主從だ。

「尤物じやの。」　と感歎する。

「金千枚！如何でござります。」　と頤を掻撫でる。

「うむ、御物、御物！本阿彌瓘の極札が無うても吉光以上の名作じや。——如何じや、那者、予が指料に爲たいが喃う………。」

「何、理由もござりますまい。御前、一番、御手からの御茶賜はされませ。」

「おやが、附も無う、異な物じやあろまいか？」　と鼻白まれる。

「はゝ。」　と失笑し掛けた吻を慌てゝ壓へて、彼は輕く額をぴしやり。へゝゝゝゝゝと微笑をして、

「いや恐れ入りますなあ！」

其後は口を耳へで、一個は囁語く、一個は首肯く、何事を什麼談合したのか誰も知らぬが。

然らば其の用意と云ふ體で主なる人は闇黒へ身を潜ませる。突端に、わ、、ッと飛上られる。い、、きゆう〳〵と鳴く。遽てゝ鼠を踏附けたので。

「やッ畜生！」

主税は、此聲に始めて其の人有ることを知つた。同時に紙襖を押開けて出て來たのが佐仲。

「いや御待せを、——嘸ぞ御退屈で御座つたらう。いやてりや火を無い。婢子共、い、い、てれ。」

と手を拍いて、

「貴方御入來の段、又た御依賴の趣ともな、旦那御聽に入れましたる處、折角の御使者、面會らふと申さるゝ。誠に都合で、拙者御執持の甲斐もあつたと申すもの。就ては御支度宜しくば座敷へ御案內。——いづれ御茶ともでざらう程に、萬事其の御心得でな………。」

旋てに彼は雪洞を點けて先に立つ。主税は刀を提げて其後に隨く。戶外は飈といふ北風の、肌膚の溫味を引攫つて、宛然の八寒地獄。脚下には霜柱が滅理々、滅理々と、劍の山へも躊くやうな心地。嗚呼、八寒の地獄、劍の山！主税は什麼な惡鬼の責苦に此から遇ふのか…………。

（三十一）

前の孤燈の下、殘火の前、形影相憐れませられたとは差違て、這處には爐も有れば御茶も有る。一室の春の氣は自から人を蒸すやうに感えて、氣も心も稍暢達と。其の行方なら幽懷い香の馨も、言ひ知らず閑寂けい釜の沸音も、同じく鬱結めた胸臆を融解て、精神を無何有の鄕にも誘導られる如き意もする。

主税が憾く感じたも、強ち此の茶室の坐心の快いばかりでは無いのである。御亭主たる上

州殿の何から何まで、御懇とは愚か、幾んと祖父樣か孫かと云ふまでに款待されて。寒かつたで有らう。物欲しうは無いかや。其方の心底は沁々酌量つた。此の夜更に內匠殿大事と思へばこそ慿う遠路をも參つたもの、其方の大事と思ふ其の御人の事、予とても甚麼如在を存せう。心易う思へ。明日からは別して指南をする。其の日數も多寡が三日じや。十四日の御返答（將軍家の）が濟みさへすれば跡は樂。其が間は苦痛うとも些と我慢お爲れて。—甚麼、皮切の三炙じやと思へば事は濟む。はゝゝゝ、彼衆といふものは兎角我儘な、那樣な禮式の場を厭惡がられるで身も困却る。…………と。

此れが豫想の、意地强惡き上野殿の御詞とは？——主税は夢かと、辱けなさに漫ろ感淚と云ふものも謙れて來た。あゝ父者が內命、金銀さへ進せて、此方から熟う御依賴申せば這樣に親切にもして下さるものを。眞實、世間に人鬼は無し。其れも然樣あらう、苟にも四位の少將殿で、御身格も御身格、御人品も御人品、御年配も御年配。然う沒義道な事爲されう理由も無いのに、何故又た殿樣初め、彌兵衛殿など、狗か豚か、人非人ものゝ樣に從前罵はしやれたのか。—但し其も可し。最も明日からは案事も要らぬ。其の案じたよりも産むが安い此の吉右左を一刻も疾う殿樣に。と思へば。

「御沙汰、申し上げ樣も無う難有く伺ひまする。主人も待難ね。——恐れながら御暇を戴きまして……。」

と主税は手を支へる。其端に嬉し涙を拭くのである。

「いや未だ可いじや。今一時のう。」

「でも、餘りに夜が闌けますれば……。」

「苦しう無いよ、未だ九時前。——今一服せう。」

「恐れながら最う私は澤山で……。」

「然樣申すな。身が折角の心入じやよ。——苦しからぬよ。」

先方では苦しう無うても、此方は苦しい。九時前と云はれるなれども、曩刻からの御長話で、最う確に八時には爲る。當所から自邸までは一里の路、急げばとて歸邸ば鷄が鳴くであらうに、甚麽の手筈を齟齬へると又た大事件に爲る。あゝ困窮たと、

「御意恐れは入りまするが、右、主人義も待居りませうに、重役の者も私左右を今かと申して……。」

「然程案ずるなりや、當方から佐仲を遣はすと爲う。喃う、其れで可い。——予もの、今からは目が冴えて、寢られぬで、無心じやが喃。夜明近まで寢物語の伽して欲しいのじや。」

主税は喫驚いた。寢物語の伽？主人持つ身が他家へ出向いて、自個が自儘に其の寢物語の伽！有るべうも有らぬ義。と返辭も爲り難ねた。

「喃う、其れで可いじやらう。唯今彼めを召ぶ。——佐仲、佐仲……。」

何處に居たのか、出ずとも好い禿頭顱は逸早く其處に出現けて、瓦燈口を隔てゝ伺候うと。

「うむ佐仲か。其方大儀でもの、此より内匠殿屋敷へ參つて、主税義は今夜一夜、主人てと借り受けられて歌物語の相手を爲する。——又は明日の義は上野委細相心得居るから、萬事御安心ある樣にと。然樣に申せ。」

「は。」　と彼は引退らうと爲る。

「いや佐仲殿。」

と喚懸ける主税を押へて、上野殿、

「や、疾う行け。」

（三十二）

「佐仲殿、其義は御無用に。」

と主税は慌遽て起ち掛けた。聲さへも變つて來たので、佐仲も此れはと猶豫うと。

「其樣に氣の揉みやるなりや佐仲は遣らぬが。然し未だ話說はある。夜は夜長じやで。今少々……。」

と悠々と煙管を把られて、上州は優かに煙を噓く。

其をも情なく振切ぬのは、此方にも依賴と云ふ弱味があるからで。主税は是非なく再た腰を卸したものゝ、以前の坐心の快つた此の御茶室も、今は宛然針の筵！其の苦痛さは幾と泣たい程である。

上州の容子は叉た小焦燥いほど悠長なもので。更に一服を徐に塡めて、娛みさうに莞爾と此方を眺られる。此夜が百年も明けぬが如く。

「何か。其方は、今年十五に爲りやッたと喃う。……然樣かな？」

「はい。」

「其方が骨柄では、弓馬槍劔、何れも今修業最中とは見ゆるがの。歌、俳諧、連歌。扨は

香、茶、蹴鞠等の、遊藝の方は何う有るの、些は心掛もおりやるか喃？」

「私は何も存じませぬ。」

詰らぬ、詰らぬ、寧ろ堪らぬ。と云ふ程に詰らぬ！恁麼御話に引懸つて居ては夜が明ける。

「此は爲たり。はゝはゝ、然樣の手鈍な義を申すもので無い。——いや今も見ましたが、茶は餘程心得がありさうじや。——一服給らぬか。——所望じやが。」

「も何うか然樣な義は御免され下されて。」

「はゝゝゝゝ此れは近頃挨拶じや。——いや然し、協らねば協ぬで好いじやがの、現今はの、言でもの泰平の世の中じや。弓は袋に、太刀は鞘。な、血腥さい風の替りに目出度い松風の釜の沸音じや。其の世の中で、立身でも爲うと云ふなりや、竹刀の柄より茶杓、香箸。三昧の撥なと持たが勝利じやな。はゝはゝ。——予は、實其許をの……。」

言懸けて、鼻を拭まれた「其許」を什麼爲されるのかと、主税が眼は此時光耀いた。佐仲は傍邊で、素破こその身で、固唾の呑んだ。

上州は、鼻を拭まれて、菓子を撮むで、自服でさゝ、〳〵と。一服を喫むで、一つ咳をして、

「……實はのう、其許をの、彼の內匠殿、內の者に爲て置くは可惜いでの。最初見た時、

然様思ふたよ。——あゝ此者を公儀歷々の若殿にも爲て見たい。——後々は天晴れの御役人！其には予方へ引取つて、左兵衞が義弟にして、禮義萬端好う仕込んで、四五年も過ぎたりや然るべき家へ養子に遣る。——其れは予方からの養子とあれば、旗本ならば五千石七千石。いや、其れ處じや無い、惣領のは存知か知らぬが、今は然る家へ貰はれて、十五萬石を領して居る。喃う、運に叶へば其許が現今の、主家以上の、大名の家へも然樣乘り込める。——什麼じやのう、主税。其方が身方な家老家筋とか申すじやが、多寡が陪臣。一番、赤穗の藩中廢めて、身が家の養子、高家の若と爲りやれぬか。——然して旗本なり、大名なりの好い筋の緣家へ行きやらぬか………。」

主税は呆れて眼を睜つた儘。上州は最う恁う爲たらの度胸を見せて、浴せる樣に、

「こりや慾を知れ。慾を知らねば當世に後るゝぞ。其方さへ承知なりや今夜より直ぐ當方へ止めて、明日にも假親搜いて卽ぐ身が養子の願を上ぐる。——如何じや氣は無いか。——喃う佐仲、こりや好事らうがや？」

「いや結構！佐仲、其仰など戴きますれば三拜、九拜、二つ返事を三つ御返事にもして卽ぐ御請を致します。主税樣、御恐悅！其麼の御思案か。福德の三年目、待てば甘露の日和

など見て御座らしやれる所ではござりますまい。早速御禮を。さゝ御早う！」

左右からわいゝわと緊逼られて主税は此に覺悟を決着た。逃避るのは卑怯であるが既う此の場合、道理をもて說くべからざる如是る輩には唯だ一時の手段！明日は又た明日。然無くては此の囚獄から身を脫出る方便が無いと、血涙も出づべき眼から莞爾と笑つて、

「私は何じややら存じませぬが、唯だ殿樣と親共さへ………。」

「おう其れ御承知なら御異存無いな？」

と佐仲は念を押す。上州は其をも待ずに、

「おやが、身も一旦發言いた事。內匠、承知を召されぬとて其儘には措かれぬぞ。——然る時は又た料見が有る！」

擊れた釘は胸に徹へて、主税は覺えず潸然との眼に淚。起ちも得やらず燈火の影に差俯向いた。其の橫顏の艷治さ！

（三十三）

翌れば三月十二日、辰の口なる傳奏屋敷には、高家を初め諸掛り役人、御馳走大名も皆な例刻より相詰むる。內匠殿も其中の首なる一人として彼の詰所に見えた。

例の疳症とて平日から頬の肉着餘り好からぬ、何方かと云へば御血色の不良い、謂はゞ悽愴い質と云ふ内匠殿の面色は、今日は故ら蒼褪めて、御眼中も血迸つて居る。其は昨夜一夜眠られぬかれで、其の眠られぬのは、彼の謁見を出し拔れた無念が第一で、次には安井藤井等の逐電も有る。又た三千兩の事も有る。賴憑む家來にさへ恁う虚呆に爲られたかと思へば、世が味氣無くもなる。情け無くも無る。其も其の根本はと云へば、あゝ詰らぬ、四位の侍從を風と心に懸られたからの事。今更ら思へば俗に謂ふ通り惡魔に魅られた樣なもの。噫無益じやと云ふ後悔の念も出て來れば、寧そもう今日限り御役を辭退して、明日からは隱居！と迄も思ひ詰られる。種々雜多、心緒は紊れて哀れ亂痲！恁麼際會には膽大斗の如しと云ふ英雄でも、夢寐頗ぶる安からざるものは有らうに、其れが正直の、物に緊急めた、世間の苦勞を御存知ない五萬石の殿と有るから、眼眶の交されぬも道理で。彌御役御免を？と其の曉方に決心の臍を固められた端。風と出て來たのは彼の御氣に入りの可愛い主税。

彼は何處から戻つて來たのか、其の出先は云はぬが。是非に明日はと出仕を勸める。其の勸告るのが自然ら又た賴む所ある如くと見えるので。あゝ彼は甚麼を賴憑むか。有繫に其

れ程の事の目に見えぬ殿とも無いから、扨はと纔に思ひ直されて。姑は今日一日だけを、と此日は出仕られた。殿に取つては辱と知りつゝ噬む程の思。全く主税が苦心と云ふを虚に爲まい。其の、御家大事と滂泣て勸告める、彼が涙を無益に爲まいの御愛憐から……！

「あゝ内匠殿、御早い喃。」

と、詰所の口から喚掛られた人がある。誰かと見ると上野殿。

「や、此は。」と此方も起たれると、彼方は莞爾と、

「今日は御不快は熟と快いかな。——唯今は兩使にも御手透じや。宜しくは案内申さう。拜見なされ。愚老、披露じや。

扨其の御式は、先づ御三家並。御官位も相當なからじや。——最初に勅使、次に院使。——愚老、貴方の姓名を披露に及ぶと、貴方が其處で謁を取られる。致すと勅使——多分柳原卿でござらうが。大樹益々御安泰、大慶至極、其方無事勤役、重疊の事、諸事大儀。と恁う口疾に仰せらるゝ。處で貴方は。難有き仕合。と恁う云はれて頭を下げられる。と、此で三卿から長熨斗が出る。御一名なりや貴方、進んで頂戴せられるじやが。御三人じやで、愚老が御臺に取り集めて貴所に進ずる。貴所は其の御臺ごと戴かれて、更に一拜して御臺を

持つて退出られる。愚老が後で御禮を申して同じく退出る。――其れで相濟みじや。な、理由もない。唯だ其の順序が間違はぬ樣。間違うと跡で面倒じや。――何、面倒とて愚老が在れば其の面倒には爲せぬがの、――又た例の〇で。」と上州は手指を環にして内々見せられて、「金銀奪られた上に、哂笑はるゝ。いから厄代じやで、其の順序を差違れぬ樣。――宜しいかな。――會得されたかな。」

座にも居られず、起立ながらの身振、聲色、水車の如くに傳達されて、内匠殿も些と呆氣に取られた。

「辱けなう存ずる。合點いたした。」

「不安なりや坊主の呼んで、仕方で御指南申さうかな。――如何じやな。」

「いや其れにも及びませぬ。――諸事然るべく……。」

「はゝ其ならば重疊じや。いや御會得の好い事じや。――然らば、恁う御座れ……。」

（三十四）

出て行れたかと思ふ間も無く、兩個は以前の詰所に復歸られた。上州を先に、内匠殿は後に、其手に爲られた三寳には檀紙に包むだ長熨斗が三つ程載つて居る。謁見は滯りなく濟むだのである。

「御引廻し辱けなう存じまする。」と内匠殿は坐に着て一禮されたが。此時の面色は稍融和いで、蟀谷に現てゐた青筋も確に其の半數以上を減じて居た。肩も張り詰るほど無念の物に、苦に病れた謁見の重荷と云ふのも今漸々下りたので。

上州の歡喜し氣な面と謂ふのも亦た無いのである。秘藏の兒猫が老鼠でも捉得たかの體、内匠殿頭を撫で廻さぬ計りにして、

「目出度いく。先づ御首尾好う、恐悅申す。――いや匠作、熟れたものじやの。――貴所、御初回かい？――いや取廻しの立派さ。口上の見事さ。落着れたもの。流石は大家じや。愚老從前多くを見たが貴所ほどのは無い。什麼も臆れてならぬものじやを、貴所には其れが無い。あゝ天晴れな。

時に、此から、今日午後の御使じやが。此れは貴所御勤め成されい。其れは御用部屋に罷り出られて、月番老中衆に明後日の打合せ――卽ち御返答の御模樣を承はり合さるゝじやな。其節には御兩使御内意をも伺はるゝ先例じやが、其は愚老が心得居る。――で、此れが其の首尾好う參ると、上樣、御耳へも自然達つて。な、それ、彼の御所望の四品一義にも

大分の都合と爲りますじや。——で、此は是非御勤仕が好い。愚老、根柢げ指南の致そ。」
甚麼と云ふ親切のか。四品の所望は既うさら〳〵無いが、然ばとて此の芳志は、實に、實に、感謝に餘つて口幾んど言ふべき所を知らぬ。其に就ても主税、あゝ彼が昨夜の苦心！
此の舍殿の意を此れ迄に和解げ與れた。噫、想像ふにも涙の種である。——と其涙は旋て殿の眼匪に、はら〳〵と出た。
「いや、使者と申せば喃う。」と上州は其の皺額を二三度撫でられて、「……昨夜寄越された。あの主税とやら。——那者を喃う……。」
と小鬢の邊りまで切りに抓かれる。
内匠殿は内心驚！と。覺えず眼は連瞬かれて、
「彼者が、甚麼でござる⁉」
「甚麼とじやでざらぬが、唯だ、彼者をのう、——愚老手許に賜らぬか？」
いゝ、ぐッと塞つた。内匠殿の口は今幾んど其の機能を失つた。
「手許と云うても小姓や伽者ではお座らんで、愚老、養子にな。——悴として見たいのじや。」

言直されたが、上州の口も狼狽して居る。物に熟れたる古兵も大事の虎口、戀としなると恁麼物！
驚愕竊つて憤怒と爲られた内匠殿も、「養子」と聞かれて其の開いた口も塞がら無かつた。何時の世にかは陪臣の——家中の悴を、公家高家とさへ一口に謂ふ其の歴々の高家の家に貰ひ受けらるゝ、那樣例が有るとあらうか。話の容子では戯談とも無いが、是れは寧ろ當座の謔戯として見る方が適當であらうと、
「はゝ、此は甚麼申さるゝ。拙者連が家中の悴を貴所樣方の御養子抔と。—存じも附きませぬ。はゝはゝ。」
苦笑を爲れても此方は褻まぬ。褻まぬでは無い、褻むでは居られぬからで、
「貴方、存じ附かれいでも、當方、眞實、存じ附いたで。——折角の愚老が存じ附き。何卒いゝなあ貴所、所望を納れられて。——これ賴む。」
「賴むとは仰せられても彼者には父親も有り、又た……。」
「主の御身さへ承知と有れば、父親とても異論は喃う。——現在當人の主税はの、主と親とが承知とあれば如何樣にもと言ひますじや。——いや既に昨夜も然樣申したじや……。」

「呀？――彼め、然樣の義を?!」

「おい喃う、愚老へ。――然も證人も有る。家來の佐仲も其席に居申したじや……。」

「や！實、左樣の不埒の義を?!」

内匠殿が眼は再た吊し上つて、拳頭は慄々と顫へて來た。

（三十五）

一時は赫と、例の戰慄も來るまでに忿怒ては見られたもの丶、さすが又た其程の思慮はある内匠殿、漸くに思ひ飜された。是れは此爺の虚喝である。所謂る其亡きを時として、有ぬも有りと爲る言懸である。主税義が然樣申さば進上申さう。然らば拙者貰ひ受けた。と恁う約束を矢へて置いて、扨後に邪が非でも引奪くる。彼が何時でも好く行るといふ其術である。と堪へられぬ所を同じく無理に押堪へて、

「は丶は丶彼とても右樣の義は得う申すまい。――然樣な不埒をば……。」

「不埒、不埒と云はるれども毛頭不埒とは御坐らぬよ。當然の義じや。是れが穢多非人の家へも養子？然樣ではござらぬ、少分ながら知行もある、官職も御存知の前。場合に依ては館の稱號さへ御免されになる愚老が家柄じや。――凡そ人として立身出世の念ある以

上は、卑きを棄て丶貴きに就くが當然の望と申すもの。こりや彼のみで無い、現在の御自分すらが四品の所望を懸けらる丶とは御座らぬか――喃、ソレ、其れじやての、彼が心情も察し遣られて異議無う爲されい。――殊に御手前から然樣の竊運見出さる丶のは、結句世間の、御面目ともござらぬか喃？」

此にも一應の理窟はあるに、況て上州の辯口で言れるのだから實に有理とも聞えるので、内匠殿も其を捻返さうとて又た悶掻く。悶掻くと自然に不聞な言も言ひ出される。

「や、不名譽と？」

面目とは御座らぬよ。不名譽で……。」

「や、不名譽と？」

「忠信を棄て丶利得に奔る。然樣の家來を持ち申すは拙者、不名譽で！」

い、でも老人は猶ほ腹をば立てなむだ、

「や、挨拶じやな。は丶苛酷い事！然し忠信とはお言やるけれど、主從でも相見互じや。家來は主を伸立たする。主は家來を引立つる。痰相持で相互の利益を計り合ふから、――で、主從のじや。御分が樣に家來は飼犬同樣――と云はるれば、家來たる者は立つ瀨が無い。――彼者を御覽せ。あの主税をな。那の骨柄で。――親父の内藏とやら什麼じや知ら

ぬが、彼の若者は伸立つれば立派な者に爲る。俺はな、其の、彼者をば往々天晴な士に爲て、伸立てゝ見たい。——有樣申せば、五萬石の御家來には些と過ぎ者じや。」

「過ぎ者じやッ?!」　と又た氣色が變る。

「はゝ御分は蜂かのう。漫らに劍を出す。——其樣に劍の出されて第一御役も成ろまいに——差向いた午後の御使、こりや什麼お爲る?」

和されて、内匠殿が胸裏に風と憶ひ泛むだのは、彼の大石が諫言であつた。あゝ這處だな!蜂の劍。此の上州の現今言はれたのも自然ら趣意は同一で、其劍は身と家とを滅亡す劍!吁過矣。彼の以後決して一途の癇癖をば勃發さじと心にも誓ひしものを。吁過矣!と其の過失を悔うるに逸早き例の殿は、其の鋒鋩も翻然と挫折て。寧ろ悄々と。膝さへ屈られた。

「上州、過言、謝罪りまいた。段々は偏に御容赦。——如何にも御使、何樣に勤めますかな……。」

「其れじやよ、其の傳達は。——ぢやが喃う、匠作、——何事も詠と歌じやな?」

「詠と歌、心得ました。——右は歸宅の上……。」

「あゝこれ〳〵。」　と吉良殿は囅然笑つて、

「貴所も中々御人が黠い。——一寸延れば尋延ぶる。——いや隅には置れぬな。——交換じや——喃う、交換と爲う。彼者と、傳達と……。」

「は。——では御座るがな……。」

「ござるも小桶も要り申そかい。過刻も云はれた彼者の貴所御家來じや。——貴所が御役を好う勤めらるれば、彼者も忠臣に爲りまする……。」

「は!」

「さ、忠臣を家から出されい。情けは人の爲ならず。鐘も撞木の中り柄!なあ、十王が勸進も九王が爲。——あ、あれ最う九時じや。——午時じや。さゝ一口商賣ひ!手のお拍れさ。」

「は!」　と俯向れた儘。

「協らぬかな?!」

「…………。」

「あ、あ痛い!腹痛、腹痛!……坊、坊、素湯、素湯!こりや我等、蛔虫が咬るは!あ痛

痛！こりや俄の腹痛――腹痛…………。」

先刻から小陰に潜むで居た坊主の二人は遽て丶出る。其等に手を牽れて上州は、憎さ氣な面を皺め〳〵て會釋も無しに起て行かれる。

後には獨個、死せるが如き内匠殿！太息さへ最う吐かれぬのである。

（三十六）

九つ半時の廣間の時計が丁と鳴るころ、内匠殿は無間地獄の傳奏屋敷を悄然と出られて、閻魔王宮の正門とも見る大出の冠木門を潜られた。是れ彼の御返答に就ての内談合、御用部屋への御使である。

必外！必外!!遺恨の腸は寸斷に斷れて、狗鼠！胸は張裂く迄緊逼て來る。内藏助が諫言さへ無くば、上野め！活置く奴では無いのであるが、我が腕を縛つて肘を掣く如き彼が眞實の忠信の意見。殊には貞雅（坊主）、彼が今泣き詫ぶる樣にして我を諫めて、月番高家の畠山殿に故々頼んで、我に御使の指南を爲する。民部殿も亦た吉良めが眼を忍ぶまでにして、其の御使の順序を敎示て、兩使の内意をも承はり合せて與れられた。其が芳志、彼が厚誼恁く迄の他の親切を無にするもと飜念して、叩き附くべき御役御免の辭表をも胸に納めて

彼處を出たものゝ――あゝ弗々可厭である。――今日限り！――縱令如何なる御沙汰あらむも那の鄙劣、卑怯、人非人。釁隙を狙うて他の皿の肉を竊まむとする盜猫の如き素奴が指圖を受くる抔、到底が協らぬ事！双刀の手前にも!!

恁う覺悟を決めて内匠殿は、愈浮世も彼の今日限りの、夢の如くに下乘橋を渡つて、三御門から中御門、御玄關を上つてから旋て大廣間、其の入側沿を御白書院の御廊下口まで差懸られる。鎌倉山の星月夜も陳いが、其の綺羅星と列み居る大名も、諸役人も、馳走る坊主も、勤役の番士も、此時の殿が御目には魍魎の如くに、幻像とも見えて、深山の草木の騷めくのか、群れ飛ぶ禽鳥の翔るのか、其中に叱、叱！との謦咳の爲るのは溪澗の細流か抔と、我ながら不思議の樣にも感はれる。其の耳許に、

「相摸殿、――見えられます。」

其は坊主の聲。恍惚の夢は風と醒めると、個は什麼、卽ぐ面前に參られたは月番老中の土屋相摸殿。

「あッこれは、相州！」

「おゝ内匠か。御苦勞々々。――御使かな。」

と、相州の御聲は爽快で自然と人の氣を興奮てる。是れが俗に謂ふ「御用部屋調子」の甲高なる者で、松平豆州（寛永中の有名なる老中）以來の習慣と傳へてある。
「は。御使で――御内意もござります。」
「然樣か。然らば承はらう。坊、御書院へ………。」
老中は「無席」と云ふので、殿中（但し御表）は何れの御間でも「立入勝手次第」との制規である。附添の坊主は直ぐ御白書院の紙襖を拔くと、
「免さッしやい。」
相州は一會釋して先へ入られる。内匠殿も其後から續く。双方の坊主等は御紙襖の外に控へて居ながら、何時も始める潜々との批評話。
「おい、赤穗の面色は什麼だい。全然化物だぜ。――遣られたな。上野爺に？」と親指を出す。
「嘘アねえ。御玄關を上らしッた時から脚下がふら〳〵よ。化物じや物え、幽靈だ。――貞雅、那奴も附てるになあ、旦那を那麼目に遇せるてえが有るものか。」と大不服。
「什麼して〳〵！」と今一人の其を驟擊した、

「俺も先度に龜井に附てゝ熟知てるが。那爺が慾の深さと云たら麹町の井戸よ。數が知れねえ！與ても不足で、與ら無えけりや無理に踏奪る。――或る衆抔ア奥方の無心まで爲れて憤泣たとよ。――だから津和野（龜井）も終局にや憤怒て、殺了うと云て噪急だのだ。――又た些と神經の有る人なら其氣に爲らずにや居られ無えからなあ。――道理だ！」
「おや赤穗も其の最中だな。可哀さうに好個御前だが。何しろ譬喩の「大名の懷兒」を山根太夫の手に懸ける――土王丸の檻折と云ふものだから堪らねえ。――子雀の眼に針だ！」
「針どころか、捻殺るのだ。――其を御部屋（執政方）で御存知無ともあるめえけゝ、親指（上樣）が御贔負で、何事でも上野々々か。御奥も一杯。京都も掌の内と云ふのだから手の下け樣が無え。那麼奴こそ早く結果了はねえと世間泣せで、俺達が所得物に果も影響が來る。――だが其の樣子じや、今回も無事御用濟の御祝儀と爲て吳れゝば好がのう。殿中でゞも何事か有て見ろ――災難だ！……おや御起座か。――へーい！」
神妙に、殊勝に、口を拭つて彼等は御紙襖際に平伏すると、先に出られたのが、相州、
「喃、唯今申した事を、熟と貴所も勘考されてな。――上下の迷惑にも相成らぬ樣……。」

「は。委細——心得まして、ござります。」　内匠殿の口は吶つて、——看ると、眼には潸涙！

（三十七）

「殿樣——申し譯もござりませぬ。」
と主稅は御前に手を突て、唯だ悄れて居る。内匠殿も腕を組れて、目を瞑つた儘。——此の匂はしき夜を照らす絹燈の火も、明日の南風の前觸にする房總地の沖鳴も、御庭の外の石垣に當たる大潮廻りの浪の音も、何れも晩春の温暖を十分見せて、御火桶さへも遠斥けらるべき此の彌生も中旬の宵。其れが主從が胸は氷り切たる霜柱の寒風に吹き荒まれた旦の氣色、暢氣どころか、凍着いて居る。哀れ、憐れ、此も誰が所以ぞ。
萋兮斐兮其の貝錦を成す、彼の人を譖る者も亦已に太甚。内匠殿は今日の晝程、土屋殿内話を聽かれて吉良殿に對する意恨と云ふが一層に深くなられた。其は敢て相州の口づから内幕悉皆打明られたと云ふでは無きが、内匠殿と土屋殿とは其實遠類の御仲、卽ち殿の伯母壻たる大垣の戸田釆女殿の相州は又其の緣者で。恁有る筋合から今回の御役を彼方は太く懸念せられて。言ふ迄も無きが吉良上野なる者は名に有てたる口强馬、御分如きの一條

索で動く爺でない。既に過日も此の饗應の義に就て種々の不足を申し立てたが、其中には取上ぐべき筋も、又た上ぐべからざる筋共も多分に有る。要するに其の上ぐべからざる不足の筋は、陽は御爲の忠誠を飾言て、陰に他の短所を發訐らす者である。從前の饗應役も此術に中てられて迷惑せる向も許多しとか聞けば、貴方もな、善く其邊には注意られて成るべく彼が憎惡を買れぬ樣、一方には上樣御外聞、又一方には其身の立場、或は成り難き堪忍の場も有るかは知らぬも、其處をば深く堪へ負せて。其も唯纔かに三日が程。萬事は拙者等も含み居れば。と辭を盡されての意見の數々。親切は又た身に沁み徹る。此の身に沁る親切と教訓とに絆されて、今日限りの御役御免の覺悟の臍をも其場には言出し難ねて、殿は悄々と歸邸られたが。想へば念ふ程、其言謎語に似たりと雖も吾身の上に關れる事たるは明瞭である。固より讒言！無きをも有ると——善きをも惡しと——譖つて誣る、陷擠るゝとは勿論なれども。其義ならば何故又た其義と男らしうも打出しては言はぬぞ。第一其の不足とは、金銀か。意恨とは、彼の喧嘩か。或は吾を亡き者にと云ふは、主稅が事か。と然無きだに疑惑と嫉妬と、胸の炎は宛然燃ゆるが樣である内匠殿は、急ぎ其の主稅を召されて、前夜からの始末と云ふを鞠訊された。

有るにも有られぬは彼れ主税である。然く迄の殿が御難義に爲らうとも、又た其れ迄の猜疑を受けやうとも夢にも思はぬ。なれど承はれば又た御道理で、事實に於ては「主と親とが異議さへ無くば」と言たのに相違は無い。あゝ苟初の方便から箇程の大事！此の口の過を申し釋くには切腹――と迄は思ひ詰めたが。然るにても此儘では。と玆に初て彼の夜の顚末を委細く語つて、涙の間から、

「殿樣――甚麼との申し譯とてござりませぬ！」

漸々に脣を解かれた殿は、深い〱慨息で、

「……然樣か喃う。予も然樣とも存じたが、養子と云うで萬一其方が氣が迷うたかと――。委細は分曉つた。こりや其方を徒だ自己が所有に爲うと云ふ其の口實の虛僞じや喃。――吁、善う判明た。」

再た目を瞑ぢて、手を胸にして、深き思案に沈まれる。

「殿樣！恐れ入りますが、――私、私に御暇を!!」

其言をば屈托で御耳に入らぬか、再もや太息で、

「……相州は、成るべく彼奴が憎惡を買ぬ樣にと忠告れたが。――予も喃。唯一個の其方を倚てまで、身の安全を冀はうとは。――殊に素奴めは從前も那の譏口で多くの者を惱めたと云ふ。――到底も棄て措けぬ！」

主税は喫驚いた。吾に言れるのか、御獨語かは分らぬが。兎に角其の御意の中には決然たる覺悟の臍てふも微見えるので、

「殿、殿樣、其りや協りませぬ。御前樣が然樣の事、御勿體ない。――唯私に、――右御暇を……。」

注視ても、殿は看向も爲れぬ。

「……家來の手抔！予は、予が肚裏に在る……。」　と倘だ御獨語。

「いや其は協りませぬ義で！」　と既う一生懸命、御傍に倚ると。

「協らぬ！協らぬ！其方等の小腕で！控へて居れ。――暇も何も決して恇んぞ！」

（三十八）

然らぬだに昨日の騷動。今日の殿が御血色。又た今の御前での主税への御意。事件こそ有れと息を凝して、固唾を呑むで、其の委細を御次の小陰で、餘所ながらではあるが承はつたる近習役の大石瀨左衞門。ゝ、もう大童の血眼で御殿を出るなり堀部が宅へ駈附けた。

「安兵衛在るか。大事じや、大事じやッ！」

折節、昨日の押取刀の連中は皆な此家に居た。然も評議の最中である。――聲を聞くより一番に飛で出たのが近松勘六、

「やッ瀬左、何事起つたか？」

瀬左衛門は玄關からつか〳〵、座敷の眞中に撞乎と坐して、肩頭からの太息、眼を瞋かして、

「おう衆も居る。――今伺へば殿は那の上野の老奴、一刀にと被仰れる樣じや。こりや衆甚麼と爲る?!」

愕焉と瞑同す、眼の下から。「一刀に？」と何れも覺えず叫むだ。就中安兵衛、

「彌然樣爲ッたか。むゝ、もう是非無い。殿樣御手迄もじや。が、其は明日、殿中かな？」

「ぢやらうが、俺、其處迄は得聞かなんだで………。」と膝を寄るは早水である。瀬左衛門は拳頭を叩いて、

「主税にじや。――那の童にじやッ！」

童とは、と衆の瞳子は更に動搖いた。

頑童じや！那奴、俺同家じやが可憎い奴！殿樣を其樣な境遇に陷いたも那奴じやわ！」

と彼は其の拳頭ではら〳〵と落る憤涙を拭つて、

「那奴、昨夜、本所に行せたな。――行せをッて那の老奴が養子に爲るたら云ふ約束して、殿樣御目を眩まかいて、今日あの御出仕を勸告たじや。

殿樣は、昨日の那の事！もう乃公は御役は可厭じや。御免願うて隱居する。御弟ご樣御家督と被仰れたのを。那奴め。いゝ仔細おざらしやりませぬ。唯今然樣の御義なされては御家に障ります。今日は是非御出仕。但し如何樣の義おざらうとも唯御取合なされずに。と諄〳〵辯云うたで殿も然樣かと、御出仕られて見ると、大齟齬じや。

甚麼でも老奴は、主税寄越せと云ふ。殿は又た遣られぬと云うで、大論判爲られたげな。其の論判の終果が、苛い無禮な所爲したらうずで。其で殿も彌との御腹も決着られた。畢竟ずるにこりや皆主税が爲す業じや。可憎い奴の！」

「ぢやが、其れも不通の義じや喃う。――第一が養子？其義も異なじやが。主税殿とて幼穉に似合ぬ分別者。平生からの殿樣思ひ。其人が自儘に他家へ養子の約束する？父でを甚麼とお爲れる氣かな。」

と安兵衛は眉根を顰せる。其の肯けぬ面に同意らしきは近松で、

「殿は其事を什麼御意なされた？」

「其いがじや！」　と瀬左衛門は齒を咬切つて、

「餘義ない境遇で不知其の養子の義と、彼め抜けくと言譯する。殿樣が殿樣じやが。然樣か、予も然樣あるべき筋と思ふたが。と別に御叱責も有らしやれぬ。俺、眞實齒癢うて！」

と又たぼろく流涕て、

「ぢやが殿は殿。唯だ那奴め、俺が一家で、然樣な不義の働きをッて、其を大目に見遁い措ては主等兎もあれ、俺が立たんで。俺、血祭に奴打斬つて、卽ぐ其足で本所へ行ぐ。衆も同意か?!」

「いや手强？主枕殿に手强なし！父でも居らるゝ。成敗は內藏殿任せ。無法爲な。」　年長なり、幾分かの分別もある早水と安兵衛、慌遽てる如くに彼が不法を押禁めると。近松も、先づくと、其の猛りに吼るを推和める。

「ぢや什麼する?!」　と又た眼を苛眼げる。

「待よ、お主も。熟と評議をして寬れ。本所なりや明日登城前まで。――夜は長い。」

言ふを聞くなり、暴猪は蹶乎と起つた、

「えッ夜長、――評議じやと？えいお主等、幾許でも評議せい！百年でも評議せい！瀬左衛門其の仲間にや入れぬわい。緩りと爲い！」

彼は突如に疊を蹴立てゝ玄關へ。「それッ」、と四五人は追懸けたが、最う怒毛の影も無かつた。

（三十九）

昨夜の寒氣に引反りたる今日の温味、小半合の醉心地さへ別て春なる、此處一刻千金といふ貧乏德利の枕の夢を突如に叩き破られたは吉良家の門番で、

「あ、はいく。誰方樣で？」

戶外では門の潜戶を破れよと叩く。

「明ろく！淺野から來た！」

淺野が使者は昨夜も歸去が八時半だ。と門番は喪氣了した。

「只今明けます。――御使者、御名前は？」

「名前は要らん。──明ろ〳〵！」

門番は吃驚いた、何所の國にか大名使の恁麼横風な權柄附と云ふがあるものか。爛酔てでも居るのか？と物見の穴窓を密と明ると、來た者の手に持たは二巴の騎馬提灯。はゝあと感つた。此は今日ちら〳〵と噂のあつた御養子とかの大石殿、其人が渡せられた。其れで此の明ろ〳〵か。解めたわい。と、

「大石樣で？」

「むゝ大石じや。疾う明ろ！」

今は疑ふ所も無しと門番は小門を開く。と、又た吃驚いた！一應の會釋でもあるかと想ひの外なる、其の首根子を無手と捉へて、彼の來た漢子は、

「主人の居間へ案内しろ！」

彼は唯だ打魂消て、「ひやア──‼」

一人は辛くも摺抜けて、「狼藉者──‼」

此の叫喚は夜闇の廣場に谽谺を做して響いたのである。今や御奥の用向を終つて、内玄關の扃をがらがらと抜けた松原佐仲は、狼藉と聞くなら肉は戰慄たが、其でも氣丈に、

「詰合の衆、ソレ出合へ！」

自己は一散に遁入らむとする帶際を、無慘、疾風の如くに飛び來つた甚麼者にか攫まれた。

「わア赦せ──‼」

「汝、汝は先度に看覺えのある松原佐仲じやな。汝にも意恨は有る。さ主人が居間へ案内しろ。押並べて首を取る。大石瀨左衛門貰ひに來た！」

遣ると云つては猫兒一頭すら澁面をする松原佐仲が。況て其の掛替の無き大事な首ィ貰はれると云ふのであるから、命を先途と叫いつ擬掻いた。瀨左衛門は又た這奴を遁走しては當の目的の上野の居間が知れぬから、と手の下に捉て押へて案内にと云ふもので、攫むだ帶を遮二無二牽く。一方は牽く、一方は擬掻く。鉢附の板より弗と斷れたる錣にあらで、博多の帶は何時の間にかは空解けのずる〳〵と此方の手に殘る。這！無念なと。再た飛び蒐つて其の襟元を更に掴むと、其も蹝脱け！赤裸の佐仲は其色したる虎の尾の餘布を長くも引いて、鰐の口を纔に遁れて命辛ら〲逃延びた。

話頭轉つて、大石主税は、頴やく殿の御鬱憤を和めて、御前を退出つて御茶の間まで來ると、其所に出會したのは近松勘六。

「や、主税殿！」

「おゝ勘六殿。什麼お爲れたのじや？」

「いやお同姓の瀨左衞門がな………。」

主税ははいゝッと。――其は彼の一徹短慮の向不見と云ふのを熟く知るからで。「什麼爲ました？」と匆忙しく問うと、彼の始末である。やれゝ逸まつた、其様な事しては手筈が差違う。彼爺を討つには又た討つ様な手段が要る。其の手段は今吾が胸裏に――今宵を過さず、出向いて。と思つたものを！吁、殘念な！

其は兎も角も、那の暴猪武者が何様なる狼藉を爲るか。――棄て置けず。と主税は一散に駆け着けた。韀に鐙を、宙を飛して………。

騎り着けて見ると、果せる哉、瀨左衞門は今死物狂ひ！玄關の式臺の眞中央に突立ち上つて、彼が所好める二尺六寸、大彈平を眞額には振冠つては居るものゝ、本意どころかは、若黨足輕雜人原の突棒刺叉六尺棒に取圍まれて、額からは大汗、呼吸も險しく、今少時くせば罟に罹れる雉子の羽掻綾。其のみかは弦音も爲る。矢も飛んで來る。提灯松明、四邊は宛然白晝の氣色で、逃るも退くも彼は旣う叶らぬ所謂る九死の地！主税は慌てる迄に驚愕いた。

（四 十）

危險きは征矢！「矢留！矢留！」と主税は喚ぶなり、飜然と馬から下立つて驀地に彼の玄關に駈上がる。其を瀨左衞門が味方と見たのか、飃と音して又た一條の矢は危ふく身を掠めて過ぎた。

「やあ聊爾！我等は主税。御存知の者。其れなる狂人を召捕へに參つた者。御手敵ひするではござらぬ。――佐仲殿、佐仲殿！」

佐仲を呼むだが、其者は影も見せずに、倒つて一個の貴公子めける若人が内玄關近く立ち現はれた。年齡は十九か二十才。色の蒼白い、細面の、眼眦の吊上つた。身には白綾の無垢、銀造りの脇指を腰にして、手には角製の半弓を持つ。弦音の主は確に其人である。

「汝は主税じやな。――身は左兵衞じやぞ！」

と蛇と疾視れる。扨は御存知か、と思つたが此方は不識ぬので、

「あッ若殿で。――恐れ入りましたる義に御座ります。家中の狂人、何と心得ましたるか狼藉の段、平に御免されの程、主税、偏に御謝罪を申し上げまする。」　と身を屈めて一

揖するど。

「何と心得てとは胡亂じやぞ。其處な奴めは先刻から意趣を言罵るは！」

「如何な義を申しましたるかは。——其處は其の狂人故…………。」

「狂人で無い。確に意趣ある奴。——射止るは容易なれども活ながらの糺明をと思ふで時刻も延びた。——今繩に繋げて見する。待て！」

再び弦に矢を上さるゝ。引絞られては其迄であると主税は慌遽て、

「狂人々々！狂人に相違ござらぬ。狂人に御弓矢は近頃御卑怯。御家名の汚穢に爲りまするぞ！」

「甚麼じや家名にじや！父の首をと云ふ奴を身が手に掛るが何故汚穢じや?!」

と鏃は主税の方へ向く。主税は驚いた。

「やあ我等をか！」

「應？狂人に卑怯なら其方に振舞ふ。受て見い！」

此矢にこそ大に意趣がある。昨夜養子と粗決つた這奴が此家に入る以上は、御自分に於ける父ごが愛も自然ら分割れる道理。倖ひの此時機を！と云ふ遁すまじき嫉妬の箭先、一念

を籠めたと謂ふのであるから眼の据方も拳頭の固も頗ぶる凄愴い。とは知らぬが、此方は身に大望がある。當の敵でも無き此若殿の箭面に立せらるるは不本意とも、難義とも！騙すに術無し、と猝に心に泛むだのは同じく其の昨夜の一義で、

「兄上御無體じやッ。私は既う當家御養子。御義弟の私を其樣な御矢に掛られますか?!」

左方の袖を射向にして弦音と共に身を躱むとする。

「えい!!」　と云ふ切聲の聞えたは彼の式臺の上、「あッ！」と叫ぶ動搖と同時に猛虎の如くに咆つて來たのは彼の瀨左衛門、

「汝果然て！此刀吃へ!!」

打下す大彈平に、主税は馬手の肩頭から袈裟掛か、と思ふと然は無くて飜然と外した。切尖は小砂利を斫て、火は潑と發つ。

「あ痛！」　と瀨左衛門は小膝を突いた。

左兵衛殿が箭は過つて其敵ならぬ彼が太腿を射たのである。

兩敵に介まれた主税は最う絶體絶命。今は此迄、踏込んで！と踏出す突端、

「やア逸まるな主税。左兵衛何爲るぞ。待て、待て、待て！」

と駈出られたは上野殿で、御後に續くは猶ほ彼の赤裸々の儘なる松原佐仲、

「若殿、御意！主税殿は御敵ではござりませぬ。御お御弓矢など埒も無い。御お止り……。」

と袂に縋る。夜討曾我の大藤内の正身が正で出たので、左兵衛殿も苦々しさと、場合の其時機で無きのを見られたか、

「痴呆奴が！」　いゝとぷいと御奥へ。

其れにも管はず上野殿は、「主税かよ」。と寄らうと爲られる。見るなり瀬左衛門は勃立うと爲る。なれども痛手、又た小膝を突く。

「いや殿樣、狂犬、狂犬。あの狂犬めが目と牙は。――おやで今夜は協りませぬ。明日、明日、明日の晩！喃ア主税樣、あの一義、御納得じやな。今夜御入來のところを見まするとゝ？」

主税も是非なく輕く首肯く。

「いや其義なりや彌明晩の事。――明晩は此方から御迎者を進せます。――今夜はく。」

と左仲は其主を傍へも寄せず、遮二無二押立て奥へと行く。

其跡を見送り果てゝ、遺恨の涙に掻暮るゝのは主税の立姿。わゝと號泣くのは箭傷に傷いただ瀬左衛門、

「俺、死たい！」、

（四十一）

翌れば三月十三日。此の曉方から降り出した雨は、些と暴風雨がゝつた凄味を帶びて、南風さへ加はつて荒く頻吹く。其れでも今日は上樣が兩使との御對顏、且は御能の惣登城といふ其日であるから、朝六半時の大手の大下馬には、諸家諸役人の惣供は混多返して、馬は嘶く、人は騷擾く、仲間小者は喧嘩をする、其間から名代の甘酒「暖かいのく」と「大福餅」とは聲を嗄らして客を呼ぶ。

「こりや一杯呉りやれ。」

「は、生姜を入れますか。」

「いや其儘で好い。」

がいゝがぶりと飲むでは、代り、又た代り。連續に五杯までを息も吐ずに仰飲り着けて、

「あ、些と此れで……。」

と胸を按する。呆れた老爺は笠の下から差覗くと、其人は黒羽二重の五所紋に茶宇の袴の

色美き優若衆。

「好う召しますな。今一杯進げますか。」

「否や最う可い。――時に爺、淺野殿は未だ御登城に爲らしやらぬか喃？」

「はあ、淺野樣は。」と茶碗を拭き〴〵、

「あの内匠樣なりや那りや御勅使樣御供でござりましよ。――其れなりや五つ半時で、今一時でござります。」

「あ、然樣か。辱けない。――おう爺、此銀取らす……。」

豆銀一個を懷中から撈り出して、釣錢といふに耳をも假さず、辰の口を指して一散に！

彼は主稅である。主稅は昨夜瀨左衛門を吉良の屋敷より介抱け出して、或る町醫の外科を叩きて、其の太腿の箭疵を縫鍼せたが。其れが看護と、心中の機密を語ると、醫師が口止の神文などに夜は早くも明けて、交睫とも爲で今來たのであるが、

來る途中も、唯其心に願ふところは「事莫れかし！」と云ふ其の一條。昨夜の殿が御氣色では必然今日の傳奏か、若くは殿中で、彼れ上野を刃傷すに相違無いのである。刃傷しては大事――御家は破滅！然ればとて諫めたとて聽かれぬ殿を、強て諫むるも無益の所爲。

寧ろ我が代つて羈刺うれば、縱ひ何程かの御咎はあらむも淺野家御家名と迄の事は無くして、其の御本意も立つと云ふもの。目下の我が爲すべき責務は唯だ此の一途で有る。と彼は其の養子の義から徒爾に居らで協はぬ腹を、徹妙くも此の御身代にと料見の臍を据え變へた。

内匠殿も同じく其の肚裏で。今日を最期！と鐵砲洲の御住居を出立たれた。勿論、其の意裏といふのは秘めて誰にも語られぬが、大概の處をば昨夜彼の瀨左衛門が嗅いたので、彌兵衛も總右衛門も聞知つてゐる。彼等は抑止た。今日の御出仕は平に御無用。御家の爲め是非に一日御引籠り。と詰掛け〴〵强諫たのであるが、例の殿は聽納られぬ、

「予には又た予の料見が有る。無用を申すな。今日は太切の日じや！」

其の「太切」とは甚麼か分解ぬが。御對顏に御能とあるから、御役に取ては實に太切の日と有るのである。然し殿の太切とは其の武士の意地、彼の惡物を斬つて世の害毒を鋤くと。

又一つには、幼稚の主稅を無理强に壓着て、養子の名をもて彼を窘苦め、我をも騙詐さうと爲た其の眼前の意恨とで。此の突詰られた太切の日を一日空に過されたら、或は我れ發狂するかも知れぬとまで自分ながら思はれた。――思はれたのが卽ち發狂?! 其の變異し

御心にも、主税は什麼したか、彼には唯一目。と待れたが、待れたが昨夜は竟に歸らぬので。今はと言ふので其の屋敷を出られたのが天明の六つ半。恰も主税が大下馬で、殿の御登城を案じて聞合せた時が其の時刻！

「殿樣!!」

と大名小路の或る長屋下から待合した主税は出たのである。看ると、赤合羽に竹子笠、掲り股立に足袋跣。袖の露やら涙やら、

「殿樣、私でござります………。」

御駕は忽ちひゝゝたと止つて、扃は啓いた。

「おう其方か。逢ひたう有つた。好う參つて呉れた！」

粟津の松原で面を會せた木曾殿に今井の昔日も恁う有つたか。契りは朽せざりける思ひに思はれた主從兩個は、互迭に手に手を取り交して、霎時は潸然と！

（四十二）

御城にこそ陪臣たる者、御玄關の式臺を上ること一步も協はぬが、傳奏屋敷は然は無くて、御馳走役たる大名の詰所に、用とし云へば、其の供伴の中より出入ることも叶るのである。

主税も今や此の主用を托附けに、内匠殿が坐席の外、廊下の出入口に控へて居た。が、其眼は勿論、入り出る諸役人、殊には高家の御上りと云ふ方に注がれてゐる。

其の高家の中で第一に參向されたのが、月番の畠山殿、次が品川殿、其から大友殿。――吉良殿は什麼せられたのか、一向見えぬ。――左右する中に最う五時の時計。

「主税。」　と召ばれた。其は殿である。

「は。」と應へて御傍に倚ると。太と御懷慕し氣に、

「熟う、顏見せて呉れ………。」

「あッ。」とは言つたが、最う主税には其後句が出ぬ。殿も此を最期であらうが、此方も其れが一生の御永訣と、其の悲さが胸に痞えて、涙に逼つて、不覺の露のみ袂に落つる。殿も唯ほろ〳〵との御涙で、

「……昨夜の樣では最う逢へぬと思うたが、恁う顏見れば滿足じや。――殊には其方が心中も見た。過分じやぞ。――過分は過分に思ふなれども唯其の、手指は相成らぬぞよ。――其方に怪我あらせては予が素志も空に爲る。――豈夫に其方も予が爲る事を無に爲うとも爲まいので。な、最う退れ。――彌兵衛に總右、其餘も見え隱れに伴き參つたとも存ずる

が、仔細あつて彼等に會はぬ。唯此義は予一人の心として、後々の事は父の內藏、——熟う賴んだぞと申し聞け。——あ、名殘は惜いが喃う。退れ。——退れ。」

眤と注視られた其眼を逸して、又た潸然との落淚である。

什麼爲やう歟とは主税が現下の胸裏。此處で抗爭ふ？其は得策で無い。然ればとて御意に隨ふ？如何して此場が外さるべきで。此の御返辭と身の處置とには彼も確地と當惑したが。

可也！と云ふ匆速の判斷で、

「必得ました。では私は退出ります。何卒御見事に遊ばしまして………。」

「おゝ聽濟んだが。其で安堵じや。——見事に斬て見する。懸念に及ばぬ………。」

血眼ながら莞爾と笑はれた其の悽愴さ。覺悟を決めた主税が腹にも犇と徹へて恐怖しさには、はッと憚伏すと、

同時に此の詰所の小陰を忍足に出て。首を縮めて舌額しつゝ、急歩に奧を目掛けて行く者がある。雨天の薄暗い廊下とて熟くは見えぬが、其の背影は六十餘の年配の一個の老人。其影が或る場所で消えたかと思ふと、坊主の一人は此方の詰所に馳て來た、

「赤穗樣。上州樣が御用談とござります。」

現下とて有繫に喫驚いた殿は、行んとする坊主を喚止められた、

「上州、何時の間に御見やれた？」

「過刻でござります。——御屋敷から殿中へ、其れから此方へで、唯今御詰所にござります。」

「然て、表門から渡せられたか。」

「いや御裏口からの樣にござります。」

「ふう、裏手とは？」

裏口とはと異しまれたが、

「兎に角參らう。——卽時と申せ。」と內匠殿は起立ながら、然ら氣なき態に主税を一目。行れては溜らぬ主税、

「あゝ殿樣！」

慌遽て其れを抑止やうと爲る。

「もう御時刻もござりませぬ。御急の御用なさうで。」

「あ然樣か。——主税、唯今申した事をな！」

再た一瞥して突と行かれる。
「あゝ」と言つたが、追ふには追れず。追ねば一大事！寧そ、噫、もう然う爲ては!! 抑留る、と決心して主税が駈出さうと爲た時には、殿の影は既や廊下に無かつた。

（四十三）

ござんなれ幸の此の用談、天の與ふる好機會！と今は一途の内匠殿は彼の詰所に來て見られると、個は什麼、我が目的た上野奴は遙かの奥に座を占めて居る、其前には畠山殿、大友殿、品川殿。猶其外にも大目附の仙石伯耆守、御目附の多門傳八郎、甲乙と四五人は居られて。固より廣い間で無いのであるから足の踏所も無い程である。
内匠殿も此には退却した。と看るなり吉良殿は、
「内匠、其、其座へ。此方には相成らぬ。其へ坐りやれ！」
分曉ぬが「はツ」と入口へ衝居られると。
「御身は今日は留守番じや。熟と此の明巣に御番の爲やれ。」
と權柄附である。其を苦々しと見た畠山殿は調和し心で、
「いや内匠殿、貴所は何やら不加減さうな。仍て今日は登營の止られて、當所に在つて緩

々療養をと、唯今上州も言はるゝじや。な、然樣今は心得られて………。」
と目顔で知らする。其が急立つ内匠殿には最う其の意衷も解れぬので、
「否や拙者病氣でござらぬ。異な義を申さるゝ！」
と突と倚うと爲る。倚るのは即ち一擊！といふ其覺悟！
「いや協らぬ。起つこと相成らぬ。其方は病者。病者も病者、勤仕の叶らぬ健忘じや。若老耄じや！。」
「何!!」と云ふ袖を多門は取止て、
「御待ちやれ内匠！——ぢやが上州も餘り御口が過ぎ申さう。如何な御意趣か？」と屹と咎めた。吉良殿は得たりと云ふ面、
「意趣は有る。ふゝ無うでかい。今日は御對顔に御能。御馳走役たる者は正六時の御門開を合圖に登營して、兩使御休息の間の掃除萬端、續いて御能の座所、殊に當日の雨天とてさらば役者共が樂屋の出入り、御雨覆の模樣、塀重門の開閉までも熟う氣の附て、越度無きやうにと豫ては精々、呉れぐも申し達し置いたのに。其れが如何じやい？」　扇で内匠殿が面を遙に指して、

「既や時刻の、五つ半にも爲らうといふ頃のそりと來やれて、詰所に引籠うで、我等方へは屆も無い。——然うとは知らず、此方は定刻に出て、右等の萬事、什麼かと見ると、可哀や左京が獨個出やれて、目鼻同いて騒いで居やる。——餘りに見離ねて愚老も手傳うて、諸事先づ差支へ無き迄に指圖濟いて、扨て戻つて來て見れば。什麼じや各位。——此、こ此の內匠はの、——秘藏の兒小姓を當所まで引連れて、昨夜の痴話の未だ爲足いでか、泣み笑ひみ狂うて居やる。まゝ沙汰の限り喃う。——見られい那の顏を。淚の痕がある。其りや其の痴話けて居た其の痴呆の其、其の證據じやは！傳八、是れでもか？當日御式總掛りたる拙者が指圖を忘却了うて、其の兒小姓めに現抜いて、役義も何も放擲かすとは、こりや右の健忘——若老耄じやあろまいか。——いや健忘。未だ好い名のじや。——其事から云はゞ、腑抜！……腑抜!!……腑抜士じやは。あはゝゝ!!——伯州如何じや、愚老が言、——過言でもあるまいが?!」

疊み掛けての雜言に然らでもの內匠殿形相は最う形容に語も無い。其の頰桁！と飛蒐らうと爲る。なれど袂は利かぬ。間は隔てゝ居る。無念！無念!! 無むゝゝ無念!!!——でも猶走り寄うと爲れる！

其を人々は扯止め樣とする。哮る。模掻く。厭据ゆる。悶着又た悶着の其又た耳許に。

「あゝ待た！皆みみ皆出合て呉れ。腹はは腹！切腹！切腹!!」

其は坊主の貞雅が叫聲で、彼は主稅の切腹と踹るのを、其の右方の手に辛く執り附て、囈きつ喚きつ連りに援護を呼ぶのである。

（四十四）

騒擾の紛れに上野は脱て出られる、兩使は既や登營とある、諸役人は退散する。目指した敵手を取遁した內匠殿は獨個彼の空巢に遺棄されて、泣頽折れる主稅を扶けて、其日の午剋に鐵砲洲の屋敷に復歸られた。——悄乎と………。

其の無念を慰藉め離ねて、我さへも傍杖を撃たれた心地で、憤然として登城に及むだのは目附の多門傳八郞。——殘念である！不法である！其の殘念は我が私の意趣として姑く堪へむも、其れが不法は自然公儀御面目にも關はる次第。御目代たる我が横目役の職分に對しても內分の沙汰として打棄て置く理には參らぬ仕義。と彼は早や其の千石高を抛出す覺悟で、早途御用部屋へ推參して、彼の內匠殿に對する吉良殿が無禮の段々、現在の儘の目擊通りを逐一に申達して、

「近頃以て怪しからぬ義でござる！」

「又た那の老人、然樣の不始末を致したかい。いや困却た惡癖………。」

と、眉を顰せられるは彼の土屋相州、

「甚麼としたもので御座らう喃？」

と同列を看顧られる。

甚麼と爲るとて、實際甚麼との手の下し方も無いのである。謂ふ迄も無い彼れ上野は高家の筆頭、又た當日の惣御掛り。上樣の御覺えも斜ならぬのに、大奥は一杯、兩使にも御入魂、御式萬端は鵜で呑むで居て。彼無からんか今日の御禮にも直ぐ差障へる、と云ふ古老の老狸。其處は老中も一目を置く殿中での利役者で、淺野も可哀いが背に腹は替られぬと事實がある以上に。又た聞けば一方にも其落度は有る。正六時の御門開に登營といふのを縱や傳達が無いからとて五時過に傳奏へ來て詰所の火桶に烘つて居る杯は是れ太だ怠慢の沙汰。此を上聽に達したならば一も二も無く。內匠義心得方宜しからず、御役儀等閑、不束の次第と爲るは眼前である。其れ以て笑止の次第。殊には御吉事の最中と云ふに御咎の者を出す、彼が本家たる藝州の所思も氣毒とあるに、京都御聞えも妙ならぬから、此は如

何でざらう、今日の事は後日の詮議、濟んだる義は姑づ其儘として、明日の御儀式だけ勤むる樣にと內匠へ內々の使者遣はされては？兎角は明日一日じや。其程の堪忍は彼にも能らう、先づ有耶無耶の沙汰が專一と云ふ。姑息と云へば姑息であるが、其の姑に虐待られる嫁を、今一時の辛抱、辛抱と嫉妬口が和める格で、倦ねた老中方の評議も其處に一致する。相州は固より然有り度いのであるから、多門も是非なく口を噤める。——其處へ御用で來合せたのが、御留守居番の梶川與惣兵衛。

「與惣右、今聞きやる通りじや。其方內匠方へ行て吳りやらぬか………。」

此の御用繁中、迷惑なとは思つたが、其處は他ならぬ相摸殿の御依賴。又た淺野家とも彼の撫川の戸川家からの緣合で、無地不識ぬとも無い交である。

「如何にも御沙汰に隨ひまして、——但し何樣に申しましてな？」

「いや其處は御主が作略でよ。」

相州も弱られたらうが、梶川も窮つた、

「手前作略と申しましても。——然し精々御內意の程は傳へませう。」

「內意と云ふでもの、當部屋の義などは餘り申さん樣に喃う。內匠は當世に似ぬ一風人じ

や。頼母しい氣象はあるが又た其丈けに我を立てる。――で部屋など初手から云ふと、權柄か抔に存じて故障を申さうも知れぬで喃。――先づは其方が好意かな。傳八から委細を聞いて、取敢へず見舞に來た――などか喃う……。」

御留守居番と云へば御廣敷向、御廣敷と云へば大奥所屬で、女中相手の勤仕であるから梶川與惣兵衛、決して頑固な、人情を解せぬ、融通の利かぬ男では無い。相州が淺野家との内縁を察して、助勢を爲ないにも其の役向に對して大いに難からるゝ所有るをも酌量けて。今一つは、昔日の戸川家の報恩といふ自分も氣に爲つて、注文は難かしいが、役目は難義だが、其處で異議無く領承けた。

四十七八の豐肥と肥つた、赭顏の、身材の偉い、辯口の巧い、壓手の利く老爺である。相州も此男ならばと思はれた。

如何にも梶川、使命をば見事に果したのであるが。其果したのが結局は大騷動の基。噫、誰知明旦晴與雨、況是後生是又非で、一寸先は暗黒といふのか、誰が言つたか、依様山嶽的眞理であつた。

（四十五）

「箇樣な際には酒じやく。酒、酒！飲めば甘露も馨くやらむで、氣も晴々する。殿も御過しやれ、愚老も頂かう。」

と膝を崩し掛けた與惣兵衛は手にした盃をぐいッと干して、額をびいッしやり、傍に居た堀部彌兵衛へ、

「老人殿、一盞進らう。」　と獨個莞爾々々。

霎刻からの此人が談話は、實意も見えて、親切も籠つて、辭てでは無く、眞身に我殿の身上を思ふても呉れられる。此の調子に引立られて、殿の御鬱胸も自然と融解て、明日一日を御無事ともあらば、此酒は今死ぬ病人への獨參湯。其ぞ淺野家再生の恩と云ふのを此人に被るのである。然樣思ふと何やら此の今指された盃が、鎭守の稲荷の神酒でも賜はる樣な心がして、飲ぬ彌兵衛も泌々尊くも辱なくも、又た嬉しくて、

「は、今晩は下戸の拙者も澤山頂戴致します。誠に唯今迄の御教訓、有難く拜聽仕つりよりまして…………。」

と、恁麼時にも涙を拭くのが老人の僻。與惣兵衛は彌元氣で、

「はゝ何のさ、其樣な禮にも及ばうかい。――唯だ狂犬がのう、吠たとて啀めばとて前方

が犬なりや、縦し些ばアり咬れたとて腹も立ちませぬ。いや立ぬじや無い、立られぬのじや。究竟人間と犬、――痴呆臭うて。――で先刻も多門に言ひました。貴方、其様に怒るのは尚だ若輩と。――其れは那の傳八は横目。往來を歩くにも喃う眞直に矩尺打つて、曲り歪みを一寸も遁さぬ目附の職分としては然もでざらうが喃、物事は然う直のみでは行きませぬ。屏風を御見やれ、あの曲折た所にさ、其妙が有る。――で唯だ其極所は、根締―胸裏にじや喃。萬一の時に節義を謬らぬ。其れ丈けじや。」

彼の舌は愈旋つて、膝は益伸し出されて、受けた盃を滴々と飜しくて、

「いや、勤向の事などを箇條な席で申しては相濟ぬがな。我等が御廣敷向抔と來たなりや其は〳〵で、全體の相手が女中じやろ。いや其の御臺所の世話など云ふては話に爲らぬ。――味噌が甘い、醤油が鹹い、香物が硬い、汁實が軟い。いや羹附の液が多いとか、燒物の魚が小さいとか、飯の焦から茶の澁いのまで不滿が出る。いや其僻又た吃ふは〳〵。蕃茄なりや一人一個宛、大根なりや三本か。其れ程に吃ひ置きながら些と何かの不足があると、御末女頭めが御鈴間へ來て、恁う云ふ口吻で。今朝は一同の女、御飯を好う食りませぬ、自然勤向にも障りまするど其の趣進達も致さねば爲らぬ事に相成ります、右各様御心得迄にと恁う遣りをるな。其れで眞實吃はぬのかと取調ぶれば、甚麽の、右の蕃茄一個じや。――蕃茄一個をぺゝゝろり平げ置きながら右の不足じや。はゝはゝ。喃、什麽じや？で孔子も申された、女子と小人とは育ひ難し！あゝ名言じやな。で近來は一切取合ぬ。其等の苦情は聞流し、脅喝は門前拂と決め置くじやが。――猶且、あゝ其れでも難いな。是れが浮世の勤！――其の浮世に立交はれば、彼等の女子や小人とも其馬を合せて行かねば協らぬ。――殿も然樣じや。あの本所の爺などに虐らるゝと、そりや御腹も立うがの、實の申せば好い御稽古じや。――浮世の味を知る、其も御學問の一つじやよ。」

異見だか、洒落だか、醉ての愚痴だか。砂糖湯の中に熊膽を交せて、其れを生姜酢で飲ませる樣な。苦い、甘い、辛い、酸ぱい、妙な味で得も言はれぬ加減に和られて。殿はと見ると、半は笑つて、半は苦つて、其でも御胸が此の一劑で開けたのか、御盃も三つ四つ進る。御酌に立つた主税は世にも心底嬉しくて甲斐々々しく立廻る。與惣爺樣は猶連續に傾けながら、

「むゝ其方が主税かの。――あゝ内藏が子で。むゝ天晴の器量々々。――あゝ親父の内藏

助………。」

彼が當地に居たならば、と言うと爲たのを、什麼思つたか急に氣を變へて、

「あ、內藏が、――內藏には我等親類の戶川が家も苛い世話に爲り申したよ。其を思へば他事とも存せぬで。殿も御知りやる現に那の常松院の婆殿のう。頭梁強くて家を倒す。――其の老婆が倒し掛けた彼の家を內藏が支柱で再た興起いて呉れられた。――いや短氣は損氣、彼件が好い手本ぢやで。――喃う內匠殿、御手前も意趣もあらうが、さ、、らり流いて、明日は勗めて。――何の女子と小人じや。蕃茄の代に金の百兩も叩き附けて御覽じろ、老爺、へい、なく\/じや………。」

もう眼も散漫、舌頭も異しい。其に對する內匠殿の面は寥しい笑、

「然らば明日は、――御身が異見に附き申さうか喃?」

「其れ、それ、其れじや。――既に相州と云ふ味方は有る。伯州も傳八も御身樣をば苛う案じて喃。其れには及ばずながら愚老もな、居ますするで。彼奴意地曲るとて然う勝手にはじや。はゝゝ安心なされて喃。――てゝりや彌兵衞、御分もじやよ、確乎せい。殿じやとて和藥云やらば灸もおませ。はゝゝゝゝ。明日は好いかな?」

「何分にも御助勢の程、偏に賴み上げまするで。はい。」

「承知、承知。何に多寡が三火目の辛抱。武士は腹さへ切るじや。明日一日の堪忍が協らぬとあらうかい。喃內匠殿!これ何故御返辭なされぬかな。――考案ては不可ん\/!然らば愚老御暇じや。――ほい又た飜れた。――ナニ今一盞?然あらば末期の盃か。いや緣喜でも無い鶴龜々々。」

（四十六）

昨日の風雨は夜の間に霽れて、仰げば高き千代田の城の松の樹梢、日も麗かに霞罩めて、今日は目出度き將軍家が兩使への御返答。三月十四日の當日となつた。

殿中の颯々きは昨日にも優つて、何しろ諸大名惣出仕と云ふのである。大廊下から大廣間、帝鑑に溜、柳の間と云ふ、御家門譜代外樣を言はず、國主城主定府を論せぬ大名席には、百萬石も素一（一萬石）の朱袍も一樣に摑み込れて、天神も蜻蛉も一個團塊。これも當代御威勢の致すところ、やあら目出度やと言祝ぎも敢へぬ萬歲に才藏然（諸大夫の大紋納豆烏帽子に、番士等の素袍侍烏帽子）たる諸役人等は、混多返して、何の伺彼の問合と、席暖まるに暇もあらざる御用繁の最中に。獨個詰所の猫脚火鉢を控へて、空嘘烟草をぱく\/、

りばくり！澁面か腹の工面か、眉の底から睚焉々〳〵と往交ふ人の影を注視て、然も不興氣にぶッ坐つて居るのは、彼の吉良殿！

今日の吉良殿は實に面白からぬ者でゐる。其も其の理、之を内にしては主税の戀、之を外にしては苞苴の金、全然鶍のはしにも棒にも掲らぬ空拂！此が釣好なら釣竿をへし折て、魚籠を毀して。合戰ならば、大將大童の、自暴を發して、無理攻の討死と云ふ始末。

吉良殿は考慮たのである。一昨日の夜、彼が家來の瀨左衛門とか云ふ狂奴が來て狼藉に及むだものゝ多分内匠は不知ぬであらう。不知ねばこそあれ後から慌遽て主税をも馳着させた理由。——其は十分彼は主税に未練はある。が猶我が所望を無下に拒否むとあらぬ心底は、其日の素振の萎靡れ返つたでも知れてある。然らば此上にの我が手段と云ふは什麽あらう。猶々此方の厚意を見する。——其の見する厚意とは外でも無い、彼が太く難澁の者にして居る殿中の諸事萬端を相役の左京に預けて、彼には手も下ろさせぬ。いや下させぬ而已では不可ぬ。此方が代つて其事を扱ふ。——凡そ此程にして芳志を運むで、其の好意と謂ふを見せたらば、彼とてもやはかと云ふので、其で其の出仕の時刻も傳達せぬ。爲ぬのも亦た山である。歡喜の不意擊は一層其の感が深いと云ふ知れるから！

恁く迄の心盡しを、什麽聞きなば彼は欣び且つ謝するであらう？木石と雖も喜び泣て、早速主税を我方に輸る、——此は然う無くては叶はぬ。必然然もあらう。微妙くも、と云ふので急々吉良殿は歸邸て來られると。——占得り！主税の影は既う彼の詰所に見えて居る。扨は？と胸先づ動悸くのを、跫音と與に僅に鎮めて、吉左右什麽と竊聞うと。個は怎麽、案外の始末である。——與れる處か彼等は我を討果すと云ふ。——是に於てか勃然たる歯を切つた上州は、可愛さ餘つた百倍の惡題口の返報に及むだものゝ其でも未だ斷念られぬ。今夜あたりは、主税を寄すか、金を越すか、彼の邸にも然樣目の盲えぬ木偶坊ばかりとも有るまいから流石に甚麽とか謝つても來やう。——來ぬと云ふ法は無い。——否や來で叶はぬ理であるから。——と待つたが〳〵、依樣土偶は土で、金も人も、悉皆梨も礫もで、夜は空しく明けた。其の空しく明けた日は即ち十四日！

其んなら彼奴彌御役御免だな。可也、御免なら御免で又た執り計らふ術がある。と血眼の吉良殿、急ぎ登城して聞合せると。其の願書も未だ出ぬと云ふ。——什麽爲たのであらう、人も寄さず、金も越さず、願書も出さず！と此に愈小焦燥が大焦燥と爲つて來て、我から失望を益々高めて、今は此方が氣でも狂ひさうな心地。——内匠！素奴、見えたら、汝、

汝、汝！什麼して與れう？と。其處で上州は彼の火鉢を斜に構へて、眼張つて淺野のあの字か、内匠のたの字か、甚麼でも見附たら！と烟の出るほど黑焦になつて居る。處へ出仕て來られたのが、内匠殿！

（四十七）

折柄、其處へ、例の急步で來掛つたのが彼の梶川の與惣老人、内匠殿も其と見るなり步を停められると、老人は忙はしく摺寄つて、

「いや殿。好うぞ。」と彼の面は如何にも其の本意あり氣に打笑まれる。

「おゝ御身も。」と此方も何氣なき挨拶を返して、行うと爲られると。

「……今日は。御宜しいかな。——此、此の御工合は？」

彼は目をもて其と知せて、暗に其胸を叩いて見せた。殿の御顏は悽い〳〵、太く寥しい者だつたが、其でも含笑で、

「むゝ、宜しい。」

「何が宜しい！胸、什麼召された！」

耳邊の一喝！餘り其の突如なのに殿も老人も喫驚いて振顧ると、其の吩驚した主は吉良殿

なのだ。老人は素破との身で軀を楯に、

「や上州。——いや當日は。」

然計りの老練家も此の不意には些く周章て、突痴の氣色。雖然も這處ぞ、と一方には内匠殿が袂を牽いて、一方には又た己身を彌々其双方の間に割入れて、

「……當日は、快晴で……。」

と、目を御廊下の陽光に翥して聊か無間な言を云ふ。

「ナニ快晴？貴公は、我等を、侮弄しやれる喃？」

吉良殿が眼は閃乎！飛だ劍先が向て來たので梶川は大に窮困て、

「いや何う致して……。」

「言れるな、貴公は戯弄る！——甚麼じや快晴。……今知りやれたか。」

恁う搦まれると其の執念の深さ加減は、靑蛇も三舍を避ける。況んや背後には其の魅むでゐる蛙たる人が在る、其の保護者は自分であるから、何事も無難が專一と、

「いや然樣な義は、眞實以ちまして……。」

「日が照れば天氣が好い、雨が降れば天氣が惡い、——三歳兒でも存知じやは。——其を

知りやらぬは、ソレ其處の、其男が喃。」

と、風は轉れたが、さあ大事だ！と老人は内匠殿が面を覗くと、唯だ無言。然して瞳子は凝つて居る。彼は胸先づ動悸として、再び此方を振向くと、蛇の毒舌は 益 鋭い。

「……晴天も雨天も不知ぬじや無くて、日暮も夜明も存せんじや喃。——昨日もじやが、今日まで、相も變らぬお遲刻じや。——てりや内匠、お主のがは飯喰う時が早朝なのかい！いや馬鹿の大飯かい！何さま五萬石、獨個で喰うか。いや穀潰しな！——昨日は腑拔と申したが、今思へば箆棒じや喃。——あの箆棒といふ棒御存知か。其の棒は飯糊を製る——竹箆じや。な。飯粒を壓し潰す、卽ち穀潰し！人間ならば御身がの樣なのじや。はゝ箆棒男！目も鼻も沒いぬ、ゝ、ぬッ箆棒!!」

言語同斷！罵ふのは殿に罵ふのであるが自個さへ耐らぬ心地。這處は成る堪忍の場合で無い、成らぬ堪忍！成らぬ堪忍を成らせるのは、避るに若かず、と與惣兵衛は牽いた内匠殿の袖を捉へて此の場所を退うと爲た。其をば速くも看咎めたは彼の地獄目。

「與惣。貴公も箆棒の肩持ちやるか喃？」

「や、甚麼とで喃？」　と些と氣色を變へた。

「甚麼とじや無い、其手の醜態は？——手の醜態は！」

「え？」

「袂を押へて！什麼爲やる？——む、金銀強求るじや喃。——分解つた。あゝ、お主大奥の女中依囑んで此の箆殿に、四品とやらを執持つな。で其の禮金先づ強求るか！——措きやれ爺。穀潰しの腰押すれば、お主も同じ箆仲間じやぞ——」

「呀！」

と叫つたが、與惣兵衛旣う其腹に据え兼ねた。他に忠告た彼の堪忍の其緒も斷れたか、彼は矢庭に我が脇指に手を懸んとする。と看る刹那！

「國賊!!」

霹靂の聲と一所に一道の閃電は彼が頭上を横に掠めて、前面なる吉良殿が烏帽子を眞額から破附けた。其人は内匠殿。——從前捉れた馬手の袂の自由を得たを倖ひと、公私の仇たる此の國賊を眞二つ！と拔擊に破り附けたのだ！

切は切たが人一個を隔てたる無念や及腰。烏帽子の眉より額に掛けて見事兩片には破つたれとも其切尖は縁に觸へて、人は眉間に僅少の輕傷を負けたのみである。雖然も迸走る鮮

血は卽と眼に入る。然らぬゞ動顚して人心地ゞ喪失た吉良殿は、

「わア!!」と云ふなり打倒れる。躍り蒐つて又た一太刀！——首へと見えたが目が眩むで手も狂つたか、肩骨をばらり！吉良殿は其儘ぐたり！

「十々滅を！」と云ふ聲が爲た。

心得た、と乘し掛る殿を、横さまに突退けたのが大友で、呼吸さへも無き傷者を肩に引掛たのが品川殿。

「邪、邪魔するなッ!!」

追んと爲られる。追及ば此の兩個に一個は空竹割！

「待た、殿！」

と梶川は抱止めた。其をも猶、と喘られるのを、彼は耳元に口壓し附て、

「御人が違ふ！目指た者は十分じや！」

「や、刺留たか？」

莞爾と微笑つた内匠殿は、其坐に撞と、

「與、與惣兵衞。さ、御法に爲い！」

（四十八）

此の騷動は朝の間に起つて、其の場所は今日將軍家の御對顔、兩使へ御返答の其の御間とある御白書院の前面、所謂る松の御廊下である。もとより兩使が通行の路、僅微ではあるが血にも汚れる、況んや殿中の上下は鼎と沸く。拜謁御延引あるべき歟、の問合も立られたが、聊か以て苦しからず、武家の闘爭敢て希しともこれ無き義歟、との柳原卿が見事の返答で。卽刻御場所を御黑書院に差換られて、先づは御禮滯りなく相濟むが否な。大目附庄田下總守を上使、御目附大久保權左衞門、多門傳八郎を檢使として、芝田村町なる田村右京大夫殿邸に差向けられた。是れ内匠殿切腹との御使である。

内匠殿は此日の午前、彼の田村邸へと預けられたが、宿意ともあれ其人は刃傷の人、途中に於いて什麼ならむ變事や起る？若くは家士の狼藉も？と警護の人々が配慮にも似で。殿も無事、路次も安全。殊に彼の屋敷に着れてからは唯だ莞爾と、

「いや飛だ御造作じやな。風と爲た事から愆橾の義と相成つて、各位にも迷惑。いや心外の義じや。」

と、全然饗應にも招ばれて來られたかの落着加減。此が今、人を斫つた、物を傷害たと云

ふ其人か。御大名の殺人犯といふものは恁麽者か。と孰れも呆れて、其の暢氣さに吃驚くばかり。中には感じて漫ろ涙をさし含む者もある。

暢氣も道理、快然たるも自然ら其所以ある事で。内匠殿が此時の肚裏は、誰か知るべき、領内の山畑でも暴らす猛獸でも擊取つて、――我一家を苦惱めた古借金でも皆濟た心地。即ち已を攻め他を窘めたる國賊たる上野奴を打果たせば、我が意恨は素よりで有る。諸人の難澁も爲に救はれて、隨つて在上へも忠義と爲る。――但し喧嘩は兩成敗。人を傷くれば我は流謫され、他を殺害せば自も死ぬ。其は最初より其の覺悟で。身――家――人、即今に於て甚麽か有らむ。單だ目下の單だ俺は、所謂る紅爐上一點雪！

恁う御腹の据つた以上は、煩惱、業障、底を拂つて、殘れるは山高く水長く、心に懸る雲もなき悠々たる胸間の眞如の月！彌陀の來迎とも待たるゝは浮世の御暇を下させらるゝ切腹の上使の御入來。――と待つ、其の御使の三人は今來たのである。

固より惡怯る樣も無い。行水を了つて、衣服を改めて、案内に導かれて其席へ出られると、庄田を上座に、大久保と多門を下座に、三使は堂々たる威儀を刷ふ。曠なる座敷も憂愁の氣は人に逼つて、床には軸も無く、瓶には花も無い。申刻過なる晷は、無常迅速の理を其

の熱もない薄光に語る。

「内匠殿、其座へ。」と徐ろに庄田は命つた。

「は。」

「上意。――辭を改めますぞ。」と嚴重に言渡した後、稍少時して、懷中を搔つて取出した一通を總州は力めて聲高く讀上げた。

「……淺野内匠頭。――其方義、宿意これ有るとて御場所柄をも辨へず、高家吉良上野之介へ刃傷に及ぶの段、以ての外の義、不束に思し召さる。之に依て領地御取上げ、家名御取潰し、切腹仰付らるゝ。――然樣存知ませい！」

其聲の高かで有つた丈け、一座は猶更ら森然と鎭靜つたが、同時に人々は唾を嚥みながら其方へ瞳を打注けた。猶同時に介錯の御徒目付は刀柄に手を！――此は御法である。否とも言はゞ卽ぐ打果すと云ふ彼等が勤方の一つである。

無論！難有き旨の御請を。と思ふには似ず、良思案の殿は、小首を傾げて、

「上野への刃傷？――刃傷とのみ御沙汰に見えまするは――彼一命は？」

不安の念に驅られた殿。其手を支へた形振上げられた面と云ふものは、頗ぶる悽愴かつた。

(四十九)

敵手の上野が一命は？とは當面つたる一大事の問、其れで大久保權左衛門、多門傳八郎、兩個の目附も息を凝て上使たる庄田總州が面を視た。

視られた總州も指塞つたのである。從前の容子を見ると、此の内匠頭、敵手をば見事刺留て、怨恨も春の雪と消えたる胸中水の如しと有るらしい。其を今御醫師が書上の、額傷は輕疵、肩頭なるは骨に徹らず、氣絶は一時の事、療養方を盡さば三週間にして治癒。といふのを聞せたならば、折角の安心も忽ち紊れて、其ぞ所謂る冥途の障碍。詮無き事。と風と懐着れたから我にも非らず言を澱むで、

「いや、彼は重體で………。」

「では侑だ存命で?!」

と、其の乘上られた驚愕の面と謂ふものは！――で總州は又た餘義なく、

「其の、存命も覺束無い。」

「醫師は何と申したか喃?!」

彌窮られた總州は、

「此處六時が間じやと云ふ………。」

「はア、六時が間！」

六時が間？六間が間！と我が問に我が答ふる如く内匠殿は二度三度繰返されたが。旋て唯だ手を支へた儘、首を抵下て、沈黙て了はれた。其容は死せるが如く！

吁嗟此の「六時が間」――命の欲い!!と哀れ殿は單一途に念はれた。――唯此の六時！此間は僅少の六時であるが、我には永劫の時間である。此六時の有無の爲には、我は安心の正念を得て寂光の都に曇りなき月を觀められるか、但しは修羅の瞋恚の炎に億劫の身を燒かるゝか、其孰方かので。――抑や此迄に爲遂たものを。命を棄てる、其は一向惜まぬが。唯だ彼奴を遺して逝く！實に堪られぬ無念である。あゝ念へば何故那時に十々滅を刺さなむだ！――與惣右が止めた。何故彼は予を禁止たのか！分解ぬ〳〵。其にしても目下は唯其の六時が間！彼奴が其傷で冥途へ往く。其を見屆けて後快よく――潔よく切腹したい!!

悔ひても回らぬが、回らぬをも猶悔までは措けぬ無念の數々に、掻裂くばかりに思ひ擾れる。擾れては早や前後の差別も無くて多時は其儘に、殿は涙をさへ潸然と落された。

大久保權左衞門は當時名立たる俠客である。暫くは齒を切つて堪へて居たが、此の落涙を見るなり溜らぬ大音聲を掉り立てた、

「内匠殿！何故請け召されぬ。見苦いッ！」

「はッ！」と殿も氣を取直されたが。一座も此の大久保が聲には吃驚いた。——權左衞門は猶疊み掛て、

「女々しい其落涙。——御手前とても然程の膽玉とも御座るまい！」

言ひ放てゝ睨め据えるのを、遽に押止たのは多門である。

「權左粗忽な。然樣な骨無い義を云ふちふが有るものか。——や、殿怯れたとはござらぬも御請の遲々、批判も御座らうず。意趣あらば御返辭の後に申されい。如何じやな？」

實にもとか、漸くに其面を揚られた殿、

「傳八殿、芳志は過分。——如何にも上使に申し進ずる。——切腹——内匠、謹むで御請の仕つる。但し御强求の義が一條ある。——其の時刻を喃う。今夜の夜半迄と延されい。」

總州は再た礑地と違却した。固より言渡の濟みたる後には、行水に湯漬、最期の一盞。一

方には其の座敷の支度を抔ど、物の一時か程の猶豫はあるべきも。夜半とは！今が七時半。夜半と云へば幾んと六時。——其の六時と云ふは今の我が口狀からとも思はるゝが、扨て由ない事を言つたもの。——既に上樣の御立腹は激しいもので、時節をも辨へぬ内匠頭が處爲。卽刻死罪！どの仰出されも有らうと爲たを、執政衆の御諫言で辛やく切腹との御沙汰に更改つた程のこと。其の切腹を夜半まで私に延すと云つては、先づ御勘氣は覺悟、無論我が役儀をも賭てならでは、と總州。我首を所望と云はれた約は其の百分が一ほどの難義な仕合と躊躇はれた。

愈其の憤懣に堪へぬは權左衞門、

「夜半までとは甚麽お爲る氣じや。——其間に上野からでも使僧が來るか？——いや氣體な！——むゝ甚麽じや？上野が左右の待つ？——むいは、ゝゝ、那の御爺めが最期の待つは五年か、十年か。——いや内匠、今下總の申しやれたは御身への會釋。甚麽う、ゝ死ぬかい。あの老爺奴がよ！——傷は淺い！」

「呀?!」

「狼狽たな。御身。——深さ淺さ、切たか切ぬか其の大約は手徹でも知るゝわさ。——知

れなんだか？え丶？――慌遽て召された！權左衛門、役儀外いて申さうならば可惜ら事を爲た。あの毛爺、撲殺いて狸汁にも羮て酒さ喫んだら甘かんべいに。遺憾い事を爲た！――いゝ、ぢやがもう詮ない。觀念して、潔く、腹ぉツ屠るさ。」

（五　十）

「潔よく」無論である。「切腹」勿論の事！と赫と急れた内匠殿は、

「權左！――内匠は腹切り得ぬ者と思やるかッ！」

睨み返されたが。權左衛門は其にも平氣で、

「おう。切り得ぬ者と無るべき御身が切り得ぬから助言の爲る。――人は最期じや。御分が父先祖、代々立てられた武功と云ふを此時に無にお爲れなよ。地體、此の泰平の代に生れて意趣で腹切るとは武士の冥加じや。はゝ權左、一言の祝儀を申す。」

恁う聞けば、其の過言は過言にあらで、其が俠客の本性を發露たのだ。俠客の意地は殿も承知、再び其面色を和げられて、

「面白い權左、祝儀は異議なく受納致すぞ。――但し切り得ぬのか、切り得られぬのか、我等の腹が。――御身も目附じや。熟う知られう。

凡そ、人を殺す者は死、人を傷くる者は流。是れ式條に定められたる天下の法じや。今下總の申しに據れば彼奴は未だ死なぬ。況んや御身が口狀では其傷は淺い。――恁れば式條の表に就けば、我等は流罪――死には當らぬ。

なれど我等は死は覺悟じやぞ。縱し流罪に處せられてから一旦の覺悟は變せぬ。況て、慌遽た！――無念じやが御分のお言やる其場で慌遽たに相違ない。――武士が血を見て慌遽たとは有るべき事か。――内匠、此の一事をもても恥て死ぬ。其の面皮が爲に自殺する。

――意地として内匠、活て在られぬ！

ぢやが喃う、其事聞く迄は一命、『惜うおざッたぞ！内匠の刃傷は固より我が私の意趣とおされど、一つは又た公儀の爲め。――那の惡物を諸人の爲に除けうと爲た覺悟におざッたぞ！――内匠、唯是れ、其心が無いならば、御免を願ふ。縱し家名に關はる御煞度受けうとも御役の辭退を申す。雖然と身の意地と、諸人が爲に、或る人々の忠告を無にしてまで此義を果いた。――果いたが如是の仕義！――責ては彼を我が死出の供にと思うて、其れで一命を惜みまいたぞ。――彼の六時が間!!」

六時が間の命乞をば世にも拭ふべからざる恥辱と云ふ樣に、殿は又もや眼色を變へて、唇

を戰かして身を顫はせられた。道理迫ての哀れさはよ。恥を知る武士の一言、然う有つたか！と大久保は剛綫の猛勢にも似ず、拳頭を握つて睜張た眼からは瓢然との湛涙。總州も溜息。多門は獨り息を凝して其一語だも聽漏さじとか、其膝を間近に寄する。日は既や暮れて、其處に列なる燭光の影は廣き座敷に隈も無く、目眩しき迄なるにも瞬もせず、仰いで天井を眴詰られた殿は、旋て其の歛り行く呼吸と共に頭を垂れて、太息一つして、

「……あ、早や申すまい。趣意も是れ迄。――いで然らば御覽に入れう。切り離ねた此の内匠が腹！」

其れ！と目をもて其の用意を右左に告られる。

「いや未だ間もおざる。行水、湯漬、――所望とならば遺書の一通。な、色附の一盞も……

……。」

と、多門は注意する。

「然樣な義もじや。――行水は今致した。湯漬、欲しうも無い。――唯一通は？否や、其

義もじやな。――一盞だけは介錯の人に指し申さう………。」

「然りながら、家士の向へ――喃？」

「いや………。」

「確と、お座らぬか？」

無い處かは、其は山程に有るのである。勿論、我が意趣は、今朝纔に其の一筆を書認めて居間の机邊に密に遺れたとはあるもの丶、事心と錯へる現下となりては、傳へたき事、書遺されたき事は千萬無量！なれど其は皆以心傳心、他聞も他見も憚かる事件。天下の公義を執る目附方たる者の耳や目に――と、其の遺憾さの胸を摩つて、

「いや。御――座らぬがの、――我等家來は、一人も參り居らぬか喃？」

言ふ時に、早馬で騎り附たらしき御使番の一人は、老中奉書を持參した。同時に椽側なる杉戸の陰で、泣聲はわッと起つた。

（五十二）

思ひも寄らぬ御使番が老中の奉書。何事かと一同は披見に及ぶと。無慘やな其は内匠殿が切腹の催促狀、上樣には其の注進を御待兼と云ふのである。――噫百事は休矣、是に至つ

て總州が愀然も、大久保が泔涙も、餓鬼の擂待、――其死の猶豫に一分の利益だも與へられぬものと爲り訖つた。

抑も目出度き御儀式の當日、殊には桂昌院尼公が一位御昇進の御吉事と云ふ其日に於て、公儀御由緒淺からぬ淺野氏其人を切腹さする。其さへあるに今又た如是る御使とは、心得ぬ事かな。とは思ひは爲たもの丶、今は何との爲む術も無き多門は、責て家士への最期の對面。彼の杉戸の泣聲は其かとも心注れたので、

「内匠頭家來の向――在るか！」

其れと意を得た御徒目附兩人は、内匠殿左右に控へて萬一の非常を警戒むる。一人の御小人目附は突と起て彼の杉戸を拔くと。此處に詰掛けたは堀部安兵衛、片岡源吾、磯貝、近松を初として近習馬廻りの者十四五人。其中より一人先に、躓く如くに走り出で丶平伏したのが大石主税。

彼等が悲憤の眼に映じた殿の容姿と謂ふものは甚麼とある。今朝ほど看送り參らせた大紋に烏帽子、供揃嚴めしき出仕の盛裝には引變りたる、水色の小袖に無紋の上下。最う此時には疊も裏返つて、白布も敷れて、面前なる白木の三寶には、白紙に卷て紙捻で結へた其

の用意の短刀と云ふも置れてある。――傃る可しとは思はぬでも無つたが、見れば今更ら、あゝ、あッと眼も昏れて魂も其場に消えた。骨も碎けて肉も裂くる計りであるから聲さへ不出で、主税は唯、

「殿、殿樣!!」と急て言つたが、其聲は涙に流れて了つた。

殿も、其を沁々と視られた限り！彼の仰せたさは山々で有らうが、同じく涙に塞つたか、將た難かられたか。――一語も無つた。

時刻移ると。「申すべき事有らば唯今じや。疾うく申せ。」「言へ、言へ、遠慮すな。根抵げ言へ。」とは多門と大久保とが注意である。

「殿樣御願ひが御座ります。私を御供に!!」と主税は云ふなり。涙を拂つて双肌を早や押寬げると。跡に控へた十四五人も「御免されませ。御先を！」と一同に其肩衣を剝んと爲る。

「いや相成らぬ。以ての外な。殉死――御禁制！況て御咎の者。家名再興にも差障ゆるぞ！」

と總州は慌遑て其席を起つ迄にした。御咎も再興も其義は知らぬが、此處で彼等に切腹せては上使の御役に差障へる。其の差障が覿面に可怖いから？――其樣遠慮は現今

の彼等には耳へも入らぬ。

「いや私は部屋住の者。未だ前髪の者。公儀御帳にもござりませぬ者！殊に主人切腹も私ゆゑで。主人後には殘れませぬ者！殉死ではござらぬ。亂心とも狂氣とも――。」

言ひ棄てた儘の主稅は遙かの後邊に脫て置いた脇指を取りにと、起うと爲る。

「あれ抑止い！」　と總州は更に慌忙しく指止られる。徒小人の兩目附は、一方は主稅、一方は彼の十四五人を遮二無二押止める。其には田村の家士も手傳ふ。一場の騷動！呵呀と見る時。

「鎭まれえい、い！內匠、最期じや‼」

兩人が喝聲に此はと覗れば。――殿は既や脇腹へ！其切尖をきり〳〵と廻されながら、

「主！主稅‼」

主稅は既う半ば狂氣である、抑止られたる手を振摸切さま、夢の如くに、

「はゝはい！」　と御傍へ倚る。

殿は苦痛の眼を赫と睜開て、其の硬る舌根、炎焰の如き呼息の下から、

「……內！內藏へ喃‼彼、彼奴は倘――存命じやぞッ!!!」

紅血淋漓る血刀を紀念とか、其方へ抛げて。今一度、彼等をと捻向れる其首を………。

只見落紅風拂盡！　借問す塵夢の淸きを得る乎怎麼。試みに看よ這個の染血刀！

大石良雄（前篇）終

明治三十九年七月二十日印刷
明治三十九年七月廿三日發行
明治三十九年十月廿八日再版
明治四十年五月十五日三版
明治四十年十一月二十日四版
明治四十一年三月廿三日五版

大石良雄前篇
定價金七拾五錢

不許複製

著作者　塚原澁柹
發行者　平山勝熊
東京市京橋區南鍋町一丁目二番地
印刷者　武廣和雄
東京市京橋區宗十郎町十五番地

發兌元　東京市京橋區南鍋町一
振替貯金口座八五三番
隆文館

東京國文社印行

塚原澁柿園君著
塚原千種女史畫

淀殿第一編……定價七十五錢 送料金八錢
淀殿第二編……定價七十五錢 送料金八錢
淀殿第三編……定價金一圓 送料金十二錢

本書特色

▲白皙珠の如き繊手に絶代の豪傑豐太閤を翻弄し未だ飽足らず▽して更に掌を伸べて六十餘州を握らんとしたる女丈夫淀殿が半面や如何に。▲夜半雨瀟々として蘭燈影淡き下、滂沱として下る數行の紅涙は抑も亦た誰が爲めに濺ぐものぞ。

本書持色

▽時代に精通し、行文に老練なる者▲は個中の消息を叙して、最も明細を極むるものあり。▽然れども本書を以て單に女丈夫の生涯を描ける單調の物語となすは甚だ愚なり。▲烱眼の讀者各位希くは、事實と寓意との鍵を本書に於て探り給はんことを、これや本書の癖すべき興趣たればなり。

讀賣新聞批評

▽著者獨特の書きかた何人も眞似のしやう無し、美貌花の如き十六歳の乙女茶々の、秀吉に見出されて其の寵を擅にするに至るの發端より淀君の生涯を描し、彼女が負け嫌ひの強情の、一風變りたる女性たるを現して趣味更に深し。

東京朝日新聞批評

▲老練圓熟時代小説を描出して當時殆ど匹儔を見ざるは塚原澁柿園の手腕なり、淀殿の一編、內は精悍き豐太閤の磊落豪邁、石田治部の機智巧慧、局待從の細心苦衷等皆よく人格現はれ活躍し、作者の才筆縱横に走る。▽

好評嘖々

大塚楠緒子女史著 新海竹太郎君意匠 金文字入金縁裝釘

小說 晴小袖

新式洋裝最美本
定價金八拾錢
郵稅金八錢

一葉逝き、薄氷去りて、世は等しく閨秀文壇の寂寥を告ぐる中に、獨り大塚楠緒子女史あり。其精緻の想と艶麗なる筆とは早く既に芳名をうたはる。今や『晴小袖』一卷女史が筐底より出でて金釵にはあらぬ一瓣の蕙として文壇初めて聲あり。一たび之に接せば春風面に温かに、秋月天に清く綿々の情緒人をして喜憂せしめ、惻々の哀音人をして泣かしむるものあらん

渡邊霞亭君著 宮川春汀君畫 ●總クロース表紙最美本

小說 次郎島

菊判全一冊
定價金七拾錢
郵稅金八錢

幼にして孤となり繼母の手に懸りて虐待せらる何等の悲慘ぞ、少妹あり友愛の情に富みて異母兄の業務を助く何等の可憐ぞ、途に惡漢に要されて誘拐せらる何等の痛恨事ぞや、之れ寧ろ一齡纔に十有一敢て少妹を尋ねて旅程に上る何等の殊勝ぞや、之れ寧ろ一篇の立志譚

東京 隆文館 發兌

好評

菊池幽芳君著　鏑木清方君畫

小説 **筆子**

筆子は現代文壇の雄鎮、家庭小説作界の明星菊池幽芳君か心血を濺ぎたる一代の傑作なり、豐富なる構想を配するに靈妙濃艶の筆を以てし彼女が波瀾多き戀愛の徑路、曲折深甚なる人生の慘目愴情を描いて、實に深刻精致を極め、讀者をして恍惚として篇中の人たらしむること斯の如きは、君の前著中にも亦類を見ざるところ、此篇今や美裝を凝して世に出づ、明治文壇の大作と稱せらるゝもの或は皆其光を失はん。請ふ速に一本を購ふて其眞價を知り給はんことを

クロース表紙金銀色箔押
口繪精巧木版數十度刷
初枝之卷・筆子之卷
定價各金九拾錢
郵稅各金拾錢

東京 隆文館發兌

好評嘖々

幽芳君著
清方君畫
小説 **賣花娘**

新式洋裝美本
菊判全壹冊
定價五拾錢郵稅八錢

賣花娘の一卷其名既に可憐なり、之れを描くに著者獨特の艶麗纖細の筆を以てす。讀み去り讀來れば花顏の娘子楚々として書上に躍るを覺ゆ。花や花召しませ花の糸櫻。都大路の朝風に聲おろ〳〵と呼び行く乙女子の上に一片の同情を寄せ給はゞ、須らく其の花籠の一束を買ひ取り給へ。

江見水蔭君著
宮川春汀君　鏑木清方君畫

小説 **海賊の子**

意氣冲天の勢は之を破天荒の老將軍に見るべく、剛强壯快の鋭は之を獰猛なる快水夫に見るべし、もし夫れ窈窕たる麗姫、薄命の俠美人並せ來つて巧みに落葩流水の艶を添ふるに至つては或は壯に或は優に奔放は天馬の空を驅るが如く纏綿たるは芙蓉の雨に惱むが如く宛然之れ拔山飜海の風浪を前にして彩華艶麗の花圃を見るが如し

前後貳冊最美本
口繪精巧木版數十度刷
定價各冊金七拾五錢
郵稅各冊金八錢

發兌元 東京京橋 隆文館

小栗風葉君著　松岡輝夫君畫

小説 **美丈夫**

クロース裝釘最美本
口繪精巧木版刷
菊版前後貳冊
定價各冊金六拾錢
郵稅各冊金六錢

俠人の俠麗人の麗は風葉氏一流の才筆によりて具さに其極致を盡さる。日東帝國快男子あり、鬚髯黑ふして面は白く。其活躍する處意氣天を衝て鬼神を哭せしめ、其笑ふの時優容娘子をして慕はしむ。今日世を擧げて纖緻細巧の文學に醉ふの時這個好丈夫出でゝ初めて人意を强ふするに足る。敢えて世の諸兄姉に告ぐ新理想の日本男子にあこがれ給はゞ宜敷本書を繙かる可し。

好評嘖々

橋本埋木庵君著 鏑木清方君畫 口繪濃艶（前後二編）

小說 歌吉心中

定價各四拾五錢
洋裝頗美本
郵稅各六錢

身はうき川の浮き沈み、流れのまゝに糸竹の、節しげき世を今更に弱き運命を趁ふとても、染まぬ蓮の露の珠、淸き心もぬば玉の、浮世の闇にかき消されて、あはれ、戀の意氣地に倒れし、俠と情とに殉せし江戶見藝者の面目を偲び給ふ諸賢は宜敷本書を繙き給へと云爾。

小說 小松嵐

（前後二編）
定價各金五拾錢
郵稅各冊金六錢

大和心を人問はゞ櫻と匂ふ武夫の御國の爲に獻げし生命と西に東にさすらひて肺肝を碎く花も實もある長物語り、美人と俠客と薄命の勇婦と其間を點綴して、千紫萬紅、絢爛の委曲を極む。是正に幕末に於ける一篇の勤王史と云ふ可く、其實歴よりすれば、嘗て滿都の劇場に上演せられて百千萬の子女をして同情の涙に咽ばしめし『玉取姫』の前編と見るも可なり。敢へて諸兄姉の一粲を待つ。

東京 隆文館發兌

好評嘖々

柳川春葉君著 鰭崎英朋君畫 菊版最美本前後二冊

小說 浮沈

總クロース裝釘粹麗
定價前編六十錢後編七十錢
郵稅各冊金八錢

颯一陣林頭の梢を吹けば、千籟忽ちに起つて、天、月は暗く、水は叫ぶが如く戰慄たり。轉變定めなき世のはかなさを、一葦正に浮きつ沈みつ、何地に行かむとはする。兄は血ある青年也妹は涙ある少女也。著者そが兄妹の爲めに滿腔の熱血を捧げて同情の筆を揮ふ。皇天希くは兄妹の爲めに其行衛の暗潮を照らせ

德田秋聲 宮川春汀君畫 口繪精巧木版數十度刷

小說 病戀愛

表裝斬新
定價金六拾錢
郵稅金六錢

題して病戀愛といふものは蓋し戀愛の苦痛と憂愁とがはるかにその愉快と幸福とより、大にして、やゝもすればこの人生の光明を蝕し、戀せる男女を驅つて絕望の淵に赴かしむること多きを暗示せんがためならざるなからんや。さあれ苦痛の裡、憂愁の裡なほ且ついふにいはれぬ喜悅存じて、此寂寞なる人生を彩どるもの、是れ戀愛の眞味に非ずや

東京 隆文館發兌

田口掬汀君著　鏑木清方君畫
小説　情の人
總クロース裝釘優美
口繪精巧木版艶麗
全一冊定價金六拾五錢
郵税金八錢
沈痛凄麗なる文字を以て、清醇にして純潔なる着想を彩るものは掬汀氏なり。穩健にして優艶眼を明治の新思想に着けて、具さに其の矛盾衝突、融和の深致を描き、悲痛、幽婉、人をして泣かしめ、人をして怡ましむるは掬汀氏獨特の手腕ならずや。本書は子が苦心の傑作にして、崑山の片玉相集りて燦爛たる光を發するが如く、玲瓏として明月の露に映ずるの慨あり。

好評嘖々

小栗風葉君著　宮川春汀君畫
小説　うき寐
口繪精巧木版數十度刷
表裝嶄新美本
定價一冊金五拾錢
郵税一冊金六錢
花柳界裡の女性を寫して之を良く詩化するは著者獨特の擅場なり。『うき寐』の一篇、材を狹斜の地に搆へて一點卑猥の境に渉らず。而もよく其眞相を描いて、憐む可き美人の風容目前に見るが如く、艶様痴體盡く拉し來つて其詩趣に資す。虛と實と裏表、落す涙の眞僞は、一に讀者の推考に委かせん。

東京　隆文館發兌

26
355

終